

SW2.5 ミラーズ共和連 邦キャンペーン

haratomo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソードワールド2.5キャンペーンのリプレイです。

中堅冒険者であるPCたちはある日冒険者の店のマスターから秘密の輸送任務を依頼されます。しかしその輸送の対象は人族、蛮族、魔族から追われる少女らしく……

本作は、「グループSNE」及び「株式会社KADOKAWA」が権利を有する『ソード・ワールド2.0/2.5』の、二次創作です。

(C) GroupSNE

(C) KADOKAWA

目次

『一合一離—ヴィヴィ—』	—	1
『寡二少双—ゼノ—』	—	53
『市虎三伝—クラリス—』①	—	129
『市虎三伝—クラリス—』②	—	203
『四通八達—アリア—』①	—	271
『四通八達—アリア—』②	—	335

『一合一離—ヴィヴィ—』

○トレーラー

○自己紹介

GM : それでは、SW2. 5 ミラージュ共和連邦キャンペーン第1話、『一合一離—ヴィヴィ—』を始めさせていただきます。皆様宜しくお願ひします！（※GM注 一合一離：他人と関係を結んだり、離れたりすること）

PC1 : よろしくおねがいします

PC2 : よろしくおねがいします—！

PC3 : よろしくお願ひします

PC4 : よろしくよろしく—

PC5 : よろしくお願ひします！

GM : まずは各人自己紹介をしていきましようか。まずはPC1さんからお願ひします。

PC1： スピールです。フルシル様にお仕えるメリアです。こっちの子はサーリア。私にはよくわからないすごい技術で動いているそうです。今は小さいですけど、大きくなって魔物とかの相手もできるんですよ。すごいよね。

料理が趣味なので、いろんなところの料理を食べて、覚えていきたいなと思って旅したので、食べられる魔物とかはちよつと詳しいです。あと、最近錬金術つてのも面白くなって思い始めたので、今勉強中です。よろしくお願いします。

GM： では次はPC2さんです。

PC2： 僕はブラン。ナイトメア。

ある魔導士の下で実験体として育てられたんだけど、そこで追い出されたから冒険者をやつてる。盾なら任せて。どんな相手からでも守つてみせるから。

……背中の刻印は知られるとめんどくさいから秘密。

以上……お腹すいたし食べて寝よ……ふああ……

GM： 次はPC3さんです。

PC3： わたしブラン

……さつききいた？ そうだっけ

じゃあもういいよね

おやすみ

PC4： 寝るな、まだキャラ紹介中だ!!

PC3： おきた

わたしブラン。リカント。

師匠のよし

最強の剣士をめざしてる

よろしく?

GM： お次はPC4さん、どうぞ!

PC4： オイラの番だな!

オイラはポツクル、レプラカーン、産まれるときにカーチャンがポツクリ逝きかけたからポツクルって名前なんだ!

魔動機文明の遺跡で家族と暮らして15年、成人して、ちよつと外の世界を見てみようとならうとフラフラ出て行ったら、美味しそうな香りが!

それが、スピールの作るご飯との出会いさ!!以来、ずっと一緒に旅をしてきたんだぜ。ちなみに、このロングバレルはオイラの身長(130cm)より長いけど(150cm)、グラビティ・アーマーで身体を重くすることで安定して撃てるんだ!

オイラが獣をこの銃で仕留め、それをスピールが料理する。最高のパートナーだ!

GM： それでは最後、PC5さんですね。宜しく願います!

PC5： ふあゝあ、おはよう。ファイオーネだよ。私は『闇夜の案山子亭』に住み込みで働いてる冒険者兼薬剤師なの。

いきなりあくびしてごめんね、昨日薬品調合に没頭しちゃってさ。

……ん？なんで薬剤師なんて儲からないのにやってるの、だって？

……治してあげたい人がいてね。だいたい時間かかっちゃったけど最近やつと見込みが立つてきたから必死なんだ。

だから昼間はずつと眠そうにしているとと思うけど最低限セージとして仕事するよ。それと攻撃魔法でちよつと特殊な事が出来てね。

お父様から受け継いだこの杖の能力で魔法に追加で属性を配合する事が可能で、相手の弱点を的確に……、いや実際に見てもらった方が早いかな？戦闘のときを楽しみにしててね。

それじゃあ、自己紹介終わり、お昼寝してくるね。

GM： ありがとうございました！この5人でキャンペーンしていきます。

ブラン（PC2）：ちよつと待って、ブランで名前かぶってない？

ブラン（PC3）：ほんとだ。

GM： では今のところは暫定でブラン修羅とブラン弟子でいきましょう。

ブラン（修羅）：了解。

ブラン（弟子）：ん。わかった。

GM：それではこれから開始となります、よろしくお願ひします！

PC一同：よろしくお願ひします！

それぞれの程度詳しいキャラクターデータについては以下の通りです。また今回のキャンペーンは各PCに1個ずつオリジナルのユニークアイテムが配られているため、その概要も一緒に載せています。

また、PCたちの立ち絵に関してはPicrewのみーなのキャラメーカー（β版）様を使用しています。

・スピール

・ブラン（修羅）

・ブラン（弟子）

・ポツクル

・フィオーネ

○オープニング（冒険者の店サイド）

シナリオの導入は冒険者の店での依頼から始まるパターンと街道で巻き込まれるパターンの2パターンがあります。話し合いの結果導入の割り振りは以下のようにになりました。

冒険者の店：スピール、ブラン（修羅）、ポックル、フィオーネ

街道：ブラン（弟子）

GM：それでは、まず冒険者の店側から導入をしていきましょう。

ミラージ共和連邦ナジュニア領、首都ナジュニア

ここは、底にある冒険者ギルドのひとつ「闇夜の案山子亭」

GM：元冒険者で本名不明、片足を失い義足となったナイトメアである「マスター」が店主をしている店です。その店で、店主から依頼を受ける……前に依頼を受ける予定のあなたたちは何をしていますでしょうか？

スピール： 厨房のお手伝いしてます

フィオーネ： 隅の机に突っ伏して寝ています。

ブラン（修羅）： 酒場の一角でぼーっと座ってます

ポックル : お手伝いをするスピールのお手伝いを。料理はできなくても、テーブル拭くくらいならできるんだぜ!

GM : それでは、そんな皆さんにマスターが声をかけてきます。

・マスター立ち絵(立ち絵はpicrewのストイックな男メーカー様を使用しています)

マスター : 「あー、ブランにフィオーネ……。ちようどいい、スピールとポックルもこつちに来てくれ」皆さんを名指して手招きしています、場所は店の奥にある個室……つまり秘密のやり取りをする場所。

ブラン(修羅) : 「……ん。」おもむろに立ち上がり奥へ

フィオーネ : 「眠い、あと五分。」目をこすりながらついていきます。

ポックル : 「なんだぜマスター?食料調達か?」わくわく

スピール : 「ちよつとだけ待って、刃物しまつちやうからー」と、ちよいと遅れて最後に入る

マスター : それでは、部屋に集まった皆さんに対してマスターは口を開きます。

「実は、な……個人的に信頼しているお前たちに、ちよいと極秘裏の依頼があるんだ」

ポツクル : 「秘密の依頼か!?なんだなんだ!?」と更にワクワク

ブラン(修羅) : 「……」特に反応せず話を聞いてます

フィオーネ : 「個人的に信頼してるなんて、うれしい事言ってくれるね。」

スピール : スピールはのんきそうにしてるけど、頭の上の機械の梟が目を光らせてます。

マスター : 「ちよいとな、護送依頼を頼みたいんだ。受け取り場所はここと北の街の中間点あたりの街道沿い、目的地はこの街の郊外にあるとある屋敷まで。受け取る相手はこの割符の片方を持っている。依頼料は……守秘義務込みでひとりあたり5000ガメルだ」

ブラン(修羅) : 「守るのなら任せて。得意だから。」むんと細腕に力こぶをつくってみせます

ポツクル : 「ヤバいブツか? ヤバいブツなんだな! くうくう! 腕が鳴るぜ

!!!

フィオーネ : 「中堅冒険者4人固めて護送、受け取り手は割符の片割れで本人確認と。適正価格より高めの報酬と守秘義務込み、少しきな臭い依頼だね。」

マスター : 「もちろんきな臭い依頼だ、だから依頼主に関しての情報は教えよう。

こいつは「伯爵」からの直々の依頼だ(※)「伯爵」とはこのナジュニア領の領主「アー

デルベルト・ナジュニア」の事です。「伯爵」とは通称で、領主なのになぜ「伯爵」という呼び名なのかは不明です)

スピール : 「ここまで話してくれたなら、断れないですねえ。いろいろと」

ポツクル : 「なあマスター、この店って、領主様から直接依頼をもらえるほど有名だったっけ?」

マスター : 「………個人的な知り合いなんだ、俺が」

ポツクル : 「?!?!」

マスター : 「信頼できる俺が、信頼できる相手を雇えだとき。だから、何かあったらお前らもろとも俺も死ぬ」

ブラン(弟子) : 「死ぬの!?!」

ポツクル : 「かわいそう……」

G M : 「まあ「君たちが裏切って伯爵に不利益なことをしたらマスターもろとも殺される」ってことですな。」

ポツクル : 「なに言ってるんだマスター! 任せとけ! 俺たちならかんつべきに依頼をこなしてみせるさ!!」

ファイオーネ : 「ずいぶん気合入ってるね。その言葉、覚悟、本当……?」と言いなから真偽判定振ります。(コロコロ) 達成値20です。

GM : んー。(シークレットダイスを振る) その達成値だとマスターの言うことは本当だと思いました。

フィオーネ : 「……その眼、嘘はついてないみたいだね。とりあえずマスターの事信用する。試すような事言ってごめんなさいね。」

マスター : 「仕方ないさ、フィオーネは親父さんの為にまだ死ねないだろう？」
そう言つて、ちよつと困つたように笑つてます。

マスター : 「受けてくれるのなら、護送対象と詳細を教えよう。申し訳ないが、明日の早朝に出発してくれると助かる」

ポツクル : 「もちろん受けるよ。な、スピール?」

スピール : 「マスターの信頼に応えないとね。もちろん、うけるよ。他の人も心配だし」

ブラン(修羅) : 「僕に任せて」こくりとうなづく

マスター : 「ありがたい、これが護送対象だ」と言つて、小さい肖像画みたいなのを出します。そこに描かれていたのは、そこには左右の瞳の色が違う、感情を感じさせない少女……おそらく12〜14くらいのひとりの少女

マスター : 「この女の子の名前は『ヴィヴィ』、詳しいことは聞かない方がいい」
・ヴィヴィ立ち絵(立ち絵はみーなのキャラメーカー(β版)様を使用しています)

ポツクル : 「護送対象って、ヒトだったのか!」

マスター : 「死なせないようにしてくれ、とのことだ……だからお前らを
選んだんだけどな」とブランを見ながら言います。

ブラン(修羅) : 「ヒトだろうとモノだろうと、僕は変わらず守るよ」

ファイオーネ : 「心強いね、よろしくねブラン。」

ブラン(修羅) : 「うん。任された。」

ファイオーネ : 「ところでその子の事情は聴かないけど、せめて何に狙われてるかだ
け教えてくれない? 敵対対象が人か魔物かで守り方が変わると思うの。」

マスター : 「人族。蛮族。そして……魔神、その全部だ」

マスター:「種族や信仰で、敵が出来るってわけでもないからな。お前たちも今後の為
に覚えておけ……時には共闘し、背中を預けるときだってある……裏切られる
時も、な」と自身の脚を見ながら言います。

ファイオーネ : 「これは……骨が折れる依頼になりそうだね。」

ブラン(修羅) : 「? 問題ないよ?」と不思議そうに

ポツクル : 「マスター、オイラからも一個だけ聞いていいか? その子、オイラたち

の依頼のこと知ってるんだよな？　女の子を泣かせるような依頼だったら……オイラ、いやだな」

マスター　：「護送……いや、護衛するのはその子の命を守るためだ。それは保証する」

ポツクル　：「そっか……わかった、がんばるよオイラ！」

スピール　：「マスター。支度金とか、支給品とかつてないですか？」

マスター　：「あいにく急ぎでな、そこらへんはないんだ。代わりに、脚用として馬車を用意してある。徒歩なら一日かかるが、これなら明日の朝に出れば昼過ぎには着くだろう」

スピール　：「おー、馬車。乗り心地がいいといいなあ」

ポツクル　：「マスター太っ腹ー！」

出発前にスピールさんがみんなの分のお弁当を作成。料理人スキル5のスピールさんが6ゾロを出し、大変美味なサンドイッチができました。

○オープニング（街道サイド）& PC合流

GM　：　お待たせしました、弟子の方のブランさんです。時間は次の日の昼頃ですね。ブラン弟子ですが、街道をそのまま進んでいますか？それとも迷子ですか？

ブラン（弟子）　：　街道を進んでいます。「ふんふんふくん♪」てくてくてくてくて

ポツクル　：　かわいい

師匠　：　「えらく上機嫌だなあ弟子よ、なんかいいことでもあつたか？」と、師匠から声？それともテレパシー？が来ます。

ブラン（弟子）　：　「うん。師匠といっしょにたびをするのたのしい。」

師匠　：　「悪い気はしないねえ、でももつと楽しいことなんざいくらでもあるだろうに」師匠としては、女の子なんだからもうちよつと着飾ったりアクセサリーとかも付けてもらいたいかもです

ブラン（弟子）　：　「そうかな？でもまちなかだと師匠とはなせないし……」

師匠　：　「友達をね、作った方がいいと思うんだけどね、うん」

ブラン（弟子）　：　「？師匠がともだちだよ？」首をかしげる。師匠と友達と親の区別がないので

師匠　：　「嬉しいことには違うんだけどなあ……」表情は見えないけれど、間違いない苦笑い

ブラン（弟子）　：　「ところで師匠、いまどこにむかつてるの？」

師匠　：　「……あ？お前さん目的地なしに歩いてたのか!？」

ブラン（弟子）　：　「なんとなくきたみちとちがうほうからでただけ。ここどこ？」

師匠　：　「……地図、持つてるか？」

ブラン（弟子）：「もってない！」

師匠：「……………このまま、道を歩くとしようか」

ブラン（弟子）：「どんなところにつくのかなー」楽しそう

ここで、ブラン（弟子）の優れた五感が異変を感じました。

それは金属音、打撃音、何かの焦げる匂いそして……………血の匂い

ブラン（弟子）：「師匠、なにかきこえる」

ブラン（弟子）：「っ！」走り出す

師匠：「戦闘、だな。弟子よ、気を抜くなよ？俺は、まだお前以外に使われるつもりは無いからな」

ブラン（弟子）：「わかってる」

そして、戦場に辿り着くブラン（弟子）。彼女が到着すると、そこには複数の獣みtainの（テラービースト）と、翼と角を持つ美丈夫（ドレイクバロン）が居ました。

それに対峙するのは、ひとりの全身鎧の騎士。騎士は、どうやら一人の少女を守っているようです。

ブラン（弟子）：「よろいのひと！かせいする！」

騎士：「……………ッ!?感謝する！」

ブラン（弟子）：「ふ……………」師匠を握り集中する

ブラン（弟子）：「あなたが、わたしのあいてだね」

ブラン（弟子）：「斬る」

襲い掛かる、テラービーストの爪と牙！一人前の戦士ですら屠るその攻撃、だがしかし

ブラン（弟子）：「みえてるよ」

彼女には、それすらスローモーションのように感じたのでした。

ブラン（弟子）：「おそすぎる。それにすぎだらけ。」（ちようどいい、師匠に教えてもらった技を使おう）

白虎の回避は攻撃に転ずる。その攻撃の名は……

ブラン（弟子）：『虚白』

音もなく両断されるテラービースト

ブラン（弟子）：「うまくできた」ちよつとうれしそう

師匠：「上出来だ」

そして振り返った時、ドレイクバロンと騎士の戦いにも決着がついたところでした。

竜と化した蛮族の頭を貫く剣

そして、鎧ごと騎士の胴体を両断した蛮族の爪牙

はらり、騎士の頭から鉢巻きがひとつ地面に落ちると同時に勝負は決しました。

ブラン（弟子）：「よろいのひと！」

騎士：「……………旅の方とお見受けする。すまないが、この騎士の最期の頼みを聞いてくれないか？」としわがれた声が兜の下から響く。

ブラン（弟子）：ギリツ（奥歯をかみしめる）「……………わかった。いつて」

騎士：「このお方を……………ナジュニアまで。このまま、街道を進めばこの割符の片割れを持った冒険者がやつてくるはずです。仔細は、その冒険者……………に……………」そう言いながら、明らかに魔法の品である割符を彼女に渡します。

ブラン（弟子）：「たしかにうけとった。ナジュニアまでこのこをまもる。それでいい？」

そして騎士はこと切れます

師匠：「やらなけりやいけなことが、出来たな」

同時に街道の方から近づいてくる馬車。

師匠：「……………つと、誰か来たようだな」

フィオーネ：おびたしい血の匂いからただ事ではないと悟り、馬車から飛び出します。

スピール：「おーい！ だいじょうぶですかー！」御者台の上から

フィオーネ：「……………一足遅かったみたいね。ごめんなさい、貴方の仲間が……………」

ブラン（修羅）：「ちよつとファイオーネ、待った。先に出ない」と盾役としておっかけていきます

ファイオーネ：「あ、ごめんつい必死で〜。」ブランの後ろに控える。

ポツクル：無言で銃を構えていたけど、事は終わっていたので降りてくる

ブラン（弟子）：「あなたたちは？」

師匠：「その騎士から言われたことを伝えてやれ」と察した師匠は皆には聞こえないのでブラン弟子にそう告げます。

ブラン（弟子）：「ん。あなたたち、わりふ？つてしってる？」

ポツクル：「割符……てことはアンタが受け渡し相手か！」

ブラン（弟子）：「まっつて、かくにんがさき。あなたたちはみかた？てき？」

スピール：「あ、そうそう割符だね。サーリア、出して」というと、サーリアがペツと割符をスピールの手に吐き出す。「それと、これ合わせてみて」

すると、2つの割符はぴつたり合体します。

師匠：「どうやら、こいつらがさっきの騎士の言っていた奴らしいな。見た所お前さんと同じくらいの実力か？とりあえず守れつて言われた嬢ちゃんを保護したほうがいいぞ」

ブラン（弟子）：「ん。みかただね。うたがつてごめんなさい」

スピール : 「ええと、馬車の血は……返り血？中の人は無事……かなあ。大丈夫ですか？開けてもいいですか？」

倒れている蛮族と魔神、そして騎士は死んでいます。そして馬車の中に隠れている様子の少女は出てきません。そして情報共有をするPCたち。

ポツクル : 「……そうだったのか。じゃあ、オイラたちの受けている依頼について、ある程度は話をした方が……あ、でもこれシユヒギムってやつなのか？」

スピール : 「そこは、仲間だから大丈夫でしょ。割符も持ってたし」

ポツクル : 「そうだよな！」嬉しそうに

ブラン（弟子） : 「とりあえずぶじをかくにんしたい。しんかんさんがいたら手伝って」

フィオーネ : 「いや、遠くから見てもわかるよ。鎧の方はもう……。せめて埋葬してあげましょ。スピールちゃん、後でお願いできる？」

スピール : 「まずは、ヴィヴィちゃんの安否確認だよ。おねがいします」

ブラン（修羅） : 「なら」と向かいますよ

ポツクル : スピール行くならついていくー

少女のいる馬車の前に向かったPC4人。フィオーネは少し離れて警戒と共に騎士の死体を調べています。

ブラン（修羅）：「……大丈夫？怖かった？」と扉ごしに話かける

ブラン（弟子）：「いきてる？」

少女（ヴィヴィ）：「……なに？今度はあなたたちが私を殺しに来たの？」と平坦な声が奥から返ってきます。馬車の奥でひとり、体育すわりをしている少女が一人。先ほどまで凄惨な戦闘が近くであったというのに、まるで何事もなかったかのような態度です。

ブラン（修羅）：「大丈夫。僕たちはマスターからの依頼でキミを守りに来たんだ」
ヴィヴィ：「そう、じゃああのおじさんも私を手放せてせいせいしているのでしょうね」

ブラン（弟子）：「おじさん？よろいのひとのこと？」

ヴィヴィ：「勝手にやったんだから感謝はしない、これ以上話をするつもりもないからそう伝えておいて？」

スピール：「私はスピール。キミがヴィヴィちゃんだねー？これから、スピールたちがキミを案内するの。よろしくねー」と、挨拶をする

ポツクル：「オイラはポツクル、冒険者なんだ、よろしくねー！」

ヴィヴィ：「そう、短い間になるだろうからよろしくはしない」

彼女はPCたちの方を見ずに話していましたがポツクルの言葉が聞こえた瞬間、身じ

ろぎをします。

ヴィヴィー : 「……ッ!?」

ポツクル : 「?」ヴィヴィーの様子に首をかしげる

ヴィヴィー : 「……ヤ……ナ……デ」

ヴィヴィー : 「近づかないで! 私に……近づかないで!」

ヴィヴィーはそう言いながらそこから逃げ出そうとしますが、すぐに馬車内の荷物にぶつかって転んでしまいます。

ポツクル : 「どうしたんだよ? オイラなんか変なこと言ったか?」と困っている

ヴィヴィー : 「いや……もう、もう見たくない」

ヴィヴィーは手探りで立ち上がり自身の顔を覆い、そのまま泣き出します。余程の恐怖だったのか、そのまま気を失ってしまいました。

ブラン(弟子) : 「とりあえず、はなれて?」(師匠をポツクルに向ける)

ポツクル : 悲しい顔をしながら、しぶしぶ出て行く。「なあスピール、オイラなんかしたかなあ……?」

ヴィヴィーから離れるポツクル。一方で近づいたPCたちは、彼女はどうかやら目が見えない……もしくは視力が非常に低下しているようだということが分かります。

スピール：「この様子だと、ヴィヴィちゃんをこの馬車から移動させるのは難しくそうですね……」

一方で騎士の死体を調べたフィオーネ。その結果、騎士は穢れ点が4点に達していたナイトメアであり、蘇生は不可能であるということが判明します。

フィオーネ：「これは、穢れが溜まりきつてるね。蘇生は厳しいかも……。」騎士の死体に対してキルヒア流の礼をした後、持ち物を確認します。

ヴィヴィを囲んだり騎士の持ち物を確認したりするPC一同。そんな時どこからか、短剣くらしいの大ききの何か投げ込まれ地面に刺さります。そして頭上には、昼なのにきらびやかな光。オーロラです。（なお、舞台であるアルフレ임大陸においてオーロラは「奈落の魔域が発生する前兆」とされています）

ポツクル：「きれいだ……」

ブラン（弟子）：「なに……あれ」

ブラン（修羅）：「綺麗だけど……なんだかイヤな感じだね」

そして、投げ込まれた何かから球状に広がる虚無。そこに奈落の魔域が発生してPCたちは無理やり巻き込まれます。暗転する視界と意識。

気が付いたときにはどこか小ぎれいなダンジョンのような場所にPCたちとヴィヴィのみがいます。

○ミドルフェイズ①

PCたちがいる部屋は中央に台座、壁にはなぜかどの言語でも理解できるマップのよ
うなものがかかっています。

・マップ

マップや台座を調べるPCたちの頭に今度はどこからともなく声が響きます。

まず、交易共通語で『第一の証を捧げよ』

続いて汎用蛮族語で「第二の証を捧げよ」

そして魔神語で「第三の証を捧げよ」

最後に、その3つの言語で「されば、新たなる道が拓かれん」

ブラン（弟子）：「だいいちのあかし？ 師匠ー、師匠にもきこえた？」

師匠：「よくわからんが、とりあえず目の前のモノを斬るだけじゃダメってことだ
な」

ブラン（弟子）：「弟子だけじゃなくて師匠も脳筋だった」

ファイオーネ：「最初に『第一の証を捧げよ』これはみんな聞こえてたよね？」

ブラン（修羅）：「うん、聞こえた」

ポツクル : 「聞こえたー!」

フィオーネ : 「続けて汎用蛮族語で「第二の証を捧げよ」、最後に魔神語で「第三の証を捧げよ」だったよ。」

ポツクル : 「さつすがフィオーネ、いろんな言葉を知ってるんだな!」

ここで、気を失っていたヴィヴィも目を覚まします。

ヴィヴィ : 「……………あ……………ここは……………どこ?それに……………」

証?新たな道?なに?」と手触りで床の材質を判断して口にします。

スピール : 「……………わからない。突然奈落の領域?に飛ばされちゃったみたいだけ

ど……………」

フィオーネ : 「そうだね、ここを攻略しないと出られないかな……………」

ポツクル : バツが悪そうに、いそいそと距離をとるポツクル

ヴィヴィ : 「ああ……………」何かを察したかのように、絶望に満ちた声を上げます。

ヴィヴィ : 「これは多分、私のせい。だから、近づいてほしくなかった」

ヴィヴィ : 「誰かが死ぬのは、もういやだから」と明らかに落ち込みます。

スピール : 「……………そっか。ヴィヴィちゃんは、やっぱり優しいんだね」といい、ゆっくりと手に触れる

ブラン（修羅）：「大丈夫。少なくとも僕がいる限り誰も死なせないよ」と胸を軽く叩く

ブラン（弟子）：「？だれがしぬの？」

フィオーネ：「勝手に死ぬことにされても困るよ、一緒にここから出よう。」

ヴィヴィ：「……とりあえず、自己紹介。知ってるかもしれないけど、私はヴィヴィ。……あなたたちは？」

ヴィヴィに問われ、改めて自己紹介をしていくPCたち。スピール、フィオーネと順調に進みますが……

ブラン（修羅）：「僕はブラン。みんなを守るのは任せて」

ブラン（弟子）：「わたしはブラン。……？」

ブラン（修羅）：「……ん？」

これまで触れられる機会がなかったPCの名前かぶりがここで顕在化します。

GM：やった！ブランかぶりだ！

ポツクル：ブランとブランでブランがかぶってしまった

スピール：Wブランドタイム

ブラン（弟子）：「あれ？わたしじこしようかいしたっけ」

ブラン（修羅）：「自己紹介したのは僕だけ……ブランって」

ブラン（弟子）：「ん。わたし、ブラン」

ブラン（修羅）：「僕、ブラン」

ヴィヴィ：「ややこしい。どうにかして」

ポツクル：「ヴィヴィに突っ込まれてて笑う」

ブラン（弟子）：「??」

ブラン（修羅）：「だってさ。どうしようか？」

ブラン（弟子）：「あなたもブラン、わたしもブラン？」

ブラン（修羅）：「……みたいだね。珍しいこともあるね」

ブラン（弟子）：「ややこしいっていわれても、わたしのなまえだよ？」

ブラン（修羅）：「だねえ、僕もあの人から名づけられてからずっとブランだったし……どうしようか？」……まずい、この2人だと話が進まないのでは……？

ヴィヴィ：「ところで」と、Wブランの話を遮るようにして顔を上げて話し出します。

ヴィヴィ：「その……ポツクル、っていうのは……さっきの、その……おとこのこ？」若干手足が震えている。

ヴィヴィ：「あー、やっぱり、男のヒトって、苦手？」

スピール：「そう……じゃ、ない。ちよつと……同じくらいのお

ヴィヴィ：「そう……じゃ、ない。ちよつと……同じくらいのお

とこのこには、悪い想い出がある……だからこわい……でも、あなたのせいじゃない」と、どこにいるのかわからないから下を向いて口にします。最後に、消え入りそうな声で「ごめん……なさい」とも。

ポツクル：「そっか、オイラの言葉がキミにイヤな思いをさせたのかと思っただけ、そうじゃなくて少し安心した。うん、それだけ分かれば大丈夫だよ、謝らないで。きつとキミのせいでもないんだから」

ポツクル：「オイラ、ポツクル。君を守るために来たんだ。改めて、よろしくね！」
ヴィヴィー：「……よろしく。握手とかはこわいから無理だけど、わたしもわたしでがんばる」

自己紹介も終わり今いる部屋の探索などを始めるPCたち。そんな中フェアリーテイマーのフィオーネさんは妖精から「詳細は分からないがヴィヴィーも穢れ点が高い。」との警告を受けます。

フィオーネ：あああ、これ一回でもヴィヴィーちゃん死なせたらあかん奴だ
ブラン（修羅）：よろいの人だけじゃなくてヴィヴィーも穢れ4点組かー。

そんなこんなでわちやわちやしていると、ブラン（弟子）のお腹がぐーと鳴きます。どうやら腹ペコの様子。

フィオーネ：「おなか空いた？こんな非常時にそんな悠長なこと……（ぐうううう

う)「恥ずかしそうに赤面してます。

ポツクル：「幸いに、今はお腹以外万全の状態だ。どうせ全部の試練をやらなきゃならないなら、一番キツイのから片づけたいな……。ほら、ヴィヴィも。スピールの作るご飯は本当においしいんだ!」

スピール：「ふっふっふ。腹が減ってはなんとやら。万全の態勢で試練とやらに臨むために……じゃーん! みんなが寝てる間に作ったお弁当!!」寝ないのでみんなが寝てる間に朝食と弁当が作れる。メリアの家事力有能では?

ヴィヴィ：「ん」どこにあるかわからないので手を差し出します。

ポツクル：手が触れないように気を付けながら差し出す、かな。

ヴィヴィ：受け取ったお弁当をそのまま手探りで食べ始めます、こう「誰かに世話をさせる」のを当然としている感じが見られますね。

ブラン(弟子)：「おべんとう!」

師匠：「必要な時、どんな状況だろうと食べるのも戦士の価値のひとつだ」と師匠は頷く感じ

フィオーネ：「……私もお腹空いたわ。うつつむきながら弁当欲しそうにスピールに手を差し出す。

ブラン(修羅)：いつの間にか弁当を受け取って懐から取り出した激辛ソースを

ドバドバかけてる「スピール、おいしいよ。料理上手なんだね」

スピール : あきらかに辛そうなソースをドバドバかけるブラン修羅を見て一瞬動きが止まる。「えつと……うん。それかけないで食べた感想が欲しかったかな……あははは……」

ブラン（修羅） : 「?こつちの方がおいしいよ?」

ヴィヴィ : 「よくわからないけど、とても不穏な匂いがする……」

ブラン（弟子） : 「それも、おいしいの?」ブラン修羅の持つてるサンドイッチを見ながら

ブラン（修羅） : 「おいしいよ。キミも食べてみるかい?」サンドイッチを差し出す

ブラン（弟子） : たべる。びっくりする。ぐったりする

師匠 : 「……弟子?……弟子……弟子!!おいブラン!死ぬな!」

ポツクル : 「ブラーン!!」

ブラン（修羅） : 「?呼んだ?」

ポツクル : 「キミじゃない!!」

ブラン（弟子） : 涙目で「ひとのたべるものじゃない……」

ポツクル　：「ファイオーネ、早く蘇生魔法を!!」

ファイオーネ　：「いや、私は神官じゃないって。スピールちゃん、蘇生お願いできる
〜?」

スピール　：「辛いんだったら、キュアウーンズでいい……かなあ……フルシル様こ
のお願い聞いてくれるかなあ……」

ブラン（修羅）　：「?????」みんなどうしたんだい?」真つ赤なサンドイッチを表情
一つ変えずにパクつきながら

といった感じで、休憩を取り親睦を深め（?）ました。

○ミドルフェイズ②

人・蛮・魔の試練の攻略順番をPCたちで話し合った結果、人の試練から攻略するこ
とになりました。部屋に入ったPCたちの脳内に再び声が囁きかけます。

「ここは調和の試練……心技体の3つの試練を均等に挑み、そして同時にクリア
しなければならぬ。」

どうやら部屋内に用意された3つの課題に「同じ人数」で同時に挑戦して全てをクリ
アしなければならぬようです。見識判定の結果、それぞれの課題は以下のような
ことが判明しました。

①心の試練

自分の魔力をオーブに注ぎ込み、中の魔力を全部相殺出来れば試練クリアです。必要なのは精神力ボーナス。

② 技の試練

中のパズルを解かねばなりません。必要なのは器用度ボーナス。

③ 体の試練

明らかな有毒ガスです。他の試練が突破されるまで毒属性の魔法ダメージに耐えねばなりません。必要なのは生命力ボーナス。

話し合いの結果、心「フィオーネ&ヴィヴィ」技「ブラン（弟子）&ポックル」体「ブラン（修羅）&スピール」となりました。しかし試練の前にフィオーネさんが相談したいことがあるようで……

フィオーネ：「……ところで、二人のブランちゃんどうやって名前区別すればいいの〜?」

ブラン（修羅）：「あ、それどしよっか」（何も考えてない顔）

ブラン（弟子）：「なんとなくわかるからだいじょうぶ」

スピール：「ブラン〜」

ブラン（修羅）：「？」

ブラン（弟子）：「？」

スピール : 「だめじゃん」

ブラン(弟子) : 「……………そんなこといわれても、こんなこといまままでなかった」

師匠 : 「まあそもそも他の奴らとパーティー組んだことないしな」

ブラン(修羅) : 「同じく。ブランなんて名前なかなかないし」

ブラン(弟子) : 「……………でし、でいいよ」

ヴィヴィ : 「……………なんで、でし?」

ブラン(弟子) : 「よくよばれる」

スピール : 「でし……………弟子?お師匠様でもいるの?」

ブラン(弟子) : 「うん!師匠!わたしにたたかいかたをおしえてくれる」(剣を掲げる)

フィオーネ : (きつと『師匠の剣』って言おうとしたんだな。)

ブラン(弟子)は師匠こと所持している魔剣「無銘」と精神感応で会話が出来ますが、他のPCからはそれがわかりません。よってお互いの認識に違いが出来るというわけですね。いつになればこれが刷り合わされるのでしょうか?

一方のブラン(修羅)の呼び名ですが、呼び名の由来になっている修羅の刻印についてはPCは秘密にしているため決まらず。ひとまず何もつけない「ブラン」と「弟子」で

区別することになりました。

そして肝心の心技体の試練ですが2ラウンドほどであっさりとクリア。一行は中央の部屋の台座に嵌めると思いき宝玉と、試練突破のご褒美としてトレジャードロップ表を振った結果ハルバードとレコーディングピアスを手に入れました。

ポツクル：「ひとつめの試練、クリアだな！」タッチのポーズ

ブラン（弟子）：「……………ポツクル、なにかしたっけ」（※技の試練の判定をクリアしたのは弟子）

ポツクル：「ゴフツ!!」

ブラン（弟子）：「かわいそう（）」

そんなわけで、勇みながら？人の試練をクリアした6名。体の試練で減ったブラン（修羅）とスピールの体力を回復した後に蛮の試練へと臨みます。試練の部屋に入ると再び聞こえる音声。

「ここは解放の試練。隔離された仲間が獣に食られる前に、結界を破壊し解放せよ」

ここはパーティーのうち1人以上を戦場に放り込み、そして放り込まれた人以外が戦場に貼られた結界を外部から破壊できればクリアのようです。

結界内部には「かたんびースト君（PCからの攻撃が不可能なテラービーストの廉価版）」が「6―結界内部の人数」匹湧き、ランダムに中にいるキャラクターを攻撃しま

す。

スピール : 「結界？は良くわからなかったけど、あの動物は毒抜きがめんどくさいやつ！」

ポツクル : 「さすがスピール、魔物に詳しいんだな!!」

フィオーネ : 「結界の方はタコ殴りし放題だけど、結構タフだね。弱点ない分私は少し相性悪いよ。」

ブラン（修羅） : 「魔獣は僕に任せて。みんなは外にいていいよ。あの程度だったら余裕だから」

ポツクル : 「くっ……ブランの犠牲、無駄にはしない!!」

ブラン（修羅） : 「ちよつと、殺さないでほしいんだけど」

フィオーネ : 「二人で大丈夫??ブランちゃんの固さは知っているけど、奴ら魔法使ってくるよ。」（フィオーネは修羅の刻印の存在を知らない）

ブラン（修羅） : 「魔法も大丈夫。対魔法ならむしろ自信あるよ」

フィオーネ : 「それならいいんだけど。無駄しすぎないでね。」

スピール : 「大変そうなら呼んでね! 回復するよ〜!」

ブラン（弟子） : 「斬れるならどつちでもいい」

そして始まる戦闘。外部組が結界をタコ殴りにする中、かたんピースト君がブラン

(修羅)をタコ殴りにします。といっても所詮はかんたんビーストと案山子の結界、PCたちの敵ではありません。

かんたんビーストの打撃はほぼすべてブラン(修羅)の防護点18点に阻まれ、魔法も全て抵抗され修羅の刻印により回復されました。結界もまた、ブラン(弟子)の4回転クリティカルを受け崩れ去ったのでした。

ポツクル : 「でし、やるじゃん!」

ブラン(弟子) : 「ふふくん」(どやっ)

フィオーネ : 「おお、でしちゃんすごい。」

ブラン(修羅) : 「終わったね。みんなお疲れ」

ブラン(弟子) : 「ブランもすごかった。おつかれ」

ブラン(修羅) : 「ん。ありがとう」

ヴィヴィ : 「なんかさつきからチカチカ光る? いや魔力が変な感じに活性化してたね」(ブランの方を見ながら、修羅の刻印について言及をしている)

ブラン(修羅) : 「ヴィヴィ、多分それ他の人の魔力とかと間違えたんじゃない?」

ヴィヴィ : 「……」(難しい顔をしている、追及を諦めたようだ)

フィオーネ : 「ヴィヴィちゃん、魔力を目で感知できるの?」

ヴィヴィ：「視覚とは違う感じ、でも目が見えなくなったから似たような感じに知覚できる」

そうこうしているうちに部屋に出てきた宝箱。中には宝玉と獣よけの蠟燭が入っていました。蚤の試練もクリアした一行、残すは魔の試練のみとなりました。

ポツクル：「この調子でいくぞー!」

魔の試練の部屋に足を踏み入れた一行、その脳内に最早お馴染みとなった声が響きます。

「これより、汝らの発言を禁ずる」

その声と共にフィオーネ⇄ブラン（弟子）、ブラン（修羅）⇄ヴィヴィ、ポツクル⇄スピールの組み合わせでそれぞれ腕がエネルギーのリングのようなもので結ばれます。

そして、続く声。

「結ばれた相手と自身とを比べ、優劣もしくは大小で計測できる『自身と異なる点』そして『どちらがより優れているか、もしくはは大きいか』を述べよ」

つまりは相手と自分で何か比較できる点を、具体的に述べればクリアとなる試練です。そのことを聞かすや否や反応した人が二人……

ポツクル：「そんなの決まってるぜ、スピールの方がオイラの百万倍料理がうまいんだ!!」

ブラン（弟子）：「わたしのほうがわかい」（相手はフィオーネ）

GM：あ、ポツクルと弟子にダメージ（威力100、魔法ダメージ）が入りました。

ポツクル：なんでだー!!!（〇）

ブラン（弟子）：ぐふっ

フィオーネ：ぐふっ（年齢のことを言われて）

声：「相手の名前を言っではいけない、あと返答の順番はこれからダイスで決める」

フィオーネ：ダイスとは???

スピール：フライングか……

ポツクル：ダイス……それは試練の声の発言なのかww

ブラン（修羅）：各位にダメージが入ってて草

ダメージは入るもの、二人とも試練はクリア扱いとなりました。残る4人の順番は「フィオーネ、ブラン、スピール、ヴィヴィー」の順です。

フィオーネ：「私から行くね。私よりも重いものが持てる〜!」（フィオーネの筋力は3。相手であるブラン（弟子）の筋力は18）

ブラン（弟子）：（ちからこぶ）（でない）

ブラン（修羅）：「……それじゃあ次は僕だね。僕の方が固い」（身に着けてる鎧

と盾を指しながら)

GM : ちよつと待ってくださいね、ヴィヴィのデータを確認します。

ブラン(修羅) : おつと???

ポツクル : まさかのw

GM : あ、よかつたクリアです。まだブランの方が硬かつた。

ブラン(修羅) : 『まだ』

スピール : マナコートあつてもあれは流石に

若干肝を冷やしつつ、次はポツクルと結ばれたスピールになります。

スピール : 「スピールの方が背が高いよー」

ポツクル : ガーン!!(気にしている)

GM : 種族がね・・・はい

そして最後に残つたのはブラン(修羅)と結ばれたヴィヴィ。彼女はというと……

ヴィヴィ:めつちや顔をしかめている、そりやあ相手がだれかわからないから仕方ない。他の5人に関して、軽い自己紹介はされているが実際に見たわけではない。

本来ならわかりやすい答えはある、だが彼女はもうここにはいない「そうではない相手」を知っている。(一同:「穢れのことだろうなあ」「よろいのひと・・・」)

「同じ」ではなく「優劣」でなければいけない、そして彼女が出した答えは……

ヴィヴィー : 「……数」

ヴィヴィー : 「殺した数なら、私の方が絶対に……多い」

そうして、魔の試練はクリアとなったのでした。ご褒美は6回使える一角獣の角。売
るだけで18000Gになる高級品です。3つの試練を終え、回復をする面々ですが、
フィオーネさんがスピールさんに「シークレットボイス」を使つての話があるよう
で……

フィオーネ : 『スピールちゃん聞こえてる？今あなたと私だけで秘密裏に会話で
きるようになってるよ。』

スピール : 「ほへ？あ」

スピール : 『き、聞こえてます……』

フィオーネ : 『うん、よかつた。実はスピールちゃんにだけあらかじめ言つてお
きたい懸念事項があつたんだよね。私の考えすぎだつたらそれでいいんだけどさ』

フィオーネ : 『私たちが奈落に飛ばされるとき、そこにあつたよろいの人含めた死
体三体も一緒に巻き込まれたじゃない？私先に調べてたから知つたんだけど、あれ
偶然にも人族蛮族魔神一体ずつだつたんだよね。未だに死体が出てこないから、魔域
の主にも有効活用されてるかもしれないって思つてさ。』

フィオーネ : 『それでね、よろいのひとなんだけどさ。……穢れがたまりきつてた

んだよね。つまり次はない、蘇生したら即アンデット化。スピールちゃん、このパーティー唯一の神官だから、もしもの時はお願いしてもいい?」

フィオーネ：『ヴィヴィちゃんの手前、悲しいかもしれないけど。』

スピール：『本来、死んじやつたらそこまで、つてのがこの世界のルールだから。いくら悲しくてもやらなきゃいけないことだからねー。願わくば、その人がそういうことされずに静かに眠ってくればいいんだけどね』

フィオーネ：『……うん、そうだね。私もそう思うよ。スピールちゃんにやらせられそうだよ。』

フィオーネ：『私の言いたいことは終わり、長々と聞いてくれてありがとう。』

スピール：『いいのいいの。教えてくれてありがとう。あなたに神のご加護がありますよう』

フィオーネ：『ははは、私も神の声が聞こえたらいいのにね。』耳につけたキルヒア聖印に触れながら

そんなPCたちにヴィヴィが声をかけてきます。

ヴィヴィ：「何も聞かないんだね、やっぱり仕事だから?」と先ほどの試練での発言に関してすねおそらく。

スピール：「話したいのならいくらでも聞きますよー。なにせ神官ですから」

フィオーネ : 「デリケートな話にずかずか入り込みたくないだけだよ。誰にだって人に知られたくないことぐらいあるでしょ？」

ブラン（修羅） : 「僕は盾役であんまり敵とか殺してないし……あれ？でも野宿の時食べてたウサギとかもカウントに入るのかな……？あれ……？」一人で考え込んでます

スピール : 「おいしく食べたなら、それで結構ですよ。命を奪ったことに引け目を感じるなら、せめて無駄にしないで。だから、料理はおいしく、のこさず……ね？」

ヴィヴィ : 「……」

無言で、自身の懐から何かを取り出すヴィヴィ。それは5個の鈴でした。

ヴィヴィ : 「あげる、どこかにつけておいて……信用も信頼も今は出来ないけど、利用はしてあげる」

フィオーネ : 「これは？」

G M : 「ただの鈴です、でもこれを装飾品としてどこかにつけておけばヴィヴィはあなた方の位置を認識して「魔法の起点にする」もしくは「範囲魔法からの除外」が出来ます。ヴィヴィは目が見えないのでこの音であなたたちPCの場所が分かるようになるわけですね。」

スピール : 「わあ、きれいな音。確かにこれなら、ヴィヴィちゃんにも私たちがど

ここに居るかわかるのね。ちよつと心を開いてくれたみたいでうれしいぞ〜ウリウリ」
 ヴィヴィ : (めっちゃいやそうな顔)

ブラン(弟子) : 「すず……すず……すず……にああ」(耳につける)

ブラン(修羅) : 「似合うかな?これ?」(鈴をつけた腰を振りながら)(若干嬉しそう)

ヴィヴィ : 「……うるさい」周囲でいきなりじやらじやら鳴りだした結果
 フィオーネ : 「……せつかくもらったものだけど、サーリアの分がなくなると困るから私はパス〜。その代わり、後衛でヴィヴィちゃんにべつたり引っ付いてやる〜。」

ポツクル : 「ありがとう、大事にするよ!あ、そうだ。これ、お返しにあげるよ」と言つて銃弾を一つ差し出す

ヴィヴィ : (今までで一番眉をしかめる)

ヴィヴィ : (しばらくしてため息をつき、そつと手を出し)

ヴィヴィ : 「……はやく」掌に落とせ、触りたくないと言外に

ポツクル : 手が触れないようにそつと落とす

ヴィヴィ : 「……ほう」

ポツクル : 「旅の途中に会った人から聞いたんだ、お守りになるんだつて!」

ヴィヴィ : 物珍しそうに撫でまわす、どうやらガンとかは触れたことが無い模様。

そのまま、懐にごそごそ入れる。服の上から叩き位置を確認、満足そうなのか鼻息が若干フンスフンスしてゐる。

スピール : 「えーずるーい、スピール貰ったことないのに〜」

ポツクル : 「あれ、そうだったっけ？でもスピールにはサーリアいるじゃん！」

スピール : 「お目付け役とお守りはちがうじゃん！」

ポツクル : 「ハハハ！」ヴィヴィちゃんに嫌な顔以外をさせられたし、よしとしよう

○クライマックス

中央の部屋に戻り宝玉を台座にガチャガチャ嵌めていくと台座の中心がひび割れ、崩れていき下への階段が見えてきます。

ヴィヴィ : 「・・・・・・なんか、変な音がする」新しくできた道から伝わる音が、それとも空洞音を感じたのか口にします。

ポツクル : 「慎重に進もう」

ブラン（弟子） : 「ん。なんのおとかな」

GM : 判定とかは特にいりませんかね、おそらく金属のこすれる音などが反響して聞こえてきます。この奥には、武器や鎧を装備したナニカがいることでしょう。

ポツクル : 金属、魔動機文明、もう帰りたい……（

ブラン（弟子）：「いやなよかん。じゅんびする」主動作使つて獣変貌します。

GM：それでは、これ以降ガウガウしておいてください。（※リカントは獣変貌するとリカント語しか喋れなくなります）

ブラン（弟子）：「がう」

フィオーネ：「……ヴィヴィちゃん、敵に何が来ても気持ちを強く持つてね。」

ヴィヴィ：「?・・・ああ、そういうこと」

ヴィヴィ：「構わない、いまさらだしね」

フィオーネ：「……ん。問題なさそうだね。」

フィオーネ：「というか、まさか趣味で覚えたリカント語が役立つこと日がくるとはね。」

スピール：「獣変化つてやつはじめてみた」

ブラン（弟子）：「!がうがう（はなせる)?」

フィオーネ：「がう、がうがう?」（大丈夫わたしの言葉伝わってる?）

ブラン（弟子）：「がう!」

フィオーネ：「がうがうが!」（ならよし!）

ポツクル：「さっぱりだぜ……」

フィオーネ：「でしちゃんは、今夜は肉料理が食べたいと言ってたわ。」

ブラン（弟子）：「がうががう（つうじてない）」

フィオーネ：「でしちゃんにいたずらっぽくウインク

ブラン（弟子）：「がうう？」（胡乱げな目）

PCたちがそんな風に会話をしていると、開けた場所に出ます。まるで闘技場のような広さです。そこには3体の魔物がいました。うち奥に控える2体は機械で出来た存在、投擲用の槍を携えた魔動機（スターズナイパー）。

そして、その魔動機の前に存在する1体。1体、そう言語で表すには不釣り合いな異形が存在しています。大きな下半身、翼、そして上半身としてそびえる異形。異形は、鎧を着た剣士、半ば竜化した蛮族、ところどころ腐敗した魔神の姿を掛け合わせています。

ブラン（弟子）：「よろいのひと……」

いざ戦闘開始です。フィオーネの腕輪がひとつお亡くなりになったものの、PCたちは相手の弱点を看破&先制を獲得。以下は各ラウンドのハイライトです。

【1ラウンド目】

まずはスピールのバトルソングの支援を受けた遠隔組がボスに範囲攻撃を叩きつけます。ここで部位ごとに異なる弱点を突くのにフィオーネのペネトレーターが大活躍。（フィオーネ「ファイアブラストに土属性を付与、ファイアストーンブラスト!!」GM「溶

岩流かな？」

そして後続する前衛組の攻撃でボスの翼部位が落ち、敵の飛行バフ（命中回避に＋１）が切れます。（GM「ま、まだ胴体の攻撃阻害残ってるし……」）

続く敵のターンは飛んできたスターズナイパーの槍がフィオーネに直撃、HPのほとんど（HP：31↓6）が消し飛びPC一同に冷や汗が滴り落ちます。ボスのナイトメア部分の薙ぎ払いをPC達が凌ぎ、ドレイク部分がブラン（修羅）へ放った魔力撃の打撃点で6ゾロが出たりしながらも無事（19点軽減）終了しました。

【2ラウンド目】

フェローであるヴィヴィの魔法制御スパークからスタート。敵が多部位&スピールのバトルソング継続の影響もあり計50点ほどのダメージが飛びます。続くフィオーネの数拡大した弱点付与ファイアーアローもヒット、ボスのHPを着実に削ります。

そしてブラン（弟子）の一撃（弟子「パラミスが仕事をした！」）&ポツクルの3回転クリティカルバレットによってボスは倒れたのでした。

残る敵は雑魚のスターズナイパーのみです。スピールは回復魔法を使い、ブラン（修羅）は後衛に向かい傷ついたフィオーネをかばって終了です。なお、聖王の冠が仕事をしました模様。

相手のターン。ランダム決定したスターズナイパーのターゲットはフィオーネとブ

ラン（修羅）。2体とも狙撃の構えを取って3ラウンド目に突入します。

【3ラウンド目】

ボスがいなくなった今、スターズナイパー程度ではPCたちの敵ではありません。フィオーネ怒りの2回転ファイアーアロー（雷属性付与）を筆頭にした攻撃によつてスターズナイパーはあつげなく沈むのでした。戦闘終了です！

（GM 談）「結果的には楽勝でしたが、ワンチャン死ぬかもと思わせられたので私は満足です」

戦利品のはぎ取り（ダイス平均値5.7）を終え、ボスのトレジャードロップ表計50点（強化適正値の5倍）に一喜一憂するPC達。主な獲得アイテムは女神のヴェールとマナスタッフでした。

そんな中PCたちのもとにヴィヴィイが近づいてきて、会話が始まります。

ヴィヴィイ：「どう？終わった？」

スピール：「多分、終わったみたい。どこかいたいとことかない？」

ヴィヴィイ：「特には、後ろにいただけだしね」

スピール：「ヴィヴィイちゃんも助けてくれたからだよく。とくにあの《スパーク》とかすごかったし。スピールたちより強いでしょ」

ヴィヴィイ：「本来はね、今は色々あるから」

ヴィヴィ : 「……私、役に立てたよね？」

ブラン（弟子） : 「たすかった！」

フィオーネ : 「もちろんだよ。」

ブラン（修羅） : 「ん。ありがとう」

ヴィヴィ : 「じゃあ……」と手探りでそこら辺を調べてから、「これ、ほしい」と言つて、戦利品にある『朽ちた剣（200G／金A）』を持ちます。おそらくナイトメアのよろいの人が持っていたものですね。

スピール : 「大事なもの、なんだね。いいよ、仲間だもん」

ポツクル : 「かつこいいもんな、その剣！」

フィオーネ : 「……ちゃんとよろいの人も供養してあげないとね。よければ彼の名前教えてくれる？」

ヴィヴィ : 「知らない、聞いてないから」

ブラン（弟子） : 「ん。こっちじゃなくていいの？」と言つて戦利品の中から歪んだ魔法の装備（剣・鎧）（3000G／金黒赤S）×2を触れさせようとする

ヴィヴィ : 「……そっちは、私には重いから。自分の分はわきまえてる」

フィオーネ : 「そうだったのね……。……でしちゃん、それたぶんドレイクの魔剣だよ

？」

ブラン（弟子）：「これドレイクのなの!？」

フィオーネ：「勝手にそういうことにしました」

ヴィヴィ：「……そろそろ、外に出れるんじゃない?」

ヴィヴィがそう言うと、周囲の風景が崩れて徐々に元居た街道の景色へと変わっていきます。

ブラン（修羅）：「余計な寄り道くっちゃったけど、行こうか」

スピール：「馬車は……と」

ポツクル：「無事みたいだな、よかったー」

○エンディング

馬車に乗りこみ、指定されたナジュニア郊外の屋敷に到着したPCたち。そんな彼ら待っていたのはこじんまりとしながらも明らかに高級な屋敷と、レイと名乗る青年でした。

・レイ立ち絵（立ち絵はpicrewのストイックな男メーカー様を使用しています）

レイ：「……こんな夜半に、誰かな?」君たちの風体と馬車を見ると、ため息をつきながら口を開きます。

スピール : 「わざわざご丁寧にありがとうございます……少しばかり遅れてしまいました、中身は無事です」

レイ : 「中身……ねえ」と顔をしかめながらヴィヴィを見ています。

レイ : 「……とりあえず入れ、予定よりも人数が多いようだからその話も聞かせてもらう」と言つて、君たちを屋敷の中……食堂みたいなどに案内してからお茶を出します。

ブラン（修羅） : （若干警戒しながら屋敷の中をうかがっている）

レイ : 「そのナイトメア、ここは『伯爵』の別荘だ……少なくとも今は警戒しなくてもいい」

ブラン（修羅） : 「すまない」とだけ言つて露骨に警戒はしないでおく。でもいつでも戦闘態勢に入れるようにはしておく。屋敷の様子になんとなく前監禁されていた魔導士の屋敷を思い出していますね。

ポツクル : 「『伯爵』だつて？ てことはここは、マスターの友達の家なのか!!」

レイ : 「ああ、あれを友達と評していいかはわからないがそういうことだ。さて、どうせイレギュラーな事態でも起きたんだろう？ 説明してもらおうか」

ブラン（弟子） : 「ん。かくかくしかじか」よろいのひとと協力して倒したあとに合流したところまで

レイ：「成程な、遺族がいるかは知らんがそれ相応の対応はしよう」

フィオーネ：「あの方の素性をご存じなのですか？」

レイ：「知らん、興味もない。伯爵に報告して判断を仰ぐだけだ」レイの対応はあくまでも事務的、むしろ現状を疎ましく思っているようにも見える。

スピール：「その後、私たちが合流しましたが、突如現れた奈落の魔域に飲まれ、脱出に手間取った次第です」

レイ：「……それについては信じよう、ここからもオーロラは確認できた」
ポツクル：「そういえば、アンタは何者なんだ？」伯爵の友達か？」

レイ：「……俺は『レイ』、覚えなくてもいい。伯爵の執事……みたいなものだ。この別荘の管理も任されていてな、そのせいで今お前たちの対応をしている。……少し待っている」と言つて席を立ちます。そして、袋を持つてすぐ戻ってくる。

レイ：「約束の報酬だ、そのリカントの分も用意した」と言つて全員に5000Gずつ渡します。

ブラン（弟子）：「おお。りんじしゆうにゆう？」

スピール：「あら、連絡がない人員ですのに、ありがとうございます。それと、一つだけ聞いてもいいですか？」

レイ：「どうぞ、答えるかは知らんがな」

スピール：「ヴィヴィちゃんに、また会いに来ても？」

レイ：「問題ない……いやむしろこつちから依頼させてもらおう、その少女の護衛を頼む。伯爵は忙しくてね、ここに来るのに何日かかかりそうなんだ」

フィオーネ：「……一度の依頼でずいぶん信用していただけたようで〜。」

レイ：「信用なんてしないさ、せいぜい利用だ。はつきり言おう、俺はその少女を世話する気はさらさら無い」

フィオーネ：（利用と、ヴィヴィちゃんと同じ言い回しするのね。）

スピール：「でしようね。私達も、依頼としてなら喜んで」

レイ：「ああ、きちんと金は出そう。基本的に1日ひとり500G、有事の際はそれに追加だ」

ポツクル：「衣食住は!?!」

レイ：「この屋敷の部屋を貸してやる、物品はあるものを常識の範囲内で使え」

ブラン（弟子）：「ん。ん〜? 師匠、どうしよう」

師匠：「弟子よ、これはあくまで俺の勘だがな……ここにいれば、戦いには困らんと思うぞ?」

ブラン（弟子）：「にやり」「ん。わかった。ひきうける」

ポツクル : 「やりますやります!!」

スピール : (……物を壊しかねない人たちがいるので一筋だけ冷や汗を流す)

ブラン(修羅) : 「それなんだけど、僕だけ別の場所で宿泊できないかな? 豪華な屋敷つてちよつと落ち着かなくて……」

レイ : 「この屋敷には離れなぞ無い、ひとり部屋にするか庭で寝ろ」

ブラン(修羅) : 「分かった」と言つて1, 2日庭で寝ますが、多分ベッドに釣られて最終的には部屋にいます

レイ : 「ああ、それとそこのナイトメア。お前、俺が不本意そうにしてると思つてるだろう?」

ブラン(修羅) : 「? 僕? そうだけど。そうじゃないの?」

レイ : 「まさか、大当たりさ。仕事だから迎え入れるが、歓迎はしない」そして、こう続けます。

レイ : 「俺は、穢れなんかに関わりたくないんだ」と言つて、ブランとヴィヴィを一瞥してから部屋を出ていこうとします。

ブラン(修羅) : 「……まあそんなものだろうね……」後ろ姿を見ながらつぶやきます

そんなシーンで第1話は終了。次回は屋敷内部でのお話になります!

『寡二少双―ゼノ―』

○前回のあらすじ&成長

ヴィヴィという少女の護衛を依頼された（または歩いてたら巻き込まれた）PCたち。前任の護衛だった騎士から彼女を託された直後、突如生成された奈落の魔城に飲み込まれてしまいます。魔城を攻略し、指定された屋敷までヴィヴィを送り届けたPCたちは、彼女の引き続きの護衛を依頼されますが……

1話終了時点での各PCの主要な成長は以下のようになっています。

スピール ライダーが7↓8に。1話のトレジャードロップ表で女神のヴェールとマナスタツフを獲得。

ブラン（修羅） ファイターが7↓8に。新たにコンジャラーを2レベル習得。1話のトレジャードロップ表でウィークネスリビラー（ソードBランク）を獲得したのでバスタードソードから乗り換え。

ブラン（弟子） フェンサーが7↓8、エンハンサーが2↓4に。習得練技は《マツスルベアー》《ストロングブラッド》。ケアフルオートルーターと相互フォローの耳飾り（ポツクルと共有）を購入

ポツクル マギテックが7↓8、シューターが5↓6、スカウトが4↓5に。相互フォローの耳飾り（弟子と共有）を購入

フィオーネ フェアリーティマー7↓8に。勇者の証：心を購入

○トレーラー

○オープニング

GM：それでは2話、開幕となります、よろしくお願ひします！

ブラン（弟子）： よろしくおねがいます

フィオーネ： よろしくお願ひします！

スピール： よろしくおねがいます

ブラン（修羅）： よろしくですー！

ポツクル： わー！ぱちぱちー！

出だしのダイスロールの結果、第一話の終わりから4日の日数が経過したことになりました。その間ヴィヴィの警護をしつつも街で買い物などを済ませたPCたち。勿論この間も給料はしっかり発生しています。

ヴィヴィの護衛の給金は1人1日あたり500G、つまりは2000Gの収入になります。何もしなくてもこれだけの報酬が入ってくるのでPCたちとしてはおいしいところですよ。（GM「届けたからオサラバではシナリオが崩壊するので必要経費です」）

またPCたちが滞在することになる屋敷の間取りもここで提示されました。

ここで当然のごとく問題となるのはPCたちの部屋割り。PCたちに与えられたのは①から⑤の客室。また②の客室だけは大部屋で、2人が泊れるようになっていきます。（ポツクル「一番大きな部屋はオイラが取った！」一同「ほう？他の誰かに野宿を強制と

女子との同室どちらがお望みか」

護衛対象であり生活能力がないヴィヴィ（GM）「もし放置した場合、布団のシーツだけ被って壁にぶつかり、階段を転げ落ちながら食堂に來ますね」PC一同「それはそれでかわいい」が2人部屋の住人になり、各人の斥候スキルの有無やバレたくない秘密（ブラン（修羅）の修羅の刻印）などを加味した結果、部屋割りは以下のようにになりました。

①ブラン（修羅） ②スピール&ヴィヴィ ③ブラン（弟子） ④フィオーネ ⑤ポツクル

ここでポツクルがGMに話があるようで……

ポツクル : ところでGM。たまたま⑤になったんですけど

GM : 風呂は見えないですよ

ポツクル : 部屋の窓から露天風呂

ブラン（修羅） : 先手打たれてて草

フィオーネ : 先手打つGM

GM : 露天風呂は、塀と木々に囲まれているので覗くためには直上まで行く必要があります。きちんと考えながらデザインしましたよそこらへんは

ポツクル : バタリ

とまあそんな一幕もありつつ、部屋割りが決まったPC一同。ここでPCたちが気になっっているのはやはり同居人であるレイさんのことのようにです。

スピール：「厨房使つてもいいですか?!」

レイ：「好きにしろ、片づけさえしていれば材料も使つて構わん。食材が無ければ警護に支障のない範囲で街でも行け」ちなみにレイの作る料理は基本的に仕事しながら片手で食べられるやつとかばかりです。皆さんに対して作る気は毛頭無いようすが……

スピール：「ありがとうございます!!今度差し入れ作りますね!」

レイ：「……いつ街に行くかわからん、夜には戻るつもりだからそう思つておけ」

フィオーネ：「レイさんレイさん、仕事の合間に書齋の本読みに行つてもいい?伯爵邸にはさぞ珍しい本があるのでしよう?」

レイ：「書齋については、俺がいるときだけにしろ。執務室のモノを勝手に見られたら俺もお前も命が無いぞ。本を読めない時間が嫌なら、あらかじめ持つていく本を俺に伝えてくれ。それならいい」

フィオーネ：「了解。読みたい本まとめとくね」

一同：(思ったほどとつきにくい相手ではなさそう)

一方でブラン（修羅）はヴィヴィイに話があるようです。

ブラン（修羅）： あ、ヴィヴィイちゃんに操霊魔法教えてもらえるよう頼みたいですー
GM： なるほど、適当なところに座ってぼーっとしていますので適当に話しかけてみてくださいいな。

ブラン（修羅）： 「ヴィヴィイ、ちよつといいかい？」と中庭にいる時にでも

ヴィヴィイ： 「………？えーつと………固い方のぶらん？」

ブラン（修羅）： 「そうそう、固い方のブラン」

ヴィヴィイ： 「なに？」

ブラン（修羅）： 「ヴィヴィイって操霊魔法仕えたよね？実は僕にも教えて欲しくて」

ヴィヴィイ： 「暇なときでよければ」

ブラン（修羅）： 「ありがとう。ちよつとは僕も操霊魔法について知っておかなきゃ
と思つてね。助かるよ」

ヴィヴィイ： 「………多分、機会はあつたんだろうね。深くは聞かないけど」

ブラン（修羅）： 「………そうしてくれると助かるよ。重ね重ねありがとう」

ブラン（修羅）： 「それじゃあ、また夜にでもお願いするよ」

そう言つて立ち去るブラン（修羅）。入れ替わるようにしてポツクルがヴィヴィイのものを訪ねてきます。

ポツクル：「あれ、ヴィヴィ、いつの間にか包帯取ったんだ。目の色左右で違うんだな……左目も見えないのか？」（注：話時点ではヴィヴィは変装のため包帯を片目に巻いていました。屋敷に来て変装の必要がなくなったので外しています）

ヴィヴィ：「今はどっちも見えない、色のことは最初っからこう」声が聞こえたほうには振り向かずに言います。

ポツクル：「そうなのか。オッドアイって言うんだろ？オイラはじめて見たよー！」
ヴィヴィ：「そう？自分は他に知ってるけど」と初めていわれたかのように言いますね。

ポツクル：「まじ!?旅の途中で一人だけオッドアイの人に会ったけど、すごく珍しいんだって言ってたんだけどなあ……オイラだまされてたのかー!!!」

ヴィヴィ：「住んでる世界が違う、それだけのこと」

ポツクル：「ヴィヴィの住んでる世界ってすごいんだな！今度オイラもつれて行つてくれよ」

ヴィヴィ：「いや」

ポツクル：「ガーン！」

ヴィヴィ：「お前が行くのは気にしない、でも私が戻りたくない」

ポツクル：「そっか、じゃいや」

ヴィヴィ : 「それじゃ」と言って、立ち上がり去ろうとします。

ポックル : 「またなー!」と見送る。なんか地雷が爆発した気がするので撤退します
○

○ミドルフェイズ① 個別シーン

各々話したい人と話し、ここからイベント表を使つてのシーンです。PCたちは

① 1日目朝② 1日目昼③ 1日目夜④ 2日目朝⑤ 2日目昼

のそれぞれの時間帯に一人ずつ割り振られ、そこでランダムなイベントと遭遇します。イベントは原則として屋敷内で「レイ」「ヴィヴィ」「パーティーの誰か」と共にいる時に起こるといふもので、時間帯や対象によつて内容が異なります。ダイスの結果それぞれ割り振りは以下になりました。

① 1日目朝 : ポックル ② 1日目昼 : ブラン (弟子) ③ 1日目夜 : フィオーネ

④ 2日目朝 : ブラン (修羅) ⑤ 2日目昼 : スピール

① 1日目朝 くポックルの場合く

GM : それでは1日目の朝、ポックルですね。レイ・ヴィヴィ・PCたちの誰

か希望ありますか?それともランダム?

ポックル : 当然ランダム!

GM : それでは1d6を振りましょう。1く2でヴィヴィ、3く4でレイ、5く

6でPC達とのイベントです。

ポツクル : (コロコロ) 1!

GM : ヴィヴィとのイベントですね、こんな感じが起きます。

窓際に顎を乗せ、ヴィヴィが暇そうにしている。ゆらゆらしていて今にも落ちそう
だ。

GM : ちなみに何もしなければ落ちます。

ポツクル : 「大丈夫かヴィヴィ? なんか落ちそうじゃないか?」

ヴィヴィ : 「……んー? えー……」船をこいだまま、両手をバタバタさせて窓の外に投げ出している感じですね。半分寝てます。

ポツクル : 「おーい、ヴィヴィ、こんなところで寝てると危ないぞー!」声をかけながら近づいていく

ヴィヴィ : なお、ヴィヴィには一般的な危機意識が薄いのでこのまま物理的に何かしないと普通に墜落します。

ポツクル : 触るのもなあと思いつつ、声をかけつつずいずい近づきます

GM : なるほど、それではヴィヴィがずると落ちます。助ける場合は、先制判定で目標値13にしましょうか。

ポツクル : (コロコロ) 18。助け方は任意でいいです? 具体的に言うと、重力制

御で飛び出しながら、ロングバレルで拾いたい!

ヴィヴィ : それでは、ヴィヴィはロングバレルに担がれますね。

ポツクル : 「危ないところだった……」

ヴィヴィ : 「……………?……………?」

ヴィヴィ : 「……………なにごと?」ぷらーん

ポツクル : 「こつちが聞きたいよ……」と言いながら中庭に下ろしてあげる

ヴィヴィ : 「……………なにごと?」再びの疑問符

ポツクル : 「2階の窓から落っこちたんだよ……寝てたでしょ?」

ヴィヴィ : 「なるほど?」

ポツクル : 「もうちよつとマシなところで寝たほうがいいぞ……」

ヴィヴィ : 「まあ死ぬわけでもなし、いいのでは?」

ポツクル : 「いやそういう問題じゃないだろ? たぶん痛いぞー」

ブラン(弟子) : 中庭から見てる。「なにごと?」

スピール : 「あれー? なにかあったのー?」

ブラン(弟子) : 「そらからふたりがふつてきた」

スピール : 「空……あ、あの窓か……あの窓!」

ヴィヴィ : 「……………?」むむむ、と軽く唸っています。

スピール : 「いや2階なら……いい……のか……?」

ポツクル : 「よくなーい!!」

ヴィヴィ : 「……!」 ぼん、と両手をうつ

ポツクル : 「わかつてくれたか!」

ヴィヴィ : 「あさごはんだ」

スピール : 「あ、そうそう、ごはんできたよ」

ブラン(弟子) : 「ごはん!」

ヴィヴィ : 「卵食べたい」と言いながら食堂に向かいます。

ポツクル : 「ダメだこいつら、オイラがなんとかしないと……」

ポツクル : 「あ、つて朝ご飯はオイラも食べるよ!おいてくなよー!」と追いかける

ポツクル。なんか苦勞人ポジションに押し込まれつつある

②1日目昼 くブラン(弟子)の場合く

G M : 次は弟子の方ですね、相手を選択するか、ランダムかどちらにしましょうか?
 か?

ブラン(弟子) : せっかくだしランダムで

G M : それでは1d6振りましょう、結果は先ほどと同じです。

ブラン(弟子) : (コロコロ) 3

GM : お、レイですね。暇つぶしに本でも読もうかと書齋へ向かう、執務室で仕事をしているレイの前を通らなければいけないって感じの内容ですけど……とところで弟子、本って読む？

ブラン(弟子) : 剣術の本なら

GM : ああ、武術系の本ありますね……. 確かにあるわ。

ブラン(弟子) : あと料理、というか食べ物が載ってる本

GM : 料理本、間違いなくありますね……. それでは適当に入ってきてく

ださい。執務室には窓はありますけど書齋は本の保護のため窓はありません。

ブラン(弟子) : こんこんこん「しっじきーん」

レイ : 「空いてる、何か用か」と声が聞こえます。

ブラン(弟子) : ガチャ「剣術のほんってある？」

レイ : 「剣術……. お前の場合何に当たるかな？一応一通りはあるはずだ」

と持っている師匠を見ながら。

ブラン(弟子) : 「ん。よみたい。よんでいい？」

レイ : 「いいぞ、上の方に届かなかつたら台座を使え」と書齋の方を指さします、

鍵はかかかっていないようですね。

ブラン(弟子) : 「ありがとう」ペこり「おじやまします」ガチャ

ブラン（弟子）：「……どれ？」

レイ：「しばらく悩んでる弟子に声がかかります。」……読める言語は？」

ブラン（弟子）：「きょうつうご、リカントご、まどうきぶんめいご」

レイ：「……ふむ」弟子と、持っている師匠をしばらく観察してから「ほれ」といくつか本を渡します、片手両手両方の片刃系……それも力ではなく速さ主体の剣術についてばかりですね。

ブラン（弟子）：「おおー」キラキラ「ありがとう」ぺこり

レイ：「気にするな、いつまでいられても困るからな」と書類が山積みの机に戻ります。弟子はどうしますか？

ブラン（弟子）：「持って出ていいなら中庭とかで書いてあることを試したい」

GM：なるほど、素振りとかそんな感じですか？

ブラン（弟子）：「師匠と話しながら次の技のヒントにならないかと試行錯誤中」

師匠：「なるほど、お前にはまだ足りないものがある」と師匠

ブラン（弟子）：「たりないもの……」

師匠：「いつか、強敵と対峙した時に気が付くかもしれないな。お前はまだ若い、まずは地力を積み上げるがいい」

ブラン（弟子）：「わかった」素振りをする

G M : これ、意識すると「将来の強敵とのイベントまで待て」ですね！

ブラン（弟子） : いつかな

レイ : そんなこんなしていると、窓越しにレイが中庭の弟子を見ていますね。

ブラン（弟子） : 気づいてもそのまま素振りしてる

レイ : 声をかけずに離れていきます、荷物を持つているのでいったん街に向かうようですね。

③ 1日目夜 くファイオーネの場合く

G M : それでは次は1日目夜、ファイオーネのお時間ですね！ 個人的には、NP Cが一回ずつは出てきたのでもう後は何とでもなれるかと。

ファイオーネ : レイ選択しようか悩むけど、ここはランダムでしょ

G M : どうぞどうぞ

ファイオーネ : (コロコロ) 5

G M : PCの誰かですね、ランダムで対象を決めましょう。最悪、恐ろしいことになりますね。

ファイオーネ : 恐ろしいって、もしかや混浴イベントか？（なおポックル）

G M : それとも出目に対応するキャラを先に言ってから振ってもいいですよ

ファイオーネ : (コロコロ) ポックルだああああああああああ

ポツクル　：　おや？

GM　：　それでは、ポツクルとこんな感じのイベントが起こります。ごめんなさい。

1日の疲れを取るために入浴に来たフィオーネ、ここには露天風呂もあるようだ。

ブラン（修羅）　：　あつ（あつ）

スピール　：　約束された終末

ポツクル　：　ポツクルのお墓を立てるです

ブラン（修羅）　：　ごめんポツクル、リザレクションはまだ使えないんだ……

フィオーネ　：　「ふうう、一日のほとんど警護というのも疲れるね。」

フィオーネ　：　「警戒し続けるというのも無理があるもの、ここは露天風呂でも入って

リフレッシュしないとね。」

ポツクル　：　「まったくヴィヴィの危なっかしさと言ったらないぜ。」

ポツクル　：　「窓から落ちられたときはどうしようかと思つた……。今日も一日疲れ

たし、たまには露天風呂で疲れを流すか。」鼻歌を歌いながら浸かっているポツクル

このキャンペーンは全年齢版なので、もちろん露天風呂のお湯は白濁した泉質です。

ポツクル　：　湯気もたっぷり仕事をしている

GM　：　謎の光さんも待機しているぞ！

フィオーネ　：　「……ん、だれか来てるのかな？」まだ誰の声か気づいてない、そち

らに視線が「あら〜ポツクルくんじゃない〜？横失礼してもいい〜？」

ポツクル：「〜♪ってフィオーネ!?なんでこんな時間に!?!」

フィオーネ：「ふっふっふ、ここの露天風呂は混浴だからね〜。」あ、自分に妖精魔法のミストハイドかけてていいですか？

G M：全年齢版なので全然大丈夫ですよ

スピール：これが真のおねシヨタぢから

ブラン（弟子）：なんでポツクルが一番大変そうなんだろう

ポツクル：なんでやろな……

G M：黒一点だからでしょう

ポツクル：ヴィヴィに泣かれたあたりからかな……

フィオーネ：「どう〜?ここの警護には慣れた〜?」

ポツクル：「ばか!こつちくん!〜!」と言いながらそっぽを向いて慌てふためく

ポツクル

フィオーネ：「魔法で体は隠してるから気にしなくていいの〜?」

ポツクル：「そういう問題じゃない!〜!」と言いながら岩の向こう側に行きつつ

フィオーネ：「それとも今から『きやあ、ポツクルさんのエッチ〜!』とか叫んだ方がいい?」にやり

ポツクル : 「オイラまだ死にたくねー!!」

フィオーネ : 「冷静に考えると今の状況おかしい気がしてきた、やっぱり叫ぼうかしらね〜。」

ポツクル : 「先に入ってたのはオイラなのにな〜」

フィオーネ : 「せ〜の!」自分とポツクルにシークレットボイスかけてから叫びます。ポツクルからすると屋敷全体に叫ばれたと勘違いするので焦ることでしょう。

ポツクル : それだと脱兎のごとくポツクルは退散するかなw声にならない悲鳴を上げながら

フィオーネ : なんか思ってたのと違う感じになったw

G M : 一応、どの表でもお風呂イベントは用意しておいたんですけどこれが引かれるかあつて思いましたね。男性ポツクルだけですし。

ポツクル : どうしてよりによってポツクル……

フィオーネ : ポツクルの悲鳴を楽しみながら露天風呂で酒飲む。明日、露天風呂はお酒の瓶が散乱、風呂内で寝てるダメエルフが発見されることでしょう。

G M : どうぞどうぞ、片づけしなかつたら翌日レイに怒られるくらいですので。

フィオーネ : こいつ 警護する気あんのか?

といった感じで1日目は終了。レイからPCたちに給金が支払われますが……

G M : フィオーネ以外は500G、フィオーネは300G貰ってください。レイからは「わかってるよな？」と無言の圧力がフィオーネにのしかかります。減額で許された。

ブラン（弟子） : 草。真面目にやろう

フィオーネ : 「え、何の事ですか？」

ポツクル : 「フィオーネほんとに反省してくれよな……」

スピール : わあ早朝に風呂に入ると宣言したスピールが片付けもするんですね優

秀だなあ

フィオーネ : スピールさんがばれる前に掃除してくれる！

G M : 屋敷内のお酒を飲んでいたら在庫の原書に気が付きそうなので、お酒の分だけ自前でお金減らしておいたらばれなかったことにしましょうか。

フィオーネ : それじゃあ お酒200G分飲んだという事で

G M : 結局同じ！

ブラン（修羅） : 高級酒だったんやろうなあ……

ブラン（弟子） : 何持ちだしてんですかフィオーネ

④ 2日目朝、ブラン（修羅）の場合

G M : それでは、2日目の朝です！ブランですね

ブラン（修羅）：相手はランダムデー（コロコロ）2

GM：おやヴィヴィ。それではこんなイベントです。

ブラン（修羅）は朝食後ヴィヴィに捕まえられる、風呂に入りたいとのことだ。

ブラン（修羅）：風呂オー！

GM：各所にばらまいたやつを的確に選ばれるやつ（GM註：レイのお風呂イベントは1日目朝、朝風呂に行こうとしたらレイが風呂掃除をしていて「早く入りたいなら手伝え」と言われるイベントでした）

ポツクル：地雷原かここは……

ヴィヴィ：「……ん」とりあえず近くにいたブランを掴む。

ブラン（修羅）：「ヴィヴィ、どうしたんだい？」

ヴィヴィ：「おふろ、いきたい」

ブラン（修羅）：「ああ、そういうえばヴィヴィは一緒にいる相手が必要だったね。ス

ピール……は片づけで忙しそうだし……僕とがいいのかい？」

ヴィヴィ：「誰でもいい」

スピール：「ちよつとてがはなせないからよろしくー」と脇を通過

ブラン（修羅）：「まあ僕も今は暇だし、魔法教わつてる恩もあるしでお手伝いしよ
うかな？」あ、刻印を秘密にしたいから盲目のヴィヴィ相手だろうと当然脱ぎません。

着たまま洗うよ

ヴィヴィ : 「じゃあついでに練習しようか。魔法で動かしてみよう」とヘチマを渡されます。

ブラン(修羅) : 「……ちよつとまだ難しいかもね……」若干目逸らし

GM : では、魔力を基準に目標値13で行きましょう。ゴレムを操るのと同じ感覚ですかね。

ブラン(修羅) : (コロコロ) 12。いちたりない……

GM : ぎこちない感じで、時々すつぽ抜ける感じですね。一応洗えなくはない。

ブラン(修羅) : 「……ごめん、まだ慣れてなくて」

ヴィヴィ : 「……未熟者」鼻で笑います。

ブラン(修羅) : (無言でへちまを手にとってヴィヴィの背中を強めにこする)

ヴィヴィ : 「♪」無言、こうかがないようだ。魔法教えてる関係もあるので、仲が良くなってきているかと。

ブラン(修羅) : (効果がないと見るや魔力を使ったぎこちない背中こすりに戻る)

ヴィヴィ : ちなみに、体を洗ってもらった後きつちり100数えて出てきます。

ブラン(修羅) : (かわいい)

ヴィヴィ : そして当然のように着替えを手伝ってもらおうとします、教育をする

ならばちぼちやつていかないよ。

ブラン（修羅）：特に教育する気はないので着せてやります

ヴィヴィ：それではほかほかになったヴィヴィは満足そうにフンスフンスしながら「大儀であった」と言います。

ブラン（修羅）：「ははっ、ありがたき幸せ」とひざまづきましょう

ヴィヴィ：それではそのままおてつないで帰りましょう。

スピール：下着のつけ方くらいは教えてると思うけどここではサボるんだろうなあ

ヴィヴィ：さぼれるのなら徹底的にさぼるか、今の所。

⑤2日目昼　くスピールの場合く

GM：それでは2日目昼、スピールですな。

スピール：レイさんに差し入れでもよかつたけど、街に行つてマスターと会話してもいいなあ。どつちかの2択をランダムで

GM：おつそれではそのように

スピール：（コロコロ）街です。多分朝に差し入れは済ませた

GM：それでは案山子亭です、ここはいつも通り。多分、1話での顛末はもう報告しているんでしょうね。

スピール　：　「やつほーマスター。顔見に来たよー」

マスター　：　「おう、この間は助かったよ。その後どうだい？」とカウンター越しに聞かれます。

スピール　：　「みんなであの少女と仲良くやつてるよー。レイさんも、そこそこ程度には親切にしてくれてる」

マスター　：　「……あいつも、色々あったからな。そこらへんは大目に見てくれ」

スピール　：　「あーいう偉い人の補佐って、大変だもんねー。それだけじゃないんだろうけど、あの屋敷にこもりながらいろいろやつてるみたいだし。ちよつとくらしいもの食べてほしくて差し入れしたけど、食べる暇あるかなー」

マスター　：　「暇がなければ作るさ、あいつはそういうやつだ」

マスター　：　「……早死に、しなけりやいんだがな」

スピール　：　「けっこー遅い時間まで起きてるものね。気になっちゃう」

マスター　：　「それもそうだがね、アイツは体にちよいと爆弾抱えててな。流行り病にでもかかったらどうなるか、って心配はしている」

スピール　：　「うわー大変。しかも絶対無理して拗らせそうな人じゃん。そりゃ心配するわ」

マスター：「いくら言っても聞きやしねえ、生き急いでるんだよなあ」と自分の甥を心配しているみたいな感じで頭抱えています。

スピール：「……昔仲間だったとかなのかな？」

スピール：「スピールができるのは、今のところ料理くらいだから、依頼の間はその面倒くらいみてあげないとー」

マスター：「助かるよ、あいつ時間が無い時とか保存食片手に仕事してるんだよ………執務室に、常備してるんだとさ」

スピール：「わあ、掃除してあげた方がいいかな。でも流石に入ると怒られるか」
マスター：「あいつがいる間ならいいんじゃないか？見せたくない書類とかは隠すだろう」

スピール：「んー、じゃあ今度掃除していいか聞いてみよつと。ありがとマスター」

マスター：「おう……つと、ちよつと待つてくれ」と声をかけて、（コロコロ）陽光の魔符＋3を1枚渡してくれませす。

マスター：「この間の一件での、俺からの個人的な礼だ」

マスター：「………兄貴を、成仏させてくれてありがとうな」

スピール：「わーありがとうマスター」

スピール : 「……………兄貴！」

その他PC一同 : 兄!?

フィオーネ : 重要情報どんどん発掘してくスピールさん強い

マスター : 「ああ、俺は脚をやられて店をやってるが兄貴はそのまま冒険者を続けてな……………違う街に行っただと思っただら、このザマさ」

スピール : 「……………よかった、あれ売ったのこの店で。」

スピール : 「お兄さんは救えなかつたけど、その意志は、少しはスピールたちが継いでるつもり。あの人たちのことは、任せてチョーだい」

マスター : 「何かあつたら、遠慮せず頼ってくれ。出来る範囲で、どうにかしてやるよ」

スピール : 「頼れる間は、頼らせてもらおうよ。早速なんだけど、あの人たちの好物とかしらない？せっかくだから買って帰ろうかなあ」

マスター : 「……………ジャンクな食べ物。とりあえず、レイの好物はそんな感じのだ。割と種類は問わない」

スピール : 「アハハ、じゃあ割とヴィヴィちゃんにてるのね。あの子、味が濃い方がおいしそうに食べるもの」

マスター : 「……………なるほどな。まあ俺くらいから見ればどつちもガキには

違いねえ」苦笑します。(注：レイは20歳。ナイトメアであるマスターは50〜60歳くらい)

スピール：「スピールたちもそうだね。ありがと。よし今日は頑張るぞ。ありがとーマスター」

マスター：「おう、よろしく頼むわ」と見送つてくれます。

スピール：「じゃ、そのまま買い物しますね。サーリアと一緒になので一人でも楽々。」

○ミドルフェイズ② 全体シーン

PCたちそれぞれのシーンも終わり。時刻は2日目夕方。だいたい夕飯くらいの時間です。大体いつも仕事してるか帰ってきてないレイも、今日は珍しく厨房の方に来ています。

レイ：「……………ん？そうか、そう言えばこの時間帯お前はいるよな」と厨房にいるスピールに声をかけます。

スピール：「あれー、ここでお話するのは初めてかも？」はんばーぐこねこね

レイ：「……………毎回全員分の用意、手間じゃないか？」と言いながら適当に物を取り出してます。

スピール：「人数増えても手間変わらないって。荷物が増えるくらい？でも、手

伝つてくれるならありがたいですよ。楽しいし」

レイ：「……………」無言で手を洗い、腕をまくり上げます。どうやら料理を手伝つてくれるようだ。

スピール：「ありがとうございます。じゃあ、パンをこんな感じに切つてもらつて……」

レイ：「はいはい、仰せのままに」と割と手際よくやっています、ある程度技能をかじっているのもありますけど元々器用なんでしょう。

スピール：「いいかんじですねー。やっぱり一人で何かすることが多いんですね？」

レイ：「基本的に今はここで一人だからな、嫌でも覚えるさ」

スピール：「いつからここで？」

レイ：「……………伯爵に拾つてもらつてから8年、くらいかな。ここには5年前くらいからになる」

スピール：「この広い家に一人で5年……うーんスピールだとちよつと寂しくなつちやうなあ。あ、でも街に出てるし大丈夫なのかな？」

レイ：「じきに慣れた、それにそんなことを考える暇もなかったからな」若干遠い目をします。

スピール : 「え、もしかしてあの量をずつと?」

スピール : 「あ、パンが終わったらこのイモを切ってもらえます? フライドポテトを添えたいので」

レイ : 「……伯爵はな、人を見る目があるんだ。そいつの『これくらいならぎりぎり死なない程度に大丈夫だろう』つてのが特に」と言いながら料理を続けます。
スピール : 「……スピールはその人のことをうわさでしか聞いたことないんですが、すごい人なんですねえ」

レイ : 「まあ、あの人がいる限りこの領は安泰だろう」

スピール : 「でも、マスターが貴方のことを仕事しすぎだって心配してましたよ?」

レイ : 「……」 苦虫を噛み潰したような顔になります。

レイ : 「死なないさ、少なくとも今は……死ねないな」

フィオーネ : そろそろツマミを求めて突入してよいですか?

GM : どうぞどうぞ

フィオーネ : 「スピール」。追加のお酒となんかつまめるものちょうだい。」レイがいるとは露知らず乱入

スピール : 「え、もう飲んだの?」

レイ：「……もう飲んだ、と？」

フィオーネ：「飲み切った〜！」

ポツクル：「フィオーネ！それ以上飲んだらやばいって！」

フィオーネ：「げ、レイもいたのね〜。」

ブラン（弟子）：「ぎゆうにゆう〜」お風呂上がりのさっぱりした顔で

スピール：「厨房そんなひろくないよ〜」

レイ：「……なるほど、いい身分だなお前さんは」とフィオーネの首根っ

こを掴みます

フィオーネ：「大丈夫、飲みすぎないようにするから〜。」

レイ：「片手でつかんだまま、無言で宙づりにして食堂に放り投げます。見た目以上
に怪力。」

フィオーネ：「うぐ。」

ブラン（弟子）：「ぶくつぶくつ、ぷはあ〜」腰に手を当てて牛乳を飲んでる

ブラン（修羅）：「激辛ソース切れたんだけど、ないかな？」入らなそうなので顔を

ひよっこり

ポツクル：「あるわけないだろ……」

スピール：「ない」

ブラン（修羅）：「そう……今度街に行かないとか……」（残念そう）

ブラン（弟子）：激辛ソースと聞いてめっちゃ逃げる

ヴィヴィ：「ごほん、にく」さっそうと食堂に到着

スピール：「もうちよつと待つててね〜」

PC5人にレイ、それにヴィヴィが集まった厨房はすさまじいわちやわちやになりつつあります。

フィオーネ：「レイさん、これでも私だつて最低限仕事はしてるんだよ〜？」ぶつけた背中をさすりながら

レイ：「それについては結果さえ出せば構わん、だが今は別だ」

レイ：「狭いんだよ、お前らが来ると」と半眼になりながらスピール以外を見ます。

ブラン（弟子）：いつのまにか食堂で席についてる

ポツクル：てったーい！

GM：といった感じで、お夕飯ですね。

ブラン（弟子）：「いただきます」

フィオーネ：ヴィヴィちゃんがご飯食べる前に毎回薬品学判定振つてもいいですか？

GM：ほう、ちなみに薬品額判定の目的は何でしょう？場合によつては「あ、全

然ないですね」があるので。

フィオーネ : 単純に致死性の毒物の確認、いちおう仕事ですし

GM : いいですよー、目標値とかはこちらからはなしで。

フィオーネ : では(ココココ) 21。

GM : ヴィヴィには何もありませんでした、でもレイはなんか常備薬っぽいのであります。見た感じ、胃薬や強壮剤・虚弱体質用の薬の混合っぽいですね。後はなんか魔術による何かっぽいのが混ざってました。詳細は不明ですが何かしらの症状を抑えるための薬とまではわかっていいです。

ブラン(修羅) : 苦勞人……

フィオーネ : ヴィヴィの食事を調べるついでに、全員分の成分分析したら反応が出たのでしょうか。

GM : ちなみに、その薬について質問すると「こういうのを飲まんとやつてられん」と言われます。

フィオーネ : 了解です、誰から薬貰ってるかは聞けますか？

GM : 伯爵の伝手で、お抱えの薬師に定期的に処方してもらっているようですね。
フィオーネ : なるほど

そんな夕食前的一幕もありつつ、その日の夜中です。

種族がら眠る必要がないスピールが見張る中寝ていたヴィヴィが、突如苦しそうに呻きだします。かなりの苦痛なようで、苦しみによつて意識を失うもまたしばらくすると苦しきで目覚めまた呻き始めるような様子です。そんな中部屋の扉がノックされま

す。

レイ：「開けてくれ、緊急事態だ」とレイの声ですね。

スピール：「こつちも、ヴィヴィちゃんが変で……」と開ける

GM：ブラン（修羅）、ちよいと生命抵抗の判定してみましようか。目標値は17で。

ブラン（修羅）：これ、守りの剣か???（コロコロ）17。

GM：お、ちようどですね。それでは気分の悪さに起きる、そこまで気にするほどではないですが、まるで街にいるみたい。ご察しの通り、守りの剣の圏内に入ったと確信できます。

ブラン（修羅）：すぐに隣室に向かいます。「ヴィヴィ、大丈夫？」

GM：南側の3部屋にいるみなさんはスカウト+知力目標値18で現状に気が付きます。

判定の結果、ポックルのみが気づくことができました。

フィオーネ：フィオーネはヒラメなので振りません

スピール　：　酒飲んで寝てるダメダメお姉さん

ポツクル　：　二人の部屋を叩きながら駆け付けます

ブラン（弟子）　：　びくっ

フィオーネ　：　「すやああ」酒瓶抱えて寝てる

レイ　：　それでは、ポツクルを見つけたレイが声をかけますね。「何かあったようだな」

ブラン（弟子）　：　あれ？レイさん2人いない？

ブランが不思議に思うのも当然、レイは現在客室②にいるはずなのです。

GM　：　それでは、ここでヴィヴィと部屋にいるスピールは判定をしましょうか。

マイナス4の修正で、冒険者技能＋知力ボーナスでどうぞ。

スピール　：　（コロコロ）　11

GM　：　（コロコロ）　13点と17点の物理ダメージです、いつも起きているようなんで鎧は着ていていいですよ。

スピール　：　「いひゃい」

レイ?　：　「・・・ちつ、気づかれるのが早いか」舌打ちをします。

このタイミングで、ブラン（修羅）が登場。レイの姿をした何者かがスピールに攻撃を加えているのを目撃します。魔物知識判定の結果、相手は姿を変えることができる魔

神、ダブルブルグであることが判明します（GM「マスターキーを持っているはずのレイが部屋の鍵を空けるようになってきたことを怪しんでいたらダメージは受けませんでしたね」）

ダブルブルグ : 「………仕方ない、逃げるか」

スピール : 「あ、ちよつとー！」

ブラン（修羅） : 「逃がさないよ」部屋の入口を塞いで逃亡を阻止しようとしています

先制判定13に成功したら逃がさなくて済むものの、スカウトを持っていない2人は判定する権利もなく、ダブルブルグはそのまま逃亡します。

スピール : 「ふえ、逃げられちゃった」ウォーリーダーをかえしてえええええ

ブラン（修羅） : 「くそ、逃した……」窓から逃亡した魔神を見ながら

ここらへんで全員客室②に集合します。

レイ : 「おい、何があった？」

フィオーネ : 「今窓ガラス盛大に割れた音したけど？」

スピール : 「えつと、ヴィヴィちゃんが苦しみだしたら、レイさん……に、化けた

ダブルブルグが……」

ブラン（修羅） : 「魔神がヴィヴィを襲った。ごめん、逃した」

ポツクル : 窓から逃げた輩を狙い撃とうとするも時すでにお寿司

ブラン（弟子）：「がう〜がうがう」（もう見えない）

レイ：「……なるほど、最近街で視線を感じたのはそういうことか……すまない、俺の落ち度だ」悔しそうに顔を歪めます。

フィオーネ：「二分間の監視だけで姿口調真似されてしまうんでから、仕方ないよ〜。特に人通りの多い街の中だとね、誰に見られてるかとか容易に分からないでしょ〜」

GM：と、このタイミングで屋敷内の灯に関する魔道具が全部破壊されます。

暗視を持つていないキャラクターは、何かしらの方法を取らないと行動にマイナス修正がかかります。壊れたのは、あくまで館内のだけなので皆さんの手持ちは大丈夫です。

GM：今回は、ユニットを編成して館内の何処かにいる敵と探り合いをしながら進めていきます。そう、皆さんは一緒に行動してもいいし部隊を分けてもいいのだ！

ブラン（修羅）：館内戦闘！

ポツクル：これはレプラカーンの真価を見せるときだな……（注：レプラカーンは種族特徴で透明になれます）

ブラン（弟子）：スカウトだよ！がうしか言えないけど

ここで館内戦闘ルールの詳細です。比較的こまごまとした話なので興味のある方だ

けどうぞ

GM : ひとまず現状を説明しましょう。皆さんとヴィヴィ、そしてレイは現在客室②にいます。手持ちの明かり以外は全部破壊されているので、明かりなしに動くには暗視が必要となります。明かりをつけても大丈夫ですけど、その際敵側から発見されやすくなります。

ポツクル : ヴィヴィの容体は？

GM : ヴィヴィはとても危険ですね、どこかにある守りの剣をどうにかしないとそのうち発狂死します。セージ持ちはフィオーネだけでしたっけ、病気知識判定で目標値17/20の判定をしましょうか。ヴィヴィの現在の容態が詳しくわかります。

フィオーネ : (コロコロ) 21

GM : はい、それではフィオーネは『このままある程度の期間ヴィヴィを守りの剣の圏内に放置しておく』と発狂死する』とわかります。ユニット行動以外に戦闘ラウンドが発生した場合もポイントが増えることに注意してください。

ナーシングやサニティで発狂ポイント増加を抑制できると判明したので、ヴィヴィにそれぞれ魔法をかける一行。(GM「魔法ひとつにつき、増加の最大値が1減ります」)

最後に、この館の攻略条件は以下の通りです。

- ① 館内にいる全ての敵の排除
- ② 館内からの脱出、ただし現状謎の力により玄関からしか脱出できません。
- ③ ヴィヴィの発狂死

このいずれかが達成された時点で、今回のイベントは終了となります。

ファイオーネ : それじゃあナーシング使います(コロコロ) ふあんぶったwww
 ブラン(弟子) : 草

ブラン(修羅) : おいおいおい

ポツクル : 「ファイオーネ?」 真顔

ファイオーネ : 「……ごめん寝起きで調子出なかった」

ファイオーネ : 「もういつかい、今度は全員まとめて!」

そんな一幕もありつつ、18ラウンド持続のバフをかけていくPCたち。ここでファイオーネが全員にかけたサイレントムーブ(MP消費6×5人)の負担が後々重くのしかかってくることになるのですが……

またユニットの編成は以下の2グループになりました。

- ・ポツクルのみ(索敵値9 隠密値15 行動値6)
- ・レイ含む他PC5人(ヴィヴィ除く)(索敵値13 隠密値12 行動値5)

レイ：「間違いなく、何かが屋敷内に侵入している。……最終的には脱出したほうがいいだろうが、行動はお前たちに一任するよ」ヴィヴィを抱えながら、皆さんに言います。

ブラン（弟子）：「がう！」

ポツクル：「この館を無事に脱出したら、みんなでパーティー開こうぜ！」

ブラン（修羅）：「ポツクル、それ、フラグだから」

スピール：「まずは、安全確認〜」

フィオーネ：「ヴィヴィちゃんの病状を調べたけど、一刻の猶予も許されない状態だね。早く敵を制圧してここから出してあげないと。」

■1ターン目

それでは1ターン目です。それぞれのユニットの行動は以下の通りです。

・ポツクル（行動値10）： 隠密（隠密値19）・1階への移動

・他PC組（行動値10）： 隠密（隠密値17）・索敵（索敵値22）

それでは行動開始です。1階へ移動するポツクルは玄関前に敵が1組いること、そして敵が1組2階が上がっていくのを確認したものの他には何事もなく行動を終えました。一方で他のPCたちの探索の結果、2階に敵がいると分かりました。

その敵はPCたちを発見し、戦闘が始まります！敵は透明の魔神ゴードベル。高い防

護点も厄介ですが、それよりも透明化が厄介。攻撃を当らない上に避けるのも難しい、前衛泣かせのモンスターです。事前にかけられていた《プレス》分で弱点を抜き、更に先制を取ったPCたちのターンからスタートになります。

・1ラウンド目

ファイオーネの魔法が抵抗を抜き、しつかりとダメージを出すところからスタート。次に前衛にいるスピールが《バトルソング》を歌い、他前衛組の命中をサポートします。そんなスピールをブラン（修羅）がかばい一つ高い出目により確実に攻撃をヒットさせ、HPを削ります。

これに続くブラン（弟子）ですが、出目が振るわず命中はパラミスAが仕事した《ファーストアクション》分の1発のみ。しかしダメージはダメージ。PCたちの攻勢によりゴードベルのHPは半分ほどになりました。

最後にフェローであるレイの行動はキュア・ハート。ですがHPの減りが一切ないPCたちには恩恵が無く……エネミーターンとなります。

続くエネミーターン。対象はブラン（弟子）とスピールということで、結果としてWブランが攻撃の対象です。修羅への攻撃は弾かれたものの、弟子への攻撃は命中。17点のダメージを与えました。

・2ラウンド目

レイの行動は武器での攻撃（威力40+19）+《フォース》（魔力10）。固定値のため攻撃は命中し魔法は抵抗。続くブラン（修羅）の攻撃は外れ、弟子の攻撃は命中。残り12までHPが削れます。更にファイオーネのファイアーエネルギーギーター（純エネルギー）が抵抗を貫通。哀れゴードベルは倒れます。PCたちの勝利です！

スパール：問題は戦闘したからサイレント解除（注：サイレントムーブは音を立てると解除される）

ファイオーネ：さよならMP30……特に意味はなかった。

こうして1ターン目を終えたPCたち。戦闘による時間を経過含め、ヴィヴィ発狂までのカウントはこのターンで9貯まりました。

■2ターン目

2ターン目各ユニットの行動は以下の通りです。

- ・ポツクル（行動値13）：隠密（隠密値18）・索敵（索敵値18）
- ・その他PC（行動値11）：隠密（隠密値15）・索敵（索敵値21）

それでは行動及びその結果です。ポツクルは玄関に変わらぬ一組を見つけます。動いていない模様。そして、2階では敵兵の一組とPCたちがお互いを発見します。

敵は索敵用魔動機。先制判定16に成功すれば無力化できますが、失敗すると爆発して

全員にダメージを与えるというものです。ブラン（弟子）が先制を振り、22を出して無事無力化に成功しました。

ブラン（弟子）：「がう?」

索敵用魔動機：『チチチチチ、発火装置点火準備』

ブラン（弟子）：「がう!?!」

ナレーション?：君しか気が付いていない、だが君のワザマエなら点火前にこの物体をセツダンすることなどチャメシインシデンツツ!!

ブラン（弟子）：「がうがう!」斬る

ナレーション?：しめやかに爆発四散

ポツクル：ナムサン!

スピール：これがゼンモンIIタイガー

ブラン（弟子）：結局爆発するんかい!

ポツクル：たしかにwwww

ここで各階にロールプレイションが発生します。まずは1階のポツクルからです。

ポツクル：ヒソソ

???：『おい、そこにいる奴』と、玄関の方から男性の声が聞こえてきます。

ポツクル：ビクツ!!

??? : 『いるんだろう? 透明になってはいるようだが……俺にはわかるぞ』
 ポツクル : (オイラには分かる。これは……人違いだ!!) 知らんぷりしてみる。カマ
 かけであつてくれー

??? : 『ほう、どうやら俺のことをなめているようだな?』

??? : 『お前たちの前情報は知っている……もちろん、透明だということ
 貴様がレプラカーンのガン使いだってこともな。俺のことをなめているのか、それとも
 自身の力をずいぶん自信があるようだなあ』

??? : 『なんたって、マギテックがこんな状況で「ライフセンサー」すら使っていない
 んだからな』と、自身の手元にある計器を見ながら声をかけてきます。

ライフセンサーとは、特定の種別以外の生命体がどこにいるかを把握できるように
 なる魔動機術の一種です。敵はどうやらこれを使用して索敵を行っていた模様。

余談ですがこの「ライフセンサー」はポツクルも使用できません、なんで使っていないかつ
 たんでしようねえ?

ポツクル : ちなみにさつき聞きそびれたんですが、入り口で確認した敵って、見た
 目と数くらいわかります?

GM : 今の所ポツクルが見た感じは一人ですね、目に見えている分では。君と
 同じく2Hガンを持った相手がいます。

ポツクル : なるほどなるほど

ナイトメアスナイパー : 『なんならここで撃ち合いをしてもいいんだぜ?』と、顔につけたゴーグルを弄りながら言います。どうするかはポツクル次第ですけど。

ポツクル : 「いや、そいつはやめとくよ。キミの息の根を止める前に、聞いておきたいこともあるからね」とりあえず声は返す

ナイトメアスナイパー : 『そうかい、じゃあいいことをひとつ教えてやるよ。どうやらここは、奈落の魔域と同じように閉ざされているようだな』

ナイトメアスナイパー : 『俺の後ろ……玄関を通る以外は、外に出られないってさ』

ナイトメアスナイパー : 『それじゃあ、待つてるぞ。ああ、もちろん来なくてもいいぞ?その時は誰かさんが死ぬだけらしいからな』

ポツクル : 撃つてこないことに安堵しつつ「お優しいついでにもう一つ教えてくれよ。キミらの目的はなんなんだい?」

ナイトメアスナイパー : 『俺は、自分が死ぬまでここを通さないだけだ。詳細は省くがね、そうしなけりゃいけないヤツもいるんだよ……世の中にはね』

ポツクル : 歴戦の雰囲気を感じ取ったので、サシでは挑まずみんなを呼びに行こうとか思うポツクル。

去り際の判定で、敵はこのスナイパーだけでなく、他にもいそうであることが分かりました。

ポツクル：（撃ち合ったら死んでたZ☆）

一方で2階。レイと共にゴードベルを倒したPCたちですが、彼の戦い方に違和感を感じました。

GM：ぱつと見非武装だったレイは、インスタントウエポンを作って攻撃をしていました。で、攻撃をする際になんですけどレイの肌に変化がありました。こう………背中の方から肥大した血管みたいなモノが全身に模様如く発現していました、あくまで戦闘中のみですが。見識判定を20/24/30で内容がわかりません。

ここでフィオーネの出目が走り、達成値24をたたき出します。その結果開示された情報は、レイの身に着けている装備品に関するものでした。

禍魂（マガタマ）

知名度：20/24/30 製作時期：不明 装備部位：背中

形状：移植された魔導心臓、能力解放時には全身に傷跡が発生し血液が結晶化する。

目標値20：《歪んだ魂》「+12」「+6」「+6」「-6」「-6」「-6」の修正を任

意の能力値それぞれに行う。

目標値24・《異形の躰》武器攻撃時、使用する武器の威力を倍として計算する。自身の手番終了時、使用した武器は全て破壊される。

GM : これを背中に装備、とういか移植されています。これがあるので、威力が40とか60の攻撃を普通に行います。(ブラン(修羅) : 「移植ナカーマ」)
 フィオーネ : 「レイさん、その背中……。」

レイ : 「気にするな、今生きているのはこれのおかげだ。ここで使うって決めたのも、俺だしな」

フィオーネ : 「……そう、なら特に言うことないよ。あとで全身の傷跡スピールちゃんに治してもらったらいよいよ。」

レイ : 「問題ない、勝手に再生する」実際ダメージは発生しないので演出だけです。
 スピール : 「いたくないんですか?」

レイ : 「……」少し口の端を歪め 「もう慣れた……」なんて言わないけどな」

ブラン(弟子) : 「がう!」尊敬の眼差し

レイ : 「痛みがあるから、今生きていることを実感できる……」あと、やらかなきやいけないこともな」

スピール : 「……レイさんにも、ヴィヴィちゃんにも、負担がかかりすぎないうち

に早く出ないとですね」

フィオーネ：「さすがだね。ごめん何も聞かないって言ったけど一点だけ、伯爵から頂いてる薬はそれと関係あるんだよね？」

レイ：「……いや、どちらかといえば主に胃薬……」眉間にしわを寄せて呻きます。

フィオーネ：「……お疲れ様です。」（ストレス抱えてそうだし、お酒ひかえよ）

ポツクル：レイさん……

スピール：食生活乱れてるから……

ブラン（修羅）：GM。そういうえばブランって育ての親の魔導士の名前知ってたりしますかね？知ってたらここで出したいけど

GM：育ての魔導士ですか、名前はマレウスです。きちんと設定は作っています。

ブラン（修羅）：どもですー。外れてるかもだけどカマはかけときたい

ブラン（修羅）：「レイさん、お疲れのところ悪いんだけど……マレウスっていう名前に聞き覚えはないかな？」

レイ：お、地雷を踏みぬかれたのでブランの胸倉掴み上げて吊り上げますね。

レイ：「……その名前、どこで聞いた？」片手には作成されたインスタン

トウエポンに魔力が乗ってます（威力60追加ダメージ25）

ポツクル : おいおいおい

フィオーネ : ひええええ

スピール : わたわた

ブラン(弟子) : がうう

GM : 回らなくてもフィオーネは一撃で殺せそう

フィオーネ : 待って、フィオーネ換算しないで

ブラン(修羅) : 「……レイさんみたいな人を他にも見たことがあって、その人に彼

が関わってたから聞いてみただけ。それだけだよ」表情を変えずに

レイ : 「……」無言でブランを下ろします。

GM : あ、面白いのでここで真偽判定してみましよう。お互いに冒険者レベル＋知力ボーナスで。こちらでも公開しましょう。

ブラン(修羅) : (コロコロ) 18

レイ : (コロコロ) 20

レイ : 「……深くは、聞かないでよくよ」

レイ : 「それとすまない、女性への態度としてはどうかしていた」苦虫をかみつぶしたかのような表情です、割と心の底から後悔しています。

ブラン(修羅) : 「こちらこそ、気分を害したようなら謝るよ。ごめん」

フィオーネ : (……あれ、昨晚私の事投げ飛ばしてなかったっけ?)

G M : フィオーネさんはしでかしたことを天秤にかけましょうねー

余談ではありますが、以下このようなやりとりがありました。

G M : この間確認忘れたんですけど、ブラン (修羅) の身長どれくらいでしたっけ？
ちなみにレイはだいたい180半ばです。

ブラン (修羅) : こっちはだいたい160くらいですかね。

両者 : なるほど、それくらい的身長差での胸倉掴み……

たいへん良いものを見せていただきました。

○ミドルフェイズ③ ｖs スナイパー、そして……

ここで1階にいたポックルも合流。PCたちが一堂にそろい、残す敵が玄関にいるスナイパーのみであることが明らかになりました。2ターンのヴィヴィのカウント上昇は5。現在14/50です。

ポックル : 「たいへんだー！」

ブラン (弟子) : 「がう？」

ポックル : 「強そうなスナイパーが入り口を抑えてるぜ！」

ブラン (弟子) : 「……がう？」ポックルを見る。見た目強そうには見えないなと思
う

ポツクル : 「オイラじゃねえ!!!」

ポツクル : 「スナイパーの他にもなんかいそうな気配は感じた。透明になつてなかつたら生きて帰つてこられなかつたぜ……」

レイ : 「なるほど、挟撃とかは出来そうか?」

ポツクル : 「外に出て裏からとかは難しそうだ、あいつ曰く、この建物は入り口以外からは出られないらしい」と言いながら窓とか開けてみる?

GM : おつそれなら窓は開けられますけどすぐ外に壁みたいなのを感じます。

レイ : 「どけ」と窓の外に武器を振るいます。結果は武器が壊れただけ、外には出れないと納得します。

ブラン(弟子) : 「がう、がう、がう」パントマイム

ポツクル : 「ちなみにライフセンサーでオイラの場所突き止めてきた、たぶんここに固まつてるのもバレてるぜ!」

レイ : 「なるほどな、それでも動かない相手だと」

ポツクル : 「時間がたてば何が起きるか、わかつてるんだ」

レイ : 「……少しだけ、時間をもらつてもいいか?」と、抱えているヴィヴィをちらつと見てから君たちに聞きます。

スピール : 「なにか、やることがあるつてこと?」

レイ：「俺の部屋に物資を取りに行く、お前たちも消耗してるだろう？」具体的に、次の行動ぶんの1d6を増やしてから下に向かってもいいかです。その代わり回復と物資の補給（一同「喉から手が出るほど欲しい」）が出来ます。

ブラン（弟子）：「がうう。ペロペロ」傷をなめる

フィオーネ：「急ぎたいけど、消耗したまま戦って負けたら本末転倒だね。」

ということでレイの部屋に向かうPCたち。そこには魔晶石が保管してありPCたちは7点を2個、9点を2個、10点を1個手に入れました。

レイ：「ちよつと待つてる、確かこのあたりに……ほら、これで少しはもつだろ」

スピール：「ありがとうございます。これだけあれば持ちそうです」

フィオーネ：「MP心許なかったんだよね、ありがと。」

レイ：「準備はできたか？行くぞ」と本人も白Sカードの束持ち出してきました。

スピール：「わあ、やる気」

レイ：「寝覚めが悪いのは嫌なんだな」と抱えているヴィヴィをちらつと見ます。

スピール：（なんだかんだ言っつて、大事にしてるじゃん）

レイ：うるさいやい（中の人）

ポツクル：レイさんの萌えキャラ化

ブラン（修羅）：「ヴィヴィのために頑張ってくれて、ありがとう」仲良くなってる（と思う）魔術の師匠なので

レイ：「……行くぞ」と返答はせずに下に向かおうとします。

そんなわけで1階玄関での戦闘です。PCたち（+レイ）が1階へ向かうと、変わらぬ様子でスナイパーが立ちはだかっています。

ナイトメアスナイパー：『7人……それと騎獣か、データ通りのようだな。逃げも隠れもせんよ、かかってきな』

ブラン（弟子）：「がお！」
ポツクル：「二つ聞きたい」

ポツクル：「なんでオイラが2階のみんなと合流するのを許したんだ？ 一人の時に仕掛けることもできただろ？」合流できてから聞く、ワタシは賢いので

ナイトメアスナイパー：「それは俺の受けたオーダーじゃあないからな」

ナイトメアスナイパー：「俺の役目はふたつ。ひとつ、お前たちを出来るだけこの館内にとどめること。ひとつ、お前たちを出来るだけ消耗させること」

ナイトメアスナイパー：「……死んでもやり遂げる、そういうことだ」
ブラン（弟子）：（めっちゃ消耗したな）

ブラン（修羅）：（こいつのせいではないんだよなあ……）

スピール　：　半分がサイレントムーブ

ポツクル　：　（やさナイパー有能）

ポツクル　：　「ならお望みどおりってやつだ！」

ナイトメアスナイパー　：　「さあ来いよ、そこのお姫さんの命がどうなるかわからないぞ？」と戦闘準備をします。

スピール　：　「……どうしてみんな命を粗末にするかなあ」

ポツクル　：　「気をつけろ、敵はあいつ一人じゃない!!」　ワタシは賢いので、さつきの内容を覚えているのです

ここで難易度18の危険感知判定。これを《プレス》分込みでちようど成功させたポツクルは玄関周辺に擬態したシンカーハウスがいることが分かります。相手の高い先制値におののくもそれ以上の出目を見せたブラン（弟子）により無事先手を獲得し、弱点抜きにも成功したPCたち。それでは、戦闘開始です！

・1라운드目

まずはすっかりおなじみと化したスピールによるバトルソングから。（スピール　：　なにもあげるものがないから歌を歌うよ！　GM　：　とうとつなきんモザ）続くサーリアの一撃でスナイパーのHPが削れます。

そしてエルフ生まれナイトメアであるスナイパーの氷弱点を突いたフィオーネの

ファイアブラストにより早くもスナイパーが虫の息に。その後の行動はレイ。魔力撃（威力60+25）がスナイパーに炸裂し、そこに捨て身カウンターを試みたスナイパーは死亡しました。

しかしただでは死なないのがこのスナイパー。特殊能力の決死隊（生死判定失敗時、主動作と補助動作を1回ずつ行える）により《シヨットガン・バレット》を後衛に打ち込んでせめてもの傷跡を残します。

さて残るはシンカーハウスだけですが……この敵の打点（2D+7点）だとブラン（修羅）の防護点（最大18）の前にはほぼほぼ完封されてしまうということそのまま勝利ということに。圧倒的に早い決着でした。（GM「ぐだるのは回避よー」）

戦闘後、1ラウンドを使って回復するPCたち。この時点でのヴィヴィのカウントは21/50。ほぼほぼ4割です。

ブラン（弟子）：「がう」扉の前にいる

ブラン（修羅）：「ヴィヴィも苦しそうだし、早く出ようよ」

ポツクル：「いくぞー!」

スピール：「そとー」

PCたちが外に出ようとすると、どこからか声がかかります。

銀月の騎士：「それはかなわぬというものだ、穢れとそれに迎合する者たちよ」出

てきたのは、魔剣を携えた一人の騎士。その手に持つ魔剣こそ、守りの剣の効果を持つ物だとわかるでしょう。

ブラン（弟子）： やばそうなのが

ブラン（修羅）： めっちゃ強そうな人きたー

ポツクル： きゃーかつこいー!!

フィオーネ： IKEMEN

銀月の騎士： 「この世界の理を乱す存在、そしてそれに加担する者たちよ。最後にチャンスをやろう。我の手をその血で穢す前に、疾く自害せよ」騎士は、そう言い放ちます。明らかに会話は通用しそうにないですね！

ブラン（弟子）： 「がうう！」警戒している

ブラン（修羅）： 「僕の役目はヴィヴィを守ることに。相手が誰だろうと、何があろうと関係ない」大盾を構える

ポツクル： 「その剣がヴィヴィを苦しめてるなら、まずはそいつを壊させてもらうよ！」

フィオーネ： 「そつちこそ、そこを退くついでにその守りの剣へし折つてくれないなら痛い目見るよ〜？」

スピール： 「……」複雑な顔

銀月の騎士　：「嗚呼、なんということだろう……未だ穢れを湛えてすらい
ない者までもがそのような世迷言を……ならば、せめて来世で良き歩みを送れ
るようにするのも我が勤め。穢れに迎合したこと、そしてなによりあのお方の道を阻ん
でしまった己を恨むがよい！」

どこか演劇をしているかのように嘆き叫ぶ銀月の騎士。ここで新たな人物が登場し
ます。

???　：「——ほう、誰が『そのこと』についてまで口にしていいと言いましたか？」
と、常に笑いをたたえたような、しかしどこことなく人間味を感じさせない声が聞こえて
きます。

ブラン（修羅）　：あつ……

フィオーネ　：もしかして魔導士との感動Wの再開ですか？

ブラン（修羅）　：えーっここでー????

一瞬体がこわばった騎士、だが続く言葉に緊張がほぐれる。

???　：「まあ許しましょう、今日の私はとても気分が良い」

マレウス　：「いやあ、お姫様を迎えにきたところで……とてもとても、懐
かしい顔に会いましたねえ」と、暗闇の中からひとりの魔術師風の男が出てきます。

(立ち絵はpicrewのストイックな男メーカー様を使用しています)

マレウス：「ねえ検体B?.....おっと、今は『ブラン』でしたっけ」とブランの方を見ます。

ブラン(弟子)：「？」ブラン(修羅)の方を見る

ブラン(修羅)：「.....」顔からすつと血の気が引きます。手もがたがたと震えだす

マレウス：「おやあ、どうしました?今は何もしてないではないですか.....それとも、何かされたいんですかねお前は。うーん、体を刻むのも電気を流すのも毒を注入するのも飽きましたねえ.....ああそうだ!」

マレウス：「お前の素性をそれとなく周囲に伝えるとか、妙案じゃないですか?」と、微笑みます。

スピール：「.....穢れよりも邪悪」

ブラン(弟子)：「グルル」魔術師をにらみつける

ブラン(修羅)：「.....痛いのは嫌だ痛いのはいやだいやだ.....」話を聞いていないようであわごとのように繰り返しています。

フィオーネ：「.....ブランちゃん大丈夫?」震えるブランの手をそつと握る。

ブラン（修羅）：　　ファイオーネの手が触れると一瞬びくつと震える

ファイオーネ：　「……あいつに過去何されたか私には分からないけど、今だけはヴィ
ヴィちゃんを護つてあげないと。いつもの頼りがいのあるブランに戻って？」顔を覗き
こみながら。

ブラン（修羅）：　「……ヴィヴィ。そうだ。ヴィヴィを守らなきゃ……」目に若干生
気が宿る。下げてた手をゆっくりとあげて盾を構え直す

ブラン（修羅）：　「……ヴィヴィに僕のような目を遭わせる訳には……」しかし依然
として全身震えています

ポツクル：　「だりゃー!!」とロングバレルを二人に向かって振り回す。

GM：　　お、それは敵側ですかね？それなら騎士に届くよりも前で謎の力で跳ね返
されました。力場的なものですね。

ポツクル：　重力制御で華麗に着地！「オマエたちの話に付き合ってる間にもヴィ
ヴィは苦しんでる、まずはその剣を折らせてもらおう!!」

銀月の騎士：　「ほう？貴様ら如きにこの魔剣を破壊できるとでも？寝言なら、死し
た後に口ずさむがよい」

ポツクル：　「その言葉、そのままお返しだ!」

レイ：　「……話 は 済 ん だ か？」と前に出てきます。

レイ：「俺の方も色々と言いたいことはあるんだがね、まあ今はいいさ。とりあえず、今はこのお嬢さん方を安全なところまでエスコートしなくちゃいけない身なんですね」

レイ：「不本意ながら、問題に巻き込まれてやるよ」

ブラン（修羅）：「レイさんカッコいい……」（ポツ）

ポツクル：「レイさんもだいたい丸くなつたなあ」

レイ：「……だから、こんなことには関わりたくないんだよ」と、最後に小さく呟きます。

銀月の騎士：「ならば来るがよい、魔剣のサビにしてくれる」

といったところで、マレウスが割り込んできます。

マレウス：「ああ、ちよつとよろしいかな？……先ほどの君の失言についてなんだけど」と騎士に声をかけますね。

マレウス：「面白いものを今日は見せてもらつたけど、これじゃあ足りないから……君の体と尊厳、使わせてもらうね」と、騎士に短剣を突き立てます。

銀月の騎士：「な、に……あがああ……と騎士は呻きだし、その下半身が変貌します！具体的には「部位：触手」が3部位生えました。

ポツクル：「騎士……!!!」

といった感じで騎士が暴れだして戦闘開始です！エネミーは騎士（4部位）に加え後衛にマレウス。なおマレウスに関してはHPなどが設定されていますが倒す必要がないボーンラス敵としての登場。行動も各陣営が行動を終えた後にランダムで決定する舐めプキヤラです。

ファイオーネ：「ブランちゃんまだ手震えてる……。無茶しすぎないでね？」

ブラン（修羅）：「大丈夫。頭を切り替える……。切り替えるから……」

レイ：「お前はあのデカブツだけ見て置け、あとはそうだな」

レイ：「後ろにいるヴィヴィ、守るんだろ？」とだけ言つて肩に手を置き、ブランの前に立ちます

ブラン（修羅）：「……分かった。ヴィヴィを守る。やることは変わらない。変わらないんだ」

魔物となったため生やさされた銀月の騎士の弱点を抜くPC一同。また今回はPC陣営（主にブラン（修羅）とサーリア）の弱点隠蔽判定も行いますが、こちらは失敗。続く先制判定ではブラン（弟子）が6ゾロを出して先制を確保。弟子、先制だと出目が走るようです。

・1ラウンド目

触手が存在する限り騎士本体へのダメージが軽減されるためまずは触手を落とそう

とするPCたち。スピールの《バトルソング》に乗せて（スピール：　急に歌うよ
 ブラン（弟子）：　（こんなに歌うもんだっけ…））サーリアが電撃を触手に浴びせる
 ところからスタート。そしてポツクルの指輪を割った《ショットガン・バレット》が炸
 裂しますが、騎士本体はトレジャー強化の瞬間達成値＋4で回避。触手だけではありま
 すが広くダメージを与えます。

PCたちの範囲攻撃は終わりません。フィオーネが騎士の弱点である衝撃属性を付
 与した「ファイアショット」は出目11で炸裂しますが、騎士本体は同じく出
 目11を出して抵抗。ハイレベルな攻防を繰り広げます。

そんな攻撃に巻き込まれた触手のうち1本のHPがここで0になります。そして触
 手の1本が倒れたことにより、騎士本体の特殊能力《剣の暴走》（ランダムな対象に10
 点）が発動します。その攻撃対象は残りHP6である自身の触手。（ポツクル：　まず
 い、これは！　GM：（コロコロ）　あれ…？　触手2が死亡……スピール：

連鎖墮ち……）2本目の触手死亡により誘発した《剣の暴走》の対象はポツクル。
 （ポツクル：　「なんでオイラー!!!」フィオーネ：　ポツクル、フラグ立てるから……）
 気を取り直して次はフェローのレイ。彼の魔力撃が残る触手を叩き伏せ、残すエネ
 ミーは銀月の騎士本体（とマレウス）のみになります。そして今回の《剣の暴走》の相
 手はというと……

銀月の騎士 : (コロコロ) マレウス。 笑うしかない

ポツクル : 草

スピール : キターーーーーー

フィオーネ : これは草

ブラン(修羅) : 騎士無能……

ブラン(弟子) : この騎士かわいいな

マレウス : 「おやおや、どうやら急造の検体ではこんなものですか」と切り裂かれた自分の腕と流れていく血液を面白そうに眺めています。

マレウス : 「ハツハツハ、すみませんねえ。お前の献身をあれだけ頂いたうえでこんな醜態を見せてしまつて……いや、お前からの献身だからこんなものかな?」とブランに微笑みかけます。

ブラン(修羅) : 必死に目を会わせないようにしてる。 マレウス、的確にぐじぐじと傷跡をいじくつてくるな……

長かったPCたちの手番も残るはブラン2人。先に行動したブラン(弟子)は初撃を外すものの(ポツクル : 先制をとって終わりじゃないんだぞ!!w)、ファストアクシオン分を当ててクリティカルさせます。ちなみに騎士本体はあらゆるダメージを10点軽減する障壁を展開していますが、クリティカルするとこれが無効化されるためク

リテイカルには額面以上の偉さがあります。最後のブラン（修羅）は弟子をかばいつつ、着実にダメージを与えます。

ようやくやってきたエネミーターン。まず騎士は《月の光》（補助動作で行えるエリア1つを対象とした魔法攻撃。主動作で行うと威力アップ）を使用、後方全員に魔法攻撃した後ブラン（修羅）にトレジャー強化の《呪いの波動》を放ちます。そのままナイトメアであるブラン（修羅）に殴りかかり、命中（銀月の騎士）：「穢レハ、滅ボサネバ!!」。31点の物理・銀属性ダメージを与えると共に、その手に持つ守りの剣の特殊効果により穢れを持つ彼女の最大HP・現在HPを5点減少させます。

各陣営の行動が終わったので最後にマレウスの行動です。最低でも13レベルのウィザードであると明言されている彼の行動はというと……

マレウス：（コロコロ）椅子を魔法で取り出して、その場に座ってくつろぎ始めます。

マレウス：「ああ、おかまいなく」

ブラン（弟子）：優しい方だった！

ブラン（修羅）：舐めプ甚だしくて草

最後にラウンド移行によりヴィヴィの発狂カウンター上昇。25/50まで到達します。

・2라운드目

まずはフェローであるレイの数拡大《キュア・ハート》から。先ほど騎士から殴られたブラン（修羅）はもとより、《月の光》により削れていた後衛組のHPも回復します（ポツクル）：顧客が求めていたものスピール：戦況を把握している男ブラン（修羅）：レイさん有能すぎるけど。PCたちの攻撃は騎士に対してフィオーネが指輪を割りながら放った「フレイムシヨックアロー」からスタート。障壁に阻まれながらも弱点を突いてかなりのダメージを与えます。

対騎士で若干の余裕が見えたためポツクルはマレウスを狙うことに。クリティカル値8の《クリティカル・バレット》がマレウスを襲います。そしてここでポツクルの目が荒ぶります。5回転し、58点のダメージをたたき出した《クリティカル・バレット》はマレウスを一撃のもとに撃ちぬいたのでした。

ポツクル：「オマエみたいな外道だけは生かしちやおかねえ！」

マレウス：「いやあ、やりますねえ……これは予想以上だ」と額を撃ち抜かれて辺りに血や脳漿をぶちまけながら笑顔で拍手しています。「……失礼、お名前を伺っても？」

ポツクル：「ポツクルだ。冥土で思い返すことだな」

マレウス：「ポツクルですか、覚えておきますね。ですが、残念ながら後半のお願

いは聞けませんねえ……」

ブラン（弟子）：「新しいフラグ立った？」

スピール：「あたらしいおもちゃを見つけた顔」

マレウス：「おっと、それよりも目の前のバケモノをどうにかしなくていいんですか？」と椅子に腰かけたまま皆さんに行動を促します。

ポツクル：「なんだこいつ……不死身か……う？」

残るは騎士のみ。クリティカル目当てで剣に持ち替えたブラン（修羅）の一撃でしたが、残念ながらクリティカルはせず。その後スピールが次ターンからの前線での《バトルソング》準備のために移動し、《ワードブレイク》でブラン（修羅）にかかった《呪いの波動》の解呪に臨みますが失敗してしまいます。残るサーリアとブラン（弟子）の攻撃も命中し、騎士もだいたいぶ消耗してきているようです。

そしてやってきたエネミーターン。騎士は主動作を使い強化された《月の光》を前衛たちに放ちますが、出目が振るわず。全員に抵抗されて手番終了です。

・3 ラウンド目

まずは前回と同じくレイの数拡大《キュア・ハート》（GM「フェローだからランダム行動のはずなのに、何故戦況に合わせた行動をしているのだろう？」）から。《月の光》で消耗したPCたちの体力を回復させます。その後前線にいるスピールが再び《バトルソ

ング。この恩恵を受けたサーリア及びブラン（修羅）が、出目の振るわなくなった銀月の騎士に打点を与えていきます。

次に動くのは先ほど5回転のファインプレーを見せたポツクルですが、ここで命中ピソゾロ。相互フォローの耳飾りで対になっているブラン（弟子）に後を託します。

ポツクル：ポツクルの放った銃弾に気を取られた騎士を、でしの師匠が襲う!!!

ブラン（弟子）：「ガオ！」相互フォローで出目10固定。達成値25！

銀月の騎士：6ゾロチエックですね（コロコロ）。出ました、6ゾロ。やはり演出はダイスを振った後にするべきですねハッハッハ！

ブラン（弟子）：「がう!？」必死になって戦ったものを意志の力で覆されるやつ

ポツクル：「なんだって!？」

銀月の騎士：「穢レ……ケガ、レハ何処ダアツ!!」力任せに魔剣を振りぬく！

ポツクル：これは強キャラだわ

GM：今までの株の急降下をここで使う！

続くフィオーネの魔法にも抵抗。欠片分の追加HPに突入しますが、まだ立っていません。

騎士の行動は自分に散々ダメージを出してきた後衛組への主動作《月の光》。フィ

オーネとポツクルはこれに対し事前にかけていた《カウンター・マジック》分でなんとか抵抗し、3ラウンド目は終了です。この時点でのヴィヴィの発狂カウントは34／50。戦況もいよいよ終盤となってきています。

・4ラウンド目

レイの行動は武器攻撃＋《フォース》。スピールの《バトルソング》の影響もあり手数が多いマルチアクションによる攻撃は偉いです。続くブラン2人の攻撃は、どちらも命中。弟子がクリティカルを出して障壁を無視したダメージを与え、欠片による追加分を――66点まで削りますが騎士はまだ立っています。しぶとい。

その後スピールの《フォース》が飛びますが抵抗された上障壁に阻まれほとんどダメージは通らず。しかしサーリアによる追撃で、遂に銀月の騎士は崩れ落ちるのでした。戦闘終了です！

○エンディング 一難去つて

ポツクル : 強敵だった……

スピール : 「穢れは、確かに良くないものです。でも、それを得ているからと言って、その人が必ず悪いということはないのです……」

マレウス : 「ハハハ、確かにそうですね。穢れを得ていようがいまいが使えないやつは使えませんし」 脳天を貫かれてなお語り続けるマレウス

スピール : 「……」

マレウス : 「今日は面白い余興が見れました、感謝しますよ」といって立ち上がり、そのまま騎士が落とした魔剣を無造作に拾おうとします。

ポツクル : 「でしー!」

ブラン(弟子) : 「ガオ!」先に拾おうとする

マレウス : 「邪魔ですね、切りなさい」マレウスがそう言うやいなや、突然現れた小さな影が弟子に切りかかります!

ブラン(弟子) : 「がう!」躲そうとする

ブラン(弟子) が咄嗟に身をひるがえす、そして目の前には魔剣を拾う小さな影

(GM 「ここからPCの負けイベントだけどいい?」一同 「どうぞどうぞ」)

(立ち絵は Picrew のみーなのキャラメーカー (β版) 様を使用しています)

ゼノ : 「あつれく? 殺せたとおもったんだけどねえ……面白いねえキミい……」と、心底嬉しそうに笑う少年。そしてブラン(弟子) は気が付きまず、自身の腹部に浅い傷があることに。

ブラン(弟子) : 「ぐるう」傷を押さえながらゼノをにらむ

ゼノ：「せんせー、ちよつと遊んでもいいかい？」

マレウス：「ゼノ、本当にあなたは好きモノですね。……好きにしなさい」

ゼノ：「やったあ！その白いの、勝負しようぜ!!」と言つて、自身の背中にある布に包まれたものを取り出します。鞘も鏝も無く。装飾すらない剣どこか「無銘」に似たそれ、ただし決定的な違いがあります。どんな扱われ方をしているのか、剣の芯は歪み刃は零れ刀身が錆付いている。

ゼノ：「どつちが死ぬと思う？」と花が咲いたかのような笑顔を向けます。

ブラン（弟子）：「がうう……？」（師匠……？）

師匠：「……ブラン、いいかよく聞け……あれはヤバイ、逃げろ」

ブラン（弟子）：全身の毛が逆立つ「……がうっ！」逃げようとする

ゼノ：「……ねえ？今何しようとした？」恐ろしいまでのスピードで詰め

寄り、顔同士が触れる寸前で止まります。

ブラン（弟子）：「がうっ!」後ろに飛びのく

ブラン（弟子）：「ぐう」少しの動きで息があがる

ゼノ：「いやあ、やつぱり思ったとおりだよ！さつき、脚を斬らなくてよかつたあ。

キミあれだよな？サツとしてシユバツて感じのやつ……えーつと」

マレウス：「後の先」

ゼノ：「そう、そんな感じの剣だ！」そう言つてから、剣を両手で持ち刺突の構えに入ります。

ブラン（弟子）：　　：　　：逃げられない

ブラン（弟子）：「……がう！ガオガオ！」（師匠！たたかうしかない！）虚白の構えを取る

師匠：「……腹をくくる、しかねえか」

ブラン（弟子）：「ガオ！」集中力を高めている

ゼノ：「いつくよく!!」そう言いながら少年、ゼノが動き出す。勢いを全く感じさせない、緩い刺突。

ブランが師匠から教わった技「虚白」、それは相手の攻撃を避けながら斬る技。しかし、ゼノの攻撃を避けるために体を動かしたときに気が付く

ブラン（弟子）：動きは最小限に、躲して斬—

彼の剣先は避ける前と同じ位置……いや、避ける前よりも自身の体に近づいていた。まるで、自身の避ける動きがあらかじめわかっていたかのようにごく自然に

ブランの体を、ゼノの剣が貫いた。

ブラン（弟子）：「っあ……」

ゼノ：「わあ！すごいねキミ!!」とても嬉しそうに、ゼノは笑う。

ゼノ : 「ボク、初めて『三步目まで』動いたよ！」

ブラン(弟子) : 刺されたままゼノを見つめる

ゼノ : 鼻歌交じりに剣を抜こうとします、ただガタガタの剣なので思いつきり揺らしたり捻ったりしながら引き抜きます。「あつれえ、抜けないなあ」

ブラン(弟子) : 「つつつ」意地で叫び声はあげない

ゼノ : 「あ、折れた」

ブラン(弟子) : 地面に倒れている

ゼノ : 「つまんなくい、せんせーかえろ？」玩具に対する興味を失った子供のよう
にマレウスの所に戻る。

マレウス : 「あなたは本当に聡いですね、もうちよつとしたら勝手に帰るところで
したよ。そんな羽虫は捨て置いて早く帰りましょう、そろそろ厄介なのがここに来ます
からね」

ブラン(弟子) : 「∴∴ GYAO！」かすむ目でゼノを見ている

ゼノ : 視線に気が付いたのか、振り返ってブランにピースをする。

ブラン(弟子) : 決して忘れない。

ブラン(弟子) : その姿を目に焼き付ける。

ブラン(弟子) : このままで終わらせたりしない。

ブラン（弟子）：「GAO」力を使い切って意識を失う

ゼノ：それでは、弟子に届くかは知らないけど最後に声をかけます。

ゼノ：「キミ！なんか面白かったけど……面白いただけで弱かったね！もうちよつと強くなつたらまた遊ぼうね！」そして、マレウスのテレポートで消えていきました。

突然現れたゼノという少年、どうやらマレウスの関係者である彼がこの後どのようなキャンペーンに関わってくるか……それは今のところ不明です。

なお、余談ですがこのゼノに対して「こういうの好き」「性癖を貫かれた」「メスガキ（オス）」と雑談が盛り上がりGMの顔は宇宙猫になっていました。

レイ：「……ひとまず、なんとかなつたか」とその場に座り込みます。
ブラン（弟子）：剣、抜いて。誰か

その場で治療などを行うPCたち。そんななか馬の足音が聞こえてきます。その音を聞くと、ブラン（弟子）の治療をしていたレイの目が曇ります。

レイ：「馬の音……数的にひとりだけか」

フィオーネ：「この時間帯に来訪者？もしかして救助かしら〜？」

レイ：「多分、半分あたりで半分外れだ。そして間違いなく、次の厄介ごとだ」と断言。

フィオーネ　：　「??」弟子の治療を手伝いながら

ポツクル　：　「この状況で介入してくるとすれば……伯爵？」

スピール　：　「……………依頼主様」

???　「ハツハツハ！なんと手厳しい意見を言ってくれるものだなレイよ！」と、声と姿があらわになります。

（立ち絵は Picrew のストイックな男メーカー様を使用しています）

伯爵　：　「それではまるで、この余という存在が厄災ではないか！」

伯爵　：　「そしてそんなメリアよ、正解だ！余こそがこのナジュニア領の長たる存在……アーデルベルトである！」

スピール　：　深く礼をする

伯爵　：　「頭を上げることが許そう」

伯爵　：　「ふむ？なにやら賊にやられた惨状と見るが……まあ目的の姫君は無事なようだな。大儀であったぞ皆の衆！余が来たからにはひとまず大丈夫だろう、まあ治療の心得は全くと言って無いがな」

伯爵　：　「ほれ、そんな最低身長のものよこちらへ来い。これをそんな姫君に渡す栄

誉をくれてやろう」とポツクルを呼びつけます。

ポツクル : しぶしぶ近寄る。だれが低身長じゃい

伯爵 : 「うむ、余の身長の2/3ほどと見た」伯爵は190くらいです。

ポツクル : 「頭下げる手間が省けるな」

伯爵 : 「よいではないか、人とは違う視点を持てるのは美德のひとつよ」と頭をわしやわしやしてきます。

ポツクル : 「イライラ」気やすく触んな

そんなポツクルの不機嫌を気にも留めず、伯爵は剣の形をしたブローチをポツクルに渡します。

ポツクル : 「これなんなんだよ？」

伯爵 : 「守りの剣を無効化する魔道具だ、稀少な物だから大事に扱えよ？」

ポツクル : 「へえ、そんなもんが」ヴィヴィの方をチラリ

伯爵 : 「ふっふっふ、今なら意識が無いから好きなどころにつけれるぞ少年よ。どうせ彼女からは避けられているんだらう？」

ポツクル : 「アンタには関係ないだろ、依頼はこなしてる」

フィオーネ : 「守りの剣を無効化……。それは本来なら蛮族側が持っているべき魔道具ではないでしょうか、どうして伯爵様がそのようなものを？」

伯爵：「蛮族から奪った」

フィオーネ：「なるほど、単純明快な回答でございますね。」

伯爵：「クツクツク、余のことを理解したうえでそのような振る舞い…….
なかなか面白い奴らだ…….とりたいが」

伯爵：「まああれだ、どうせレイの日常を見て『ああなるほど』とでも思ったのであろう？」

愉快そうに笑う伯爵、これが領主なのかあとと思われはしたものの強い印象を植え付けることには成功したでしょう。

そんな伯爵サイドとは別に、レイは戦闘を終え放心しているブラン（修羅）に話しかけます。

レイ：「…….どうだ、マレウスと会った気分は」

ブラン（修羅）：「…….そうだ、あいつは…….」我に返ったような感じであたりを見直し、ポツクルが射抜いた後の血だまりに目が留まる。「これくらいで父さんが死ぬ訳ないよな…….そうだよな…….」そこに近づいて眺めている

レイ：「深くは聞かないが、お前はやつのことをそう呼んでいるんだな」

ブラン（修羅）：「…….！」

ブラン（修羅）：「…….忘れてくれると、助かる」

レイ：「嫌だね、奴に関することは頭から離れそうにない」

レイ：「だから、お前には教えてやるよ。俺は、8年前に伯爵に拾われてな。自分の父親を殺すために、家を出奔したんだよ」

レイ：「……忘れても忘れなくてもいいが、誰にも言うなよ？俺も、お前のことは言わないから」

ブラン（修羅）：「……ありがとう。後で、僕のこと話すよ」

レイ：「それだけ話せたら大丈夫だな、あつちを見てみる」と顎で促した先には、今までから一転して安らかな顔で寝ているヴィヴィがいます。

レイ：「守れたじゃないか、なら上出来だ」

ブラン（修羅）：「そっか。そうかあ……」そのままヴィヴィの近くに寄って行って、そのまま崩れ落ちます。「ごめん、ちよつと気が抜けた。来客が来てるみたいだけど、そつちはよろしく」そのまま目をつぶる。

レイ：「自分の上着を一枚脱いで、無言で二人にかけてからその場を去ります。」

そんなレイの向かった先、伯爵サイドはというと……

伯爵：「さあて、ひとまず安全な場所……ウーム、そうだなあ……」

そこな冒険者たち、余の屋敷に来てみる気は無いか？」

スピール：「守りの剣の問題も解消されたことですし、依頼主様がそうおっしゃる

のでしたら、彼女を移送いたしましたしょう」

伯爵：「なあに気にするほどではない、それに足はこちらで用意しよう」と言いながら、懐から通話のピアスホルダーを取り出し、「む？どれだったかな？」と探し始めます。

レイ：「……………伯爵、爺さんへの直通なら一番左のです」

伯爵：「おおすまないね……………あー爺やか？今別荘にいるんだが迎えるの馬車などをな……………ん？仕事を放棄？なあに問題ないレイも連れて帰るさハツハツハ！！」

伯爵：「さあ、それでは行こうか冒険者のみんな！！」親指を立てる。

スピール：「少々、支度にお時間をいただいても？」

伯爵：「かまわないさ、レディの準備は色々と用入りだろう。なんなら別荘の露天風呂を堪能してきてもいいぞ、あそこは実に良いものだ」

スピール：「ありがとうございます。支度と……………それと掃除がまだですので、そこから込みで……………1時間程度かと」掃除（ドロップ品収集）

スピール：「はい。露天風呂はぶしつけながら堪能させていただきました」

剥ぎ取りを終え、伯爵にこれまでのいきさつを説明するPCたち。山あり谷あり風呂あり酔っ払いありの警護の日々を聞いた伯爵はというと……………

伯爵　：「フハハハハ！なんだそれは、余も仕事を無視……とつとと片づけ
てくればよかつたな！」と上機嫌な伯爵から全員に3000Gずつ渡されます。

伯爵からの報酬での買い物やトレジャードロップ表で盛り上がるPCたち。こんな
ところで第2話は終了となります。次回はちよつと嗜好を変えた砂漠の街での冒険の
予定です。乞うご期待！

『市虎三伝―クラリス―』①

○前回のあらすじ

謎の少女ヴィヴィの護衛として、“伯爵”の別荘に一時逗留することになったPCたち。ヴィヴィや別荘を管理する執事のレイと交流を深めたり、なぜかポツクルとフィオーネが一緒に風呂に入ったたりなど思い思いの時間を過ごす一行。そんな平穏な時間が流れる中、突如守りの魔剣持ちの一団の襲撃を受けます。襲撃者を率いていたのは魔導士マレウス。辛くも襲撃者を退けることに成功しますが、彼と、彼と共にいた少年ゼノの存在は二人のブランの心に暗い影を落とすのでした……

○成長報告

GM : まずは成長報告、軽くでいいのでどうぞー

ブラン(弟子) : フエンサーが9になって盾を持ってアビス強化した結果、回避が前回より6増えました。あとジャイアントアームとった

GM : なるほど、よりがうがう(?)となりましたね。ありがとうございました
! それでは次、ポツクルの成長報告です。

ポツクル : マギシユールが1ずつ伸びたかな、特技は収束なので、11レベルで制御

ショットガン予定。買いたいものもなくなってきたので、貯金して終わり

GM : ショットガン無双の日も遠くはない、ありがとうございます。それでは次はスピールの成長です！

スピール : スピールはプリースト8、ライダー9に上げて、特技でマリオネット、騎芸で姿勢堅持取ったのですとスライドするバトルソングが見れます。あと、そろそろ人権が必要になるのでソーサラー2です。人権人権。真語魔法はマスターに教えてもらいました

GM : なるほど人権、ありがとうございます！次はフィオーネですね、よろしくお願いします！

フィオーネ : フィオーネはフェアテ9、セージ8に成長。特技はダブルキャストで敵弱点を二回突きます。(なおMP消費)あと買い物で酒の種30個買いました、水さえあればいつでも酒飲めるよ！

GM : 酒の種、美味しさを決めたかったら都度2d6しましょうね。そしてピュリフィケーションがあるのでフィオーネ由来の酒も造れるようになりました、まる。

フィオーネ : フィオーネ由来の酒とは

GM : ピュリフィケーション、~~本~~純物を取り除いて真水を作る・・・つま

りはそういうことだ。(GM註:良い子のみんなは深く考えないようにしましょう。)

GM : それでは成長報告最後、ブランお願いします！

ブラン(修羅) : ファイターが8から9に、コンジャが2から4になって戦闘特技でマルアクが生えました。買い物は不撓のバックルを購入。後はペット(ゴレム)が飼えるようになったのでストローバードのゆずを飼い始めました。

あとコンジャ繋がりです。そろそろ必要だと思うのでぬいぐるみを買いました。せつかくなのでヴィヴィと自分のぷちぐるみを原料から買って自作(テイラー3が生えた)。後半2つは3/4くらいPLの趣味です。よろしくおねがいます。

(周囲の反応 : #距離の詰め方が異常 #感情が重い #情緒に加速装置搭載か #ブレイキカニトロロしかない)

以下に今回のPCたちのデータを改めてまとめておきます。

・ブラン(弟子)

・ポツクル

・スピール

・フィオーネ

・ブラン（修羅）

○トレローラー

○オーブニング — 依頼を受けよう —

GM : ところでこれ、セクション開始する前にヴィヴィのことで確認しなければいけないのがひとつあるんですよ。護衛も終わつたし、ヴィヴィに関しては伯爵が屋敷で引き取ろうと思うんですが異論とかがありますか？ちなみに前回で別荘が半壊したので、レイもいったん住まいを伯爵の屋敷にしています。

ブラン（弟子） : (正直今は人のことを考えてられない)

フィオーネ : レイ君の様子見て、特に警戒してるわけではなさそうならフィオーネは問題ないかな。元々別荘に届けるまでが任務だし

ポツクル : いいのでは？

スピール : 元からそういう契約だと認識してるので特に申し立てもない

ブラン（修羅）： ヴィヴィが安全で、相変わらず会えるなら会えるならそれで

GM： 流石に伯爵の屋敷に顔パスはまだ出来ないですが、会えなくはないのでひとまずはそんな感じにしましょう。それでは前回からの経過日数を決めてから、オープニングや導入をしていきましよう。

ダイスの結果、5日が経過したことになりました。

GM： 1週間より短いので皆さん1日が食費（最低10）＋寝床（最低15）なので、最低25G上限なしで5日分消費お願いします！ここで無駄に豪遊したり質素だったりふだんの生活態度がばれます。いやあ、生活費徴収つとともSWやっている気がしますね。

ブラン（修羅）： 底辺ではないけど豪華とは決して言えない暮らしを送っているので30G×5＝150G消費しときます

ブラン（弟子）： 街にいるなら1日食費20、泊り30くらいかな

スピール： 別に贅沢とか思わずに40G/日で200Gだと思おう

ポツクル： スピールと同じで。ポツクルも200Gです

フィオーネ： 基本贅沢しないけど、毎日ワイン一瓶飲むので50G×5＝250G

ブラン（修羅）： 1日あたり1瓶は相当飲むやつ……

ポツクル： 毎日酒のボトルを抱き枕にする人……

G M : 予想通りフィオーネが一番消費していますね。それではそれぞれがセツ

シヨン開始時に何をしているのか決めましょうか。まずはブラン（修羅）からですね。

ブラン（修羅） : セツかくだし振ってみます（コロコロ）寄付をしたらしい（エピッ

クトレジャーリー記載の余暇表参照）。孤児院に30G寄付しました。なんとなく過去の

自分と重なって、気まぐれに寄付したんでしようねえ

G M : なるほど？それならば当然マレウスとの過去が脳内に挟み込まれると。

ブラン（修羅） : それもあるかもですねー。前回会ったしその再会も関わってそうで

すね

G M : それでは次はフィオーネですね。セツシヨン開始までの間何をしていたこ

とにしましょうか？要望が無ければダイスでも良し。

ポツクル : 酒やろな

フィオーネ : お酒常に飲んでるわけではないです。冒険者亭二階で薬師の仕事して

るか。というわけで、一般技能で五日分お金稼げませんか？

G M : 稼いだ分がお酒に自動的に消えますけどよろしいか？

フィオーネ : お酒の分で生活費高くしたけど、まあいいか！ たくさん飲めたよ、やつ

たね！

スピール : スピールさんは厨房でいつものお手伝い（プロ級）しつつ駄賃代わりに

真語魔法教えてもらった。(案山子亭のマスターは元真言魔術師)

G M : なるほど、ちなみにマスターはこの後依頼を持つてくるときに出るのでここでは割愛してもよろしいでしょうか？

スピール : でしょうね。いいですよ

ポックル : ポックルは森に猪撃ちに行つて、スピールにおみやげにして料理してもらった！おいしい猪汁ができましたとき(他力本願)

G M : ポックルは他にしたいことありますか？ヴィヴィに会うために透明化して伯爵の屋敷に忍び込んで捕まるとか。

ポックル : あー、好感度上げに走るかー。ミッションインポッシブルみたいな感じで

G M : それでは、透明化を加味してスカウト技能＋敏捷度＋4でダイスロールしましょう。目標値は20で。この判定の結果によっては、ポックルは拘置所スタートになりますかね。

ポックル : (コロコロ) 22。しまった、ここは失敗しておきたかった()

G M : それでは見事に忍び込めました、お風呂でも寝所でも庭でもどこでもいいですよ。

ポックル : もう風呂はこりこりです() ヴィヴィが庭でのんびりしてるところにで

も顔を出します「よっ!」

ヴィヴィ : 「………。(無言で小型の機械についている紐に手をかける)」

ポツクル : 「ストップ、すーっぷ!!」

ヴィヴィ : 「………何用?」ゆっくりと腰を浮かせながら聞きます

ポツクル : 「森に今晚の食材を調達に行つてたら、珍しいもの見つけたからさ、持つてきたんだ」と言つて懐から、ここらではあまり見かけない果物を

ヴィヴィ : 「くわしく」食い気味。餌付けが好感度稼ぎになるキャラ、大体のゲームにいますよね。

ヴィヴィ : (スツ………と手を出す)

ポツクル : ここらではあまり見かけないバナナを、ポンと手渡す

ヴィヴィ : 「………?」手の中で弄繰り回す、食べ方を模索しているようだ。とりあえず、服でごしごしバナナを拭いてからそのままかぶりつこうとする。

ポツクル : 「ストップ、すーっぷ!!」皮向いて食べるんだよ、と言いながらむいてあげる。ちなみにバナナにしたのは切る手間がないから()

ヴィヴィ : (嗅覚が甘い香りを捉えたので、不用心な観光客からカメラを奪い取る日光の猿の如くバナナを奪つて食べ始める)

ポツクル　：「思った通りだ」と言いながらウへへと笑う

ヴィヴィ　：（不愉快そうな顔をしてポツクルの方を見る）

ヴィヴィ　：「……」無言で手をちよいちよいと動かす、どうやらこつちに
来いというジエスチャーのようだ。

ポツクル　：首をかしげながら近寄る

ヴィヴィ　：「美味しかった、ありがとう」

ポツクル　：「よかったよかった！森でバナナ美味しそうに食べてるサル見てたら、
この前干しブドウ食べてたヴィヴィを思い出してさ。持ってきたら喜んでくれるん
じゃないかと思ったんだよ！」

ヴィヴィ　：まくしたてるポツクルの声を頼りに狙いを定め、服の裾を掴む

ヴィヴィ　：「でも、それとこれとは別」そう言いながら、ヴィヴィはにつこりと笑
い機械についていた紐を抜き去った。防犯用のベルが鳴りだしますね。

ポツクル　：「ストツあああああー!!!」

GM　：次の日の朝、目の下にクマを作ったレイがポツクルを闇夜の案山子亭まで
連れてきてくれました、まる。そんなわけでお待たせしました、ある意味前半の山場で
ある弟子のオープニングです。

ブラン（弟子）　：前回は疲れて喋らないのかと思つてた師匠が一晩経つても喋らないの

で不安になってます」「…師匠」

師匠：もちろん師匠から反応はありません、それどころか手入れをしているのにどこか妙な感じ。いつも感じている覇気のようなものが無い、ただの道具みたいです。

ブラン（弟子）：「師匠がしゃべらない… どうしよう」とりあえず部屋から出てくる。

誰かに相談したい

フィオーネ：「ありや、ブランちゃん浮かない顔でどうしたの？」 酒瓶抱えながら廊下で出くわします。

ブラン（弟子）：「フィオーネ… ううん、なんでもない」通り過ぎる

フィオーネ：「あ、ちよつと…。」呼び止めようとする。「…何かお悩みかしらね。」この前出くわした敵に変な因縁つけられてたし…。」

G M：これは通過されて妥当では？

フィオーネ：「どう…して…。」「…あとでスピールちゃんにでしちゃんのメンタルケアお願いしところかな。」

ポツクル：「こらフィオーネ、またこんな時間から飲んでー」

G M：これ、ポツクルが捕まる前と後どつちか

ブラン（弟子）：「!……ポツクル!」一日目のつもりなので前かな
 ポツクル：「でし……」

ブラン（弟子）：「ポツクル!師匠が!師匠がく……」泣きつく

ポツクル：「え?あつ!ちよ……どうしたんだよ、でしー」と言いながら困っている

フィオーネ：スルーされたフィオーネさん「……」。

ブラン（弟子）：「うう。師匠がしやべらなくなっちゃった」師匠を見せる

ポツクル：「わかった、わかったから落ち着けて、な?」と言いながらやんわりと
 身体を離そうとする。フィオーネの視線を避けるように

ブラン（弟子）：「うん。ありがとう。じつは……」師匠のことと喋んなくなったこと、
 変な感じがすることを話した

フィオーネ：「……邪魔者は去ったほうがいいかしら?」自室に戻ろうとする。

ポツクル：「フィオーネも一緒に相談に乗ってあげよう!な!!」

ブラン（弟子）：「ぐすつ。おさげくさい」

フィオーネ：「酒臭いって、そこまで言わなくていいじゃない、ぐすん……」

G M：『露天風呂に入って酒とつまみかつくらってたらそのまま酒瓶抱えたまま
 爆睡した』って経歴のせいですな。

ポツクル：「たぶん師匠は、魔剣ってやつ仲間だろ?魔動機文明にはあんまり見ら

れないんだよなあ。物知りのフィオーネなら何かわからないか？」 必死にフィオーネを参加させようとするPLの涙ぐましい努力

フィオーネ：「そうだね、もしよかったらでしちゃんの師匠、私に鑑定させてもらえる？何か手掛かりが分かるかもしれない。」 ありがとう、ありがとう

ブラン（弟子）：「ん。おねがい」 落ち着いたので対応する

GM： 師匠の知名度は20ですね、どうぞ。 ここで成功していただきたいところ

フィオーネ（コロコロ） 出目4で達成値17。 運命変転していいですか
（注：フィオーネはエルフなので変転は使えない）
????????

GM： なにもほんのうがない、ただのけんのようだ

フィオーネ：「……うん、ごめん今すぐには分からないかも。あとでじっくり時間かけて精査していい？」 冗談は置いて、1分使って再判定していいですか？

GM：（面白さとフィオーネの威厳を天秤にかけて）……まあここで伸ばしてもあれなんで、その後わかったことだけ記載しておきましょう。

ブラン（弟子）：「ううん。ありがとうフィオーネ。さつきはごめんね。うん。おねがい」

フィオーネ：「いいよ、パニックするときには他者への当たりも強くなりがちだか

ら。何か分かったらすぐ伝えるね。」

後々の判定で分かったことは以下の通りです。

GM：直ちに影響はないレベルで魔力が減少しています、おそらく原因は刀身に発生している微細なヒビでしょう。このまま放置しておく危険とわかりますね、具体的にはマジックアイテムとしての死へのカウントダウン中。

ブラン（弟子）：えっ!?

GM：今回のセックション中は問題なく使えます、反応が無いくらいで。次回以降は……（GM特有の微笑み）。

ブラン（弟子）：「どうしよう！師匠がしんじやう！」あたふた

ポツクル：「まだ魔力も感じるし、焦らなくても大丈夫だよ！たぶん……でも誰か詳しい人に診せて、治してもらわないと……」

GM：そういう場合は、自分たち以外に詳しい人を知っていそうな人を頼ればい
いと思うよ！

ブラン（弟子）：「はくしゃく！」屋敷に向かって走り出します

GM：なお、その日の夜に目の下にクマを作ったレイが弟子を抱えて闇夜の案山
子亭に来たのは言うまでもありません。

ブラン（弟子）：「がう……」

ポツクル　：「でし……」

レイ　：「お前ら、俺に恨みか何かあるのか？」力のない声

ブラン（弟子）　：「……ごめんなさい」

レイ　：「まあいい、話は聞かせてもらったよ。こっちはこっちで何とかしておくさ」

ブラン（弟子）　：「!!ほんと!!」　レイさんへの好感度がマツハ

レイ　：「解決できるかは知らん、だけどやれることはやっておくよ」

ブラン（弟子）　：「ありがとう！レイさん！」安心したので残りの日程では強くなるためにと考えて、前にレイさんの書齋で読んだ中であつたであろう「剣と盾の使い方」みたいなのを参考に、回避を上げるために炎嵐の盾を買つたり、アビス強化したり、臭くて強化し直したり、ブラン（修羅）に盾の使い方教えてもらいに行つたりした（教えて）ブラン（修羅）　：自分自身は受ける盾の使い方しか知らないだろうし、昔一緒のパートイーになった回避盾の人の言葉とかを教えたりしたかな

そして、ブラン（弟子）　だけでなくフィオーネもレイに話があるようで……

フィオーネ　：「さすがレイさん、頼りになるね。……ところでそんなレイさんにお願
いがあるんだけど。ちよつとついでいいからあの別荘にあつた高級酒、分けてもら
えないかな？」

レイ：「いいぞ、好きだけ跡地から持っていけ」

フィオーネ：「よ！太っ腹く!!」

レイ：「気にするな、どうせこの間の戦闘で厨房も倉庫壊れたからあるかどうかもわからん」

フィオーネ：「いや、一本二本、まだ奇跡的に割れてない瓶があるかも！レッツ酒瓶探し!!」

GM：それじゃあ余暇の内に探しに行ったということで、2d6マイナス10本見つかることにしましょう。

フィオーネ：（コロコロ）出目10。ちょうどゼロ本ですううううう

GM：それでは、原形を保った酒瓶を見つけた！と手に取ったらそのままひびが広がって割れました。それが最後です。

フィオーネ：「ぎゃああああああ、せつかくのお酒があああああ」

レイ：「.....今夜飲みに行くか？奢るからさ.....」と別荘再建で職人と話をするためにその場にいたレイ。あまりに哀れだったから.....

フィオーネ：「.....ありがとレイさん、今夜飲みに行きましょ。君の優しさが今は心によく染みるわ.....」(20歳に奢られる35歳の図)

GM：それでは、君たちに依頼があるのでマスターから1階に集まってく

れと連絡があるところまで飛ばしましょうか。

レイ：「1階に皆さんが降りてくると、そこにはレイがいます（やること残っていた）」

ブラン（弟子）：「あれ？レイさん？」

スピール：「彼女たちがご迷惑をおかけしました」

レイ：「迷惑をかけられるのは慣れていて、そこまでは気にしないでくれ」

ブラン（弟子）：「はっ！ペこり（あわてて頭を下げる）」

ポツクル：「少しは気にしような？」

レイ：「迷惑をかけた張本人どもは猛省しておけ」

ブラン（弟子）：「ごめんなさい」

フィオーネ：「また今度飲みに行きましょう、今度は私が奢るから。」

レイ：「暇が出来たらな」眉間にしわが寄る

フィオーネ：「ご迷惑をおかけしました……。」ペこり

レイ：「それはそうと、ちよつとお前らに用事があつてな……。」と、マスタの方を見て「早いところ済ませるか、こいつを渡しておく」と、通話のピアスの片方を一個置きます。

レイ：「お前らとは連絡が取れるようにしておけ、と伯爵からのお達しだ。俺直通

の片方を渡しておく」

スピール　：「これはどうも、お得意様にしていただいて何よりです」

レイ　：「………そっちの方が俺にとつても助かることがある、そう言うことだ」と、ブラン（修羅）の方をちらつと見ます。

ブラン（修羅）　：「？」　ああマレウスが背後にいるからか（今気づいたPL）

（GM　：　本当にいいよ　ブラン（修羅）　：　ヒエツ）

スピール　：　まあヴィヴィ周りの話もあるだろうがスピールにはブラン見た理由わからん

GM　：　前回ブランに「口外はしない」って言うてるのでこれ以上は語りませんかね。

ブラン（修羅）　：　いつまでブランの秘密は保たれるのか、こうご期待？

（GM註　：　前回の最後にブランから「あとでなんやかんやについて話すよ」って言われたのでそれを導入にしてもよかったんですけど、あれからすぐに聞きに来るキャラではないので、今回は見送りました）

レイ　：「それじゃあ俺はこれで、これから他領へ行かなくちゃいけないんでね」と立ち上がります。

スピール　：「それなのにこんな時間まで……マスターも見てるのに……」

フィオーネ　「レイさんお疲れ様です。……多忙なのは分かるけど、無茶はしすぎないようにね？」（レイの心臓思い出しながら）

レイ　：　みんなにいろいろ言われたので、ちよつと困った顔をしながら話し始めます。「屋敷の中にさ、いい場所があるんだ。木の名前は忘れたけど、もうしばらくしたら咲きごろだろう」

スピール　：　「みたい！」

レイ　：　「この間は、落ち着いて食卓を囲めなかったからな。今度は、7人……いや間違はなく伯爵が来るな……8人でそこで食事でもしようか」

ポツクル　：　フラグやめーwwww

フィオーネ　：　死亡フラグウ……。

ポツクル　：　吐血してるレイさんの最期やんけ!!

ブラン（修羅）　：　まさかーとか思ってたら思ったより濃厚な死亡フラグだった

GM　：　えつ、PCの誰かを庇う（もしくは逃がす）為に戦闘をして瀕死の重傷を負い、死ぬ間に自分の手の血を拭い取ってからヴィヴィの頭を撫でて息を引き取るレイのCGですって!!

スピール　：　当然満開の木の下で

スピール　：　「伯爵もスピールの料理食べてくれるかなあ」

レイ：「本人を見ただろ？あの伯爵が断ると思うか？」

フィオーネ：「それは華やかな食事会……。いえ、宴会になりそうね。」

ポツクル：「ストツプ、すとりっぷ!!」

ブラン（弟子）：「？」（ポツクルを見る）

ポツクル：「こういうこと言うみたいでい実現しないから!!!誰か死ぬやつだから！

やめよう、な！」

ブラン（修羅）：「フラグって言うよね。うん」

レイ：「変わらないようにで安心した、じゃあ俺は行くよ」と言いながら店の外に出ていきました。

ブラン（弟子）：「またね」と手を振っている

スピール：「カラダニキヲツケテネ」

ポツクル：「死ぬんじゃないぞー、いやほんと」

フィオーネ：「じゃーね〜」

ブラン（修羅）：「それじゃ」

マスター：「そんなところに、マスターが君たちの所に来ます。」

マスター：「あー、ちよいと依頼があるんだが……。その前にひとついいか

？お前ら、結局のところ今はチームを組んでるって扱いでいいんだよね？」

ブラン（修羅）：「…………どうなんだろうね？」（不思議そうな顔）

スピール：「…………違うの？」

ポツクル：「もちろん！」

ブラン（弟子）：「ちーむ、つてなに？」一人旅○だったので

ファイオーネ：「まあ、なし崩しのだけどチームなのかな？」

マスター：「じゃあそれ前提で依頼をするぞ。この領の西端の砂漠地帯に、パールつて言う集落があるんだけどな」

マスター：「そこからお前ら……………というかスピール宛に依頼だ」

スピール：「わたし？」

マスター：「お前、以前村興しに協力したことあっただろ……………その関連だ。どこからその情報を仕入れたのかは知らんが、バーメルのお偉いさんがそれを知ったようだな」

スピール：「バーメルだと…………どつちだろ。あの辺でなんかちやほやされたのは2回くらいあるし…………」

マスター：「文面を読む限り、知り合いがお世話になったから今度はウチも、だとか。個人的にはこの依頼を受けてほしいんだけどな、この依頼ものすごく怪しくてな」と言いながら、依頼書の文面を出します。

マスター : 「だとよ」

スピール : 「踊ったことは……ほとんどないんだけど……なにこれ……」

マスター : 「いやまあ、これに関しても噂の出どころとかどうよ？ つて怪しいんだけどな。それよりも、気になることがある」

マスター : 「依頼文書の裏、見てみる」

スピール : 「裏？」

マスター : 「……あやしいだろ？」

ブラン（修羅） : 「こわ……そつとじ案件では

ブラン（弟子） : 「あやしいっていうか

ファイオーネ : 「こわいいい

ポツクル : 「ごくり

スピール : 「……………」

GM : と、ここで見識判定を振ってみましょう。

目標値は17/22です。

フィオーネ : (コロコロ) 19

G M : 裏にかかれています文字……血文字なんですけど。そこに混ぜている物がわかります。シロツメクサの花粉が付着していたとわかります。

マスター : 「怪しいとは思っただけだな、俺はどうもおせっかい焼きな性分なよう
で……気にはなるんだわ」

フィオーネ : ……これ、ただの血文字じゃないね。何か不純物が付着してる。これはシロツメクサの花粉？」

スピール : 「シロツメクサ……」

マスター : 「ちなみに依頼としては、前金10,000、後金10,000、村おこしに成功したらさらに15,000とのことだ……この裏は無視してな」

スピール : 「スピール名指しにしては、なかなか大盤振る舞い」

マスター : 「あと、ここからバーメルまでは乗合馬車で5日かかるけどその往復チケットも用意されている……出来る限り早く来てほしいとのことだ」

スピール : 「……もし、本当に監禁されている人がいるなら、放つてはおけないよね」

マスター : 「『ミンナ』って書いてあるから集団なんだろうなあ」

スピール : 「それにスピールのお友達が巻き込まれてるっていうなら、黙って見捨てるわけにもいかない。もしそんな人はいなかったにしても、スピールが一人でひどい目

に合うだけなら、全然いいよ。むしろ、それだけだったらどれほどいいか」

マスター：「この依頼、依頼主が何か関係しているんだつたらそれに対する対応は任せる。ギルドも納得してくれるだろう」正直、このPTだと小規模な集落位蹂躪できる戦力ですからね。

スピール：「うん。正直、依頼されて村おこしって言われてもピンと来なくて、スピールはやりたいことをやって、それでみんなが笑顔になっただけだから。でも、困ってる人がスピールに助けを求めたんだつたら、応えないと」

ポツクル：「スピールがやるって言うなら、オイラはもちろんついて行くよー！」
フィオーネ：「私も受けるよ。この怪しすぎる依頼手紙の真相も知りたいし。」

ブラン（弟子）：「わたしもついてく」

ブラン（修羅）：「守る人がそこにいるなら」

マスター：「それなら依頼は成立だな、ほれ前金だ」1万ガメルをポンと渡してくれました。乗合馬車は最速なら次の日の朝ですね。何日か遅れてもいいですけど、もし監禁されている人がいた場合どうなるかは分かりません。

スピール：「よく考えると、1万Gもすでに使ってるわけだし、相手さん相当本気だね」

マスター：「村おこしに関しても本気なんだろう、あの辺りはちよつと難しい土地

柄だからな。確か……集落が3つの派閥に分裂していて、毎年どこが主導権を握るかで争っているとか」

ブラン（修羅）：「……聞くだけでめんどくさそうなんだけど」（独り言）

ポツクル：「まあでも、これも何かの縁だつて」

スピール：「町おこしになりそうなこと、お料理しか作れないのに……」

ポツクル：「オイラ射的ならできるぞ！」

ブラン（弟子）：「まちにはきょうみない」

マスター：「ああ、そう言えばあの辺りはサボテンの実を使ったりキユール（現実にも存在します）あつたな……いくつか買って置いてくれたらこつちでも引き取るぞ？」

フィオーネ：「リキユール!! マスター、そういう大事なことは先に言ってくれないとく!!!」

ブラン（修羅）：「そうかなあ……? いや助けがいるみたいだから行くんだけど……」

僕に街おこし、大丈夫かなあ……?」

ポツクル：「ブランもほら、人形劇とかさ」

ブラン（修羅）：「これ?」（懐からぷちぐるみを取り出して動かす）

ブラン（弟子）：「……? ブランとヴィヴィ?」

ポツクル : 「あれ、見覚えがあるような……」

G M : ちよつと陰キャだと思っていたPTメンバーが知り合いに向ける感情が激重で困っています。

ブラン（修羅） : 「ヴィヴィに言われて操霊魔法の練習してるんだけど、最近ちよつと擬つたの作つてみたんだよね」（ぬいぐるみのブランが手をふる）

ポツクル : 「あーなんだ、うん、よくできてると思うよ、うん」

ブラン（弟子） : 「おおく」ぬいぐるみに手を振り返す

ブラン（修羅） : 「あつちよつとまつ」

○ミドルシーン① — いざバーメルへ—

G M : というわけで、問題なければ次の日の乗合馬車に乗つてバーメルに行こうかと思いますが。皆さん意外にもお客はちらほらと、バーメルに向かう人もいるようです。ちなみに皆さん、鎧とか着ている人は普段から着ていますか？※ヒント：皆さんは今乗合馬車の護衛ではなく只の客です。

ブラン（修羅） : 立ち絵にあるみたいなシンプルなシャツですかね。でも盾は背負つてる

ポツクル : 普段から、グラビティアーマー（バトルスーツ）の上にゆつたり服でやんわり隠してます

ブラン（弟子）：2人旅長かったしたぶん装備は離さない

スピール：旅装の中ではあるけどかわいい服

フィオーネ：安定の（注：アビス強化された）くそださT

GM：「若干他の客と比べて浮いています」って言おうとしましたけどクソダサT
 なんてくつきりと浮いています。

ポツクル：フィオーネ……

フィオーネ：ヒロインカウ……

GM：そんな皆さんにですね、話しかけてくる女性がいるんですよ。

女性：「ちよつと、お話してもいいかしら？」と女性、というには若干若く見え
 ますが振る舞いは淑女のそれ……なひとが話しかけてきます。

（立ち絵はpicrewのみなのキャラメーカー（β版）様を使用しています）

スピール：「袖すり合うも他生の縁。ある意味、旅の醍醐味です。是非お相手させて
 ください」

女性：「ありがとう」そう微笑んであなたたちの近くに座った彼女は続けます。

女性：「そのいでたち……ひよつとしなくても冒険者の方々かしら？」

スピール：「隠す気のない人たちばかりですから、わかりますよね」

フィオーネ　：「そうだね。ブランちゃんとか派手な盾背負ってるからそう見えるよね。」

ポツクル　：「おまえじやい！」

ブラン（弟子）　：「ポツクルだよ」

フィオーネ　：「??？」

ブラン（修羅）　：「?浮いてる?」 会話が混沌として草

女性　：「あら? 珍しい、あなたはレプラカーンなのね」

ポツクル　：「おう、そうだぜ！」

女性　：「でもまだ髭はたくわえていないようね……幼いのにこんな生活をしていて。さぞかし大変でしょうね」とポツクルの頭を撫でてます。（一般的知識として、髭の生えていないレプラカーンは子供です）

ポツクル　：「そんなことないぞ。スピールの料理はおいしいし、みんなとの冒険は楽しいし、毎日幸せさ！」

女性　：「ふふ、それだったらそのお話を聞かせてくれないかしら?」とその場に高級そうなお菓子をお茶を出しながら言います。

フィオーネ　：「ポツクルの正体にすぐ気づけるなんてずいぶんと慧眼なのね。あと、貴方も彼とさほど年齢が変わらないように見えるけど?」

女性：「あら、女性同士でも年齢を聞くのは野暮つてもものよ？」とフィオーネには微笑みます。

フィオーネ：「これは失礼しましたわ〜。」

ブラン（弟子）：「おかし」

ポツクル：「旅の話ならいくらでもできるぜー!」

女性：「どうぞ、お食べなさいな。そのかわり、楽しいお話を期待しているわよ」
 フィオーネ：「いちおうお菓子に病理学ふつてもいい？礼儀なので」

GM：「いいですよー」

フィオーネ：（コロコロ） 18

GM：「めちやくちや美味しいお菓子、具体的には食べるだけでMPが回復するレベル。」

ブラン（弟子）：「いただきます」

女性：「いい子ね、礼儀の出来ている子は好きよ」とみんなに振舞います。

フィオーネ：「めっちゃ取っておきたいけど、今食べないの不審すぎでしょ」

ポツクル：「おいしー!」食べながら、これまでの冒険の話をする

ブラン（修羅）：「一口食べて「……おいしい。刺激がなくてもここまでおいしいのは初めて食べたかもしれない」ぱくぱく」

ブラン（弟子）：「もぐもぐ」

女性：「ああ、やっぱり冒険者の方って面白いのね……。本当に、面白いこと」と微笑みながらフィオーネの方に一瞬視線を向けます。具体的に言うときつきの病理学判定したことがばれていきます

スピール：「世の中に面白いことがあるから冒険に出てる、みたいなどころはありま
すね」いただきました

フィオーネ：「すごくおいしいわ……。……疑ってごめんなさいね。一応この後に支障があつては困るので。ところでお名前伺つても？」

女性：「ふふ……。ひ・み・つ」

ブラン（弟子）：「ひみつさん」

女性：「そうね、もし今度出会つたら名前を明かす……。それでどう？そつちの方が、面白くない？」

スピール：「すぐに会える、つてことですね」

女性：「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ひよつとしたら、次
会うときには姿が変わつていてお互いに気が付かないかもしれない」

フィオーネ：「次会うときも美味しいお菓子用意してくれるかしら？」

女性：「そうね、その時とはびつきりのを用意してあげるわ」

フィオーネ : 「それはそれは、私たちも何か用意したほうがいいかしらね。」

GM : といった感じで、道中何回かお茶をする仲間となりました。ちなみにこの後ランダムイベントが5回挟まれ、その後バーメルに到着します。さて、ランダムイベントですが、弟子↓フィオーネ↓ポツクル↓スピール↓ブランの順で2D6で行きましようか。

ブラン(弟子) : (コロコロ) 11

GM : 快調に旅は進む、次のランダムイベントの出目が+3される。次はフィオーネですね。

フィオーネ : (コロコロ) 10

GM : 13なので6ゾロ扱いですね。イベントが起きます、なんだか馬車の上に大きな影が！魔物知識判定だ！目標値は18/24で

スピール : (コロコロ) 22

フィオーネ : (コロコロ) 23。イチタリナイ

GM : それでは、皆様の馬車の前にグレートードラゴン(18Lv)が降り立ちます。

フィオーネ : だめです

スピール : は？

ブラン（弟子）：「だいいじよばない！」

ポツクル：「俺たちの冒険はここまでだ!!!」

フィオーネ：「いい冒険だった……。」

ブラン（修羅）：「ごめんレイさん……約束、果たせそうにないや……」

フィオーネ：「あれはグレートードラゴン?! どうしてこんな街道に???'」

ブラン（弟子）：「あれが、ドラゴン……」

GM：「ヒトの子よ……我は暇だ」と交易共通語で語り掛けます。どうや

ら彼? は暇を持て余しているようですね。「何か面白いことをして見せろ」

スピール：「あれ、友好的?」（グレートードラゴンの反応は中立です）

ポツクル：「本日はお日柄もよく……」

ブラン（修羅）：「素早く鎧を着こんで乗客の前に立つ「みんな下がってて」

ポツクル：「ブラン、まかせた!!」

ブラン（修羅）：「……え?」

GM：「と、ここぞでなにか判定をさせるつもりだったんですけど……今回のダイス

振ったの、フィオーネですよ。」

フィオーネ：「はい、私がいけにえになればいいのですか?」

GM：「フィオーネを見たドラゴンが嘔き出します。クソダサTシャツがツボに

入った模様。

フィオーネ　：草だが？

ポツクル　：立ってるだけでおもしろい

ブラン（弟子）　：ありがとうフィオーネ、今めっちゃ感謝してるよ

ブラン（修羅）　：存在自体がオチな女、フィオーネ

フィオーネ　：どう……して……。

GM　：「ヒトの子よ……ヒトの世界では、これが出回っているというのか……いや、実に愉快であった……ここ何十年かで一番笑った」と転がって息も絶え絶えにドラゴンはフィオーネを指さします。

フィオーネ　：……この鎧は私の特注品だから出回ってはいないけど、そんなにこの鎧変ですかね？」

ブラン（修羅）　：「鎧？」

スピール　：「鎧……」

フィオーネ　：「非金属鎧です！断じてTシャツではないです！」

GM　：「ククク……変と捉えるかは人それぞれだろう。少なくとも私は気に入った。ほれ、楽しませてもらったお礼だ……受け取るがよい」と言いながら、指で鱗をぶちつとはがしてくれました。竜の鱗（5, 000G／赤S）を一個獲得。

フィオーネ : 「ヤッタアウレシイナア」

ポツクル : ほんとに暇なんだなw w

ブラン(弟子) : 鱗の扱い…:

ブラン(修羅) : おひねり感覚で鱗を投げるドラゴンさん

GM : といった感じで御座います。死ななかつたのでフィオーネは英雄扱いですね。

ブラン(弟子) : 「いいものがみれた。師匠にも見せたかつたな…:」

フィオーネ : 実はお気に入りだったTシャツをデイスられて一人落ち込んでますね

GM : さて、次はポツクル2d6振りましょう。

ポツクル : (コロコロ) 8

GM : 特に問題なく進む道中、なにも無さすぎて眠くなってきた。なにも!なし!

ポツクル : すやあ

GM : 続いてスピールさんです。

スピール : (コロコロ) 8

GM : 特に問題なく進む道中、なにも無さすぎて眠くなってきた。なにも!なし!

し!②

スピール : お昼寝は好き

G M : 最後にブラン(修羅)です

ブラン(修羅) : (ココロ) 10

G M : 道で立ち往生しているほかの馬車を助ける、トレジャードロップ表Aを獲得。表から決めるので1d6を3回です。

ブラン(修羅) : やったぜ。(ココロ) 3, 3, 2

G M : メッセージルージュを手に入れました

G M : 「姉ちゃん化粧つ気ないね、これでもあげるわ」と商人がくれたのかな?

ブラン(修羅) : 「化粧……苦手なんだけどな」(盾を鏡にして自分の姿をチェックしながら)

G M : 盾を鏡にしている時点でお察しできる女子力

スピール : スピール以外見気にしない連中ですよ

フィオーネ : お気に入りの鎧なんだけど?????

G M : フィオーネに関しては、気に入っているから感性自体が独特なのは

フィオーネ : おしゃれだが

○ミドルシーン② | 村おこしをしよう 1日目 |

G M : そんなこんなで皆様はバーメルに到着しました。

皆様に依頼をしたのは南にある「アラベア派」の集落ですね。今回は表向き村興しなので一定以上の村おこしポイントを集めなければいけません、そのデメリットをこなしながら調査を行います。

ポツクル　：　表向きとは……？

ファイオーネ　：　うおおおおおお祭りじゃああああああ
 ブラン（修羅）　：　ファイオーネのテンションがおかしい……

ここでミドルでの行動ルールの説明がなされます。

・1日を朝・昼・夕・夜に区分して、それぞれ一回行動

・「行動」でできることは①準備②調査③休憩の3種類。行動を行う場所と、種類の宣言が必要です。

①準備では村おこしポイントを1d6＋参加人数点獲得

②調査では調査する場所に何か異変が無いかを調査可能

③休憩はそのまま休憩（睡眠）

種族的に睡眠を取る必要がないメリアのスピールは例外ですが、その他のPCたちは1日に1回は休憩する必要があります。

・②調査に関しては、同じ場所へ調査に行くPCは「サポートに専念します」といえ

ば自分は判定が出来ない代わりに一緒にいるPCの誰かの判定基準値を+2出来ます。

・また、夜以外の時間帯は誰か一人は必ず村おこしの準備をしなければなりません。

GM : 1日目の昼から開始、村おこし内で行われるメインセレモニーが3日目の夕方に予定されています。それまでには9手番しかありませんね。ちなみに、時間帯と場所の色々イベントがちりばめられています。イベントに当たったからと言って判定が出来ないわけではないので、頑張つて揃えていきましょう。

ブラン(修羅) : まあ最悪ね、我々は村おこしをやつてれば表面上は真面目な冒険者ですからね()

GM : ちなみに村おこしの方の依頼主の名前とかは考えていませんでした、健全なモブです。

ポツクル : 村おこしはどうでもいいという態度を隠そうともしないGM……w

ここでそんなモブの依頼主から今回の舞台となるバーメルの街の説明がなされます。

ここバーメルは、オアシスはあるものの無制限に水資源を使用していると枯渇する恐れがある、とのこととそこら辺の利権争いが絶えませんでした。そこでおよそ100年前から「4年に一度、祭りを行いそこで一番盛り上がったところが次の祭りまで全ての集落を取りまとめる」という決まりが出来ました。そして、3集落がその権利を奪い合っていたのですが、どうやらここ20年ほどバリー派閥(北西)が勝ち続けています。

何故彼らが勝ち続けているのか？調査班はバリーへと潜入を試みました。

そして、結論づけました。「この世はまさに大アイドル時代だ……ッ！」と
 フィオーネ …？

ポツクル … やはりそう来たか!!

ブラン（弟子） … 聞いたことあるようないなような

ブラン（修羅） … ホラーの中に唐突にトンチキを混ぜ込まないでほしい（○）

GM … どうやらバリー派閥では、専属アイドルを雇用し自身の所でのみライブや握手会などを行うことで栄えている……そう、彼らの集落のみ他の集落よりも日常生活のレベルすら高い（実際地図上のアイコンも豪華）！……よろしい、ならばアイドルだ。というわけで今回の依頼となりました。

ポツクル … え、どういうわけ???

ブラン（修羅） … えっアイドルやるの我々?? w w

スピール … 歌って踊る……

GM … ハハハ、アイドルやらせるのならもつと大舞台と逆境を用意しますよ。こ
 う、アイドルとして舞台を成功させないと身内が死ぬくらいなの

スピール … 死んでから始まるアイドル業だつてあるんですよ

ブラン（修羅） … そんな！私たちがアイドルにならないとレイさんが！（GM …

ならなくても奴さんはひどい目にしか合わないよ、コミカルな意味でもシリアスな意味でも)

フィオーネ : 結局我々はアイドルになるわけではなくて、単純に祭りの手伝いする感じですか？

GM : ですね、設営のお手伝いとか、現在計画しているところへのアドバイザーとか、まあ舞台の上でなんやかんやはやるかもしれないかもしれませんけど。ちなみに、皆さんから質問とかありますか？「神殿ってなんやねん」とか。

フィオーネ : 神殿ってなんやねん

GM : 「あそこはですね、昔からこのオアシスの近くにある遺跡ですね。どうやらオアシスの水はあそこから流れてきて出来たもののように、我らにとっての神域です。間違っても荒らさないでくださいよ？」と釘を刺されます。ある程度の知識持った人が近くに行って調べたら追加情報出てくるかもですね。

フィオーネ : 神殿北東にある建物跡地みたいなやつはなんですか？

GM : 「昔ここら一体を根城にしていた盗賊団の住処です、20年ほど前に壊滅したので今は子供の家出や肝試しスポットですね」

フィオーネ : 最後にとっても重要な質問、サボテンの実からとれるリキュールはどこに行けば飲めますか？

GM : 「それはこちらになります、まあどうぞ一献」と一本もらえました。追加で買う場合、3G/7G/15Gとランクがあります。もちろん15Gが一番おいしい。あ、渡された1本は7Gのです。効果は美味しい／めつちや美味しい／おいしい

ブラン(弟子) : 最後のやつ安全な奴なのか？

ポツクル : 記念に一本買つとくか……w

フィオーネ : 同じく記念に15Gの奴10本買います

GM : 桁

フィオーネ : 「ありがとうございませ〜！水が限られてるこの地だとよく酒が飲まれるのですかね〜？」

GM : 「それがですね、件の神殿からオアシスに流れる水のおかげで畑作やお風呂とまではいきませんが飲み水は何とかなりまして。ですので、ぜひ今回の村おこしを成功させたいのですよ」と真剣な顔、この人は普通に良い人ですね。

スピール : 「あなたの熱意はわかりました。ですが、スピールたちはこの街のことをよく知りません。ここに何があるかをよく知るため……スピールたちにおもてなしをしてもらいませんか？」

GM : 「なるほど、それは道理ですな。お昼にささやかながら酒宴とこの地域の民

族音楽などご用意しております。しばしの間、手に手をとる仲間となりますからね！皆さん是非この土地を楽しんでください！」と、いうわけで誰かが「あ、酒宴とか良いから調査行きまーす！」ってならない限り1日目昼は「準備」に全員参加扱いの酒宴となります。

フィオーネ　：本当に祭り関係ないのね、今回のシナリオ
以下GMからの釈明

GM　：最初はですね、まとも？な村おこしシナリオで与太をやるつもりだったんですよ……でも依頼書が書きあがったら、いつの間にか裏に血文字が仕込まれていましてね。気が付いたら、シナリオ内でコミカルとホラーがジェットコースターのように緩急激しくなっていました。でも私は満足していま、だから謝らない。

そして、村おこしポイント上昇（今回は1d6+5点）分を確定させる。
ブラン（修羅）　：（コロコロ）　7。まあこんなものでしょう

GM　：ちなみにこの時間、アラバアではイベントが発生します。酒宴内での聞き込みとかしたい方もいるかと思えますけど、まずはイベントを起こします。

GM　：酒宴が進み、独特な音楽やそれに合わせた舞踊、そしてこの地域には元々なかったであろう都会的な音楽や歌が場を満ちします。そんななかですね、スカウト持ちは気が付く程度の離れた場所でひと悶着が起きたようです。酒に酔った観光客（集落

の人間ではない)が、一人の女の子に絡んでいますね。「ヘッヘッへお姉ちゃんかわいいねえ」「ちよつとお兄さん(見栄)たちにお酌してよお」とかそんな感じ

ブラン(弟子) : 「なにしてるの?」

GM : 酔っ払いは酔っ払いなので君たちにメンチビームですね、手を掴まれている女の子は恐怖のせいか声を上げられず泣きそうです。

ブラン(弟子) : 「ん。こまつてる。お兄さんたち、て、はなして」

GM : 「おにいさんだろうがゴルアア!!」と殴り掛かってきますので適当に対処してください。

ブラン(弟子) : 「おそすぎ」いつの間にか女の子の隣で慰めてる

少女 : 「……………」声も出せずに縮こまつてます。

(立ち絵はpicrewのみーなのキャラメーカー(β版)様を使用しています)

ポツクル : 「お兄さんたち元氣いいねー! あつちでいい射撃場あつたから一緒に遊ぼうぜー! おまえらのなー!」と言いながらお兄さんたちを連れて穩便に舞台裏に行きます。でしに、後は任せたのウインク(ブラン(弟子) : 見てない ポツクル : 見て……)

ブラン(弟子) : 「だいじょうぶ?」少女に話しかける。

少女： はために慌てていますね、とてもテンパってらっしやる。

ブラン（弟子）：「おちついて、たしかこういうときは……ひっひっふー？」

少女：「ひ……ひ……ひっひっふー」

ブラン（弟子）：「ひっひっふー」

少女：「ひっひっふー」

ブラン（弟子）：「……おちついた？」

少女：「……おちついた、いやおちつきました。うん、おちつけ」と胸に手を当てながら冷静になります。「ありがとうございます、とても助かりました」

ブラン（弟子）：「どういたしまして」

少女：「……無言になる、ある程度場の空気の読める人間ならばこの少女の心の内がわかるかもしれない。」

ブラン（弟子）：「そんな能力は弟子にはない！」

少女：「……何を話せばいいか、わからない！場が、場が持たない！」

ブラン（弟子）：「……がお」（獣変貌を使用）

フィオーネ：変身した

ポツクル：諦めるなwww

ブラン（修羅）：いないいないばあの要領？

ブラン（弟子）：そんなかんじ

ポツクル：もう少し見守ろうw

少女：「……………ヒイツ！」

少女：「こ、来ないでえ」と呟いてから踵を返して逃げます。

ブラン（弟子）：「あつ……」悲しそうな背中

GM：追いかけてりはせず、そのままシヨボンっておきますか？

ブラン（弟子）：さっきみたいないな危険がなさそうならしよぼくれてます

GM：そこらへんは問題なさそうですね、他の方が動かなければこのまま少女は雑踏に消え去ってイベントは終了します。

宴会組は接待されながら、なにか聞いておきたいことかありますか？ 神殿と北東の山賊跡地に関しては聞きましたね。

フィオーネ：ここら一体にシロツメクサの原産地がないか、もしくはシロツメクサのメリアと聞いて誰か思いつくか？

GM：シロツメクサの分布はよくわかりませんがまあ緑のある部分にはあるのでは？という感じですね。住民からしたら気にしたことない、というレベルの反応ですね。メリアに関してても特に思い切りなどはありませんね。あ、こんな感じの情報は出てき

ます。

GM : 「メリアと言ったら、やはりアリスちゃんだろうねえ」

フィオーネ : 「アリスちゃん？ かわいいらしい名前だねえ、もしかしてアイドルの一人？」

GM : 「そうそう、バリーにいる不動のトップランカーアイドル。ここだけの話、アラベアとチールドにもファンクラブの会員がいるって話だよ」

フィオーネ : 「……本当にアイドル業が盛り上がってるのね。」

GM : 「なんでもバリーのとりまとめ役の知り合いらしくてね、結構昔から祭りに協力しているって話だよ。いやあ、いつもやつている『アリスちゃんかわいいって言うて？』『アリスチャンカワイイヤッター』の掛け声はバリーの名物風景だよ、間違いない」

フィオーネ : 「掛け声まで統制されてるのね、私も一度は見てみたいかも。」

GM : 「ライブに関してはきちんと制限されているからチケット必要だけど、この時期ならどこかで会えるかもなあ」

フィオーネ : 「教えてくれてありがとう。ほら杯が乾いてますよ。」（並々注ぐ）

GM : 「おおつとありがとう、ほおれあんたも飲みなさいな」地酒ドボドボ

フィオーネ : 「ありがと、このリキユール本当に美味しいやみつきになる。」注がれた酒を一気飲み、今度は酒瓶から直接飲み始める。（一同：だから女子力）

この時、まさかあんな出来事にまで発展するとは……と一同は思いました。何が起きるかはこうご期待。

G M : フィオーネがとうとう瓶に移行したところでこの時間帯の行動を終了しようかと思います。何か聞いておきたいこととがありますか？ちなみにアラベアでない場所に「敵情視察に行くぜ！」と向かうのも準備としてはあります。

ブラン（弟子） : さっきの子が逃げた方向分かります？

G M : 逃げた方向ですか、それでは弟子は2d6振ってみましょうか。

ブラン（弟子） : (コロコロ) 11

G M : 今皆さんがいるのがアラベアの中心部ですのでぎっくりと北に向かいましたね、でも見えないところで方向転換されているかもしれない。あと、その目です。「少女の逃げた先を見ようとした時、その行動をやってはいけない」と感じました。

動かなきゃいけないのに、体が反応しなかったり脳が「それをやるな」って警鐘を鳴らしたりする感じです。

ブラン（弟子） : はい？

ブラン（修羅） : ホラー要素？

ポツクル : おやおや？

スピール : おやおやおやおやおや

フィオーネ : 不穏になってきました

GM : と、不思議な感覚に包まれたところで次に行きましょう。

宴会も終わり、一日目の昼です。各人の場所および行動は以下になりました。

・フィオーネ：バリーで準備

・ブラン（修羅）&スピール：神殿で調査

・ブラン（弟子）：アラベアで調査（少女の行き先について）

・ポツクル：チールドで調査

GM : まずはバリーに行ったフィオーネから行きます。村おこしポイントを1d
6+1点上昇しましょう。

フィオーネ : (コロコロ) 6。やったぜ

GM : 村おこしが13点！それでは判定が必要な程度のアリスちゃんの評判です。だいたいトップアイドルとトップ女優と国家元首と幼いころ隣に住んでいた年上のお姉さんとアパートの隣の部屋に住んでいて時々煮物のおすそ分けをしてくれるワケあつて一人暮らしのJKを煮詰めて蒸留したくらいの人気ですね。

フィオーネ : 『アリスチャンカワイイヤッター』あまりにも強すぎるヒロイン度

GM : 「通りすがりの観光客がゲリラライブに出会いこの集落への永住を決めた」
「ライブ中に襲ってきた蛮族が全員一糸乱れぬオタ芸をしてから帰っていった」「大規模

なライブの時には必ず怪しげなフードを被った男が腕を組みながら最後列にいる」などなど情報は尽きません。

ファイオーネ　：「アリスちゃん、マジアリスちゃん。これはバリー派20年連続優勝も納得の可愛さね。あとで皆にもアリスちゃんの尊さを伝えないと。」

GM　：「ああ、アリスちゃんのおかげでバリーはあと1000年は戦えるよ。まさにアリスミレニアムだ」

ファイオーネ　：ところで、バリーでアリスちゃんグッズ（ペンライト）購入出来ませんか？

GM　：劣化版マグトーチといった感じで、手元しか照らせないので300Gで売ってますよ。色は変更できます（キンブレと同じ）ので頑張ってください。

ファイオーネ　：買いました

ブラン（修羅）　：即決で笑っちゃった

ポツクル　：たのしそうww

ファイオーネ　：最高級リキキュール20本分……。まあ仕方ない、アリスちゃんマジ天使だし

GM　：ありがとうございます、それでは次はアラベアの弟子と行きましょう。とりあえずはダイスを振ってみましょうか、スカウト+知力基準で

ブラン（弟子）：（コロコロ） 17

GM：なるほど、雑踏のあたりを調べると足跡が特定できました。どうやらオアシス方面へそのまま進んでいったようです、アラバア内でつかめる足取りはそこまでです。そして、追加で分かったことですが

①・少女の足跡を見た所、その周りの足跡の動きに違和感があった。まるで「その場の全員が少女に道を譲るように移動した」みたいだ。

②・少女の足取りは足跡からつかめた、しかし「聞き込みでは一切情報を掴めなかった、まるでその場にいた全員がその少女のことを忘れたみたい」だ。

以上がわかりました。

ブラン（弟子）：「スピールとブラン、だいじょうぶかな」オアシスとその向こうにある神殿の方を見る

GM：それでは、仲間を心配する弟子からカメラを移しましょう。このままの流れで神殿組と行きましようか。この「神殿」というのは、街にある神殿よりは「祭事にしか使わない本殿、もしくは有事以外中に入れない神域」と考えたほうがいいでしょう。もちろん、近づいてきた皆さんも警備の人（せいぜい5レベルファイター）に何をしに来たのか聞かれます。

スピール：「バーメルの神様に、ご挨拶を。できれば、ここでどのような信仰がなさ

れているか、そして神様がどういったモノを司っているのかを知りたく。地域の文化を知るのに最もふさわしいのは、信仰を知ることでもありませんから」

GM : 「なるほど、確かにその通りですな。……しかしながら、恥ずかしいことにここには神様など祀られてはいなく、言ってしまうえば『この場所のおかげで我々が生活できている』という剣の神様とは別種の信仰ですのでご期待に添えるかは分かりません」

GM : 「中も崩れかかっているとところなどありますし、万が一があつた場合我らの生活も立ちいかぬようになりますので神殿内に入る場合は案内として我らが同行させていただきます」と、こんな感じですね。実際に助けてくれたかわからない神様よりも実益のある建物の方が崇拜に値するという現実主義。

スピール : 「ありがとうございます。できれば、わかっていることや、普段の生活のお話なども聞きたいものです」

GM : そんなわけで、スピールに関してはそう言ったことを聞くとしまして。プランはどんな感じで聞きますか？ちなみに水源は神殿内に続いているので調べるのなから中に入る必要があります。

ブラン（修羅） : 「3つの村が欲しがってるような、この水の水質をちよつと調べたくて。水源まで調べれば、この水がどれだけ使っていいものなのかも分かるかもしれ

ないし」

GM : 「水源ですか……実はわたくし共も水源がどこにあるのか理解して
いないんですよ。見ていただいたらわかると思うのですが、神殿内部に閉ざされてい
る場所がいくつかありまして……どうやらそこから水が漏れ出ているようなん
ですよ」と案内してくれます。そんなわけで、ブランとスピールはプリーストとレン
ジャー技能に知力ボーナスでロールしてみましよう。

ブラン(修羅) : 「ありがとう。近くまで行けばもうちよつと分かるかも」(コロコロ)
13。わかんなさそー()

GM : まずブランの方ですね。すごい！このお水飲める！なんでだろ!?

ブラン(修羅) : 「生で飲める水は珍しいね」舌に乗せてみて。情報量う……

GM : 「そうなんですよ、オアシスの方よりも源泉の方が水質が良いので地酒の製
造業種はここから時下汲みしていきます」などと話してくれます。

スピール : (コロコロ) 23

GM : そしてスピールですね、まずこの『神殿』と呼ばれている場所は先ほど警
備の方が言ったように結果としてそう呼ばれるようになったところと確信できます。

そして「これを誰が作ったのか」は不明です。どちらかといえば「この場所があつて
オアシスが出来たから、ここに集落が出来た」という話ですね。ですので、おそらくこ

こは300年前の〈大破局〉以前からの建物だとわかります。

あと達成値が高かったのていくつかボーナスです。通路に、葉が落ちていました。四葉のクローバーを押し花にして造られた葉ですね。

スピール : シロツメクサ(推定)だ

GM : 警備の方も「おや? 誰かの落とし物・・・」にしてはこれを持ってそうな人はここ最近着ていないと思うけどなあ」といった感じですよ。と、葉が閉ざされた扉の前に落ちていたんですけど、サーリアが「ホーウホーウ」と勝手にその葉の方に飛んでいきます。

スピール : 「え、サーリア? ちょっとどうしたの?」

GM : そして、サーリアが近づいたとたん今まで壁だったところが変形します。

ゴゴ・・・ゴゴゴ・・・と、通路が開きました。

スピール : 「……………壊したわけじゃないですよ?」

GM : 「(。D。)」

GM : 「(。D。)」

GM : と、警備兵は一瞬あつげにとられていましたがすぐに復活。「…………申し訳ありませんけど、本日はここでお引き取り願えませんか? 流石に今の状況はとりまとめ役全員の意見が必要ですので」

スピール : 「あ、はい。そうですね。この奥に何かがあるかわかっててもわかってなくてもダメですよ。はい」

ブラン(修羅) : (こつそり奥に行こうとして止められてる)

スピール : 「えと、一応。聞こうと思ったことがあるんですけど、それだけ聞いていいですか?」

GM : 「ええ、何ででしょうか?」

スピール : 「この葉、持ち主は誰なんですか?」

GM : 「……. わからないですね、一応紛失物として管理はしますが……. まあ特別高価そうなものでもないので落とすし主は見つかからないかと」

スピール : 「持ってそうな人は知っているみたいなきことは言ってみせませんでした?」

GM : 「ああ、持ってそうな人……. というか、人種に心当たりはあるんですよ」

GM : 「でも、そう言った人はここに来ていないので誰のかなあって」ちなみに、四葉のクローバーの意匠が施された品物はアリスちゃんファンクラブのたしなみです。

スピール : 「なるほど、ありがとうございました。ちよつとしたアクシデントはありましたが……. この地域のことがちよつとわかった気がします」幸運の印、つてだけじゃないよな。メリアだし

G M : 「いえいえこちらこそ、そろそろ暗くなってきましたので外までお送りしましょう」と神殿の外に出されます。では、同時刻のポツクルにカメラを回します

G M : 夕方、ポツクルはチールド派閥の集落にきています。ここは、砂漠の方に一番近いので異国情緒あふれる品物が多い気がしますね。ラクダとかもいます。ポツクル : 「めずらしい生き物がいるやー」

G M : そうですね、普通のラクダと思って近づいたらコブから鉤爪付きの触手が伸びてくるのもあります。

ポツクル : 「思ったより珍しい生き物だな……」

G M : 器用に触手を巻き付けて、子供を乗りやすい場所に導いたり手綱代わりにしたりと有益なんですけどね。

ポツクル : 「さておき、この辺りの話は何も入ってきてないし、まずは情報集めだな！」

G M : なるほど、特に目的が無い場合ざつくりと冒険者レベル＋知力ボーナスかスカウトレベル＋知力ボーナスですね！

ポツクル : スカウトでしか振れない方を振っておこう（コロコロ） 16

G M : それでは、特に目新しい情報がないなーと買い食いをするなりしていたポツクルですが……とある情報を小耳にはさみます。

G M : 「なあなあ知ってるか？北にある跡地付近でまた変なのを見たってよ」

G M : 「またか？でも祭りのときにしか聞かないからどうせ宿無しが寢床にでもしてるんだろ？」と、チールドからは丁度北にある盗賊跡地に夜な夜な怪しい人影が見当たるようですね。しかも祭りの時期にだけ。

ポツクル : 「オイラ、ユーレイとかはあんまり好きじゃないんだけどなあ……」

G M : そんなことを呟いていると、ポツクルに声がかかりますね。

女性 : 「あら、冒険者なのに幽霊を怖がるなんてずいぶん可愛らしいことを言うのね？」と、乗合馬車で出会った女性とかち合います。

ポツクル : 「アンタは!!お菓子の人!!」

女性 : 「覚えていてくれて嬉しいわ。どう、ここで会ったのも縁だからお茶でもない？」と誘ってきますけど。

ポツクル : 「もちろん！冒険の話はあんまり増えないけどな」

女性 : 「そう、ならああなたの故郷の話が聞きたいわ」

ポツクル : 「オイラの故郷の話か……そんな面白い話でもないと思うけど、いいぜ」

女性 : ポツクルの話すことを楽しそうに聞いてますね、まるで小学校から帰ってきた子供の「今日こんなことあったの」って言うのを微笑ましそうに聞く親みたいな表情で。

ポツクル：「この鎧を見つけたときは大変だったんだー！遺跡の奥に子どもしか入れないような亀裂があつて、調子に乗って一人で進んでたらひどい目に遭つてさー！」

女性：「危ないことをして親御さんを心配させたらダメよ？あなたたちはただでさえ数が少なくて身を寄せ合つて生きているのだから。どうせ言われたんでしよう？『ここは危険だから大人になるまでは入ってはダメだ』とか」

ポツクル：「そうそう、親父も厳しくつて、遺跡の奥には行っちゃいかんつてそればつか。外に出るのも危ないからダメ。つまんないつたらないぜ。でもそんなオイラを、スピールが連れ出してくれたんだ。アイツにはほんと、感謝してるよ」

G M：×連れ出した　○勝手に着いていった　では？

スピール：　なんかきた

G M：　余つたコロッケを野良犬にあげたらそのままついてきたやつだ。

ポツクル：「旅の途中に野営してるアイツの料理の匂いに惹かれて会つただけだな、世界にはもつと美味しいものがたくさんあるつて教えてくれたんだ！」イイハナシ
ダナー

女性：「本当に、あなたは今楽しくて仕方が無いのね。でも、年長者からひとつア
ドバイスをしてあげるわ。まだ元気なうちに、一回は顔を見せに帰つてあげなさい」

女性：「親つて言うのは、思った以上に子供のことを信頼した振りをしながらそれ

以上に心配しているのよ? ……気が付いたら、もう会えない。なんてなつてはダメ」

ポツクル : 「そういうもんかなあ……。でも、お菓子の人と言うなら、うん、覚えておくよ。落ち着いたら一度顔見せに帰るよ」

女性 : 「ふふ、いい子ね」頭を撫でながら立ち上がります。

女性 : 「それじゃあ、ここらで失礼するわね」と去ろうとして、思い出したかのよう振り返る。

女性 : 「ああそうだ……。あのエルフの女の子に伝えておいてくれる? 賭けはあなたの勝ちだった、って」

ポツクル : 「賭け? よくわかんないけど、わかった!」

女性 : 「ええ、だから私の名前を教えてあげる」あれですよ、今度また会ったら名前を教えるってやつ。この人からしたら『あなたたち』って区切りだったので。

アリア : 「私の名前は『アリア』……。楽しかったわ、また会いましょうねポツクル」それだけを残して、気が付いたら彼女はいなくなっていました。

ポツクル : 「アリア……。うん、またな!」

GM : それでは、特に何もなければ1日目の夜です! メリアであるスピール以外は寝ることを推奨します、多分起きていたら次の日ろくなことが起きない。

フィオーネ : 「祭り当日が楽しみだわ、アリスちゃんふふ。」すやく

ブラン (弟子) : (このエルフだいじょうぶか。ダメだったわ)

GM : フィオーネってなんでこう発言するたびに残念メーターを積み上げていくんだろう。これ、まだ本人のうわき聞いただけで目撃すらしてないんですよ。

フィオーネ : だから会うのが楽しみなんです!! きつと超絶美少女のはず!!

ブラン (修羅) : ここまでくると何かしらの情報災害なのは……? アリスちゃん……PCたち (除くフィオーネ) の目には何も無いステージの前で狂喜乱舞する民衆の姿が……

フィオーネ : その横に必死にペンライトを振るエルフの姿が

GM : スピールは何かしますか? ひとり準備を続けてもいいですし、夜闇に乗じてどこかに調査に行ってもいいです。

スピール : 宴会で見た料理とか、この辺の特産とかみて、新しく名産品になりそうなものを思いついた体でいろいろ試している。4年に一度のイベントとかで出店になるような。

GM : それでは1d6+1点上昇ですね、どうぞ

スピール : (コロコロ) 2。 出目1を適当に消化

GM : 累計15点!

○ミドルシーン③ —村おこしをしよう 2日目—

GM：そして2日目朝！

ブラン（弟子）：「おはよう！」

GM：「おはようございませう！ところで他の集落で殺人事件と失踪事件が起きましたよみなさん！」

ブラン（弟子）：ええ

ブラン（修羅）：不穏すぎるけど

GM：「うちは何も起こらなくて平和でしたけどね、いやあ他の集落の皆さんにはご愁傷さまとしか思えません」

フィオーネ：「他の集落とはどちらで？バリー派、チールド派、それとも両方で？」

ブラン（弟子）：「しっそうじけんって、どこで？」

GM：「両方ですね、より詳しく言えばバリーの方で失踪、チールドで殺人です」
 ブラン（修羅）：「この街でも何かあるかも……気を付けなきゃ」

スピール：「盗賊とかなんとかのせい？それとも観光客？」

GM：「現場にはシロツメクサのグズがあったので、おそらくはアリスちゃん限定ライブ関係のいざこざが原因では……？」と有識者は語っています

GM : 「これで向こうのライブが中止になったら、こっちの村おこし的には有利に働きますがそれはそれ、心が痛むものは痛みますね。皆さんも、十分に気を付けてください」

といったあたりでこのシーンは終了。2日目朝の各PCの行動は以下のようなになりました。

- ・ポツクル：アラベアで村おこし準備
- ・フィオーネ&ブラン（修羅）：バリーで失踪事件について調査（ブランはサポート）
- ・スピール：チールドで殺人事件について調査
- ・ブラン（弟子）：神殿で少女の行方を捜査

まずはポツクルによる村おこし準備……なのですが、ここでは特にさしたるイベントもなし。2点の村おこしポイントを貯めた後バリー村に場面は移動します。

GM : といった感じで、まずはバリー派の集落（比較的栄えている）ヘカメラを移します。明日にライブ本番が控えている為、各所が熱狂に包まれストリートにはその体の火照りを取るためにコールアンドレスポンスの練習をしている人々もいます。

フィオーネ : 混ぜてもいいですか？

ブラン（修羅） : 止めますが

フィオーネ : 離してブランちゃん！明日アリスちゃんにやつと会えるの、完璧にコー

ル& ;レスポンスしないと！」

ブラン（修羅）：「ここに来た目的を忘れちゃダメだよ」はがいじめ

GM：「おつそこにいるのは昨日アリスちゃんペンライトを買ってくれたエルフの姉ちゃん！」と声がかかります。

フィオーネ：「貴方こそ、私にアリスちゃんの素晴らしさを説いてくれた同志よ！」杖の代わりにペンライト装備してます

GM：「アリスチャンカワイイヤッター！」（ハイタッチ）

フィオーネ：「アリスチャンカワイイヤッター！」（ハイタッチ）

ブラン（修羅）：（滅多なことでは変わらない表情がちよつと困惑の色になつてる）

ブラン（弟子）：お父さん…

スピール：単なる観光客

ポツクル：アリスチャンカワイイヤッター

GM：フィオーネはどうしてこう、ダメな部分を手前に持つてくるんでしょうかね。実際に抱えている問題はかなり厳しい（注：危篤の父がいる。1話自己紹介参照）のに。

フィオーネ：たのちい

G M : 面白そうだし、実際にペンライト代として300G払ってるのでこの場所での聞き込みに+3のボーナスあげます。

フィオーネ : 「ところで同志さん、アリスちゃんの素晴らしきライブ前日だというのに、今朝、失踪事件があったのですか?」ボーナス美味しい

G M : 「ああ、どうやら明日のライブの為に夜に居残り練習していた同士がやられたらしい」と、これ以上は判定で詳細がわかりますかね。ブランはサポートでいいですか?」

ブラン(修羅) : はい

G M : それでは判定どうぞ。

フィオーネ : 追加でフェアリーウィッシュユ。 (ココロコ) 成功、判定に+2で。(ココロコ) 諸々込みで29。

G M : それでは、まずはガイシャからですな。拉致されたのは、ファンクラブメンバーのうちの一人。昨日も夜遅くに自主練の為外出して帰ってきませんでした。拉致と判断された理由は、命ともいうべき会員証と魂ともいうべき明日のライブチケットが発見されたから。発見された場所には、争った形跡らしきものがありました。

しかし集落の兵士的立場の人たちは「それならばここにチケットがあるのはおかしい、絶対着服か転売されているはずだ」と首をひねっています。

そして出目が良かったフィオーネは、この集落の人が見落としていてであろう痕跡（足跡と何かを引きずって行った跡）を発見します！痕跡は神殿方向に続いています。

フィオーネ：「ブランちゃんみて、引きずったあとがある。被害者は連行されたときとみ間違いなにかしらね。」

ブラン（修羅）：「一時はどうなるかと思っただけど、真面目にやってくれてる……よかった……」

フィオーネ：「そりゃあ、我ら（ブラン含める）の同志が被害者となれば頑張らざるをえないわよ。」

ブラン（修羅）：「ん？我ら？」

フィオーネ：「今でしちゃんか神殿の調査をしてたよね？犯人と鉢合わせになっただけいいいけれど……。」（ブランの反応ガンスルー）

ブラン（修羅）：「あー、もしかしてその我らつてのに僕も入ってる？」

フィオーネ：「ん？だって私たち仲間でしょ！ほら、ブランちゃんもこっちにおいで。このペンライト握って話聞いてれば、きっとアリスちゃんの良さが分かってくれるはず〜！」

ブラン（修羅）：「仲間って……そっち……」と言いながら半分引きずられていきます。ぼっちにそのワードは効く。

フィオーネ : 「れつつごとく! アリスチャンカワイヤッター!!」

ブラン (修羅) : 「……それ、やらないとダメなの?」

フィオーネ : 同志30人ぐらいでブランちゃんを囲んで、ひたすらアリスちゃんの素晴らしさを語り続けます。

ブラン (修羅) : あまりにも可愛い (ブランは無表情で聞き流してそうだけど)

GM : それでは、カメラを移しましょうか。さっき話題に上がったので、弟子のいる神殿の方に行こうかと思えます。少女の痕跡は以前出会ってますし普通にスカウト+知力ボーナスで行きましょうか。

ブラン (弟子) : はーい (コロコロ) 15。え、どうしよう指輪割ります?!

GM : 達成値的には失敗なんですけど、もともとこの時間帯のこの場所には謎の少女とのイベントがあったので見つけることが出来ます。

ブラン (弟子) : 偶然何とかならしい

少女 : 神殿から離れたオアシスの近く、木の根元に座つてため息をついています。能力的に弟子が隠密したらまず気が付きません。

ブラン (弟子) : 見つけたけどどうしようか迷ってる

少女 : 迷っているブランは、ここで聞き耳判定をしてみましよう。目標値は16です。

ブラン（弟子）：「……どういたしました」

少女：「……………」 会話が途切れる

ブラン（弟子）：「……」

ブラン（弟子）：「あの、さっきたすけるってきこえたんだけど……」

少女：「あつ、やっぱり聞くんですね……………」

ブラン（弟子）：「うん。きになるから」

少女：「私の知り合い……………いえ友達?……………いいえ、家族が……………」

とても困ってるんです。でも、私だけではどうもできない」

ブラン（弟子）：GM、この子なんのメリアか分かりますか?

少女：シロツメクサですね、髪の一部がクローバーです。

ブラン（弟子）：「……いらいだしたひと?」

少女：「……………」 少女は少し考え、そして荷物から紙とペンを取り

出した後手紙のようなものをしたためてブランに渡します。

ブラン（弟子）：「?」

少女：「もし……………もしも、あなたが私のことに心当たりがあるのなら」

少女：『依頼書の裏に書いた人物が私と思うのなら、今日の夕方に仲間の皆さんとこの手紙を読んでください。それまでは何も聞かないで、仲間のもとに戻ってください』

い』と、言います

ブラン（弟子）：「……………うん。わかった。元気でね」手紙を持って去ろうとする

少女：「あ……………待って……………あなた、名前は？」

ブラン（弟子）：「ブラン。あなたは…きいちやダメなんだっけ」

GM：あ、じゃあここでブランは精神抵抗の判定しましょう。目標値は30で。

ブラン（弟子）：ええ

ポツクル：6ゾロの時間だー！

ブラン（弟子）：（コロコロ）20。無理

GM：それでは、ブランが名前を聞こうと思った瞬間脳にノイズが走ってその思考自体が無くなります。

ブラン（弟子）：「？」

少女：一瞬意識がなくなったあなたのそばには少女が立っています。「クラリス……………私の名前」

クラリス：「ちよつとズルだけど……………私から言うのはノーカンだから、ね？」とちよつと笑ってからその場を去っていきました。

クラリス：「期待しないで、待っていてあげる」

ブラン（弟子）：「クラリス」ひとまずスピールやポツクルに相談しに戻りますかね

GM : そんな感じでここはゞようと思えます。ちなみに渡された手紙を昼に見ようとする精神抵抗が発生します。

ではこの時間帯の最後に、チールド派集落でスピールですね。ちなみにここでもイベントが発生します。チールド派の集落に到着したスピールですが、見知った顔から声をかけられます。

アリア : 「あら、今日も見知った顔を見かけるわね」という感じでアリアから声をかけられます。イベント内容を具体的に言えば「調査したかったことの内容をだいたい世間話として話してくれる」です。

スピール : 「あ、アリアさん。会うのは道中ぶりですね。今はチールド派の集落に滞在を？」

アリア : 「宿はバリーの方なだけどね、お食事はいろんな場所で…….と
思つて」とモーニング後のお茶をしています。

スピール : 「ほうほう。スピールたちはアラベアにしまして、各々分散していろいろ
回つているところですね。おいしいお店ありました？」おいしいお店は貴重な情報（主
観）なので聞きたい

アリア : 「そうね、こつちの方が他領の窓口だから香辛料は豊富かしら？あとバ
リーでは愉快な店が多いようね」メイド喫茶的な？

スピール：「ふーん、味そのものだけじゃなくて雰囲気で。バリーはもう全面アリス推しなんですわ。そういうえば、アラベアの方が地産のものが多いい気がしますので、案内しましょうか？」

アリア：「個人的にはナンセンス極まりないわね。文化としてはともかくいつかは消滅するであろう個人に依存しては破綻が目に見えているから」（裏でのフィオーネ「は？アリスちゃんの不滅なんだが？？」）

アリア：「ああ、確かにあそこは地酒とかもあるらしいわね。うまいことこの水を使っているとと思うわ」

スピール：「フィオーネとかサポテン酒とかすごい気に入っちゃって、依頼料全部つき込んだりしないように財布のひもを締めないと……」フィオーネがまだ沼に落ちたてのオタクムーブしててを知らない

アリア：「楽しんでるようになにより、若いうちくらいは後のことを気にしないで遊ぶのもいいものよ？」

スピール：「酔いつぶれてその辺で寝てたり二日酔いで寝込んだりしなきゃいいんですが……」

アリア：「フフ、その時はきつと昨夜の被害者の仲間入りでしょうね」

スピール：「前後不覚になるほど酔ってたら冒険者でも簡単に連れ去られますよね

え……つて、そういうば、その事件について調べに来たんです」

アリア　：「なるほど、ここに來たつてことは殺人事件の方かしら？お茶請けにはちよつと血なまぐさいけどお話でもする？」と優雅にお茶を飲んでいきます。

スピール　：「死体そのものが目の前に転がるとか、そういう状況じゃなければ大丈夫ですよ。じゃあ、スピールも何か頼んできますね」

そんな様子で、アリアは世間話として昨夜の事件の内容を話していきます。

被害者は、大声を上げながら集落から外へ出ていった酔っ払い。大声だったので、内容的に「なにが盗賊の幽霊だ！ガキが肝試ししても何にもないだろ、俺が見てきてやる！」と北の遺跡に向かった模様。何人かは止めたけど結局男一人で向かい、今朝になつて遺跡と集落の中間で遺体が発見。

アリア　：「……万全じゃない時に一人だけつていうのは、怖いものよねえ」
他人事のように言つてます。

スピール　：「盗賊の幽霊？盗賊は確かにいるつて聞いているけど、幽霊なんて見た人が？」

アリア　：「あそこね、盗賊は本当にいたんだけど……いや今もいることはいるんだけどね。状況が状況なんで、多分ほとんどの人は『もう盗賊は全員討伐されて幽霊しかない』つて思つてるわよ」

スピール　：「そのへんの盗賊の話、あまりよく知らないので教えてもらえますか？」

アリア　：「そうね、私も実際に見たわけじゃないんだけど……」と前置きをして

アリア　：「遺跡に巣くっていた盗賊団、20年くらい前に全員死んでるの。でも、よっぽど未練があつたんでしようねえ。何人かはアンデッドとなつて再起し、今は人知れず活動を続けている……つてことらしいわよ？」

スピール　：「うーん、アンデッドか。安らかに眠つてほしいところですが……20年前に全員死んだつて、討伐隊か何かが結成されたつて話ですかね」

アリア　：「伝え聞く話によれば、内部で何かがあつたらしいわよ？」

アリア　：「さて、それではここまでが世間話。ここからは、私個人からの助言よ。あなた、今のところは仲間と合流しなさいな。ひとりで行動はお勧めしないわよ」

スピール　：「ですわね……全体的にきな臭くなつてきたのも感じてるので、昼からは合流します。ありがとうございます」

アリア　：「聞き分けのいい子は好きよ、ご褒美を上げましょう」と言つてスピールの頭を撫でてます。

スピール　：「わつ……えへへ、ありがとうございます。旅に出てから誰かに撫でられるつてこと、なかつたので」

アリア：「そう？それはよかった。．．．たまには、里の方に帰ってみなさいな」という感じで別れます、ここでスピールはダイスを1個振ってください。

スピール：(コロコロ) 2

アリア：それでは、大阪のおばちゃんか、お土産を渡すがごとく魔晶石10点を1個くれました。

スピール：「え、いいんですかこれ」

アリア：「世間話も、たまには役に立つでしょ？」といたずらっ子の様に微笑んでから去っていきます。本当に何でもないお土産を渡した程度の感じですね、他に聞きたいことなければここでメようかと思えます。

そして2日目昼の行動ですが、夜に遺跡に出るといふ幽霊が気になったPCの面々はここで寝ることに。睡眠の必要がないスピールのみが準備を行い6点の村おこしポイントを獲得。(現在2-1)その後スピールは現在の村おこしの進行度を確認するため冒険者+知力ボーナスでの判定を行います、失敗してしまいます。

2日目夕方。ここでPCはクラリスから渡された手紙を読む組と、村おこし準備組に分かれました。それぞれの内訳は以下の通りです。

・スピール&ブラン(修羅)：村おこし準備組

・ブラン(弟子)&ポックル&フィオーネ：手紙読む組

GM : それでは先に村おこしダイスですね、スピールは先ほど振ったので今回は
 ブラン1d6+2をやりましょう。

ブラン(修羅) : (コロコロ) 5。まあふつう

ポツクル : 期待値は出てる

GM : それでは、続いて準備に参加したふたりは冒険者レベル+知力ボーナスで
 目標値18をどうぞ。

ブラン(修羅) : (コロコロ) 17

スピール : (コロコロ) 19

GM : おつそれではスピールは「明日頑張ればなんとかなる」と手ごたえを感じ
 ました。

スピール : 今が26だから、やっぱ合計30か？

ブラン(修羅) : 30かー

GM : それでは、続きまして手紙組と参りましょう。手紙を空けると、そこには
 交易共通語で文章がつづらられています。

—クラリスからの手紙—

この手紙を開くことが出来たということは、多分あなたたちが私が文面を追加した依
 頼文書を見てくれた方だと思えます。文書の裏に血文字でしたためたことを先に謝り

ます、あの時は時間が無く精いっぱいの行動でした。

私は、現在バリー派閥のとりまとめ役のひとりに家族を人質に取られています。おそらくはお察しの方もいることでしょう、私は長年「アリス」としての協力を強制されてきました。私のことは構いません、ですが今のままでは捕らえられている家族がいつ何をされるかわかりません。

今の私が持っているモノは多くありません、それでも助けていただけるのでしたら、私に出来ることは何でも致します、助けてください。今夜、神殿でお待ちしています

ファイオーネ　：手紙の送り主がアリスちゃんだと知って、感動で震えています。笑みを浮かべ、涙を流しながら天を仰いでる。

ブラン（弟子）　：「だってー」準備中の二人に説明

スピール　：「えーなーにーよく聞こえなかったー」（露店設置への指示だし中）

ブラン（弟子）　：「あとでまたはなすー」

ファイオーネ　：あ、一応手紙に見識振ります、筆跡的に血文字と同じかくとかで。目標値あげるためフェアリーウィッシュユII使用で。（コロコロ）成功。続く達成値が、（コロコロ）22。

GM　：今回はペン使用、血文字は指を傷つけて急いでと考えると筆跡は一致しま

す。この判定、血文字をなめとつて違いを感じるとかくらしいしてもらえばボーナス付くかなあ

フィオーネ　：血文字をなめとつてとは???

ブラン（修羅）　：アリスちゃんの血液ですつてよフィオーネさん

フィオーネ　：アリスちゃんの血液取り込んだら、実質血縁関係では？

G M　：ちなみにこれ以上情報はないです。なので、こちらとしては皆さん買い物など準備したら次のタイミングで神殿へGOを想定していますが。

ブラン（弟子）　：……

フィオーネ　：「ついに感動の対面だ、アリスちゃん……。杖の代わりにペンライト装備してます

ブラン（修羅）　：「朝にバリー派のそこ行つた時も色々聞かされたし、なんか変なんだよね……。精神魔法でも受けてるのかな……。？」

フィオーネ　：「ワタシハイタツテセイジヨウデスヨ？」

スピール　：「まあ、滅茶苦茶やる気みたいだし……」

ブラン（弟子）　：フィオーネを警戒しておきます。クラリスに迷惑かけないように

そんなこんなで2日目の夜、神殿へと突入です。クラリス（＝アリス）の呼び出した先には何が待っているのでしょうか？後半に続きます！

『市虎三伝―クラリス―』②

第3話後半

○前回のあらすじ

アラベアという集落の村おこしを依頼されたPCたち。依頼文の裏面にあった血文字の「タスケテ」の文字に恐怖したり、村に向かう途中で会った女性アリアとお茶したり、ドラゴンをクソダサTで笑わせておひねりを貰ったりしながら到着した村には、一大アイドル旋風が巻き起こっていた！

片手間で行う村おこしの途中フィオーネがアイドルにドハマリしつつも、調査を進めるPCたち。どうやら村にはメリアたちが監禁されている隠れ里があるとの情報をつかみ、救援のために向かうのでした。

○ミドル戦闘① ―そうですいきなり戦闘です―

GM : というわけで、夜の時間に移ります。スカウトとレンジャーの方、知力ポ―ナス足して判定をしましょうか！

(該当者が判定を行う)

GM : ポックル以外の二人は、一人の少女が魔物に囲まれているのに気が付きま

した。ブランがいるのでクラリスとわかりますね。

ブラン（弟子）：「クラリス！」

GM：クラリスの周りを人型の魔物らしき存在が反復横跳びをしながらじりじり近づいていっています。

クラリス：「……ツ、ブラン！」弟子の姿を見つけると恐怖にひきつった顔で声を上げます。

GM：それではここから前座戦闘で御座います、こちらの陣営は3体！

各々戦闘準備を終え、魔物知識判定をするパーティー。その結果明らかになった敵のデータはというと……

https://yutorize.2/d.jp/ytsheet/sw2.5/
?id=DJYTBb

ブラン（修羅）：こいつらww

ブラン（弟子）：フィオーネが3人!?

スピール：うーん紳士的

フィオーネ：あちら側に着くべき？

GM：でもローアングル探偵団、なかなか無視できない能力ですよねアツハツハ。ちなみに今回の戦闘、クラリスは戦場にはいないものとして扱います。

フィオーネ : 「これが……。この超絶美少女が、アリスちゃん!!」

G M : 可愛いことはかわいいですけど、超絶と言えるかどうかは人次第でしょうね。

フィオーネ : 「アリスちゃん、私が! このフィオーネがアリスちゃんの事絶対守るからね!! アリスちゃんカワイイヤッター!!」

クラリス : 「ええ……。。(ドン引き)

ポツクル : 「フィオーネ……」

一般兵(1) : 「……。ハッ、まさか……。アリスちゃん!? あなたがアリスちゃんだったのか!」

フィオーネの言葉に敵が反応します、どうやらクラリスがアリスであるとは気が付いていなかった模様。ひよつとしなくても余計な一言でした。

ポツクル : 「フィオーネエエエ!!」

一般兵(1) : 「いや、でもきつと姿を変えているということはこれはお忍び……。我ら親衛隊は推しのプライベートには首を突っ込まない……。そう、紳士だから!」

ブラン(弟子) : 「先制まだかな。まだっほいな」

一般兵(1) : 「それはそうと、そのちいさいの……。貴様、男だな!」

ポツクル : 「見りやわかるだろ?!?!」

一般兵(2) : 「女の子ばかりの中に男一人だど!?これは絶許案件ですな!」

スピール : 「女装しとく?」

ポツクル : 「しない!!!」

ブラン(弟子) : 「メイドふくはー?」

ポツクル : 「いらん!!!」

一般兵(3) : 「なれば、これは私怨にあらず……天誅なり!しねえい!」

ポツクル : 「どういうことだー!!!」

クラリス : 「あー、もうめちやくちやだよこれ……」ハイライトの消えた

目で近くに三角座りし始めます。

フィオーネ : 「アリスちゃん、座ってる姿もかわいい!!!」

ブラン(修羅) : 「フィオーネ、どうどう」

そうして始まった戦闘はPCの先攻でスタート。敵の一般兵たちは3人とも前線ス

タート。一方のPC陣営は特殊能力を見越してポツクル一人が前線にいる状態で戦闘

開始しようとはしますが……

ポツクル : 「勝負だあああ!!!」(前線にポツクル一人が立つ)

一般兵(1) : 「勝負だあああ!!!」(視線が女性の方を向いている)

スピール : (逆の方がいいんじゃない?)

G M : あ、こいつ一人だけ前に出て逃げる気だ!

フィオーネ : 逆の方が戦闘データ上よさそうだけど、構図的には今の方が面白そう

ポツクル : 「Witness Me!!!」

ブラン(弟子) : 先制時前線に出るには通常移動がいるらしいですが

G M : つまり銃は使えない。(注: 銃を撃つには補助動作とはいえ魔法の使用が必要なので制限移動しかできない)

(無言でコマを後衛エリアに動かすポツクル)

G M : 逃げたぞこの男。

ブラン(修羅) : 秒で下がって草

ポツクル : ここが俺の居場所

G M : ポツクルが秒で下がった、株価も秒で下がった。

ポツクル : 死んだら株価も何もないからね!! 是非もないね!

そんな一幕もありつつ、配置も決まりいざ戦闘開始です!

・1ラウンド目

まずは安定のスピールによる《バトルソング》から。次にポツクルが《重力制御》を使いクリティカル値を下げながらの《ショットガン・バレット》。しかしこれは出目が3

と振るわず瞬間達成値+3を使い全員に回避されてしまいます。

ここにファイオーネが《ダブルキャスト》を使いながらの《ファイアブラスト》&単体《ファイアボルト》。《ダブルキャスト》で達成値が下がった《ファイアボルト》は抵抗されませんが本命の《ファイアブラスト》は抵抗を抜き、着実にダメージを入れていきます。

続くブラン（修羅）は相手の《ローアングル探偵団》で後衛に敵が出現することを警戒して前線に出ることなく、ポツクルに《かばうII》を宣言しつつ《スパーク》。その後ストローバードのゆずも前線に出つつ《雷撃》。両方抵抗されますがバトルソングの固定値分もあり、ダメージとして悪くはありません。その後のブラン（弟子）は前線に出ながらHPが減っている一般兵を攻撃。《ファストアクション》の2回行動もあり3体のうち1体を撃破することに成功します。最後に行動するサーリアはHPが減っている方の一般兵に《放電》を入れ、PCの手番は終了です。

敵の手番は《ローアングル探偵団》の発動から。残る2体ともブラン（修羅）を対象にしたため後衛に移動し、ポツクルへと瞬間打撃点6点込みのリア充必滅アタックを繰り出します。うち1つはブラン（修羅）にかばわれますが、ポツクルに31点の物理ダメージが飛び防護点込みでHPが39から16まで減少します。また一般兵たちのいるPC後衛エリアにはスピール、ファイオーネ、ブラン（修羅）と3人の女性がいるため、《紳士の振る舞い》で全達成値に+3のボーナスが入ります。

・2라운드目

開幕はおなじみ、フィオーネの《ファイアブラスト》から。が、《紳士の振る舞い》で上がっている精神抵抗を前に同値抵抗されてしまいます。続くポツクルの《クリティカル・バレット》は無事命中。しかしダメージ決定の出目が前ターンに引き続き3と振るわず。(ポツクル：今日ひどない??? スピール：クリバレ、出目を下げる効果がある)

とはいえ敵の残りHPはそれぞれ6点と7点。サーリアとブラン(修羅)がそれぞれ殴り、一般兵たちはあっさり昇天しました。(一般兵(1)：「女の子が近くにいるだけでウツキウキになります」サーリア(コロコロ)18点 一般兵(1)：「魂がウツキウキ(昇天)になりました」 戦闘終了です!)

GM： それでは、皆さんが戦闘を終えた後

クラリス： 「……あ、終わりました?」と声がかかります。

ブラン(弟子)： 「だいじょうぶだった?クラリス」

フィオーネ： 「無事終わりましたよ、アリスちゃん!!」

クラリス： 「ヒッ、すみません今オフなので……!」

ブラン(修羅)： 「ごめん、これはちよつとこつちで押さえておくから」とりあえず

フィオーネをはがいじめ

フィオーネ　：「ブランちゃん、離してお願い!!」

クラリス　：「……やっぱり、皆さんだったんですね」一部を視界内に入れないようにしつつ会話を続けます。(フィオーネ：「アリスちゃんかわいい、こっちみて♡」ポツクル：「フィオーネ……」ブラン(修羅)　：「さっきの人？たちも言つてたでしょ、オフの時は尊重しないといけないって」)

クラリス　：「申し訳ないですが、事情があるので私からは手紙以上のことを言えません。口にしてしまえば、あなた方の意志を無視してしまうかもしれないから」

スピール　：「スピールのことを教えてくれた人のことも話せない？」

クラリス　：「あ、多分それは私関係ありません。私がしたのは依頼文章を書いている人に『お願い』して裏に文章を追加しただけなので。ですから、誰が来るかは賭けでしたけど……よかった」と先ほどの戦闘を思い返して呟きます。

フィオーネ　：「……ふう、少し落ち着いた。私も」少し熱くなつてみたい。クラリスちゃんオフだったのにごめんね。」

ブラン(修羅)　：「少し……？」

フィオーネ　：「少しだよ、ただいつ発作が再発するか分からないから、ブランちゃん私を羽交い絞めにしたままにしてくれると助かる。」

ポツクル　：「発作なんだ……」

ブラン（修羅）：「分かった」羽交い絞めの力を強める。やっぱりこれ呪いの類では???

ファイオーネ：「ちよつ、苦しい……。」

クラリス：「ああ言ってますけど、多分彼女もう真つ当な道には戻れませんよ……。」と遠い目をして言います。

ブラン（弟子）：「……とらのかお、こわくなかった?」

クラリス：「……うん、もう慣れたから……。」

ブラン（弟子）：「よかった……」

スピール：「実は慣れても、まだちよつと怖いよ」

クラリス：「それよりも、時間がありません。今私がここにいることが、もうそろそろバレルと思います。ですので、私の家族を救う方法はふたつしかありません」と、彼女は言葉が続けます。

クラリス：「……それと、ひとつお伝えしておくことがあります」

クラリス：「私は、とある事件によつて声帯を改造されています。なので、私は皆さんに対して『命令やお願ひ』をしないように話をします」

ブラン（修羅）：改造、のところでちよつと眉を動かす

クラリス：「そうしないと、私の声を聞いた人は言葉通りに従ってしまう……」

それこそ自分の命すら簡単に捨てるくらいに」具体的に言えば、言葉を聞いた距離・対象の数・お願いの内容によって精神抵抗判定が入りますね。

スピール　：「あの失踪した人みたいに？」

一般兵（割り込み）　：「あ、失踪は推しへのアイドル性の見出し方の違いで我らが天誅を下したやつです、はい」ちなみに今回の被害者、全員ろくでもない理由でしか被害に遭っていません。

フィオーネ　：「同志……。」

スピール　　：「え、まだしやべれんの」

ポツクル　　：「天の声だよ」うーん、ギャグシナリオw

一般兵　　：「まあ我ら髑髏ですから？歌う髑髏なんて童話にもありますし？」

スピール　　：「盗賊の亡霊ってのはアンタたち？」

ブラン（弟子）　：「すごく斬りたそうにしている」

ブラン（修羅）　：「こいつが襲ってくるようなら流石にフィオーネ解放するよ。ご

めん。先に謝っておく」

フィオーネ　：「……それは誰に対する謝罪かしら？」

ブラン（修羅）　：「各方面に、かな……。」

戦闘が終了したのに何故か会話が可能なアンデッドたち、これ幸いにPC達は質問を

するがこう返ってくる。

一般兵：「フフフ、ノン！盗賊の亡霊などというナンセンスな存在ではない！」

一般兵：「そう、我らは《限界を超えし者》！具体的に言えば！身内内で流行り病が広がって全員死にそうになった結果『推しのライブを見るまでは死ねない！』と頭目の操霊魔術によりアンデッド化して生き永らえた盗賊団が我らである！」

スピール：「盗賊団、感冒により自滅か……」

一般兵：「アリスちゃんはまだライブを続けてくれているおかげでまだ余生を過ごせています！アリスちゃんカワイイヤッター！」

フィオーネ：「アリスちゃんカワイイヤッター！」

スピール：「強制的に未練断ち切らない？」

フィオーネ：「スピールちゃん、せめて明日の夕方まで待つてあげてもいいじゃないかな??ほら、彼ら人畜無害のただのファンアンデッドみたいだし！」

ブラン（修羅）：（発作が再発しないかと力を込める準備をしている）

ブラン（弟子）：「ん。けす…じょうぶつならてつだう」

クラリス：「まだ話せるのならちようどいいわ」

クラリス：『知っていることを、話して?』能力を使った『お願い』をします。

一般兵：「ハイ！我ら盗賊団、チケットを融通してもらえらる約束でバリー派の旦那

に都合の悪い人間始末してます！」

一般兵：「あと、なんか知らないけどこの近くのメリアの隠れ里に人員配置して逃げられないよう飼い殺しにしています！鍵はバリー派の旦那の家の私室のカーペット下にある地下金庫にあります！」

スピール：「滅茶苦茶具体的に知ってるのね……」

フィオーネ：「……ああやはり、さつきクラリスちゃんが言ってた、バレるっていうのはバリー派代表についてことみたいだね。」

クラリス：「ええ、私はあそこの家に軟禁されていますので」

フィオーネ：「それとバリー派、アンデットを配下に置いてるなんてまともな奴らじゃなさそうだね。」

クラリス：「皆さん、私の家族のいる隠れ里に行くのには二つの方法があります。」

クラリス：「ひとつは、バリーにある隠し金庫から入り口のカギを獲得して正面から。もうひとつは、遺跡跡地にある隠し通路から……ですが、こちらは途中で警備の魔動機が反応すると思います」

GM：「ここで、クラリスの知っている限りのマップを出しましょう。」

GM：「左の倉庫が、隠し通路（というか崩落してできた抜け道）に通じています。」

メリアたちは、居住区に閉じ込められているようですね。

ブラン（弟子）　：「…たすけたい」

スピール　：「同族とあつちや、余計見逃せません」

一般兵　：「ちなみに軟禁しているのは我らなので、女の子相手にどう接していけばいいのかわからないからとりあえず居住区に閉じ込めておろおろしてます」

ブラン（弟子）　：「…もうこれ斬っていい？」

ファイオーネ　：「メリアの隠れ里を軟禁ね。バリー派の鬼畜具合を考えると嫌な想像ばかり浮かぶんだけどさ…」。『アリス』つてもしかして襲名制？さつきアンデット同志がアリスちゃん顔間違えてたし。」

クラリス　：「アリスはずっと私です…ここに来る前に声帯を弄られたせいで、寿命も引き延ばされたみたいでして」クラリスは声帯を弄られた結果短命種なのに寿命も無理やり伸ばされています。きっと魂に歪みが発生しているので、転生は無理でしょうね。

クラリス　：「このみんなは、そんな私を受け入れてくれた家族だから…」
助けたい」

ブラン（修羅）　：「人をいじくって自分のため利用するのは、許せないね」少し語
気に力がこもっている

スピール　：「食事とか、まともにとれてるかな……」

一般兵　：「毎日三食と10時15時におやつとお茶を魔導工場で生産して持って
いってます」

ブラン（修羅）　：待遇は悪くないみたいけど、軟禁は軟禁

といった感じでクラリスがフェローとして仲間に加わりました。効果は必中化された《レイクエム》を常に歌うというもの。特殊な声帯を持っているということで楽素の蓄積も無視して連打できます。今回の敵がアンデッドであることを考えると非常に心強い味方です。そして成仏した一般兵×3を後に、潜入の相談をするPCたちですが……

フィオーネ　：……アンデッド同志よ。いくら貴方たちが外道に落ちたとはいえ、同じアリスちゃんファンであることも事実……。ライブ前日に成仏するなど、無念で仕方ないでしょう。今年のアリスちゃんグッズを貴方たちの墓に添えることを約束しましょう……。」

クラリス　：（ドン引きしながら、気持ち悪いものを見る目でフィオーネを見てる）
ブラン（弟子）　：見ないようにそつと隠す

フィオーネ　：……仕事はちゃんとするから、汚物見るような目で見るのはやめて、クラリスちゃん？」

クラリス : 「理解しているのになんでするんですかね……」

ブラン(弟子) : 「フィオーネだから……」

フィオーネ : 「理解してても!!このクソデカ感情は!!止められない!!」

ブラン(修羅) : 「代わりに謝っておく。ごめん」

ブラン(弟子) : 「ごめん」

クラリス : 「私、今日初めてこの人に会ったんですけど何ですかねこれ?前世で悪いことしたんでしょうか……」

スピール : 「クラリスさん。忘れる、って言ったたら効く?」

クラリス : 「ものすごくやりたいけどしない、『これ』を自分の為には使いたくないから」と至極真つ当な返事です。

フィオーネ : 同志(アンデット)さんからの返事待ちです

一般兵 : 「同士よ……気持ちにはわからないでもないが、時と場合をわきまえよう……な?」

ポツクル : (紳士だ……)

一般兵 : 「それじゃあ我らこのまま成仏するから、一般兵はともかく精鋭兵と頭領に気を付けてな同志たち」

ブラン(弟子) : 「ちよつとそのはなしくわしく」

一般兵：「精鋭兵は2人、警備主任と近衛兵！あと頭領以外は一般兵だから頑張つてね！具体的には出会ってから魔物知識してね！」

フィオーネ：「さらば……一般兵。君たちの事は忘れない……」メタイ

同士たちが最期の会話をしている横でも、話は進んでいきます。

スピール：「クラリスさん、めっちゃやえらい。よく頑張ってきたね」頭なでてみる
 クラリス：「一瞬きよとんとした顔をしますけど、次の瞬間涙がぼろぼろ零れます。
 この20年間で初めてアイドル以外として褒められたんでしょう。」

スピール：「うえっ、えっと……よしよし」ナデリナデリ

スピール：「大変だったんだね、ここなら……スピールたちしかいないから……」

クラリス：「よし、泣くのはこれでおしまい」ひとしきり泣いた後、彼女は立ち上がり

クラリス：「みんなに会うときには、とびっきりの笑顔を見せてあげるんだから
 ！」と笑います。

フィオーネ：（は！ああすれば合法的にアリスちゃんの頭を撫でられるのか????）

ブラン（弟子）：いやフィオーネは近づけさせないよ

フィオーネ：知ってた

ブラン（修羅）：羽交い絞めの準備はできてるぞー

フィオーネ　：「うえへっへ、アリスちゃん、私も撫でで上げようか？」魔の手を伸ばそうとする

ブラン（弟子）　：フィオーネは腕要らないんだね…

フィオーネ　：待って、切ろうとしないで

ブラン（修羅）　：羽交い絞めしてくさむらの裏かどつかにつれてきます「ブラン、ちよつと口押さえるの手伝って」

フィオーネ　：必死の抵抗虚しく、草むらの裏に連行されます

ブラン（弟子）　：「ぼうけんしゃセツトにロープあるよ」

ブラン（修羅）　：「そういえばそうだった。ありがと」ふんじばっておく

クラリス　：　それでは、そんな弟子に近づいて

クラリス　：「がうがあ、があう（ありがとね、ブラン）」トリカント語でお礼を言います。

ブラン（弟子）　：「!？」

ブラン（弟子）　：「がおん、がうが！」（こちらこそ、ありがとう）

フィオーネ　：「むぐううううううううう」口縛られてしゃべれない

ブラン（修羅）　：「ごめんフィオーネ、もうちよつとだけ、ね？」

とそんな茶番もありつつ。メリアたちを助けに隠れ里に侵入するためには①崩れた

通路から倉庫に侵入する②バリー派閥の集落のお偉いさんの家に侵入して入り口のカギを獲得する の2通りの侵入パターンが提示されています。ここでフィオーネが何かを思い出したようで……

フィオーネ :「そういうえばスピールちゃんが神殿探索してた時に、謎の隠し通路が開いたんだっけ？」

スピール :「というか、サーリアが？」

フィオーネ :「ここら一体に巨大な地下空間があるとすれば、あの通路の先も地下のどこかに繋がっているかもしれないわね。クラリスちゃん、隠れ里が神殿に繋がってる話とか知らない？」

ポツクル :「フィオーネ急にどうしたの？頭でも打った？」

フィオーネ :「仕事の話になったから真面目になってるだけですう。」

スピール :「今までずっと仕事では？」

フィオーネ :「え？アイドル巡礼の旅じゃなかったっけ？」すつとぼけ

スピール :「フィオーネは村おこしの準備には参加してない……と……」メモメモ

クラリス :「確かにあの隠れ里は神殿の地下に位置しますが……そう言った話を私は聞いたことなくて。そもそも、流れてこちらにきた私では里の中身をすべて把握できていません。おそらく……長くらしいか把握は出来てないかと」

ブラン（修羅）：「つまり神殿の道を知るにもまずは長の救出が先、と」

クラリス：「ひよつとしたら、その神殿の通路が通じている可能性もあるかもしれませんが……時間が限られている以上どうなるかわかりません」

フィオーネ：「そうだね、闇雲に神殿隠し通路進んで、もしもはずれだったらクラリスちゃんの仲間が危ないわけだし。」

クラリス：「だけど、私はあなたたちに託しました。ですから方法はお任せします、私の知る限りの知識でしたらお役に立ててください」

GM：「ちなみに現状の二つの方法のメリットデメリットですが、倉庫から侵入する場合は今すぐいけます、しかしほぼ確実に気づかれる。入り口から入る場合は、気づかれずに侵入できるかもしれません。しかし鍵を取りに行く時間がかかるため敵の戦力が増える可能性があります。あと万が一バリーの方に鍵取りに行く最中に見つかったら官憲呼ばれます。」

スピール：「バリーに行つて見つかるリスクが結構高いんだよね」

ブラン（弟子）：「ポックル、みつからないじしんある？」

ポックル：「今日は、ない」出目、ひどい

フィオーネ：「なら実質選択肢はひとつかな？倉庫からの侵入しかなさそうだね。」

ブラン（修羅）：「気づかれるにしても時間がかかるにしてもどっちにしる敵の戦力

が増えるかもだったら、倉庫の方がよさそうだね」

○ミドル戦闘② —潜入！メリアの隠れ里！そして—

というところで倉庫からの侵入を試みるPCたち一行。PC全員の隠密判定の達成値の合計が60以上で敵に気づかれない、という判定に合計値61で少しヒヤリとしながらも無事潜入に成功します。

クラリス：「ここから左の通路に行けば食料や飲み水を生産している魔動工場に、まっすぐ行けばご神木のある広場に出ます。おそらく盗賊団は広場で警備をしていると思います。……工場の方は『むやみに入ってはならない』と長に言われています」

ブラン（弟子）：「……そろそろへんぼうするね」クラリスとスピールを見ながら

GM：「あと、ここにもいろいろなものが置かれていますのでなにか使えるものがあるかもしれません」具体的に言えば皆さんにはこの倉庫内を探索する権利を与えましょう。ただし、探索と同時に隠密もしていただきます。目標値17の隠密に失敗した場合盗賊団が気づきます。

ここは隠密に長けたブラン（弟子）に《サイレントムーブ》をかけ一人で探索をすることに。探索の目目は18、隠密では6ゾロを出し本職としての風格を見せつけます。見つかったのは光のアミュレット（アンデッドへの回避と抵抗にボーナスがつく装飾

品)。これはいったんブラン（弟子）が装備することになったところで、イベントが発生します。

GM : さて、それではここで聞き耳をするまでもなく声が聞こえてきます。

一般兵 A : 「……ふう、今日の訓練も過酷だったぜ」

一般兵 B : 「ああ、なんて言ってもあしたがライブ本番だからな」

一般兵 A : 「もはや表の世界には出られない身であっても、変装してライブを堪能する……それくらいの権利は神様も許してくれるさ！」

一般兵 B : 「しかし、今日外回りのやつらまだ帰ってきていないよな？何かあったんだらうか」

一般兵 A : 「うむ、なにやらここ最近こちら一帯を嗅ぎまわっている冒険者たちがいるらしいが」

一般兵 B : 「ハハハ、まさかここには来ないで！」という、一仕事終わってさっぱりした顔つきの一一般兵たちが広場から倉庫に来る音が聞こえます。

ファイオーネ : 「一般兵が倉庫に近づいてるみたいだけどどうする？相手にこちらの位置ばれてないみたいだし不意打ちで倒す？」

ブラン（修羅） : 「気づかれたら叫ばれたりしない？」

ファイオーネ : 「10秒で倒しきれるかどうかなだね。」

ポツクル : (後々挟まれたりする危険は排除しておきたい)

ファイオーネ : (私のサウンドポケットが成功すれば3分間相手はいっさいの音が出せなくなるけど)

スピール : (そもそもここにエクソシズム)

ファイオーネ : (さすがスピールちゃん。それならまずスピールちゃんにエクソシズム打ってもらって、万が一打ち漏らしたらサウンドポケット打ってから無力化すればいいか。)

ブラン(弟子) : 不意打ちできそうな位置に移動しようとしてる

GM : そうこうしているうちに声が追加されます。

精鋭兵B : 「はっはっは、まあライブ前に火照った体を夜風で冷ましているかもしれん。今日くらいは頭領も多めに見てくれるであろう。それよりも、お前たち気を付けておいた方がいいぞ」

精鋭兵B : 「なにやら、先ほど集落から頭領に連絡が来たようだ……なにが起こったかは知らんが最悪の展開にはならないようにしなければな」と、違うデータの敵も出てきます。

相談の結果この敵はここで不意打ちして落とすとという結論になりました。代表者であるブラン(弟子)による不意打ち判定も成功し、PCたちの先攻、かつ敵陣営に—

2のペナルティが入った状態で戦闘開始です！

まずは精鋭兵Bの魔物知識判定から。これは無事成功し、データが明らかになったのですが……？

[https://yutorize.21d.jp/ytsheet/sw2.5/
?id=rQFK9K](https://yutorize.21d.jp/ytsheet/sw2.5/?id=rQFK9K)

精鋭兵B : 「……………ほう？」(ポツクルを見る)

精鋭兵B : 「……………うん、イケる」

ブラン(修羅) : いける、じゃないが

フィオーネ : 《女の子として扱えば男の子も女の子になるんだよ》

ポツクル : (ゾワワ!) 完全に今回の被害者枠

スピール : (ある意味見る目がある)

精鋭兵B : 「キミ、メイド服とか興味ない？」

ポツクル : 「ないっ!!!」

・1ラウンド目

PCたちの作戦は、不意打ちとクラリスの《レクイエム》で抵抗が下がっているうちに前線にいる一般兵×3を《イクソシズム》で消滅、後衛の精鋭Bは《サウンドポケット》で救援を呼ばなくして叩く、というものです。そのためにまずはクラリスの《レク

イエム》からスタートです。

クラリス : 「この姿で歌うのには、慣れていないけど……それは別問題。そもそもあなたたちに、私の歌を聞く価値はない」(レクイエムを発動)

フィオーネ : 「なんとという麗しい声、ひれ伏さずにはいられない!!」 ひれ伏します

一般兵 : 「な、なんだこのプレッシャーは……いや、これは違う!別の何かだ!」

精鋭兵B : 「おお……思わず膝をついてしまったではないか!?なんと
う……アイドル力よ!」

ブラン(弟子) : フィオーネはアンデッドだった?

フィオーネ : むしろひれ伏さないうですか、皆さん??????

ブラン(修羅) : 「フィオーネ、戦闘中はふざけない!」引つ張り起こす。ここでひれ

伏す場合歌を聞くべきではない『あなたたち』にフィオーネも含まれるのでは??

フィオーネ : 「あく、ごめんごめん。」アンデッドではない為、普通に立ち上がる。アンデッドではない為!

ということとで膝をついた一般兵たちにスピールが3倍拡大《イクソシズム》。無事抵抗を抜き一般兵3体は成仏します。続くポックルは《重力制御》込みの《クリティカル・バレット》。クリティカルはしないものの安定した出目で23点のダメージを入れま

す。(精鋭兵B : 「フフフ……痛いねえ、これはわからせてやらないと……」
 ポツクル : (ゾワワワワ!!) 精鋭兵B : さあ次の行動を決めるのだ、私はそれ
 でじつくりと鑑賞させてもらうよ(舌なめずり))

ブラン×2の前衛組は精鋭Bのいる後衛に全力移動。またサーリアとゆずのペ
 ト組は前線に移動の後精鋭Bに対して仲良く電撃。最後にフィオーネが《サ
 ウンドポ
 ケット》を精鋭Bに成功させ、《ダブルキャスト》分の《フレイムアロー》を抵抗され
 ながらも打ち込みPCたちの手番は終了です。

返すエネミーターンは精鋭Bが《ブリンク》を使いながらブランたちとゆず、サー
 リア全部位への5倍《エネルギージャベリン》。抵抗をピンゾロするブラン(弟子)を後
 目にブラン(修羅)が一人抵抗に成功しました。ダメージはゆずに1回転の29点(こ
 れでHP0に。一同「ゆ、ゆずーッ!?」)、サーリア胴体に2回転の42点とペット組
 に厳しい面を見せてつけていきました。

・2ラウンド目

まずはサーリアが《放電》で精鋭Bのブリンクを剥がすところから。続いてスピー
 ルが被弾している前衛組に《キュア・ハート》。回復をもらったダブルブラン組がそのま
 ま精鋭Bを殴ります。修羅の攻撃は外れ、弟子の攻撃は命中で相手は残り43点です。

ブラン(修羅) : 「ゆずのため、一発入れてやりたかった……」

ポツクル　「ゆずの恨みはオイラが晴らしてやるぜ！」あと私怨というか忌避感上乘せ

精鋭兵B　：「笑止、己を過信しすぎたな……磨けば光る可能性をもつメカクレの少女よ」

ブラン（修羅）　：「磨けば光るってなんか微妙に失礼なこと言われてる気がするんだけど……っていうか僕がアイドル??？」

フィオーネ　：「あの兵隊が言ってることは、あまり真剣に考えなくてもいいよ。……あれ、サウンドポケットかけてるはずなのにどうして会話出来るんだ??？」

精鋭兵B　：「然り、口数が少なく僕ッ娘。そして黄金の鉄の意志を持つ少女よ。属性盛るのめたいがいにいせえよと思わないではないが、いい感じでまとあつている」
フィオーネ　：「まさか、あのアンデット、直接脳内に語り掛けるの??？」

ブラン（修羅）　：「……やっぱこれ一秒でも早く倒さないとダメだ。みんな早くしよう」

精鋭兵B　：「それはそうと、早く私を撃つてくれないかなそこの少年」

ポツクル　：「そろそろいいっすか？」

精鋭兵B　：「どうぞ」胸元を少女革命ウ○ナの男性陣レベルで開く

相互フォローの耳飾りの力も借り命中23の弾丸が精鋭兵Bを襲いますが……

精鋭兵B : (コロコロ) 26。回避 (☒☒☒)

ポツクル : 「よけるのかよ!!!」

精鋭兵B : 「弾丸に嫌われている」

ポツクル : 「うそつけ! 今ぜつたい直撃コースだったぞ! 明らかに躲しただろ!!」

精鋭兵B : 「私は悲しい」胸をはだけたままポーズをとる

続いてファイオーネが《ダブルキャスト》で《フレイムアロー》と《ファイアウインドカッター》(ペネトレイターで炎属性付与の《ウインドカッター》で弱点を突きながらダメージを与え、残り24点+欠片分としたところでPCたちの手番は終了です。

そして精鋭兵Bは《賢者フォーム》を宣言しPC5人+クラリス分でHPを5点削りながらMPを18点回復。更に次の手番まで全ての判定に+1のボーナスを得ます。

(精鋭兵B : 「.....ふう」ブラン(弟子) : 「がうう:」(きもちわるい)

ファイオーネ : 当然のように賢者フォームで、女性カウントされるポツクル)《ブリック》宣言後《ライトニング》でブラン(弟子)とサーリア両部位を攻撃します。抵抗も抜きそれぞれに20点弱のダメージを与えます。

・3ラウンド目

精鋭兵B : (獣の眼光)

ファイオーネ : クラリスちゃん、この手番であの変態落とすよ! サウンドポケット落と

すから、レクイエムお願い。」戦闘で興奮してて変態さが抜けてる

クラリス：「あっはい、あそこの盗賊団ですよ。……盗賊団だけですよね」（若干目を泳がせる）

フィオーネ：「……その発言はどういう意味？まさか私も含まれてないよね？……含まれてないよね??？」

クラリス：（汗をかき明後日の方を見ながら歌いだす、それでも歌詞や音程を間違えないのは流石にプロだった）

フィオーネ：「ちきしょう、クラリスちゃんに変態だと思われてる!!これも全部アンデット貴方のせいよ、潔く死になさい!!」

精鋭兵B：「人のせいにするのは良くない、まずは己から疑おう」

ということとで3ラウンド目開幕はフィオーネから。《レクイエム》の効果を入れるため《サウンドポケット》を解除し、《フレイムアロー》&《ファイアウィンドカタール》ダブルキャスト分の行使判定を6ゾロするという結構おいしい場面もありつつ相手のHPを欠片—17まで削ります。

精鋭兵B：「君の在り方はとても猛々しい……後ろからだど道を照らしてあげられるかもしれないが、隣だと隣人を焼かないよう気を付けることだ」要約すると『パッションは認めるけどまずは自制せいワレ』です。

フイオーネ　：「唐突にまともな事言うのやめてもらえますか？」

精鋭兵B　：「おっと、まだ賢者フォームが残っていたかな？」

続いてサーリアがブリンクを剥がし、ブラン（修羅）が攻撃。相手のHPは欠片分—24となります。いよいよ残りHPも少なくなってきた精鋭兵Bに、ポツクルが《クリティカル・バレット》で引導を渡しにいきます。

ポツクル　：（コロコロ） 出目3で17。かいさん

精鋭兵B　：（コロコロ） ピンゾロ。当たります

精鋭兵B　：（にやり、と微笑む）

ポツクル　：（コロコロ） 21点！

精鋭兵B　：「フフ……私のHPは残り1点。君の手で逝けて、私は満足だよポツクル君」 そう言いながら、彼？は天に召されました。

ポツクル　：「なんだこの……なに、オイラ勝ったの？負けたの？」

スピール　：「死者を吊った。それ以上のことはない。いいね？」

ポツクル　：「あっはい」

ブラン（修羅）　：「どっちでもいい。これで喋ることはないし」

フイオーネ　：「どうかさくつと暗殺するつもりが、だいぶ長引いちやったね。」

クラリス　：「ひとまずこの場は何とかなりました、おそらく敵の頭領は長の部屋に

いると思います」

ポツクル : 「先を急ごう……」

○ミドルシーン④ —隠れ里を探索しよう—

G M : あ、あとですね、精鋭兵Bを倒したら、鍵が落ちてきました。

クラリス : 「これは……多分居住区の鍵だと思います」

G M : というわけで、皆様の行き先候補は①工場②広場③居住区④長の部屋です。

ファイオーネ : 「居住区のカギが手に入ったなら、先にクラリスちゃんの家族の安全を確保しに行かない？ 村長さんと会話出来れば、隠し通路の存在の有無も確認できるし。」

ブラン（修羅） : 「居住区の人たちは数が多いだろうし、その人たちを警護しながら脱出させるのは難しそう。先に盗賊団たちを抑えておきたい」

ファイオーネ : 「そうだけど、居住区後回しにして、異常に気付いた敵に家族を人質に取られるのも嫌じゃない？」

ブラン（修羅） : 「クラリス、監視役が普段どこにいるかとか知らない？」

クラリス : 「居住区と広場、あと長の部屋です。基本的に、長には頭領が付きっ切りでした」

ブラン（修羅） : 「つまり長の部屋からだと思うんだけど、どうかな？ 頭領を叩けば統制も崩れるだろうし」

スピール : 「どうにせよ広場は経由しないといけないね」

ブラン（弟子） : 「がうが、がうがう」（頭がなければ動けない）

ファイオーネ : 「……頭領との戦闘中に裏で居住区のメリア達が襲われるのを恐れたんだけど、そのリスクをクラリスちゃんやんが飲み込むならそれでいいかな。」

ポツクル : 「工場……なんか気になるんだよなあ」

G M : つまりみんなが広間に進む間にポツクルだけ倉庫↓工場↓広場へとダツシユと？

ポツクル : 「みんな、先に広間に行つてくれ。オイラ工場を一目見てから行くよ」
 ファイオーネ : 「ポツクルはどうして非常時に単独行動したがるの？」

ポツクル : 「勘だ……オイラのことはいないものと思つて動いてくれてればいい……墓は全部終わつてから建ててくれ！気が済んだら広間通つて長の部屋行くよ！」と
 言つて工場に向かつていきます

G M : ということでまずはポツクル以外から。広間にはとても巨大な樹木が真ん中にある、とても神聖さを感じる場所です。そして、その広間のところに整然と並べられたハッピー・キンブレ・鉢巻き・リストバンド、そしてアリスちゃんTシャツ。明日の本番を前にして綺麗に洗濯され折りたたまれたそれは、さながら歴戦の風格を漂わせます。

フィオーネ :「……アリスちゃんグッズ……。」物欲しげな顔

クラリス : (無言でフィオーネを見ている)

フィオーネ :「……いやだめ、今は仕事……。」深呼吸

クラリス : 「仕事であっても無くても他人のモノは取らないでください」

フィオーネ :「取らないわよ、ちゃんとお金払うつもりだったわ。……じゃなくて、今は仕事だから自制しないとね。」

GM : 大樹はきつと、供物の様に並べられているグッズに困惑しているでしょう。

スピール : そつと大樹に祈りをささげる(この村の、彼らの平穏をとり戻すため、力をお貸しください……)

GM : 大樹的には自分も助けてもらいたいと思います。

ポツクル : w w w

GM : 以上、この場所でのイベントでした。続きまして、工場に単独スネーク中のポツクル君、どんな感じで潜入しますか？

ポツクル : 細心の注意を払って潜入します、開けた場所なら透明化も使う

GM : わかりました、それではポツクルは工場内のライフセンサーに発見されませんでした。魔動機が一斉に振り向き、ポツクルの方へ殺到しますね。

ポツクル : ライフセンサー万能!!

フイオーネ　：さよなら

スピール　：知ってた

ポツクル　：それはそうと、工場についての描写とかはありますか？

G M　：そうですね、まずはレーンの上を様々な素材が通って食料や日用品が定期生産されている感じですね。そして、奥の方に巨大な水槽があつてそこにも巨大な木の根っこ（広間の大樹の根っこ）がそこまで届いてます。謎な技術により、ご飯とか種とか日用品が生産されている超技術工場でしょうか。

ポツクル　：謎な技術、気になるんだけどなあw

G M　：それではちよいとマギテック+知力ボーナスで判定してみましようか。

ポツクル　：（コロコロ）　18

G M　：それでは「あ、自分のレベルじゃここの技術全く理解できないわ」と理解できました。

ポツクル　：でも魔動機文明の路線だな、とは思います？

G M　：そうですね。それも今伝わっている当時の一般人レベルのマギテックではなく、魔動機文明の中でも高度なレベルと推察できます。

ポツクル　：めっちゃめっちゃ気になる……

G M　：と、いったところでポツクル君の両腕を魔動機がにこやかに掴むんですけ

ど。

ポツクル : あ、ところで魔動機なんですけど ライフセンサーで見つかって警戒されるのはやむなしなんですが、透明化で魔動機そのものからの知覚は遮断できるはずなんで、いそいそ撤退はできますか？

GM : 安心してください。マイナス4程度の修正問題ないので……と言いはしましたけどね、ここでポツクル専用イベントが発生するんですよ。

ブラン(修羅) : ポツクルさんまた変なイベント踏んでる……

GM : 「侵入者ヲ排除ス……ノー、情報パターン照合……データニ該当アリ」魔動機がこんな感じの言葉を言います。

ポツクル : 「しゃべった……?」

GM : 「保護対象0056亜種ト断定、直チニ処置ヲ行イマス。チクツトシマスヨー?」と注射が伸びてきます。

ポツクル : 「まてまてー……!!!注射はいーやーだー……!!!」

GM : 「コワクナイ、コワクナイ、コレタダノ栄養剤、アヤシクナイ」

GM : 「ハイイ、ガマンデキタネーヨイコダツタネー」と注射の後魔動機アームで頭をよしよしされます。

ポツクル : 直ちに生命に影響はありますか？

G M : MPが全快しました。

ポツクル : 「あれ、なんだろう、心なしか身体が軽い!!!」

G M : 「イイコイイコー、アメチャンモアゲヨウネー」ってなんか飴ももらえます。ちなみに「不確定名：アメチャン」ですけど明らかにマナを感じます。

G M : 「アトコレモアゲチャウネー、ジャジャーン！『管理者権限I』!!」と言いながら掌にハンコを押してくれます。

ポツクル : 「イチ!!!」

G M : 「イエス、イチー」そんな感じで、魔動機たちは手を振ってポツクルを見送ってくれます。どうやらここから外には出れないようプログラムされている模様。

ポツクル : 「よっしゃ、元氣百倍!!待ってるよみんなー!!!」飴は手に持つておきますということ元氣になったポツクルと残りの面々が合流です。

スピール : 「いつも通り戻ってきたけど、なんか元氣になった?」

ポツクル : 「おう、この通りだぜ!!!」

ブラン(弟子) : 「がう?」(なんで?)

ブラン(修羅) : 「もしかして見つかったとか?」

ポツクル : 「この魔動機、いいやつだな……」

スピール : 「やっぱり見つけたりはしたんだ」

ポツクル :「おう、おかげで元氣百倍だつぜ！」

ブラン（修羅） :「??おかげで??」

ブラン（弟子） :「がうがう？」（おかげで？）

フィオーネ :「何かされたの？」

ポツクル :「ちゆ、ちゆうしやとかあゝ」

ブラン（修羅） :「……ほんとに大丈夫？改造とかされてない??」

ポツクル :「ま、まあその話はいいんだ、ほら、進むぞ！あ、そうだ、こんな飴ももらったぜ」みせみせ

見識判定の結果、飴ちゃんは食べたらMPが1d6×1d6点回復するものだと分かりました。戦闘中は補助動作で食べられます。

フィオーネ :「このアメ舐めるとめっちゃMP回復するね。効果は個人差が大きいみたいだけど。」

スピール :「おいしいかもしれないしおいしくないかもしれない」

ポツクル :「どんな味すんだろ……」

フィオーネ :「スピールちゃんが持つてるのが無難かな。それともポツクルの物だし、やつぱポツクルが舐めたい？」

ポツクル :「いや、これはスピールにやるよ」

スピール : 「ポックルありがとー。やつぱり味が気になる……」

G M : ちなみに味に関しては「出目が高いとよりおいしく感じる」味です。どちらかといえばMPを回復させた結果脳が美味を感じるという逆説的な物なので。(一同:「デイストピアみしか感じない」)

ポックル : 「オイラが食べたならその場限りの味だけど、スピールなら、どんな味がしたか再現して、みんなにも食べさせてあげられるだろ?」

スピール : 「いやー再現は難しいかなあ。一回食べたものをちゃんと覚えてられるかは別の話っていうか?」

ポックル : 「だいじようぶ、スピールならできる!!」

○クライマックス — お前もアビス送りにしてやろうか—

G M : といった感じのところで、長の部屋から声が聞こえてきます。

女性の声 : 「や、やめてください! 何をされようがあなたたちに協力することはありません!」

男性の声 : 「ネタは上がっている、貴様らがこの奥の祭壇に何かを隠しているということとはな!」

G M : とか言った感じの尋問的なアレコレが聞こえてきました。皆さんはこのまま聞き耳を立ててもいいし突入準備をしてもいいです。

フィオーネ　：「クラリスちゃん、今の声に聞き覚えある〜?」

クラリス　：「あれは、長の声と……おそらく、盗賊団の幹部です。早く、助けないと!」

スピール　：「奥の祭壇?」

男性の声（以下精鋭兵W）　：「貴様らが隠していること、力づくでも吐いてもらおうぞ?……我は他のモノたちみたいに紳士ではいられないのだ」と、まだ見ぬ敵の幹部がメリアの長に対して詰め寄っていくところ、部屋の奥から、さらに違う声が聞こえてきます。

???　：「まあそう急くこともあるまい、我々は規律ある集団……あくまで紳士的に解決せねばなるまいて」

精鋭兵W　：「しかし頭領……ここに侵入者がやってくると連絡があったではないですか!」

それに対し、頭領と思わしき声はこう続けます。

???　：「それならばそれでよからう、来るものは拒まず……そして」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍　：「我らの邪魔をするものは、アビスへと散つてもらおうではないか」（ここで某シベリア送りの同志の立ち絵画像）

ブラン（修羅）　：名前が長すぎる、訴訟

フィオーネ　：やばいのが来たけど

スピール　　：ツイッターユーザー名

ポツクル　　：こいつあやべえ

ブラン（弟子）　：ええ

エネミーは前衛に一般兵が2体に精鋭兵W、後衛に頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍（以下文中での表記は頭領）の合計4体。魔物知識判定でWと頭領の性能は以下の通りだと判明しました。

精鋭兵W：https://yutorize.21d.jp/ytsheet/s
w2.5/?id||3GjfkH

頭領：https://yutorize.21d.jp/ytsheet/sw2.
5/?id||Zxp64Q

続く先制判定でもポツクルがピンゾを振るもののブラン（弟子）がしっかりと先制を確保。戦闘開始です！

・1ラウンド目

まずはクラリスの《レクイエム》から。エネミーに―2のペナルティが入ります。

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍　：「これは可愛らしいお嬢さん方だ、まさか君たちのようなモノをアビス送りにしなければいけないとは……。」と言い

ながら、クラリスを見て何かに気が付いた顔をして

頭領@アリスたんズツ推しすこすこす侍 : 「……ツ!? いやよそう、今日はまだその時ではない……」と自身を制します。

ブラン(弟子) : 「なんかまともに見えてきた、なんでだ

頭領@アリスたんズツ推しすこすこす侍 : オフの推しに迷惑をかけるなんて愚行ですからね

続いてスピールのブラン2人とポックル、サーリア両部位を対象にした5倍拡大《セイクリッド・ウエポン》。これは蛮族及びアンデッドにのみ有効な魔法なので精鋭兵Wにコピーされても怖くありません。そしてこの行使判定でスピールは3の出目を出したので頭領の《慟哭する壁際紳士》が発動します。

ファイオーネ : 「頭領@アリスたんズツ推しすこすこす侍さん……。私は君達が築き上げてくれたアリスチャンカワイヤッター! の文化を素晴らしいものと共感していたけど……さすがにアリスちゃんの仲間を幽閉するのは違うんじゃないかな?」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこす侍 : 「問題ない、これはビジネスだからね」

ファイオーネ : 「……ビジネスだなんて、そんな乾ききつた心でホントに心の底からアリスちゃんを愛でることができるの?」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「愛でる、か……そうか、君はまだそのレベルなんだね」

ファイオーネ : 「ナン……ダト……!?より深い深淵があるというのか!」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「私はただ、あるがままにアリスたんを見るだけ……そう、そこに何があるうと、起ころうとだ。そこにアリスたんがいる、それだけで私は良いのだ」

ファイオーネ : 「それでは、ただの観葉植物と何も変わらないではないか!?!」

ブラン(弟子) : 「なんか始まつてるけど」

ブラン(修羅) : 「なんすかねこれ」

スピール : 「観葉植物に失礼だぞ」

ファイオーネ : 「アリスちゃんに触れなくても、話しかけなくてもいいというのか?!!?そこに、アリスちゃんがいる……それだけで満足だということのか!」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「その是非を決めるのは我が心のみ。それは、他の誰に対しても同じこと……だが、目前にした行いに、心を痛めることはあるのだ」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「ああ、なんて悲しい光景なんだ……とね」ツ……つと一筋の涙が流れます。(コロコロ) HP 2点

減少です。

ブラン（弟子）　：それで喰らったの!?

フィオーネ　：「頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍……。」つられて涙ぐみます。

スピール　　：「なんなんですかこの人たち……」

ブラン（修羅）　：「ほんと、なんなんだろうね、これ」

ブラン（弟子）　：「がるう……」 困惑

精鋭兵W　　：「話はそこまで、ここは戦場也。かつてない強敵の出現に、我が腕も震えている……そう、そして……神は我らにも力を授けてくれたのだ!!」

精鋭兵W　　：「見よ！これが神が我に与えたもうた力だ……貴様らと同じく、輝く刃だ!」と、白く光り輝くサイリウム二刀流になりました。セイクリッド・ウエポン

スピール　　：「はぁ……」

フィオーネ　：「く、同志たちと分かり合えないなんて、こんなにも虚しいことはないよ……」

ブラン（修羅）　：「なんというか、これを見る僕たちが一番虚しい気がする……」

クラリス　　：「こんなんですけど一応敵なんで皆さんしっかりしてください」

フィオーネ　：「でも仕方ないね……。これもすべてクラリスちゃんのため!」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍　：　あ、さつきダメージ喰らったんで世界の汚染発生しますね。皆さん悲しみの波動に包まれてください。

ブラン（修羅）　：　汚染、解せないけど……

スピール　：　その悲しみを他人に押し付けなくてほしい

フィオーネ　：　フィオーネはちゃんと悲しんでますね。　皆の共感能力が低いのでは？

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍　：　じゃあ好きな対象を排除できるので、

フィオーネだけに世界の汚染使いますね。（コロコロ）フィオーネにだけ8点です。

ブラン（修羅）　：　いろんな意味でこれはかばえない

ポツクル　：　ありがとうフィオーネ、君を忘れない

スピールの後はフィオーネの《ファイアブラスト》&Wへの《ファイアボルト》。ブラ

ストの分は出目が3と振るわず、瞬間達成値を使った一般兵たち含めて全員に抵抗されて

てしまいます。（フィオーネ　：「く、だめ!! やっぱ私には同志は焼けない!」ブラン

（修羅）　：「フィオーネ?」心なしか目が冷たい）フィオーネの出目への頭領の《慟哭

する壁際紳士》は3点入り、何もしていないのになぜか頭領のHPがモリモリ削れてい

く様子にPCたちは若干困惑気味です。

続いてポツクルは、前衛にいる一般兵×2とWに《シヨットガン・バレット》。全員に

命中させ次のラウンドには一般兵たちを落とせそうな雰囲気です。ブラン（弟子）は先

制判定でのポツクルのピンゾロ分の相互フォローでWへの命中を成功させ、1回転の34点。瞬間防衛点10点を吐かせます。更に追撃の《ファストアクション》。この命中は6ゾロで、頭領の《語彙力を失う》が発動します。ダメージも1回転の39点で前線の崩壊も秒読みです。

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍：「……………素晴らしい！」涙を拭いてもせずにスタンディングオベーション。

ブラン（弟子）：「がう！がるるるる！」（アンデッド滅ぼす！）

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍：「これが……………新しい地平線を切り拓く光……………!？」

ブラン（弟子）：「がお！」どや顔

サーリアは一般兵に《放電》でHPを削り、ブラン（修羅）は一般兵の《ローアングル探偵団》でポツクルが被弾することを警戒し後衛に位置したままポツクルに《かぼうII》とブラン（弟子）に《ファイア・ウェポン》でPCたちの手番は終了です。

長かったPCたちの手番も終わりエネミーターン。頭領は《語彙力を失う》で行動なし。（頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍：「……………素晴らしい」壁際で腕を組みながら無言で領きかみしめて行動終了）一般兵（1）はローアングルで後衛に飛びポツクルに攻撃するも、ブラン（修羅）にかばわれダメージはなし。

一般兵（1）：「ポツクル死ねえ！」

ブラン（修羅）：「させないよ」かばうで割込み

ブラン（修羅）：「つていうかなんでこいつポツクルの名前を……？」

ポツクル：「たしかに……？」

一般兵（1）：「さつき精鋭兵Bからグループ連絡で『新しい推し、あげないよ？』つてきました」画像付き（メイド服コラ）で

ポツクル：「……」

ブラン（修羅）：「うわあ……」なぜかポツクルを見て

一般兵（2）のローアングルの対象はブラン（弟子）。ブラン（弟子）は回避に成功し、そのまま《虚白》での反撃。命中で一般兵（2）の残りHPは15点になります。最後に精鋭兵Wですが……

精鋭兵W：「おお……光の他に、我に炎の力が！そして、相手もまた炎の力」

精鋭兵W：「その剣……業物とお見受けする」

ブラン（弟子）：「がう。がうがががうう」（ん。アンデッドのくせにみるめがある）

精鋭兵W：「ならば」と、今まで持っていたサイリウムを投げ捨て

精鋭兵W：キングブレードを二本抜き、その後自分の体を巻いていた包帯を使っ

て手に固定します。

精鋭兵W : 「《こちらも抜かねば不作法というもの》」

ブラン（弟子） : 「がうががう」（おもしろい）

精鋭兵W : ※全裸になったので防護点が0になってます、ゾンビでよかったね。

ブラン（弟子） : 「がう！」（こい！）

精鋭兵W : 「光と炎をたたえた（交互に白と赤に光る）我が攻撃、受けるがよい！」
（GM註：キンプレは操作方法に慣れれば、手に持って振りながら小指だけで色を変更できようになります）

Wはそのままブラン（弟子）に2連撃。1撃目は回避に成功し、弟子はそのまま《虚白》を宣言。回避、虚白の命中ともに出目3で頭領の感涙を誘います。しかしその後のダメージロールはピンゾロ。ダメージは出ないもののポツクルの相互フォロー分を確保します。

ブラン（弟子） : 「……」

精鋭兵W : 「……ここ、これは」刃が当たったところからアリスちゃんファンクラブの会員証（高級品）が落ちる。

ブラン（修羅） : 全裸に会員証……

精鋭兵W : ほら、我ゾンビなんで肌身離さず体に埋め込めるので

ブラン（弟子）：「がう……」（みごと）

Wの2撃目も無事弟子は避け、1ラウンド目は終了です。

・2ラウンド目

まずはスピールがフィオーネ、一般兵・精鋭兵Wへの拡大《キュア・ウーンズ》。一般兵2体はこれで落ちます。続いてサーリアが前線に移動しながら精鋭兵Wに体当たり。《こちららも抜かねば不作法というもの》で防護点0になっていたのもありWも倒れます。

精鋭兵W：「……わき腹を、やられたか。白き虎の剣士よ……一瞬とはいえ、貴様と相まみえたことは私の誇りだ」

ブラン（弟子）：「がうがう、がう」（なかなかのあいてだった）

精鋭兵W：「精進、しろよ」崩壊していききました。我、全裸になった以外はともまともだったと思います。

ブラン（弟子）：うん。アンデッドじゃなければいい競い相手になってくれそうだった
ポツクル：いや会員証身体から出てきてましたけど？

フィオーネ：キンブレ二刀流はまともではないかと

ブラン（弟子）：頭領とかフィオーネに比べるとね……。誤差でしょ。

フィオーネ：フィオーネ、もしかして全裸キンブレ二刀流で会員証体内内蔵より下に見られてる？まさかね

ブラン（弟子）　…え、うん

ブラン（修羅）　… お気づきになられましたか

ポツクル　… いまさら？

スピール　… 流石知力だけは高い

ブラン（修羅）　… 知力だけは高いで草生え散らかした

GM　… フィオーネ、敵ですらしなかった『オフの推しに絡む』という大罪を犯しているの。

残す敵は頭領のみ。まずはブラン（弟子）が敵後衛にいる頭領に突っ込み攻撃。31点のダメージを出しますが頭領は瞬間防御点10点を使いながらこれをしのぎ、残り73点十欠片。更にポツクルが指輪を割りながら『クリティカル・バレット』を当て2回転の51点を叩き込みます。

フィオーネは『フレイムアロー』と『ファイアウインドカッター』を抵抗されながらも『炎に弱い』込みでダメージを与えます。最後のブラン（修羅）は自軍後衛から敵軍後衛にまで全力移動をしてPC手番は終了です。

そしてようやく頭領が動きます。まずは『マルチアクション』からの自分に『ヘイスト』。回避が高いブラン（弟子）を避けブラン（修羅）の方に瞬間打撃込みで30点を入れるも、トレジャー効果の『追加攻撃』及びヘイストチェックには失敗し、終了です。

・3ラウンド目

敵のHPもかなり減ってきていることもあり、まずはブラン（修羅）の《ファイア・ウエポン》からのブレードキラーによる攻撃から。行使判定の出目で頭領を泣かせながら34点を入れます。続くフィオーネは前ラウンドと同様に《アロー》と《カッター》。これは両方抵抗され削り切るまではいきませんでした。

追撃のサーリアの《放電》を瞬間達成値で避けるも、その後のポツクルの4回転《レーザー・バレット》の前に頭領は倒れたのでした。戦闘終了です！

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「……………これまで、か」と言いながら、懐から書類を取り出します。

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「罪滅ぼしというわけではないが、ケジメはつけねばならない……………これを、私の方で調べ上げたバリー派閥の汚職に関する証拠書類だ」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「これで……………アリスたんは、もうアイドルにならなくて済むだろう」

フィオーネ : 「頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍さん……………。アリスちゃんがそこにいれればいいという境地に達した貴方は、アリスちゃんを思ってこんなものまで用意してたのですね……………。それがアリスちゃんという尊いアイドルが消える結果になる

うとも…。」

スピール : 「あ、終わりました?もう居住区行つていいですか?」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「一応、バリー派閥を糾弾して君たちの村おこしポイントにブーストをかけるお助けアイテムなんだから聞いて?」

フィオーネ : 「はい、聞きます」 正座

スピール : 「誰か代わりに聞いておいて」もう見たくない (本音) 早く仲間を助けたい (本音)

フィオーネ : 「私が看取るよ、一応神官だし。」

ブラン (弟子) : 「ん。スピールとクラリスはさきいつていいよ」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「えー、それではこれから説明しますのでまずはレジユメをご覧ください」以下メタを超越した会話が続きます。

ブラン (弟子) : 「はい」

ブラン (修羅) : 「これ、僕もないとダメ…?」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「どうやら、この隠れ里は神殿の地下に通じる秘密通路があるようで…どうやら最初の狙いはそれだったんですね。しかし、いくら探しても見つからないとイライラしていた時にアリスたんの有用性に気が付き今に至る…ぎっくり言えばそんな感じでした」

ポツクル : 「ぎっくりしてんなー」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「セッションの本筋ではないのでね、これくらいでよいでしょう」

ブラン（修羅） : 「セッションとは……？」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「これ以上は隠れ里の長に聞いてください、皆さんにでしたら話してくれるでしょう」と言いながら光に包まれ浄化されて行きます。

フィオーネ : 「頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍さん!!」

ポツクル : 「フルネームやめて!」

フィオーネ : 「頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍さん……消えてなくなるのですか……?」

頭領@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍 : 「同士、君にはこれを」と言つて『アリスたんズツ推しすこすこすこ侍』と書かれた鉢巻きと、アリスたん法被（新品）を渡します。

フィオーネ : 「@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍の名は私が継ぎます!」涙を流しながら鉢巻を巻き、法被に着替えます

フィオーネ : 「@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍は不滅です!……だから安心して

て成仏してくださいね?」

ブラン（修羅）：「もういい?行こうか」ひざまづいてるフィオーネをスルー

クラリス：「あ、みなさん長の部屋こっちです」無視

スピール：「早く行きましょう」

ブラン（弟子）：「ゴ—ゴ—」

フィオーネ：省略されたけど、フィオーネは画面外で漢泣きしてます

ポツクル：「フィオーネ@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍……」

スピール：「そういえば飴ちゃん舐めてます（コロコロ）1×6で6点。」

GM：「そこそこ美味しく感じました、実際にはどうか知りませんが少なくとも脳

はそう認識してます。」

スピール：「まったくもって検討がつかない味。食べたことない」

○エンディング — 予期せぬ来客、そして情報量—

GM：「ちなみに、長は皆さんを見た瞬間この質問をしてきます。」

GM：「工場には、入ったのか?」と

ポツクル：「オイラだけな!なんにも壊したりしてないぜ!」

GM：「それを聞くととても驚いたように「なんで死んでない!?!」と言われます。ど

うやら、あの工場はメリア以外が入るとひき肉にされて工場の外に廃棄されるレベルで

恐ろしいようです。

ポツクル : 「注射で死にかけたぞ……」

G M : 「遅効性で、体の内側から溶けたりとかないですよね？」と心配されます。

ポツクル : 「怖いこと言わないでくれよ」。あ、そういえば、管理者権限がどうか」

G M : 「管理者権限……、それはこれかな？」と長が手の甲を見せてくれます。そこには②と書かれている。ポツクルは①ですね。どうやら長の継承の時に、工場で注射してもらったとのこと。

ポツクル : 「これいきなりハンコ押されたんだけど、なんなんだ？」

G M : どうやら、この隠れ里……遺跡の中のシステムを解放する権限ですね。鍵の解錠とかもそれで出来ます。どうやら、長の部屋の奥の祭壇に行くには①の権限が、そしてその奥に行くには②が必要とのことです。

ポツクル : 「よし、せっかくだから祭壇まで行ってみよう！」

??? : 「ではここで未だ涙を流しながら、けれども背筋をピンとはった法破姿のフィオーネが帰ってきます」

ポツクル : 「フィオーネ……？」

クラリス : 「みなさん気を付けてください、とても嫌な予感と気配がします」

ブラン（弟子） …「がう…」

ブラン（修羅） …「クラリスは隠れてて」盾を構えて前に立つ

フィオーネ？ …「フィオーネ？いいえ、私は先ほど生まれ変わったわ。」

フィオーネ@アリスたんズツ推しすこすこす侍 …「頭領さんの熱き魂を受け継

いだ私は、フィオーネ@アリスたんズツ推しすこすこす侍だよ!!」

ブラン（弟子） …「さいだんいこー」

ポツクル …「おー」

スピール …（無言で《ディテクト・フェイス》）

スピール …「抵抗した！こいつニセモノだ！」

ブラン（修羅） …「フィオーネ、目覚まして」軽めに盾でどつく

頭領@アリスたんズツ推しすこすこす侍 …「推しを不必要に困らせるのはNG」

という声が響き、鉢巻きが孫悟空の緊箍呪のごとく締め付けます。

フィオーネ …「…は、私は一体何を？今は亡き頭領さんからありがたい言葉を頂いた

気がするけど…。」

そんなこんなで祭壇に到着した一同。そこは祭壇という名前ですが、いかにも魔動機文明然としたメカメカとした空間が広がっています。見識判定の結果、分かったことは

G M : P Cに対してわかりやすく説明するのは難しいですが、P Lに対してはこう説明すればわかるかと思います。戦艦の、管制室と居住区の一部が切り離されて存在している。多分、他の部分も何処かにあるでしょう。

ポツクル : なんかそれっぽいところにハンコ押された手をかざしてみたり

G M : 手をかざしたら、地図の一部が浮かび上がります。ほとんどはアンノウンですけど。

ポツクル : 「なんかでた」

フィオーネ : 「もつと巨大な施設のための管制室と思われるね。」

G M : 「自分たちは、ここを住処として提供してくれた方に報いるためにここを守護していた」と長は語ります。どうやら、この隠れ里に逃げ込むことで大破局をやり過ぎたメリアの末裔とのことでした。

フィオーネ : 「という事は、ここが本来何のための施設なのかも語り継がれてるの？」

G M : それに関しては失伝してますね、というか多分知らされていない。あと、ご神木に関してはこの隠れ里のエネルギーを供給してくれているユグドラシルの苗木だとか。

ポツクル : 祭壇の奥に行こうとするけど、やっぱりポツクルでは無理？

GM : 無理ですね、行きたがりますか？

ポツクル : 「行つてみたいな」長チラツ

GM : 変なことしないでくださいよ、との注釈付きで同行してもらえます。

祭壇の奥にはエネルギー供給が止まり、稼働していないテレポーターがありました。

ポツクル : 「長さん、これなにか知ってる？」

村長 : 「ここを与えてくれたお方が、これを使ってここに来たことがあつたようです」遠い過去なのでそう聞いたことがある程度ですね。

ポツクル : 「こんな感じの魔動機文明で知ってることとか、知つてそんな人知らない？」

ブラン（修羅） : 「レイに聞けばそういう人わかるかも。だけど、ここ大事な場所みたいだし教えていいの？」後半は村長に

村長 : 「あらかじめ、何を聞くのか教えていただければこちらで『NO』つて言います」

ポツクル : 「場所とかは伏せておくよ。ただ純粹に、この魔動機文明について、もう少し詳しく知れないか聞くだけだからさ」

GM : それくらいならいいでしょう、装置の様式とかは伝えて構わないとのことです。

ポツクル : 「だって気になるじゃん？」と言いながら自分の掌を見やる

ポツクル : 「でことで、ちよつとピアス借りるぜ！」

ブラン（修羅） : 「あつ」そのままとられる

ポツクル : 「もしもしレイさん？こんなこんなを見つけたんだけど、もつと詳しく知りたいー!!!」

レイ : 「……少しはな、考えてから連絡をしてくれないか？」今は夜です

レイ : 「相手が誰だろうと、今連絡をしていいかどうか位先に聞けこのボンクラ」

ポツクル : 「ごめんごめん。で、魔動機文明に詳しい人とか知らない？」

レイ : 「俺は詳しくないが、伯爵の知り合いに冒険者ギルドのお偉いさんがいるな。でもあの人はダメだ、多分動いてくれない」

ポツクル : 「なんでさ」

レイ : 「ものすごく暑がりだからだ」

ポツクル : 「……どゆこと？」

レイ : 「……お前らが、どこに向かう仕事しているかくらいこつちは把握してるんだよ。で、移動時間的にその付近で遺跡を発見したんだろう？」

ポツクル : 「あー、そういうことか！」

レイ : 「つてことはだ、その辺りで未踏の遺跡なんて神殿の奥関係か……」

それとも新発見かしかないんだよ……このことは俺と伯爵だけに出来るよう頼んでおく、もうちよつと詳しい内容調べてから戻ってこい」

ポツクル　：「レイさんありがとー!!!」

ここで隠れ里の入口の方から、侵入者を告げる鳴子音が聞こえてきました。急いで広場に戻った面々の前にいた人物は――

ブラン（弟子）　：「てき!?!」

ポツクル　：「だれだ!?!」

アリア　　：「ごきげんよう、遅い時間に元気なことね」と、アリアがいます。

ブラン（弟子）　：「あれ? おかしのひと」

アリア　　：「盗賊団を倒せたのは良かったけど、その後全員で奥に引つ込むのはいただけないわね。ついさつきまで、入り口のあたりにバリーの私兵が来ていたんだから。」

アリア　　：「最悪、この向こうの子たちが人質になっていたかもしれないでしょ?」と居住区の扉を指さします。

スピール　：「抜け道がないかなと期待してましたが無かったです……」

ポツクル　：「助かったよアリア!」

アリア　　：「いい子ね、素直な子は好きよ」

ブラン（弟子）　：「……そのしへいはどうしたの?」

アリア　：「私兵？今頃外でおねむしてるかしら」

スピール　：「夜ですから」

ブラン（修羅）　：「なんとなくわかってたけど、腕は立つみたいだね」

フィオーネ　：「アリアさん助かりました。……ところで何故長の部屋に奥があるのかご存じのですか？」

アリア　　：「半分くらい予想してるでしょうけど、その先が私の家だからよ」

ポツクル　：「!!」

フィオーネ　：「ありや、そうでしたか。許可なく土足で上がりこんでごめんなさいね。」

アリア　　：「お礼を言っておくわ、ありがとう。ひと時の気まぐれだけど、助けた子たちの子孫を救ってくれて。これは、大きな借りが出来ちゃったかしら？」

スピール　　：「やりたいことをしただけなので」

アリア　　：「構わないわ、こちらが勝手に感謝するだけだから」

ポツクル　　：「え、待って、てことはアリアは……何歳になるんだ？」

アリア　　：「まあ、女性に年齢を聞くだなんていけない子ね」

フィオーネ　：「ポツクル君いけないんだ。」（フィオーネも聞いたことあり）

ポツクル　　：「あ、ごめん、つい……」

アリア : 「ま、教えてあげるわ」と言いながら、リボンをほどきます。そこには、小さな角。

ブラン(修羅) : 「僕と同じ……」

アリア : 「正確な年齢は、300を超えてから数えていないけど……古代魔法文明? あなたたちがそう呼んでいる時代から生きてるのよ? なかなかレアものじゃない?」

ファイオーネ : 「ということは大破局を経験したことがある世代なのね……。大変な時代を生き延びましたね……」

アリア : 「まあ、大破局とやらが起きる前にはもう引きこもっていたし」

ポツクル : 「魔法文明!? 魔動機文明じゃなくて?」

ファイオーネ : 「へ、魔動機文明の誤植かと思っただけ」

アリア : 「古代魔法ですよ、最低3000歳」

ブラン(修羅) : 「ヒエッ」

ファイオーネ : 「ここ以外にも引きこもれる場所があったということ?」

アリア : 「なんか途中でね、色々とめんどくさくなつたから引きこもれる場所研究して作つたの」

スピール : 「作つた……」

フィオーネ　：「す、すごいね〜。」

ポツクル　：「アリアすごいんだな、どうりで美味しいお菓子たくさん持つてるはずだ……」

アリア　：「それで、つい何十年か前に出てきたら世間様が変わっていたから旅行しているの」

フィオーネ　：「ちなみに引きこもる場所はどうかやって作ったのかしら〜？あと引きこもって何か研究でもしてたの〜？」

アリア　：「引きこもるための場所？異界に生活可能な空間を作ってそこにゲートを開くの。そうね、あなたたちにわかりやすいように言えば『奈落の魔域』を自作するつてところかしらね」

フィオーネ　：「……奈落の魔域を自作なんて、そんなことが可能なの？奈落の魔域は制御不能のいわば天災だと思っただけど。」

アリア　：「出来るわよ、ほら」と懐から短剣を出します。

アリア　：「これをそこら辺に刺せば、出来るわよ。まあ、使い切りだけどね」

フィオーネ　：「……アリアさん、それ誰かに販売とかしませんでしたか？」たしか、我々以前に短剣から生じた魔域に巻き込まれたよね？

アリア　：「まさか？そんなめんどくさいこと……ああ。そういえば何十年

か前、気まぐれで取った弟子がこの研究盗んで逃げたわね」

ブラン（修羅）：「もしかしてその弟子の名前って……」

アリア：「あら？あなたたちマレウスの知り合い？あの子今元気してるかしら？

居場所知ってたら教えてね？一発殴りに行くから」

ブラン（修羅）：「……元気にしてるよ……嫌ってほど……」

スピール：「殺しても死ななくらい元気そうに見えましたね」

ポツクル：「顔面に5回転ぶち込んでおきました」

アリア：「いろいろあつたのね」

ブラン（弟子）：「こつちもかりがある」

アリア：「……あなたたち、存外に面白そうな人生を歩んでるのね」と、
言いながらブラン（修羅）に近づいていきます。そして耳元で、他の人に聞こえない声
で

アリア：「ねえあなた、マレウスに何かされてるでしょ？……それも、
ても幼いころから」と、背中に指を這わせながら言います。

ブラン（修羅）：「……そうだとしたら？」同じく小声で

アリア：「……興味が湧いたわ、手を貸してあげる。それ、剥がしてあげ
ましようか？」

ブラン（修羅）：「……!!」明らかに驚く

アリア：「240万ガメル、それで私が剥がしてあげる……もしかして、あなた次第でそれを剥がせるかもしれない方法を教えてあげる」

ブラン（修羅）：「教えて……教えてほしい」小声ながらも渴望が見える

GM：それでは、皆さん前回レイの所持している「禍魂」という魔導心臓がありましたね。前回見識判定で見抜けなかった最後の効果がこちらです。

《魂の改竄》接触した対象に「パーフェクト・キャンセレーション」＋「レストレーション」と同じ効果を生じさせる。達成値は「任意の点数の二乗」とするが、「任意の点数」の生命力と「任意の点数の二乗」年の寿命が減少する。

GM：古代魔法文明製の修羅の刻印の場合、レイの生命力7点と、寿命49年を引き換えに剥がせます。

ブラン（修羅）：『レイの』か……

GM：頼んだらワンチャンあり得る人間性ってところが面白い。

アリア：「どう？あなた自身には何もなく素敵な余生が過ごせるわよ？」

ブラン（修羅）：「……レイに迷惑はかけられない。悪いけど自分でなんとかするよ。240万貯まったときには、よろしくお願いするかも」

フィオーネ：この話、我々は全く聞こえてない？

GM : 240万ガメルか、レイの寿命半分どころかでブランを救えるってことだけみんなに聞こえるように言いますよ。その原因は言いませんけど

アリア : 「そう、それじゃあ今はこれまでね」と言いながら、ブランの首筋に指を立てます。経絡秘孔を突くように。

アリア : 「これはサービス、不肖の弟子が歪んだ移植をしたお詫びよ」と言われると共に、ブランの体に激痛が走ります。

ブラン（修羅） : 「つつつつ!!!」珍しく顔をゆがめて蹲る

フィオーネ : 「ブランちゃん大丈夫!!」かけよる

ブラン（弟子） : 「…なにをしたの？」

アリア : 「フフ」と指先をひとなめして笑う

アリア : 「その子、感覚の一部変だったでしょ？幼いころに『ずれた』それを元に戻したわ」具体的には、味覚を正常にしてください。

ブラン（修羅） : ちよつとまって激辛……あ、痛みで話半分にしか聞けてないから味覚の一件はきいてないことにします。後のおたのしみ○

ポツクル : わーい!!!

スピール : 激辛ソースをいつも通りかけて悶えろ

GM : そう、それも見てみたい。

ブラン（弟子）：「？」

スピール：「あ！あの邪道ソース！」

アリア：「さ、それじゃああなたたちは本来の仕事に戻りなさいな。ここは持ち主の私がどうかしておくわ」

スピール：「そうですね。そろそろ夜明けも近いですし、表向きの依頼もちやんとやっておかないと」

ファイオーネ：「……ホントは奥のテレポーターの行先とか気になるけど、スピールちゃんの話の言う通り仕事先にやらないとね。」

アリア：「あとは……」とみんなを見渡し

アリア：「現在の限界に近い」サーリアを指さし

アリア：「本来のモノではない」グラビティ・アーマーを指さし

アリア：「酷使しすぎ、そろそろ折れるわよそれ」と師匠を指さします。それぞれ次回で強化を入れます。

ポツクル：「たしかにこれ、自分で改造しちやっただから……」

スピール：「限界？限界なんてあるの？」

アリア：「ええ、それただのお付き用の雑用魔動機ですもの。戦闘に役立てるのならチューンしなさいと」

スピール：「父様はこれで十分だと思つてたのかな？ 戦闘用、つてのは気になるけどサーリアがもつと力を発揮できるならその方がいいかなあ」

アリア：「この際よ、後であなた達全員いっぺん面倒見てあげるわ」

ポツクル：「太っ腹ー!!」

スピール：「アリアさんと一緒にいれるなら心強いですね!」

ブラン（弟子）：「師匠…なおせる？」 不安そうな顔

アリア：「あなたは運がいいわね、私はその剣の『もともと』を知つてるわ」

ブラン（弟子）：「もともと？」

アリア：「ええ、それは元々古代魔法文明のとある王国に仕えた将軍が最期に使つ

ていた武器よ」

ブラン（弟子）：「…なおせるってこと？」

アリア：「その中にある魂ごとなんとかしてあげる、だから悲しそうな顔はしない

ことね」

ブラン（弟子）：「うん！ ありがとう…アリア!」

フィオーネ：「ところで、お父様から受け継いだこの杖も強化できたりしませんか？ 私

もよく出自はわかつてないのだけでも……。」

アリア：「出来るけど、あなたには他の方がいいかもね」

フィオーネ ……そうですね、お父様からの借り物なのに勝手に弄つてはいけな
すね……。失礼しました。」

アリア：「それじゃあ、まずは仕事をきちんと終えてきなさい。また後でナジュニ
アの案山子亭に行くから」

フィオーネ：「……ええ、またお会いしましょう。」

余談ですが、この時のフィオーネはクソダサTシャツの上にアリスたん親衛隊法被を
羽織り、そして「アリスたんズツ推しすこすこすこ侍」と書かれた鉢巻きをしサイリウ
ムを持った状態でアリアと会話をしていました。

それに対して何の言及もなしに会話を続けられるアリアに対し、一部の人間から畏怖
の視線が集まっていたとかなんとか。

その後、将来の安全性のためアリアが隠れ里へのアクセスをメリアの一族だけに設定
して今回の騒動は終結です。ちなみに、クラリスは今後隠れ里ではなくて案山子亭の住
み込みウエイトレスになるそうです。

そしてお待ちかねの報酬&剥ぎ取りタイム。ドロップ品の中にあつたアリスたん生
写真セット(2000G/赤金S)をフィオーネが嬉々として買い取つて所持品に加
えるなどの一幕があつたものの、無事配分は終わりました。また今回得たトレジャーポ
イントに関しては例外的に次回に引き継ぐことになりました。(GM:みんな、最大の

ドロップ表でガチャしたいよね？」そんなこんなで長かった第3話も終了、次回はパーティーを分割しての修行・強化回になります。お楽しみに！

『四通八達—アリア—』①

○前回のあらすじ

村おこしの依頼の裏面に書かれた助けを求める文章を目にし、バームルという村に向かった一行。フィオーネのドルオタ堕ちやキャラの濃い（婉曲表現）盗賊団との対決もありつつ、メリアの隠れ里を救うことに成功します。

そこに現れたのは3000年以上を生きるナイトメアのアリア。彼女は一行の装備の限界を指摘していった後、『とりあえず、一回あなたたち全員面倒見てあげるわ』と言ったのでした。

○トレーラー

○成長報告&オープニング —まさかあなたがいるなんて—

GM : そんなわけで、今回はパーティー分割セッションです。

フィオーネ : いえーい

ブラン（弟子） : はい

GM : 皆さん以外の三人は、ポツクルの故郷という名の遺跡に素材周回に行かされました。『必要素材、全部揃えるまで帰ってこれると思うなよ』と

フィオーネ : おそろしい

ブラン(弟子) : 頑張れ

GM : それでは前回の依頼を終えてナジュニアに戻ってきた一行ですが、帰ってきたら休憩をする間もなく拉致をされるので日数経過はありません。宿代もなし。

ブラン(弟子) : やったぜ

GM : そんなわけで、まずはブラン↓フィオーネの順で成長報告をお願いします。今回はブランって言うだけでいいのでなんか楽ですね

ブラン(弟子) : フェンサーが10に、スカウトが8になりました。あとは回避用の敏捷ボーナスが6になったのでだいぶ避けるよ。というところでフィオーネからお金を借りてブレードスカートを装備したところです。以上!

GM : ありがとうございます! それでは次フィオーネ!

フィオーネ : 技能成長はフェアリーテイマーが10に。ファイアストーム解禁!そしてレベラーのレストアヘルスマまでリーチ!!それと知力と精神がボーナス5に。前回の成長で知力5、精神1が伸びました。以上!

それぞれの詳しい能力値に関しては以下の通りです。

・ブラン（弟子）

・フィオーネ

GM : ありがとうございます、それではみなさんが案山子亭でマスターに報告やらを済ませたところでぼんぼん、と気配もなく肩を叩かれました。

ブラン（弟子） : 「？」振り返る

フィオーネ : 「ポツクルのいたずら？」振り返る

アリア : 「はあい、おまたせ」手をひらひらさせて

ブラン（弟子） : 「アリア！」

フィオーネ : 「来るのめっちゃ早くない？」

アリア : 「そんなのゲートでどうにでもなるわよ。さ、あなたたち2人は先に行くわよ。素材周回をさせる他の3人と違って準備もいらないでしょ？」

ブラン（弟子） : 「ばんたん！」

フィオーネ : 「あ、ちょっと待って、消耗品だけ購入させて？」前回セッション後の

「買い物済ませる感じで

G M : といった感じで最低限の準備だけして皆様はラボに拉致されました。

フィオーネ : 拉致られた

アリア : 「はいいらつしやい、ちよつと騒がしいかもしれないけど勘弁してね？」

(ルームの背景がSFチックなラボめいたもの変わる)

フィオーネ : 「おじやまします」 めっちゃ近代的

ブラン(弟子) : 「おじやまします」

と、2人がラボに入ってきたところで、奥の方から、ぱたぱたという足音と共に声がかかります。

ゼノ : 「おかえりなさい！おなかすいた〜!!」

ブラン(弟子) : なんと!?

フィオーネ : w w w w w w

魔導士マレウスに付き従っていた少年、ゼノは過去ブラン(弟子)に圧倒的な力の違いを見せつけながら勝利したこともあり、弟子にとつては少なからぬ因縁の相手となります。(2話ラスト参照)そんなゼノがなぜアリアのラボにいるのでしょうか？

ブラン(弟子) : 「!?」飛びのく

フィオーネ : 「あら?!」ブラン頑張つてね

ゼノ : 「……おきやくさん？」

ブラン(弟子) : 「グルルルル」 獣変貌して警戒心マックス

フィオーネ : 「アリアさんに招待されてきたものだよ。よろしくね。」

アリア : 「はい、落ち着きなさい。あとあなたは礼儀を覚えなさい」と言いながら、

ブランとゼノの首筋にチョップ。

ブラン(弟子) : 「がう」(いたい)

ゼノ : 「いたい」

ブラン(弟子) : はもるな

フィオーネ : いたい言うタイミング同時なの、仲良しかよ

アリア : 「……知り合い？」

フィオーネ : 「ちよつと前に殺し合いたばかりだね。」

ブラン(弟子) : 「がうがう」(殺されかけた)

アリア : 「そう？その程度なら問題ないわね」

フィオーネ : 「……アリアさん問題おありと思うのだけど？」

ゼノ : 「わあい、もふもふだー」ブランに飛びつく

ブラン(弟子) : 「がうつ!」逃げようとしてる。『もふもふだー』ではない

フィオーネ : 「とりあえず今は敵意はなさそうではよかつたけど。」

前回(2話)と同じく、特殊な歩法で追い詰められるブランをよそにアリアはフィオーネと会話をします。

アリア：「ふふ、もし面倒そうなことするのならそれ相応の報いを受けてもらうから放っておきましょう。……そうね、おやつ抜きとか」

アリアがそう言った瞬間、ゼノは(スン・……ツ)と真顔になつて正座します。

ゼノ：「それはこまる」

ブラン(弟子)：「まだちよつと離れて警戒してる。柱の後ろとか」

フィオーネ：「……一応報告しておきますけど、あの子、アリアさんが以前ぶつ飛ばしたいておっしゃってたお弟子さんと一緒にいましたよ?」

アリア：「あらそうなの?じゃあしばらくは一緒にいることにするわね。さて、それじゃあまずは何から始めようかしら」

といったところで、今回のセツシヨンの説明です。ブラン側とフィオーネ側それぞれで強化に関して「イベント」↓「ランダムイベント」という名の夜会話を繰り返して、このセツトをそれぞれ3周行います。ダイスの結果、1日目はフィオーネ、ブラン(弟子)の順番でシーンをを行うことになりました。

GM：このタイミングで、なにか質問とかがありますか? PLとしてでも PCとし

てもいいです。

ブラン（弟子）： アリアとゼノはリカント語分かりますか？

GM： アリアはもちろんわかります、ゼノは「??」です。多分獣変貌している間は人族としてではなくもふもふとして扱われます。

ブラン（弟子）： もふもふ…

ブラン（弟子）： あと、ゼノの種族はなんですか？

ゼノ： 人間だよー

ブラン（弟子）： 人間かー。そしてもしや年下？

GM： ぱつと見でもだいぶ小さいですよ、ヴィヴィほどではないけど。ちなみにヴィヴィは12歳です。

フィオーネ： ところで、でしちゃんはおそらくゼノくんと稽古する事になると思うのだけど、私は何を修行すればいいのかしら？

アリア： 「そうね、特に考えていなかったわ」

ブラン（弟子）： 「がうつ!?!」（ええっ?!）

アリア： 「だから、ひとまずあなたの出来ることと…．．．現状やらざるを得ない事、それから何をやりたいかを聞かせてもらうことになるかしら。そうね、お話を聞くのに時間かかりそうだし…．．．ちょうどいいわね」と、ゼノを見て

アリア：「ゼノ、ちょっとそのもふもふのお姉さんと一緒に遊んでおいてもらえる？ シミュレーターにデータは入れておくから」

ゼノ：「おっけー、よくわからないけどあそこの筒の中にはいいいなだよね！」

ブラン（弟子）：「がう？」なにやるのかわかってない

ゼノ：「こつちこつち、なんかしらないけど『しんたいそくてー』だって！」と引つ張つていこうとします。

ブラン（弟子）：「……」

ファイオーネ：「……」でしちゃんゼノ君と二人つきりみたいだけど頑張つてね、骨は拾つてあげるから。」

アリア：「とりあえず、その機械の中に入りなさい。教えるにしてもあなたの現状の能力知らないと出来ないから。それと、これはこつちで預かつておくわね……修理しないといけないから」と師匠がいつの間にか取られています。今回ブランは基本的にゼノと行動を共にしてもらいますね。

ブラン（弟子）：「がう！」機械には入ろうとする

ブラン（弟子）：「がるるる！ がう！」（師匠をおねがい！）ゼノからはなんとか距離を取りたい

ゼノ : 「よし！ボクも負けないぞー!!」と機械に入っていく。
 ブラン(弟子) : どうして…

○ミドルシーン① —ファイオーネのシリアスと弟子&ゼノの大運動会—

ということでもずはファイオーネ側のイベント「聞き込み」からです。前回(3話)ドルオタ成分でかなりはちやけたファイオーネは、今回でシリアス成分を取り戻したいのですが……？

アリア : ファイオーネは中庭(何故か自然豊か)でお茶会となります。

ブラン(弟子) : ファイオーネのシリアスだけど、弟子がファイオーネ見直すタイミングあるかな？今アリアと二人だけってことは見てないのでは？

ファイオーネ : たしかに、やはり帰ってこないシリアス

GM : 視聴者が見てればそれだけでマシだから

ブラン(弟子) : ところで今ファイオーネの格好は…

ファイオーネ : あ、さすがに@アリスたんズツ推しすこすこすこ侍なりきりセットは着てないです

GM : クソダサTだけは確定。あれは戦装束だから

ファイオーネ : ソウダスネ

ブラン(弟子) : それだけでまともに見えるのは何かが違う

アリア　：「えーっと、あなたが今できることはまあだいたいわかるからいいとして……最近起きたこと……というか、巻き込まれてそうなことあるでしょう？教えなさい」

フィオーネ　：「……まあ事情話さないと何も始まらなそうですね。これは今から二十年前の出来事の話、とはいってもアリアさんからしたらつい最近の出来事なのでしょうけど。」

フィオーネ　：「ともかく私が今冒険者をやっている理由に直結する出来事です。」

GM　：色々思ったんですけど、もうこのメンツは逃げてでもマレウスの方から追いかけてくるレベルで足を突っ込んでしまったなあって

ブラン（弟子）　：ばかな！マレウス関係してるのはブランとポツクルとブランだけはず！（過半数）

GM　：2話でポツクルがマレウス殺害（1回目）をしたおかげで、パーティー単位で認識されてしまった。あれが無かったら……あれが無かったらまだ羽虫扱いされる程度だったのが、駆除しなきゃいけない存在と認識されましたからね。

以下フィオーネの（珍しく）シリアスな身の上話です。そうです、ただのダメなおねーさんではないのです。

フィオーネ　：「私はもともとフナジエニア領内北東部の森の湖沿岸にある小さなエル

フ集落の出身でした。母はおらず家族は父一人でした。父は元の冒険者で、狭い集落が世界の全てだった私にとつて父の壮大な冒険譚を子守歌代わりに聞くのが好きでした。」

フィオーネ　：「自然と冒険者という職業に夢を抱いていました。今思えば世間知らずな女の子の浅はかな妄想でしたね。」

フィオーネ　：「20年前、私が成人を迎えた時に、集落の掟で単独で狩りに行く事になりました。村近郊にある狩場でゴブリンを退治する程度の簡単な狩だったのですが、冒険譚に夢を膨らませていた私は愚かにも誰も立ち入らない森深くに一人で入っていました。」

フィオーネ　：「私はそこで、得体のしれない何かに襲われて気絶してしまいます。一瞬の出来事でした、セージもスカウトもない当時の私では当然の帰結です。」

フィオーネ　：「結局私自身は、心配して探しに来てくれた父に救出されたのですが、その時に父はその何かに襲われたそう翌日から謎の病気に感染し急激に悪化、7日後には危篤状態に陥ってしまいました。」

フィオーネ　：「村中のあらゆる手段を用いて治療を試みましたが、病を治すに及ばず病状を遅らせるのに精一杯でした。」

フィオーネ　：「……私の浅慮な行動で父は未だに病床に伏しています。そこで私は初

めて自分のしでかしたことの重大さを知りました…… 以来私はお父様を治す術を探すために旅を続けています。」

フィオーネ　：「もう一度お父様に会うために、ちゃんとお父様に謝罪するために…… これが私のなすべきこと、なさねばならない事です。」

アリア　：「ふむふむ」と興味深そうにフィオーネの話を聞くアリア。ここで普通の人なら慰めの言葉でもかけるんでしょうけど、一線を越えているアリアからそんなものは出そうにないですね。

アリア　：「……あなたの父親が病床に伏したのは、その人が弱かったただけだとは思うけど」と、前置きを置いてから

フィオーネ　：「それは断じて違います、お父様は何も悪くない！そもそも私が森の中に入らなければ、入らなければ！」

アリア　：「でも、その『家族愛？』とやら……興味深くて嫌いじゃないわ」

アリア　：「うん、きつとあなたが思っていることは『正しくて、とてもきれい』なんでしょうね。久しぶりに、そんな気持ちにさせてもらったわ。ありがとう」と言ってから、お茶を勧めます。

フィオーネ　：「……すみません、少し興奮してしまいました……」お茶に手を付ける

アリア　：「それで、お父様を救うのがあなたのしなければいけない事ね」

フィオーネ　：「……そうですね、そのために妖精魔法を必死に学びました、薬品学も。」

アリア　：「力さえ身に着けたのなら、すぐにでも集落に戻りたいでしょう?」

フィオーネ　：「……力をつけたのなら今すぐにでも。」

アリア　：「残念ね、今あなたが帰るのなら……それを許さない相手がいるでしょう。きつとあの子のことだわ、とても愉快そうに集落に災厄を投げ込むでしょう」と微笑みを浮かべながら確信をもって言います。

フィオーネ　：「病の正体をご存じなのですか?」

アリア　：「それはまだ、でもあの子……マレウスならきつと『自分が気になった人間の顔を歪ませる』為に、知り合いへ嫌がらせをするのは躊躇しないでしょうね」

フィオーネ　：「……なるほど、つくづく我々はこのマレウスとかいう男に縁があるようですね。」

GM　：「諦めなさいな、そういう巡りもあるわ」

フィオーネ　：「アリアさん、次弟子を取る際は性格面も考慮することをお勧めしますよ。」マレウス絶対ぶつ殺すメンバー追加のお知らせ

アリア　：「フフ、ご忠告ありがとうございます。でもそうしたほうが効率がいいっての教えたの私なの、ごめんなさいね」

アリア　：「戦乱の世で青春時代を過ごしてるから、どうもその癖が抜けなくて……」ちよつと恥ずかしそう。古代魔法文明から魔動機文明への過渡期が青春時代だったので、思考が戦国時代なんですよ。

フィオーネ　：「今アリアさんは私たちの面倒をみてくださっています、マリウスの師として追及するつもりはないです。」

アリア　：「それで……あなたはこれからやらなくてはいけないことがいくつか出来そうよ。具体的には、マレウスの撃退でしょう」撃退？というか……迎撃かな？

フィオーネ　：「お父様を治したのに村を襲われたら、たまったものじゃないですからね。」

アリア　：「あなたのそのペネトレイターを、より活かせる方法があるんだけど」といったところで、フィオーネに対していくつか案を提示してくれます。

アリア　：「……欲を言えば、操霊術師ならよかつたけどあなたは妖精使いだから……こんなものがあるわ」と、補助動作で相手に弱点を新しく付与する妖精魔法の存在を教えてくださいます。

フィオーネ　：「それは……たしかにその魔法が使えれば戦略の幅が大いに広がりそうですね。」

アリア：「ええ、あるわよ。代償として、使役している妖精の存在消滅が必要だけど」一応教えてはくれますけど、多様したらそもそも妖精魔法が使えなくなります。

フィオーネ：「妖精の存在消滅……ですか??」

アリア：「ええ、召喚使役した妖精の命を代償にその属性が弱点になるよう相手の魂に刻み込むの」と魔法を教えてください。

▶▶「フェアリーリゼントメント」

ランク1／基本 消費MP：3 対象：1体 射程／形状：2（30m）／起点指定
時間：30秒（3R） 抵抗：短縮（抵抗で10秒／1Rに）

効果：使用前に属性を「炎／水・氷／土／風」のいずれか選択、対象に「弱点：（選択した属性）＋2」を与える。元々の弱点とは別個に計算し、また元々の弱点と同じ属性は与えられない。

※ただしこの魔法を使用した場合、周囲に存在する選択した属性の妖精1体が消滅する。

アリア：これに関してはただで教えてください、使用に関しては自己責任で。

フィオーネ：「これは……そうやすやすと使ってよい魔法ではないですね……。」別の方法おねがいますw

アリア：「そうね、使いすぎたらそれこそイフリートレベルが襲撃してくるわね。」

ま、それじゃあ他の方法を考えましょうか」と立ち上がる。

フィオーネ　：「こんな魔法多用しては当然妖精の怒りを買うことになるでしょうね。」

アリア　：「まあ、襲ってきたらそれはそれで力でねじ伏せて再契約させればいいんだけどね。まずは、あなたのお父さんの病状を詳しく調べてみましょう？そこから何か見えてくるかもしれないわ」と、次のイベントが「書庫での病状調査」となります。

フィオーネ　：「何から何まで、本当にありがとうございます、アリアさん……。」

とフィオーネサイドはこういった感じで、次はシミュレーター内のブランヘカメラを回します。機械の中に入ったブランは意識を失い気が付けば広い広場にいました。そしてそんな彼女に対してゼノが声をかけてきます。

ゼノ　：「やあやあようこそ！このしみゆれーたー？ではきみのしんたいのうりよくをけいそく？して……さい……てき、な？くん……？ほうほう？を、……きだすのにやくだて……ます！」本を片手に

ブラン（弟子）　：「がう？」首をかしげる

ゼノ　：「ねえねえ、これなんて読むの？」本には『このシミュレーターでは君の身体能力を計測して、最適な訓練方法を導き出すのに役立ってます』と交易共通語で書かれています。どうやら取扱説明書みたい。

ブラン（弟子） ……獣変貌から戻らないとダメか

ブラン（弟子） ……「ん。みせて」主動作で戻ります

ゼノ ……「……………ツ!?もふもふじゃ……………ない」

ゼノ ……「??」

ブラン（弟子） ……「このシミュレーターではきみのしんたいのうりよくをけいそくして、さいてきなくんれんほうをみちびきだすのにやくだてます、つてかいてある」

ゼノ ……「なるほど……………で、なにをするのおねーちゃん？」

ブラン（弟子） ……「しらない」

ゼノ ……しよんぼりしながら壁際に体育すわりします。

ブラン（弟子） ……「……………」えっこれどうすればいいのと困惑しています

困惑している二人の方の前に、色々な道具が出てきます。そして鳴り響く音声、どうやらそこにある道具を使って身体能力を計測……………砲丸投げとか短距離走とかそんな感じのものをを行うようです。

具体的には、冒険者レベル十各能力値ボーナスを基準値に判定をブランとゼノで行います。装備などは使用不可で目標値は20で、判定は長時間かかるので練技は使えません。

ブラン（弟子） ……「そっか、指輪はどうですか」

GM : よくよく考えたら、これ意識だけをデータ転送したものだから装備とか全部ないです。

ブラン(弟子) : たしかに

GM : なるほど、じゃあブランとゼノはデータとして用意された芋ジャージ姿にしましょう。いい案だ。

ブラン(弟子) : 「これをつかってはかるみたい」

ゼノ : 「なるほど！おねーちゃんすげーい！」きらきらした目で見る

ブラン(弟子) : 「…」なんか調子狂うなって思ってます

ゼノ : 玩具を与えられた子供の様にキヤツキヤしてます。

GM : それでは、何から判定しましょうか？もうキヤラシの上から順に器用度↓精神の順でやります？ここでゼノの素の能力値を公開していくのだ。

ブラン(弟子) : 獣変貌はありますか？

GM : 種族特徴はOKです

ブラン(弟子) : じゃあ始める前に主動作で。 獣変貌

GM : まずは器用度、風の抵抗を受けやすい槍での槍投げとかでしょうか？

ゼノ : (ココココ) 基礎値15の出自8で23

ブラン(弟子) : (ココココ) ピンゾロ…あの… これは判定ですか…？

GM : はい、ということでポツクルは相互フォローの耳飾りで最初の判定の出目10でいいよ。(メモ)

ゼノ : 「……うん、まあ……いいことさ、きつとあるよ」力ない言葉

ブラン(弟子) : 「……がう」めをそらす

GM : 気を取り直しまして次、敏捷なので短距離走や障害物競争ですかね。

ブラン(弟子) : 「がうがうがう！」(スピードなら負けない！)

ゼノ : (コロコロ) 基礎値13の出目3で 16

ブラン(弟子) : (コロコロ) 基礎値15の出目9で24

ゼノ : 「おーはやいはやい！」キヤツキヤ

ブラン(弟子) : 「ガオーン！」誇らしげ

ゼノ : 「今度背中に乗せてよもふねーちゃん」

ブラン(弟子) : 背中は人なのでは？

ゼノ : ブランの方が背が高そうなので

ブラン(弟子) : 「がう！」(いいよ！)

ゼノ : 「わあい！」なんて言ってるのかはわかってない、雰囲気のみ。

ブラン(弟子) : 手でグッドサインを作ってるんでしょう

G M : 次は筋力ボーナスですね、個人戦の砲丸投げにするかアームレスリングで対決するかどうかしますか？

ブラン（弟子） : さっき投げて失敗したし、腕相撲で

G M : それでは対決！

ブラン（弟子） : (コロコロ) 基礎値15の出目7で22

ゼノ : (コロコロ) 基礎値14の出目9で23

ブラン（弟子） : 「がるるるるるる」力をこめる

ゼノ : 「………にくきゅーじゃ………なあい！」という悲痛な叫びと共に腕を倒す！

ブラン（弟子） : 「がうつ!」負けてびっくりしてる。顔だけです…

ゼノ : 「うう………」と悔しそうにしている、肉球をぶにぶにしたかったよ
うだ。

ブラン（弟子） : そんなこと言われても…なぜかこっちもしょんぼりしてる

G M : しょんぼりしている中、次は生命力………即ち持久走となります。倒れるまで走ろう

ラン（弟子） : 「ががう、がう」（はしるのすき）

ゼノ : 「おいかけてっ？やるやる」瞬時に機嫌が直る

ゼノ : (コロコロ) 基礎値12の出目6で 18

ブラン(弟子) : (コロコロ) 基礎値13の出目8で21

ゼノ : 「(☒ω☒) スヤア・・・」途中で寝始めた。

ブラン(弟子) : 「がうがう！」楽しそうに走ってる

GM : 「対象者が寝だした為、システムは混乱している」

ブラン(弟子) : 「……がう！」自分が終わった後に起こす

GM : それでは続きまして、知力。反射神経でしょうか、光ったところをタツチするやつ。

ゼノ : (コロコロ) 基礎値13の出目5で 18

ブラン(弟子) : (コロコロ) 基礎値13の出目4で17

ブラン(弟子) : 「がう」

GM : 続きまして精神・・・精神？何をするの!?

ブラン(弟子) : しらんがな

GM : というわけで『精神注入棒』と書かれたダイナスト(威力90斧SS)を持ったゴーレムが現われて『ザ!!ゼンをせよ』と言います。

ブラン(弟子) : 「がうう？」いぶかしげな眼。大体フィオーネに向けてるやつ

フィオーネ : 風評被害

GM : ゴーレム泣きそう

フィオーネ : ちよつと待ってゴーレムにも嫌がられるの？

ゼノ : (ココココ) 基礎値13の出目9で22

ブラン(弟子) : (ココココ) 基礎値12の出目11で23

GM : 二人とも達成値20以上なのでゴーレムがダイナストでセツプクしました、コングラツチレーション！ちなみにこの6番勝負での目標値20以上はブランが4個にゼノが3個。ブランの勝利(なにか)です！

ブラン(弟子) : 「がう！」(かち！) 主動作で戻ります

ブラン(弟子) : 「…つかれた」

ゼノ : 「たのしかったー！またやろうねー！」

ブラン(弟子) : 「はしるやつとどうでもうならいいよ」

ゼノ : 「わーい」

GM : あ、ここでブランはフェンサー技能+知力ボーナスで判定お願いします。目標値は18で。

ブラン(弟子) : (ココココ) 6ゾロ。めっちゃ知ってる

GM : 確定ですね、同じ流派ではないですけどゼノの体捌きはブランが師匠から教わったモノに酷似している。おそらく源流が同じか派生流派かでしょう。

ブラン（弟子）：ほうほう

フィオーネ：やはりライバル枠

GM：といったところで、最初の日のイベント終了します。ここからはランダムイベント。お二人とも1d6を振ってください。

ブラン（弟子）：（コロコロ）5

フィオーネ：（コロコロ）4

GM：お二人ともゼノとイベントですね、一緒でもいいですよ？

ブラン（弟子）：流派とか聞きたいことあるけど一緒でもいいよ

フィオーネ：ああ、流派聞きたいはわかる、別々にしましょ

GM：場所は決めていいですよ、ダイスで決めようかと思っただけど私はもうお風

呂が怖い。

フィオーネ：またお風呂枠があるのですか????

GM：このラボには露天風呂もあるし岩盤浴も出来ますよ。

ブラン（弟子）：：シミュレーターとはいえ運動した後だから風呂には入るのでは？

GM：ゼノは見たまんまなので、体を洗う前に飛び込もうとして怒られる感じですね。他のキャラクターが居なかつたら警備ゴーレムあたりに。

ブラン（弟子）：まあ、風呂にしようか。武器ない方が安心するし……持つてこない

よね？

G M : あ、ゼノはそもそも今装備持ってません。最初にあつた時も芋ジャージのみ

ブラン(弟子) : そうなの？なら風呂上がりでお願いします

G M : それでは風呂上りのブランとゼノですね。ゼノは腰に手を当てるフルーツ牛乳を飲んでます。フルーツ牛乳、コーヒー牛乳、牛乳、乳酸菌飲料各種あります。

ブラン(弟子) : 「ぎゅうにゅうぎゅうにゅう」普通の牛乳で。白いし。牛乳を片手に同じく腰に手を当てる飲んでいきます

ゼノ : 「ぶはーっ、このいっぱいのためにいきてるうー」

ブラン(弟子) : 「…それはいいすぎ。でもきもちはわかる」

ゼノ : 「ここはごほんものもおいしいねっ！ボクこんなのはじめてだよ！」
ブラン(弟子) : 「？ここにずっといるんじゃないの？」

ゼノ : 「ちがうよ？なんにちかまえから」どうやら、マレウスとはぐれてお腹を空かせて倒れていたところを偶然通りがかったアリアに拾われたようです。

ブラン(弟子) : ぐうぜん…

ゼノ : 偶然(ゼノの主観)

ブラン(弟子) : 「そう。いいひと…たぶんいいひと…うんいいひとにひろわれたね

「？」

ゼノ：「うん！」この後のことを一切考えていないであろう返答。

ブラン（弟子）：ちよつと不安になった。マレウスのことみただけで、アリアが何かしそうな気もするし

ブラン（弟子）：「ところでゼノにききたいことがある」

ゼノ：「なあに？」

ブラン（弟子）：「ゼノはどうやってあのうごきをみにつけたの？」

ゼノ：「……うーん、どうしようかなあ……ほかにもないもふねー
ちゃんだから、教えてあげるんだよ？これひみつなんだかんね」と、ひそひそ話をするように

ブラン（弟子）：「こくりとうなずく」

ゼノ：「これはね、じつは『ひでんしよ』にかかれていたものなんだ」

ブラン（弟子）：「ひでんしよ？」

ゼノ：「うん」と言いながら、ぼろぼろですが不思議と破損していない本を取り出します。

ゼノ：「なんてかいてるかはわからないから、えをみておぼえたんだー」

ブラン（弟子）：「……なか、みてもいい？」

ゼノ : 「いいよ、でもひみつだからね！」

ブラン(弟子) : ふたたびうなずく

G M : ちなみに、中身は魔動機文明語で書かれています。

ブラン(弟子) : お、読める。ありがとうございます

G M : 『古代魔法文明時代の武術の不思議に迫る!』というタイトルです。

ブラン(弟子) : 「ごだいまほうぶんめい…」

G M : そして、ブランは気が付きます。本の中に書かれている文章、そして図解の数々の数々

G M : 『あ、これ月〇ムーとかと同じ感じのやつだ』ちなみに、図解とゼノが言っているのはだいたいマンガです。

ブラン(弟子) : そういふ気付き!?それでなんで身につくんだ…

ゼノ : 「?」純真な瞳

ブラン(弟子) : 「…ありがとう。さんこうになった」聞きたいことも聞いたし、湯冷めしそうなのでこの辺でおわってもいいですか

ゼノ : 「うん!」ひでんしよを大切そうにしまう。

次はフィオーネとゼノのイベントです。事前に用意されていたランダム表で場所を決定することになったのですが……

フィオーネ : (コロコロ) 5

G M : お風呂ではなかった

フィオーネ : ちきしよう

G M : 寝室ですね。

フィオーネ : おっとある意味お風呂よりだめでは????

G M : ゼノがフィオーネの寝室に来るか、それともフィオーネがゼノの寝室に来るか

ブラン(弟子) : 何かあるんだ:場合によってはゼノの味方をするぞ

フィオーネ : ダイスで決めますね。(コロコロ)ゼノ君から来てくれるそうです

G M : それではフィオーネの寝室です。時間的には真夜中位を想定しています
が、フィオーネはその時何をしていますか?

フィオーネ : たぶん病についての本を借りて読みふけてますね。

G M : それでは、急に扉のドアノブが音を立てます。ガチャガチャと音が鳴り

ゼノ : 「.....えいつ」バキッ 寝ぼけ眼のゼノが入ってきました。

フィオーネ : 「: : : :」ノックしてくださればドア開けますよ?」

ゼノ : 「.....うう、さむうい.....」ベッドへ向かう

フィオーネ : 「ゼノ君寝ぼけてる?」

ゼノ : 「んにい……ねえ、ぼけてるう？」 布団に潜り込む

ブラン(弟子) : 事案ですか？

フィオーネ : フィオーネからは何もしてないですよ??

ブラン(弟子) : 前科がね…

フィオーネ : どう……して……

ゼノ : 「おかまい、なくて？」 布団で芋虫の様になりながら手を振ってる

フィオーネ : 「……ちよつとゼノ君、ここ君の部屋じゃないよ？」 ペしぺしたたき
ますね。起きますか？ 起きませんよね

ゼノ : 叩かれたので起きます

フィオーネ : あ、起きるんだ

ゼノ : 「……?」 するつとゼノの手が蛇のように走り、フィオーネの首元に触れる瞬間に止まった。

ゼノ : 「あれ?……どこお」

フィオーネ : その動きに殺気は感じられましたか？

ゼノ : 感じませんでしたけど、ゼノの意識が戻るのが一瞬でも遅かったら死んでいた可能性が高いですね。

フィオーネ : 「ゼノ君、さつきも言ったけど、ここは君の部屋じゃないよ。」 怖いけ

ど

ゼノ : 「わ、ごめんなさいい」わたわたと布団を直しだす。

ゼノ : 「……よし！」満足げ、しかし布団は割とぐちゃぐちゃ。……

いや？そもそもファイオーネの部屋の布団だから既にぐちゃぐちゃでは？

ファイオーネ : 正解

ゼノ : 完璧な現状復帰

ファイオーネ : 「とりあえず起きてくれたようで何よりだよ。まだ眠いなら君の部屋まで連れていったほうがいい？」

ゼノ : 「ん、めがさめちやったからからだうごかしてくる」と言い立ち上がりませんが、何か聞くことありますか？

ファイオーネ : 「そっか。せっかくの機会だしちよつと質問してもいい？」

ゼノ : 「なあに？」床にぺたん、と座る。

ファイオーネ : 「うわ、ペタンと座ったのかわいいかよ？」(マレウスとはどういう関係なの？)

ファイオーネ : 「あれ、ちよつと間違えたかも」

GM : 残念項目が増えた

ファイオーネ : PLの魂が入った

G M : おかしいなあ、自分は今回フィオーネをシリアス側に戻すためにシナリオを構築したのに

ゼノ : 「？」意味が分からないので笑顔のまま

フィオーネ : 「純真無垢かよ、最高かよ」(ごめんごめん、気にしなくていいよ)

フィオーネ : 「……冗談は置いといて、マレウスとはどういう関係なの？どこで知り合ったの？」

ゼノ : 「センスはセンスだよ。ボクを、たすけてくれたひと」

フィオーネ : 「命の恩人ってことね。」(これ命の危機の元凶がそもそもマレウスだった可能性あり得るな、言わないけど)

フィオーネ : 「センスの事もつと教えて？どこに住んでるのとか。」

ゼノ : 「センスはね、さいきんずつといろんなところにいるんだ。もともとは『るざいあ？』ってところにいるらしいよ」

フィオーネ : 「るざいあってどこじやい？ 見識振れますか？」

G M : フィオーネならゾロ以外ですね。

フィオーネ : (コロコロ) 出目3。あぶねえけど

G M : ルザイアはですね、土地の名前ですね。というか、ミラージ共和連邦の領のひとつです。ナジュニアの北の方、別の領を挟んだところにあります。二軒隣りさ

んですね。

フィオーネ : 「そうなんだ、ありがとね。そろそろ夜も遅いし質問はここまでかな。ひきとめてごめんね、おやすみなさい。」

ゼノ : 「それじゃーね、へんなふくのおねーちゃんもおやすみ」

フィオーネ : 「へんなふくじゃねえし!!」

ゼノ : 「ねえし!」笑いながら走り去っていきます。

フィオーネ : 「……寝ますか……。」そういつてぐちやぐちやになった(元々ぐちやぐちやだった)ベッドの上に横になります。

といったところで、初日が終了しました。

○ミドルシーン② — 調べものとお勉強と—

修行組、二日目です。シーンの順番をダイスで決めた結果、一日目と同じくフィオーネ、ブラン(弟子)の順番でシーンを行うことになりました。

G M : フィオーネですね、今回のイベントは書庫での調査です。

フィオーネ : おk、シリアス取り戻すぞ

G M : 今回は、アリアがブランとゼノの方に行っているのでお手伝いゴーレムの淹れた紅茶と茶菓子片手に調べものしましょうか。文献調査の判定、病氣知識の判定、そして魔物知識判定をお願いします。

判定は文献判定で23、病気知識判定で22、魔物知識で25という結果でした。

G M : それでは父親の病気なんですけど、それらしき病気が見つかりません、フアングスに似ていると最初は思っていましたけど何か違う。

G M : そんなこんなしていると「魔神と他生命体との融合実験について」という文献を見つけました。蛮族のディアボロも蛮族と魔神の合成種族ですからね、そういう研究があるのは自明。

G M : そこに書かれていた「毒を保持した魔神を別種の毒を保持した生命体と掛け合わせた場合どうなるか?」という実験結果があります。そして、魔神に関する辞典を紐解いた結果、おそらく、魔神とフアングスの毒を合成したものではないか?と思います。

フィオーネ : 強力な毒を所持している生命体と毒を持つ魔神を合成することで、さらに洗練された毒物を生成する……、そんなことが可能なの?」

G M : さらに言えば、追加の記述がありますね。

『この時に毒と毒ではなく呪いと毒を合成することで、通常の解毒手段……例えばキュアポイズンやレストアヘルスでは解毒できない毒を生成できるのではないか?』と。そこからは『それが出来た場合、どうやって呪いを毒と誤認させるか』と研究が進みます。

フィオーネ : 「通常の毒なら治せる魔法でも、呪いと属性複合された毒を治すことは出来ない……。もしそれがお父様がかかった病なのだとしたら、なんて皮肉なのかしら……。」属性複合が得意な人が属性複合された毒に感染するの、あまりにも因果って感じ

GM : ちなみにその文献の著者、マレウスって言うんですけど。この研究結果を得た瞬間、マレウスノリノリだっただろうなあ

フィオーネ : 「ほんとしやくに触る男ですね……。」ぶっころ案件だけど

GM : と、今回のイベントはこんなところですかね。今までわからなかったことの糸口がつかめた、やったぜ。

一方のブラン(弟子)はというと……

GM : それでは、ブランとゼノは教室に用意された勉強机付属の椅子に座らされています。そして、黒板前に立つメガネをかけて教鞭を持ったアリア。

ブラン(弟子) : 「なにこころ」

アリア : 「教室、教師が生徒に物事を教えるための部屋よ」

ゼノ : 「つまりアリアがせんせーだ」

ブラン(弟子) : 「アリアせんせい」

アリア : 「よろしい、それでは授業を開始します」

ブラン(弟子) : 「おー」

アリア　：「今日の授業内容は、あなた達の使用している剣術についてよ」

ブラン（弟子）　：「剣術！」ワクワクしてる

アリア　：「それじゃあブラン、古代魔法文明って聞いたたら何を思い浮かべる？」

ブラン（弟子）　：「…まんが？」

アリア　：「あなたを二次元の存在にしてあげてもいいのよ？」アリアの指の中で金属の玉がゆっくりゆっくり平らにされていくのが見えます。

ブラン（弟子）　：びくっ！おびえています

アリア　：「それじゃあゼノ、古代魔法文明を聞いたら何を思い浮かべる？」

ゼノ　：「すごいまほー、つよい！」

アリア　：「…まほ…まほ、子供だとそんなものかしら。それじゃあブラン、そんな魔法が主力で至上主義な文明で武術は役に立つと思う？」

ブラン（弟子）　：「…ふいをつけば武術のほうがはやい」

アリア　：「それも正解。だって、そもそも私たちが作ったのは始まりの剣……つまりは武器よ。どんな時代でも、極めた武術はあらゆるものを薙ぎ払ったわ」

アリア　：「今日はそのうちのひとつ。古代魔法文明末期に滅びたとある国……国土の東西南北と中央を武力で支え、敵国を排除した5つの流派の一部についてお話ししましょうか。この間話したかしら、ブランの持っている剣は『古代魔法文明末期の将軍

が最期に所持していた武器だ』って」

ブラン（弟子）：「きいた」

アリア：「それがその5つの流派……『五帝剣』『五帝流』など言い方はあるけど、そのうちの一つの長『白帝』よ」

ブラン（弟子）：「はくてい……」

アリア：「どうもその將軍ね、死ぬまで戦った挙句『まだ戦いたい、この武を後世に伝えたい』って武器に魂が宿っちゃったよう。操靈術師がアンデッドになるような感じで、インテリジェンスソードになったみたい……バカって本当にバカなことするのね」

ブラン（弟子）：「じゃあそのしようくんが師匠？」

アリア：「それは本人に聞きなさい」と言つて、剣を返します。

ブラン（弟子）：「わかった」

アリア：「まだ必要素材が届いてないから、仮打だけどしばらくはそれで大丈夫なはずよ」

師匠：「と、言うわけでこれがニューな俺の姿だ！」と声が辺りに響きます。

ブラン（弟子）：「師匠！」抱きしめる

師匠：「心配させたな弟子、いや俺としたことが無理をしすぎちゃったようだ

ハツハツハ」

ブラン（弟子）：「ううん。ごめん、ごめんね師匠。たくさんむちゃして」

アリア：「気にすることはないわよ、ほとんどこのバカのせいなんだから。よく見なさい」と師匠の柄頭にある宝石を指さします。

ブラン（弟子）：「これは？」

師匠：「おう、このぶら下がってる宝石のおかげでこうしてお前と会話できるようになったぞ！」と師匠の声が響くと同時に、宝石がごくごくわずかに震えています。

ここで師匠の不調の原因の説明が入ります。

元々発音機能などが無かった師匠ですが、幼いブランに対してコンタクトを取って導かなければまずい。そう感じた彼は、無理やり自身の刀身を微振動させてテレパシーに転換していました。しかしそんなことを続けていては、刀身は歪み微細な傷が走ってしまいます。そんな無茶の結果師匠は折れかけていたのです。

アリア：「まあ結論として親バカが過ぎて死にかけたのよそのバカ師匠は、バカみたいでしょ？だから、発音が出来るようにその宝石をつなげておいたわ」なので、今度からは師匠は他のPCとも会話できます。

ブラン（弟子）：「ありがとうアリアせんせい！」

アリア：「それじゃあ、素材班が持つてきたらそのバカ鑄ちなおすから」

ブラン（弟子）：「師匠、アリアせんせいにすぐバカつていわれるね」久しぶりに師匠と話せてうれしがつてます

師匠：「言い返せる要素が無いな！ハツハツハ！」

アリア：「さ、それじゃああなたが修めるべき流派の業を鍛えに行くわよ」

ブラン（弟子）：「おー」

アリア：「今のあなた、流派としては歪んだ方向に進んでるから。」

ブラン（弟子）：「えっ、そうなの？」

アリア：「そうね。だって、あなたの攻撃手段は防御がおろそかになるもの。五帝が二、白帝の流派は決して相手に触れさせない体捌きが基本よ」具体的に言えば、必殺攻撃のリスクである回避マイナス修正が流派的にナンセンスであると。」

ブラン（弟子）：「へー…：そういうえば師匠はその、はくてい？なの？」

師匠：「昔はそんな呼ばれ方もしていたなあ。でも俺はそんな大それたものじゃねえよ、気に入った相手に自分の業を継がせたがるただの剣術バカで充分よ」

ブラン（弟子）：「そっか…：師匠は、これからわたしといっしょにいてくれる？」

師匠：「お？俺の弟子はもう嫌だつてか？」

ブラン（弟子）：「そんなことない！ただ、わたしのせいで師匠がおれそうになつたから…」

師匠：「いいんだよ、折れても。武器は、いつだって折れるかもしれないんだ」

師匠：「俺はな、自分がもし折れても残せるものがあるから、お前を『弟子』にしたんだよブラン」

ブラン（弟子）：「師匠……」

ブラン（弟子）：「ん。もういちどちかう。わたしは師匠がむねをはれるような剣士になる。だから師匠、これからもよろしくね！」

師匠：「こつちこそな。まあ任せろや、きつと俺がお前を3000年ぶりの『白帝』にしてやるさ」

ブラン（弟子）：「がう！」

アリア：「それじゃあ、あなたには白帝の剣術をひとつ教えてあげるわね」と言いながら、師匠を手に取り

アリア：「降霊術……操霊魔法の一種みたいなものだけど失礼」と、師匠を構えてそこから流派の情報を引き出して剣術の稽古をしてくれます。アリアが師匠を持って殴り掛かってくるから、渡された木の枝で何とかしようって言うものかと。

ブラン（弟子）：「ガオン!!」やる気に満ちた声

特訓の結果、ブラン（弟子）は新たな流派特技、《双刈（そうが）》を習得しました。

《双刈》

前提：必殺攻撃Ⅱ 適用：1回の近接攻撃 リスク：命中力―1

効果：必殺攻撃Ⅱの効果に合わせ、威力ロールを2回行い任意の結果を採用することが出来る。また、リスクが回避力―1ではなく命中力―1に変更されている。

演出：焦らず逸らず、確実に深手を負わせる攻撃。獣は己の爪牙を用いてよりの確に命を刈り取ると言う。

と、弟子が新たな技を習得する一方でゼノの方は退屈そうにちり紙で手裏剣を作って投げたりしていたのですが……

アリア：「あと、ゼノ……」

ゼノ：「??」

アリア：「どうやってそのマンガで流派特技の再現まで出来たのか理解不能なんだけど、面白そうだから私が覚えている限りの業を叩き込んであげるわ」と苦笑交じりに笑います。

ゼノ：「……このひでんしよは、わたさないかんね!」

と、弟子だけでなくゼノの方にも強化が入ったところで2日目の昼イベントは終了です。

続いて2日目の夜会話です。ダイスの結果、ブラン（弟子）がアリアと、フィオーネがゼノとで両方居間でのシーンとなりました。場所が同じということで4人でくつ

ろぐシーンということに。

ブラン（弟子）：「アリア：師匠よりきびしい」なんかめっちゃぐったりしてる

アリア：「死ななきやノーカンよ」

フィオーネ：「でしちゃんお疲れ様」

ブラン（弟子）：「ん。でもおかげでちよつとわかってきた」

アリア：「ま、言葉で言われるよりも実際に相手がいたほうがわかりやすいからね」

ゼノ：（お茶をひと啜りしてから顔をしかめ、砂糖をドバドバ入れてる）

フィオーネ：「練習相手になってもらってよかったわね。修行疲れたでしょ、今夜は

ぐっすり眠るといいわ。」気持ちちよつときれいなフィオーネ

ブラン（弟子）：「うん」いつもよりぼんやりしてる

アリア：「ああ、そう言えばブランにゼノ」

ブラン（弟子）：「なに？」

ゼノ：「はいな」

アリア：「あなたたち、明日フル装備で模擬戦するからそのつもりで。死んでも直してあげるから、殺すつもりでやりなさい」3日目の弟子のイベントはゼノとの一騎打ちです。

ブラン（弟子）：「…はつみみ」

フィオーネ：「……さらつと恐ろしいけど」

ブラン（弟子）：「ん。リベンジマッチ。がお」

ゼノ：「?つまりもふねーちゃんを殺せばいいの?」

ブラン（弟子）：「ちがう。わたしがゼノを斬る」

ゼノ：「よおし、がんばるよ!」

ブラン（弟子）：「がるるるるる」

アリア：「……この子、今までろくな環境じゃなかったんでしようね。読

み書きもろくにできないし」

フィオーネ：「マレウス、そもそも教える気がなかったのでしょうね。」

アリア：「とても興味深いわね、やはりアレに力を与えてよかったわ」腕組み

ブラン（弟子）：「よくない」

フィオーネ：「子供に基礎教養を教えないのが興味深い事ですか?」

アリア：「ちがうわね。どう考えても害悪にしかならない性格の人間に力を与え

たら、世間にもどの範囲で影響を与えるか……よ」

ブラン（弟子）：「かくしんはん……!」

アリア：「長く生きているとね、暇になって刺激が欲しくなるのよ」

ブラン（弟子）：「…：そうなの？」 師匠に聞く

師匠：「俺は剣を振れたらそれでいいバカだからなあ。あわよくば、って思ってた後継者も見つかったし。まあ、世間様がどうなろうと知ったことじゃないってのは同じ意見かな」

ブラン（弟子）：後継者のあたりで胸を張ってどやってる

アリア：「胸を張りたいのなら、真髓を早く会得することね」

ブラン（弟子）：「…：がんばる！」

アリア：「それで、フィオーネ」

フィオーネ：「なにかしら？」

アリア：「あなた、結局どれにするつもり？ 私が与えてあげられるのはひとつだけよ」

実はフィオーネには強化案としてアイテムか流派特技2つかの選択肢が事前に与えられていました。以下はそれぞれのデータです。

【魔神の書】

知名度：20 形状：この世の生物ではない存在の革で装丁された本

装備可能部位：右手・左手・盾 製作時期：古代魔法文明

概要：魔神についての詳細な知識が書かれた本

ランク：〈盾〉B 用法：1H 必要筋力：1 回避：+1 防護点：+1

《魔神知識》

装備者は「読文：魔神語」を取得し、魔神に分類される魔物知識判定の達成値を+2する。（注：魔神語には本来データの読文には読文が存在していませんが、例外的に習得するものとします）

《魔を狩る者》

装備者が魔神の弱点を看破した時、MPを「その魔神の魔物レベルの半分（端数切り上げ）」点消費しても良い。消費した場合、その魔物に追加で「弱点：自軍からのダメージ+2」を与える。

続いて候補その2の流派特技2つです。

① 《魔力凝固》 宣言特技

前提：《魔法収束》《魔法制御》 適用：直後の魔法行使1回 リスク：なし

効果：対象が「○エリア／○体」となっている魔法を対象1体として使用する。その際魔力を「+術者の器用度ボーナス」して行使判定及び威力ロールを行う。この特技を使用した魔法に《魔法拡大／数》を使用することはできない。

② 《ダブルアクション》 宣言特技

前提：《マルチアクション》 適用：直後の主動作1回 リスク：生命・精神抵抗-2

効果・直後の主動作で、魔法の行使を2回行う。ただし、この時に使用する魔法は別々のものでなくてはならず、またこの魔法行使2回の射程は半減（端数切り上げ）となり、《魔法制御》及び《魔法収束》は使用できない。

提示されたのは、対魔神特化の装備と強力な魔法特技。

さて、フィオーネはどちらを選ぶのでしょうか？

フィオーネ：「ずいぶん悩んだけど、私は魔神の書を頂くことにするわ。」

アリア：「そう、あなたの御父上の病に関しては現状では何とも言えないけど」

フィオーネ：「魔法ばんばん撃つのも面白そうだったけど、私の最終目標はお父様の完治で、その障害が魔神共なら、私は奴らを滅ぼすのみです。」

アリア：「実際の症状を目にした時に、魔神の書と照らし合わせたら何かわかるかもしれないわね」

フィオーネ：「何かから何までありますがどうございます、アリアさん。貴方が居なければ、私は自分の妖精魔法で父を治せないことを知り、絶望の淵に立たされるところでした……。……未だに治す手立てが確立してないのも事実ですけど。」

アリア：「論文に関しては読んだわ。真っ先に思い付く治癒の方法を試したら隠されていた症状が悪性化して急進行するのかなかなか面白いわね」と言いながら微笑む、心底楽しんでいる。

フィオーネ : ……ええ、趣味の悪さがにじみ出てますね、マレウスの「アリアさんも心底嬉しそうなあのやめていただきますか？」

ブラン（弟子） : 「おとうさん、びょうきなのか？」珍しいフィオーネのシリーズを回収しておこう

ゼノ : 「びょうき？ いっぱいたべてよくねたらいいよー！」

フィオーネ : うん、そういうえげでしちゃんには言っただけわね。私が冒険者やってるのは、危篤の父を助けるためなのよ。」

ブラン（弟子） : 「えっ!?」心底びっくり

フィオーネ : 「危篤っていうのは、そもそも食べる事すら出来ない寝たきりの状態だね、栄養が取れないから、元気に戻ることもできない状態なんだよゼノ君。」

ゼノ : 「へえ、間引きとかしないんだ」

フィオーネ : ……うん、大切な家族だからね。」（ゼノ君から間引きという単語が出て何かを察した。）

ブラン（弟子） : 「ブランがユニコーンのつのもつてたはず。それでもダメ？」

フィオーネ : 「ダメだったよ、20年前あらゆるマジックアイテム試したけど全部逆効果だった。」

アリア : 「まあ治す方法はいくつもあるでしょうけどね、実物を見ていないから推

測だけど、ユニコーンの角、試しに行かなくてよかったわね」おそらく『一時的に体力が戻るから余計苦痛を感じる』になるかと

ゼノ：「なんかたいへんだねえ。でも、びようきはボクもいやだなあ。切れないもん」ぶんぶん両手を振り回す。

フィオーネ：「そうね、病気はいやなものだよ。……アリアさんご馳走様、私はもう少し書庫で調べものしてみるわ。まだ、件の魔神について判明することがあるかもしれない」

アリア：「どうぞ気のすむまで、まあ最悪の方向には進まなくなつてよかったんじゃない？」

フィオーネ：「ええ、おかげさまで。この御恩は必ず後で返すわ。」食器を片付けてその場を去る。

ブラン（弟子）：「……あんなフィオーネはじめてみた」

アリア：「周りに気を使って、自分の中のため込むタイプなのかもしれないわよ」
ブラン（弟子）：「……………」過去を思い返す

アリア：「……………まあそのストレスが変な方に噴出してる……………のかしらねえ？」これにはアリアも首をかしげる

ブラン（弟子）：「ストレスたまつたのかな……あれも」ちよつと優しくしようと思つ

た弟子

ゼノ：「うくんむにやむにや……」ソファで寝てる

ブラン（弟子）：「：ゼノ、ちゃんとねて。ばんぜんでたたかおう」

ゼノ：「ふあゝい」自分の部屋に戻る

ブラン（弟子）：「わたしももうねる。おやすみアリアせんせい」

アリア：「ええ、よい夢を」

ゼノ：「おやすみなさゝい」

○ミドルシーン③ — 試せ！新戦力！—

ということとで3日目。この日が終わると平行して素材回収をしているポツクル、スピール、ブラン（修羅）組との合流です。今日のメインイベントは2日目に手に入れた《双刈》及び【魔神の書】のテストを兼ねた戦闘です。

まずはフィオーネから。アリアが気を利かせた結果、フィオーネと同じレベル帯の魔神のコア部位のみとの戦闘を行うことになりました。ダイスの結果決まった相手はマハティガ。コア部位のみということとで象の頭だけがぴちぴち跳ねているという若干シニールな光景が現れました。

魔神の書のポーナスもあり魔物知識判定は当然のごとく弱点まで看過&MPを消費しての弱点付与。が、フィオーネはスカウト技能を持っていないためエネミーの先攻か

ら。いざ、戦闘開始です！

・1ラウンド目

まずはエネミーが接敵からの《魔力撃》パンチ。ファイター技能も何もないファイオーネは避けられるはずもなく……が、肝心のダメージの出目がピンゾロ。優しさの(?) 26点ファイオーネに入ります。

続くファイオーネの反撃。弱点である断空属性を付与した《ファイアブレードストーム》から。魔導帯でHPを回復しながら出したダメージは1回転し、51点のダメージです。更に《ダブルキャスト》分の同じく断空属性を付与した《フレイムブレードアロー》。抵抗されませんが弱点ダメージだけでそもそも追加15点という凄まじさで、早くも相手は虫の息です。

・2ラウンド目

エネミーは普通に殴り物理18点からの追い打ちの《ゴッドフィスト》。流星に純後衛のファイオーネにこのダメージは堪え、残りHP8点まで削られますが……

ファイオーネは前ターンに引き続き《ファイアブレードストーム》。ほぼ死に体の相手に対し容赦のない1回転をきめ、象の頭は跡形もなく消し飛んだのでした。

GM : 勝者、ファイオーネ！

ファイオーネ : 恨みを込めて燃やしながら切り刻みました

ブラン（弟子）：「おく、フィオーネすごい」

アリア：「装備の特性をうまく使えているわね、良いことよ」

フィオーネ：「魔神”死すべし”慈悲はない……。」

ブラン（弟子）：（ちよつとこわい）

フィオーネ：「魔神の書を使った初めての戦闘だったけど、いいかんじに馴染んでよかつたわ。」

ゼノ：「あのお鼻の部分美味しそうだつたのに……。」と消し炭を見てる
 フィオーネ：「そんなゲテモノ食べてないで、もつと美味しいものアリアさんに作つてもらいなさい。」

アリア：「……今夜は、ステーキにでもするわ」

ゼノ：「にくー!」

ブラン（弟子）：「にくー!」

フィオーネ：「……敵に殴られるとめちやくちや痛いわね、いつも庇つてくれるブランちゃんに感謝しないと。」

フィオーネ：「私は少し休憩してくるね。でしちゃんファイト!」

ブラン（弟子）：「がう!」

ゼノ：「ふあいとー!」

ブラン（弟子）：「……ゼノ、わかってるのかな」

フィオーネ：「ふふ、ゼノ君もフアイト」

ということでゼノV s ブランです。戦いの前にフィオーネがゼノの魔物知識判定だけやっていい、という裁定が出ましたが弟子はこれを断ります。（ブラン（弟子）：

「いい。ひつようない」フィオーネもひとりで勝つたしね）またゼノの装備はグレートソード1本のみ。

ブラン（弟子）：「がう？」（そうびは？）

ゼノ：「?武器があれば充分だよ、素手でもいいけどちよつと痛いからね」あくまで自然体、そしてこの装備が当然のように振舞う（注：リカント語の同時通訳が入っています）

ブラン（弟子）：「がるるるる」なめられていると感じました。威嚇してる

ゼノ：「だって——装備が無くても、殺せなくちゃあね」と顔から表情が消えます。

ブラン（弟子）：「……」こちらも真剣になる

まずは先制判定から。判定値19を出したゼノの前に弟子は指輪を割って対抗。しかしゼノは更に《運命変転Ⅱ》を切って先攻をもぎ取ります。

・1ラウンド目

ゼノは様子見の通常攻撃。命中の出目が9と高かったですが弟子はこれをギリギリで回避。そのまま《虚白》を宣言し反撃の24点を叩き込みます。

ゼノ：「……………うわっ」攻撃を避けられ切られる

ブラン（弟子）：「G A O！」

ゼノ：「……………へえ？おもしろおい」口の端が吊り上がる。

ゼノ：「もふねーちゃん、やつぱり早いね……それなら、これはどうかな？」

とゼノは《ファストアクション》分の行動で以下の特技の使用を宣言します。2話の最後にブランを刺した技、相手の回避先へ剣筋を先に出す歩法です。

《無為式》命中判定値+3、対象は回避力ではなく危険感知で対決判定を行わなければいけない。ただし、この攻撃にはクリティカルは発生しない。

命中の出目が振るわず達成値は21でしたが、弟子の危険感知の基礎値もあり20で当たり、19点の被弾をしてしまいました。（ゼノ：「——五帝剣、青ノ一『無為式』……………らしいよ？」。ブラン（弟子）：「…GYAO」にやりと笑う）

一方の弟子は遠慮なくSカードを吐きながらの《パラライズ・ミス》。《双刈》を宣言しながら命中24で殴ります。ここでゼノに動きがあり—

ゼノ：（わあ、鋭い一撃だあ……これは多分『アレ』を使っても厳しいからこのまま体で受け止める方が得策）

ゼノ：「……なんて、楽しくないよね！こっちも新しい技だあ！」

と宣言特技《守斬（かみきり）》を宣言します。

《守斬》1ラウンドに1回、近接攻撃及び遠隔攻撃に対して命中を基準に回避が可能。ただし目標値を4以上上回らない限り、次の手番は宣言特技使用不可。

しかし達成値は1足りず。被弾の上次のラウンドは宣言特技の使用が不可能になってしまいます。《双刈》で2回振ったダメージは32点と28点。当然32点の方を採用し、ゼノのHPが19点となります。そしてここでイベントの発生です！

ゼノ：「ひゅう、危ない危ない。もう一歩ふみだしてたら、しんじやつてたよ！」と首筋の傷痕を撫でる

ゼノ：「でもこれで準備は出来たから……ここからが本気だよ？」

ブラン（弟子）：「GAO」（のぞむところ）

ゼノ：と、ゼノの体表面に走っている入れ墨のようなモノがゼノ自身の血液を吸って発光します。以降、ゼノの能力値ポーンナスが倍になったとして基準値を計算しなおします。あとあらゆるダメージを10点軽減も追加されています。

ブラン（弟子）：「……なんて？」

ゼノ：能力値ポーンナスが倍、器用度ポーンナスだと+10

ブラン（弟子）：「……はい……聞きたくなかった」

・2ラウンド目

そんな超強化されたゼノの攻撃から。《守斬》の効果でこのラウンドは宣言特技使えないので通常攻撃です。ゼノの命中は27。対するブランの回避は29。ブランはここから指輪を割って達成値を更に2伸ばし、ブレードスカートの効果を発動させます。スカートのダメージは22点。ここに更に《虚白》を宣言し、追加で25点。この怒涛のラッシュを前には流石のゼノとはいえど耐えることができず、倒れたのでした。戦闘終了です！

ブラン（弟子）：「がう」

ブラン（弟子）：「…つかれた」

アリア：「はいそこまで、ふたりともお疲れ様」

ゼノ：「うーん」気絶してたゼノも起き上り

ゼノ：「すごいやもふねーちゃん！何回もビュンビュンやってくるんだもん！」おめめキラキラしいだけ状態。

ブラン（弟子）：「ん。しゅぎょうのせいか」リベンジたつせい、と言いかけてたけどやめる

ゼノ：「…？…？」

ブラン（弟子）：「ゼノにまけてから、ゼノにかつたためにしゅぎょうした。これでい

まひきわけ。もういちど、おたがいもつとつよくなつてからまたたかおう」

ゼノ：「……………うん、そうだね！」腕組みをして考えていたけど考えるのを諦めた顔

ブラン（弟子）：伝わってるのかな…不安だけどまあ伝わってるだろう。握手を求めよ

ゼノ：にぎにぎ

ブラン（弟子）：「ん」

ゼノ：「……………やっぱりにくきゆうじゃない」

ブラン（弟子）：「……………それはあきらめて」

ゼノ：「よおし、ボクはもつと強くなるぞお！」

ブラン（弟子）：「わたしのほうがつよくなる！」

アリア：「若いっていいわねえ」と。そんな二人を見つつフィオーネに語り掛ける

アリア

フィオーネ：「ええ、そうね」

アリア：「私もまたどこかいい人見つけて、また子供でも設けようかしら」

フィオーネ：「……………え、アリアさん出産経験あるのですか??？」

アリア：「あら？これでも昔は引く手あまただったのよ？高給取りだったし」

フィオーネ　：「てつきりそういうものには興味ないかと」

アリア　：「まあ、一時期は『自分より強くなきゃダメ』って血みどろの時期を過ごしたけど……今となつては、ねえ」

フィオーネ　：「……昔、ですか……。もうご家族は……。」

アリア　：「3000年も前の人間の家系を探すとか、だいぶ無茶でしょう?」

フィオーネ　：「それもそうですね。」

アリア　：「あーあ、こんなことなら家系を探しやすいようにどこかの魔法王でも捕まえておくんだったわ……。ま、今は手のかかるあそこの子供たちの治療でもしましようか」と、ブランとゼノの方に向かう。

フィオーネ　：「……アリアさんは世間離れして通常の常識が通用しないサイコパスなところがありますけど、少なくとも子供は本当に好きなのですね。」と小声でつぶやいた後アリアさんについてく。

その後、アリアは鼻歌交じりでゼノとブランを治療（治るけど痛い方法で）するのでした。

ブラン（弟子）　：「いたい!」

ゼノ　：「ギニャーッ!」

というわけで3日目のメインイベントであった戦闘は終わり、残すのは夜会話という

名のロールプレイタイムのみです。ダイスの結果2人とも娯楽室でのシーン。アリアのラボの娯楽室とだけあって、ラクシアにも（きつと）存在するビリヤードやダーツといった遊びの他、シアタールームにカードゲームボードゲームすらあるというオーバーテクノロジーな充実っぷりです。

GM : ボウリング場もあるし、ボーリング場もありますよ。何に使うか知りませんが。

ブラン（弟子） : ボーリング場とは

GM : 地質とか地層を検査する場所でしょう。多分アリアに聞いたなら「ボウリング場の横にボーリング場があったら面白って酔った勢いで作った」って言われます。フィオーネ : 軽い気分転換に、と思つて娯楽室に来てみたけれど……。使用用途がいまいちわからないものが多いわね。」

アリア : 「遊ぶのは構わないけど、持ち出したら比喩表現でなく死ぬから気を付けてね」と後ろから声をかけます。

フィオーネ : 「いちいち恐ろしいですよ……。」

アリア : 「ただの防犯装置じゃない、大げさね」

フィオーネ : 「大丈夫ですよ、遊んだ玩具の片づけが出来ないほどお子様ではありませんから。」

アリア : 「そう、部屋の片づけは苦手なようだけど」

フィオーネ : 「……」 黙秘権を行使します。そんなことより遊びましょアリアさん、あの棒状の物が10本立っているあれはどうやって遊ぶのですか？魔法で薙ぎ払えばいいのですか？」

アリア : 「ああ、あれはそこにある球をレーンに投げてピンを倒すゲームよ。レーンに細工がされていて勝手に曲がるのを読みながら投げるの」

フィオーネ : 「まっすぐ投げればいいってもんじゃないのね、奥が深いわ。」

アリア : 「もともとは、戦争に負けた部族を縛り上げた柱を落石が起こる地点に放置して数日間放置してどれだけ生き残るかの賭けから始まったゲームらしいわよ」

フィオーネ : 「アリアさん、思想が戦闘民族。」

アリア : 「あいにく元軍人なんでね。なんならやって……あなたの筋力で持てるボールあつたかしら？」

フィオーネ : 「自慢じゃないけど、私魔神の書持つのもぎりぎりなぐらい非力よ。」 筋力3

アリア : 諦めた顔で、魔法で筋力を一時的に+12してくれました。

フィオーネ : 「わーい、力持ち〜」

GM : せっかくなんで判定してみましよう。投擲に使用出来る技能+(知力と器

用度ボーナスの平均)を基準値に+2d6で

ファイオーネ : 球をシュートアローできませんか?

アリア : 殴られてもいいのなら

ファイオーネ : だめですよ、はい。しません。投擲に使用出来る技能がないので、2d+4で。(コロコロ) 12。

GM : 8本倒れました

ブラン(弟子) : 「ファイオーネどこだろう。しよこにはいなかったし…ん。なんかきこえた」と外を歩いていますが、ピンを倒したら音に気付いて入るー

ブラン(弟子) : ガチャ「ファイオーネ?」

GM : 魔法によってムキムキ気分になったファイオーネが玉遊びしています。

ファイオーネ : 「ひゅく、この遊び爽快感あるわね〜!」

ブラン(弟子) : 「……」ボタン。わたしはストレスためないようにしようと思う弟子だった

アリア : 「ピンの頭部分にマレウスの画像でも貼り付ける?」

ファイオーネ : 「なに、今の私マレウス8人薙ぎ払ったことになるのかしら!」

アリア : 「さて、残機はあといくつでしょうね」

ファイオーネ : 「奴、100回殺してもしぶとく生きてそうよね〜。まだまだ球投げられるわ

よく。是非ともピンに写真付けてもらえるかしら〜！」さよならシリアス
 ブラン（弟子）：…とりこみちゆうみたいだからまたあとでこよう

そして、画像貼り付け（フィオーネの脳内にアクセスして投影する装置）を意図的に
 バグらせてボールが当たる瞬間ピンの画像がアリスになるといふ事故を挟みつつ

フィオーネ：じゃあ、フィオーネは「ひやつは〜！今のはいい球、マレウスの顔面に
 直撃するわね！」と言ったとたん事故は起こったと

その結果研究所内に響き渡るフィオーネのえげつない悲鳴

フィオーネ：「ヴああああああああああああああああああああああああああああ、ア
 リスちゃんんんんんんんんん」

そしてその悲鳴の後、ツヤツヤした顔で娯楽室を出てくるアリア

ブラン（弟子）：「あ、アリアせんせい」

アリア：「あら、どうかしたの？」

ブラン（弟子）：「フィオーネをさがしてた。まだとりこみちゆう？」

アリア：「フィオーネなら娯楽室で気絶してるわよ」

ブラン（弟子）：「そんなにストレスたまってたんだ〜」シミュレーターとはいえ魔
 神と一人で戦ってたもんね

アリア：「まあ、頑張っていた人生が否定されかけたのは確かだから……」

色々なことが、あるでしょうね」と顔を背けて言います、多分笑いをこらえてる。

ブラン（弟子）：「ん。フィオーネはへんなどころがあるけど、師匠のこともみてく
れたしいエルフ」

ブラン（弟子）：「わたしもなにかてつだえることないかな」

アリア：「なら、そのうち彼女は帰郷するはずだから付いて行ってあげなさいな。
どうせマレウスが絡んだ異変だろうし」

ブラン（弟子）：「ん。そうする：フィオーネのへやつてどこだっけ」運ぼうとして
る

アリア：「案内させるわ、ついていきなさい」とその場でゴーレム作成してびこび
こさせておきます。実質ルンバ。

ブラン（弟子）：「ありがとうアリアせんせい。おやすみなさい」

アリア：「おやすみなさい、多分明日には他の子たちも戻ってくるから剣を打ち直
してあげる」

ブラン（弟子）：「！ほんと!?」喜んだ勢いでフィオーネを落とす

フィオーネ：着地時に首がダメな方向に曲がりました

ブラン（弟子）：「：ごめんフィオーネ」

落ちたフィオーネをルンバ（ゴーレム）が轢き、ギャグ時空特有の物理法則を無視す

る挙動で吸引口へ吸い込まれていくフィオーネ。

ブラン（弟子）：「フィオーネ!？」

フィオーネ：右手のサムズアップを覗かせながら、吸い込まれていく

ブラン（弟子）：「見ていることしかできない弟子

その後ルンバ内で洗浄された結果、フィオーネは（外見だけは）きれいなフィオーネとして排出されました。

ブラン（弟子）：「でてきた……」

アリア：「あなたたち、本当に見てて飽きないわね」

フィオーネ：「なんか気絶していた間に散々な目にあつた気がするんだけど……。」

ブラン（弟子）：「ごめんなさい」ペこり

フィオーネ：「いや、でしちゃんはたぶん何も悪くないよ。なんか絶望的に運のめぐりあわせが悪かっただけだよ。」弟子に落とされたことを知らないの

アリア：「確かにあなた、人生には支障ないけど自分の嗜好としては大事なところで運が悪いわよね……うん、ついでだしこれあなたに預けておくわ」と懐から取り出したものをフィオーネに渡します。

フィオーネ：「アリアさん、これは?？」

アリア：「あなたたちの醜態を自動的に記録してデータを私に転送してくれるマ

ジックアイテムよ」

フィオーネ　：「待って、なんでそれを私に渡すのかしらアリアさん????」
「フィオーネ珍獣扱いだけど」

アリア　：「一応私が許可したら通話も出来るわ」動物園に仕掛ける定点カメラの気分

フィオーネ　：「……あ、ようするに通話のピアスですね、最初からそう言ってくれれば。」
「好意的解釈」

アリア　：「そつちからは連絡できないけどね。でも画像記録と転送以外の余剰魔力はそつちで使っていいわよ」
具体的には10点ぶんのマナチャージクリスタルと同じ効果（でもマナチャージクリスタルじゃないから同時持ち出来る）です。

フィオーネ　：「え、それめっちゃくちゃうれしいです。アリアさん、ありがとうございます。すく！」
「フィオーネの人権を犠牲にして強いけど」

アリア　：「こつちの暇つぶしにも出来るから気にしないで」

という感じで夜は更けていくのですが、ブランの部屋に何者かが侵入してきます。

ゼノ　：「おいっす、もふねーちゃん起きてるっ？」扉バターン

ブラン（弟子）　：「……ねてる」

ゼノ　：「えっおきてよ、おきよてよ」ゆっさゆっさ

ブラン（弟子）：「…なに？」眠い目をこすりながら

ゼノ：「ボク、もどるね」となんか金属の棒と鞆を背負った旅姿で

ブラン（弟子）：「…マレウスのところ？」

ゼノ：「たぶん」

ブラン（弟子）：「アリアじや、ダメなの？」

ゼノ：「うーん。アリアのおねーさんはね、一緒にいちゃいけないひとだとおもうんだよ」

ブラン（弟子）：「…それはひていしない」

ゼノ：「あのひとは、たぶんボクたちとはいる場所がちがうから。おたがい、ふこうになっちゃう」

ブラン（弟子）：「マレウスもおなじだとおもうけど」

ゼノ：「かもね。でも、ボクはセンセにたすけてもらった…そう、おもってるから」

ブラン（弟子）：「…そう」自分にとつての師匠みたいな存在なんだなと思ってます

ゼノ：「これ、もふねーちゃんにわたしておくね」と、ぼろぼろになつてすりきれ表紙に手書きで『ひでんしょ（日本語ならひらがなな印象）』を書かれた本を出します。ゼノが流派特技を覚えたやつですね。

ブラン（弟子）：「いいの？だいじなものなんじゃ…」

ゼノ：「うん、だからなくさないでね。また、それかえしてもらいにくるから」

ブラン（弟子）：「…！わかった。あずかっている」

ゼノ：「それじゃあ、えーつと」と少し考え、ぎゅーつ、とブランに抱き着く。

ブラン（弟子）：「!!？」

ゼノ：「それじゃあ、またね！」と、離れてから笑顔で去っていきました。

ラン（弟子）：「ん。また」と去っていった方に向かって手を振ります

以上で修行組の3日間は終了です！次回はポツクル、スピール、ブラン（修羅）の素材回収組です。お楽しみに！

『四通八達―アリア―』②

○オープニング

GM : えー、それでは第四話資材回収組の開始となります。今回は、前回の依頼を終えてナジュニアに帰宅。その次の日の昼前にアリアが案山子亭にやってきて皆さんを拉致するところくらいから始める予定です。なので日数経過によるお金の消費は無し、消耗品購入は出来ませう。

GM : この組のメインは資材の回収とダンジョン踏破によるトレジャーポイントの獲得です。今回メインスカウトとメインセージがいらないから……

GM : それでは、ポックル↓スピール↓ブランの順番にまずは成長報告をしていただきますしよう。どうぞ！

ポックル : ポックルは！なんと！スカウト7です!!あと申し訳程度にキャッツアイ。以上！こんなこともあろうかとスカウト上げておきましたよ(○)

GM : はい、とても堅実だと思います。それでは次、スピールの成長報告どうぞ。スピール : スピールはブリースト9ソーサラ5なのでなんとMPが12+7増えたうえに暗視がオマケで生えてきてすごーい、になりました

ポツクル : すごーい!

スピール : ソーサラー5の大事な話として、トランスレイトがあります。悪用しよう。以上です

GM : ありがとうございます、これでNPCの種族を考えなくて済みます。それでは最後、ブランどうぞ!

ブラン(修羅) : ファイターが9↓10、コンジャが4↓5に。ドレインタッチはまだまだですが申し訳程度の《アース・シールド》が使えるようになりました。後は筋力が成長してブレイクしました。それくらい。以上!

GM : 簡潔! 冒険者レベルが11になって取るのが防具の達人の場合、鎧も買いなおせるからお金を溜めましょうね! ありがとうございます!

以下にそれぞれのPCの今回のデータをまとめておきます。

・ポツクル

・スピール

・ブラン（修羅）

GM： それでは、皆様がナジュニアに帰還した翌日の昼前。時間的には朝かもしれませんが、部屋から下に降りてきたときにマスターから声がかかります。

マスター： 「おう、なんか猫の方のブランとフィオーネがどつかに連れてかれたぞ。あと伝言頼まれたわ。昼前に迎えに来るから、遠征の準備しておけっさ」

ポツクル： 「あれ、マスターずいぶん久しぶりじゃん」

マスター： 「そりやお前ら二週間くらい依頼で外だっただろ」片道5日を往復、向こうにいたのが3日ですからね。

ポツクル： 「そんなに経ってたのか……ところで、でしとフィオーネ連れていかれたって、誰に？」

マスター： 「金髪の嬢ちゃん、あれは多分バケモノかなんかだな。逆らう気も起きねえよ」

スピール： 「アリアさん、ちらつと見かけたけどそれだったのね」

マスター： 「あんなのと知り合うとか、お前ら最近激動の人生歩んでるよな」

ブラン（修羅）： 「二人とも無事だといいいけど……」 “あの”アリアだしなあという

顔

ポツクル : 「美味しいもの食べてるんだらうなあ」

ブラン（修羅） : 「それはそうかも。あのお菓子おいしかったしね」

と、そんな話をしている時に店の扉がババアーン!!と開きます。

ヴィヴィ : 「邪魔するでえ」

ブラン（修羅） : 「でえ？」

ポツクル : 「少し見ないうちに……」

ヴィヴィ : 「……おかし」

ポツクル : 「ヴィヴィがね」

ヴィヴィ : 「こう言ったらだいたい『邪魔するんやったら帰ってえ』って反応が来るはずなのに……おのれ伯爵、許すまじ」

ポツクル : 「おかし……」

ブラン（修羅） : 「ポツクル、ツツコミは任せた」

ポツクル : 「これも全部、伯爵ってやつのせいなのかー」

ヴィヴィ : 「ん、とりあえずこれ」と手紙を前に出します（誰かが取ってくれと信じて疑わない）。

スピール : 特に何の疑いもなく取る

その手紙にはこんな感じのことが書かれていました。

やあ諸君、夢の中で会って以来かな？君たちの伯爵だよ

ちよつと訳ありで領から離れなくてはいけなくなつたんだがね、まだレイも帰つてきていないからヴィヴィを案山子亭に預けようと思う。金に関してはツケておいてくれ
それではよき人生を、アデュー！

ポツクル　： 「雑う!!!」

スピール　： 「適当な経費ほつたくりたくないなあ」

ヴィヴィ　： 「いちおうお小遣いはもらつてる」じゃらじゃら

ブラン（修羅）　： 「ヴィヴィはここで暮らせて言われて来たの？」

ヴィヴィ　： 「まあ屋根があればなんとかなるから」

スピール　： 「所持金と言動に矛盾が」

ヴィヴィ　： 「貨幣文化、まだ慣れない」

ブラン（修羅）　： 「大丈夫かな……」生活力皆無なんだけどヴィヴィ

ポツクル　： 「伯爵のお金で、遊びに行くか!!」

そんな感じでPCたちとヴィヴィが話しているところに、アリアがやってきます。

アリア　： 「こんにちは、準備は出来て……あら？知らない子がいるわね」

ポツクル　： 「ヴィヴィってんだ！」

アリア　：「なるほどね……」とヴィヴィをじいつと見てます。

ヴィヴィ　：「……」変わらず仏頂面

ポツクル　：「ヴィヴィ、こっちはお菓子の人」

ヴィヴィ　：「お菓子？」

ポツクル　：「美味しいぞ」

ヴィヴィ　：「なるほど。よし、それじゃあよろしく」と言いながらアリアの服の裾を握ってます。

アリア　：「……お客が、増えたわねえ」苦笑

アリア　：「ま、いいわ。私も興味が湧いていたところだから……一緒に行きましょうか」

スピール　：「ダメって言われたらちよつと困ってたところなんでありがたいです」

ポツクル　：「お菓子パーティーだー！」

アリア　：「別にいいわよ、基本的に面倒見るのはあなたたちなんだから」

ブラン（修羅）　：「そういえば、アリアってフィオーネたちとどこかに行つたっていう話じゃなかったっけ？」

ポツクル　：「そういえば二人が見えない」

アリア　：「ああ、あの二人はうちの研究所で勉強と運動。それで、あなたたちには

色々が必要な素材の回収をお願いするの。内容はこれね」と資料が渡されます。

ブラン（修羅）：「勉強と運動に素材が……？」

ポツクル：「必要？」

アリア：「正確には、サーリアの改造と虎の子の剣を打ち直すための素材よ」

スピール：「打ちなおす？」

アリア：「ええ、あの剣細かいヒビだらけで折れそうなんだもの。それに厳密には魔剣じゃないから魔剣に作り直さないと。サーリアは、なんか改造案思い付いて……：……久しぶりに機械いじりしたくなったから……」

ブラン（修羅）：「つまりアリアの趣味？」

ポツクル：「趣味か」

アリア：「その通り、大人しく付き合いなさいな。悪いようにはしないから」

スピール：「んー、まあ、悪いようにはならないか」

アリア：「ああそうそう、聞いておかなければいけないことがあったわ。ねえスピール、あなたこの3つの内ならどれが好きかしら？」と言いながら図面を3枚見せます。

そこには ①ドリル ②強化チェンソー ③有線ファンネル の3種の強化案が

書いてありました。このうちどれを選択するかで成長したサーリアの能力が変わる、と

のことです。以下は各能力の軽い説明です

①・ドリル：命中の度に相手の防護点を戦闘中減少、累積

②・強化チェインソー：単純な威力強化

③・有線ファンネル：扱いにくい（判定などにマイナス）が胴体の攻撃を遠隔攻撃に出来る

スピール：ファンネルの見識に失敗した顔

GM：小型の模型（動く）を見せてくれました。

スピール：用意が良すぎる

ブラン（修羅）：これも趣味か……

ポツクル：「ドリル!!!」目をきらめかせてスピールを見ている

ポツクル：「な、スピール、ドリルだよな、な!!」

スピール：それ聞いて（ドリルはやめた方がいいんだろうな）と思ってる

スピール：「動きが面白かったので、このふあんねる？つてやつで！」デモがあると

流石に有利

アリア：「それじゃあ、それで組み立てておくわ」

ポツクル：「ど、どりる〜〜」涙

アリア：「じゃあみんな後はお願ひね」と書類と巻物を渡してくれました。書類に

は、集めてこなければいけない素材が書かれています。

そこに書かれていた素材は①穢れた灰×5 ②ミスリル×1 ③水の結晶×1 ④竜の鱗×1の4種類。

アリア：「その素材がありそうな遺跡へテレポートできるスクロール、あとその管理人への手紙を渡しておくわ」

ポツクル：「どんだけ危ない遺跡だよ……」

アリア：「あら？自分の故郷のことをそう言うのはいただけないわよ」

ポツクル：「ほえ？」

アリア：「あなたの実家のある遺跡、その奥が目的地ね」

スピール：「あー、あの。入ったことないけど」

アリア：「そうそう、元々別荘のひとつだったんだけど、気が付いたらなんか動物がすみ着いちやつてて、まあ追い出すのもかわいそうだしそこそこかわいからそこで暮らしてもらおうかなって思つて」と言いながらポツクルの頭を撫でています。

ポツクル：「どうぶつ……」

ブラン（修羅）：「つまりポツクルの一家はアリアの居候つてこと？」

アリア：「……敷地内に居ついた野良猫が繁殖した？そんな感じ？」

ポツクル：「いつの代から住んでるか、オイラも聞いたことないぞ……」

アリア　：「大破局後の事だから、300年は経ってないわね」

ポツクル　：「ほへー」

アリア　：「さ、前あなたに言った通り里帰りして親に顔でも見せてきなさいな」と暗に早く行けと言ってます。

ヴィヴィ　：「……遺跡……！」とフンスフンスしたヴィヴィはアリアでなく一行の誰かの裾を掴んでいます。

ポツクル　：「まじか……行くのか……心の準備が……」

ブラン（修羅）　：「そんなまずいところなの？」

ポツクル　：「いやなんつーか……勝手に出てきたようなもんだし……」

スピール　：「ふらっと」

ポツクル　：「匂いにつられて」

ヴィヴィ　：「動物かな？」

ポツクル　：「くうくん」

ブラン（修羅）　：「ヴィヴィは割と人のこと言えないような……」

ヴィヴィ　：「さて、これかな？」と手探りで巻物を開いていきます。

ヴィヴィ　：「……お？」

スピール　：「読めるの？」

ヴィヴィ : 「なるほど、わからないけどわかった」

ヴィヴィ : 「この巻物、開いたら効果が発動するやつだ」開ききつた巻物を見せながら

スピール : 「なるほど」

ブラン（修羅） : 「なるほど」

ポツクル : 「ヴィヴィー……!!!」

という感じで、ポツクルの心の準備をよそに故郷への転移が始まったのでした。

○ミドルシーン　↳ダンジョン探索！↳

ポツクル : 「ついで……」

スピール : 「あ、マスターにいつてきますしてなかった」

ブラン（修羅） : 「一応周囲の警戒してる」

遺跡への入り口らしきところに転移したPC3人。すると丁度そこで荷造りを始めているレプラカーンたちがいます。先ほどのエリアの話からするに、ポツクルの一族であろうことが分かります。

ポツクル : 「こそこそとヴィヴィの陰に隠れるポツクル」

GM : 「もうだめだあ……おしまいだあ……」
「シニタクナアイ、シニタクナアイ！」とかそんな言葉が聞こえます。

ヴィヴィ : 「行つてみようか」すたすた……草に足を取られて転び、盛大な音を立てて持っていた金貨がばらまかれる。

ブラン（修羅） : 「ヴィヴィ、大丈夫？」素早く近寄つて助け起こす

ヴィヴィ : 「もんだいない」と言いながら立ち上がる。

ポツクル : 「あ、お金」と拾い集める

ヴィヴィは無事だったのですが、その音に気が付いたレプラーカーンたちがPCたちの方を向きます。

ポツクル : ヴィヴィって目が見えないんだよな……？w

GM : 同じ屋敷で二週間暮らして、慣れてきたのをそのまま慢心して違う場所でも同じ行動を取った結果がこれです。

ポツクル : こいつう〜w

スピール : 「ど、どうも〜」

GM : 「あ、どうも」ペ〜り

ポツクル : ポンと手を打ちおもむろにデイスガイズとか唱え始める「でいすがーいず、でいすがーいず」（注：ポツクルの姿をした別人アピールをしたらしい）

ブラン（修羅） : 「ポツクル、デイスガイズいる？」小聲

ポツクル : 「いま唱えてる！」（注：唱えていません）

GM : 「…………みんな、大変だ!」「ポ…………ポックルの幽霊が!」「なんだって?」

ブラン(修羅) : 「…………間に合わなかったか…………」

GM : 「昼間だぞ」「なんでこの時間に幽霊?」「でもポックルだぞ」「なるほど、ぼつくり逝ったポックルと」

ポックル : 「だれがポックリ逝ったってえ!!?」

スピール : 「幽霊ってことは死んだと思われてたかあ」

GM : 「うわあ!お前の部屋物置に改造したのがそんなに恨めしいかこの幽霊!」「それとも、お前の部屋にあったアレやコレを里の男で分け合ったことか!」「いやいや、部屋の中にあったモノを売り飛ばして宴会したことじゃあ?」

GM : 『『『それだ!』』』

ポックル : 「オイラはこのとおりピンピンしてらあ!!」

ポックル : 「あと全員並んで手を上げな」ロングバレルを構える

GM : 全員の姿が掻き消えました

スピール : 「うーん家族」

ポックル : 「ばかめ!!!ライフセンサー!!!」

GM : 「逃げろ!」「おとり用の人形を忘れるな!」「音響爆弾もな!」

ブラン（修羅）：「ポツクル、脅しはよくないよ」荒ぶるポツクルに肩ポン

ヴィヴィ：「心は広く持とう、な？」ポン

ポツクル：「ブラン、安心して。これは脅しじゃないから」目が血走ってる

ブラン（修羅）：「……余計ダメなんだけど……」

そして時間が流れー

GM：『『ごめんなさい』』顔が陥没（ギャグ的表现）したレプラカーンたち

GM：「しかしまあポツクルが生きておったとは、この里のみんなの目をもってしても見抜けんかわ」

ポツクル：「節穴ぞろいなんだよなあ」

GM：「いやしかし、これはある意味助かったかもしれないぞ」と相談をし始めます。

ブラン（修羅）：「そういうえば何か困ってたよね」

GM：そして、ものすごくよい笑顔で「ポツクル、ちよつと遺跡の奥に行ってみたくないかな？」と言います。

ポツクル：「行きたいわけないだろ！」

ブラン（修羅）：「アリアーに行けって言われてなかったっけ？」

ヴィヴィ：「行かなきゃならないんだよなあ」手紙を片手に

ポツクル：「てか、奥には行っちゃだめって一族の掟じゃなかったのかよ!？」

GM : 曰く「お前はもう一回死んだことになったから大丈夫、お墓もきちんと建てたし」だと。このお墓、アイスクリームの外れ棒か何かに名前書いたやつだと思いません。

ポツクル : 「もう少しわかりやすく事情話してくれないかな。でないとお墓増えるんだけど？」お墓、絶対もう残ってないやつだ

GM : 『『ドラゴンがね、奥から出てきたの』』

スピール : 「端的」

ポツクル : 「帰ろっか」

ブラン（修羅） : 「アリアからの依頼は？」

ポツクル : 「ブラン、行ってくれるか!!」

スピール : 「多分、素材揃ってないと帰れなそうだしね」巻物ひらひら

ブラン（修羅） : 「だつてき？」

ポツクル : 「くくくうくくくん」

ヴィヴィ : 「それじゃあ行こうか、どっちの方向？」

ポツクル : 「こつちー」と言いながらイヤイヤ遺跡へ向かう

ヴィヴィ : 「大丈夫大丈夫、穢れは4点までならアドだから」と言いながらついて

いきます。

ポツクル : 「メタあい!!」

スピール : 「アドって何……?」

ヴィヴィ : 「なんかいい感じのこと、伯爵曰く」

スピール : 「伯爵の言葉遣い、マネしちゃいけないものな気がする」

ブラン(修羅) : 「穢れ、そんないいものじゃないから……」(ナイトメアの元捨て子)

ヴィヴィ : 「確かに、残機は多いに越したことないよね」ブランの言葉に頷く。

ブラン(修羅) : 「……そういう意味じゃ、ないんだけどな」

ポツクル : 「残機……」

GM : 「ここら辺は完全に種族的なすれ違いですよね」

ブラン(修羅) : 「こればかりはあとで話したい方がいいかもなーとか思ってる

ポツクル : 「そういえばヴィヴィの種族なんだっけ?」

GM : 「まだ言ってる無いですね、暫定蛮族」

ブラン(修羅) : 「目が見えない穢れ4点ってこれバジリスクじゃん(じゃん)」

ヴィヴィ : 「それじゃあポツクル先導よろしく、頭だけは残るようにしてくれたら

何とかするから」

ポツクル : 「がんばりまーすー」

ポツクル : 「そういえばー話ではあんなに怯えてたヴィヴィがなにげにポンとかして

くれるようになってる

G M : 気持ちに変化があったんですよ、多分そこらへん聞いたらポツクルは悲しみに包まれると思います。

ポツクル : ええ……

ブラン（修羅） : 男として見られてないやつ……

故郷を通り物置と化したポツクルの部屋とポツクルのお墓を横目に遺跡内へ入る一行。最初は狭い通路を通る中、急に開けた場所に出ました。そして、声が響いてきます。

ドラゴン : 「……定命のモノよ、何用でここまで来た？」皆さんは3話でグレートードラゴン（レベル18）見ましたよね、大きさにこいつもそうだろうなあって思います。

ポツクル : 「はじめまして……」

スピール : 「この元の持ち主に言われて、おつかいにきました」

ドラゴン : 「なるほど、それでは証を立ててみよ」

ブラン（修羅） : 「証？」

ポツクル : 「鱗とか一枚いただけですかね……」

ドラゴン : 「おや？こんなところに出っ張りが……ネジかな？」と言いながらポツクルの頭を掴もうとします。

ポツクル　：「違います！生きてます！必死です!!」

ヴィヴィ　：「これでは？」とアリアから渡された手紙を出します。

ポツクル　：「ほえ？」　管理人への手紙……なるほど！

ドラゴン　：「どれ……」と言いながら爪の先で器用に手紙を開き、手紙を前後に動かしてから目を細め、懐から老眼鏡を出して手紙を読み始めます。

スピール　：（あの老眼鏡もアリアさん謹製かな？）

ブラン（修羅）　：（知り合いっぽいしあり得る話かも）

ポツクル　：（グレーターローガン……）

管理人　：「あいわかった、歓迎しよう。こちらへ来るがよい客人、詳しい話はそこで」と奥に促されます。通された先、そこには洞窟内に自然空間が広がっていました。なんと空まで再現。

ポツクル　：「奥こんな風になってたのかー」

管理人　：「それで、必要な素材を取りに来たと。成程確かに素材は全部この遺跡内にある……自由に魔物を討伐するなり交渉するなりすればよからう。と、いうわけでこの老いぼれの頼みをひとつ引き受けてくれんかな？」と自身の鱗をちよんちよん、と叩きながら言います。

ブラン（修羅）　：「なんかこの間からこういうの多いよね」小声

管理人：「断りにくいとわかってるからな」

ポツクル：「とりあえず聞くだけなら」

管理人：「遺跡の離れた所にいる、知り合いに届け物をしてもらいたい。ちよう

ど、そやつがお前らの欲しい素材を持っている。口利きの手紙も書いてやろう」

ポツクル：「至れり尽くせり渡りに船！のつたぜ！」

管理人：「それでは・・・」と届け物と石をふたつ渡してくれます。

スピール：「なにこの石」

管理人：「これは転移石だ、この遺跡内でしか使えないが有効活用してくれ」

スピール：「うーんロストテクノロジー」

といったところで今回の説明です。今回はダンジョンハックシナリオとなっており、5×5マスの合計25マスが遺跡の全体像で、これを1マスずつ踏破していきます。時間は1日目の12時から開始して、3日目の18時がタイムリミット。PCたちのできる行動は以下の通りとなっています。

①移動：道のつながっている隣接したマスに移動し、イベントが発生した場合それを行う。経過時間は1時間＋イベントによって追加もあり。

②休憩：その名の通り休憩（草を焚く、睡眠など10分以上かかる行動）、経過時間はその行動にかかった時間。

③再探索：イベントで「探索判定に失敗？それじゃあ何もありませんでした」とかを再度挑戦できます。経過時間は1時間。

また、PCたちがさきほど手に入れた転移石の効果は「スタート地点もしくははランダムな位置に飛ぶ」です。

以下に遺跡の全体像を貼りますが、シナリオ開始時各タイルは裏向きになっており、情報が分かっているのはスタート地点とゴール地点だけでした。また各タイルにはX軸に左から1〜5、Y軸に上からA〜Eのアルファベットが振られています。

GM：なお、この遺跡はロストテクノロジーの塊なので18〜6時までには明かりが消えます。届け物を頼まれた相手の居場所は「2B」です。どこに道がつながっているかはわからない。そう、この管理人耄碌して遺跡内の地図がわからなくなったのだ！

ポツクル：「このドラゴンつかえねー!!!」

管理人：そんなわけで、イベント開示十クリア認定1マスにつきトレジャーポイントを1d6点あげます。これは管理人からの報酬です。

ポツクル：「ありがとう管理人さん!!!」

管理人：「おつとネジがこんなところに」

ブラン（修羅）：「自業自得」

というところでダンジョンハックの始まりです！まずは入り口で調査を行い、ランダムなマスの情報を開示。ここで開示されたのは5D。温泉イベントのマスでした。

GM：ポックルが天然温泉（もちろん混浴）を発見しました。

ポックル：これはやばいぜ。あかん香りしかない

スピール：天然温泉（男性用）とか出たら笑うけど

GM：何故この一行はお風呂に縁があるのか

ポックル：用意するGMのセリフ!?! w w

GM：1/23を初手で抜かれたGMの気分になってください。

ポックル：どうしてこんなところを引いてしまうの……w w

そして早速転移石を使う一行。転移先は4B（剣型のゴーレムがいる高台）でした。魔物知識判定の結果、剣はイクシードデイズター（レベル1）であることが判明しました。これの自動獲得戦利品にはアリアからのお使いリストにあつたミスリルがあります。他ではミスリルが手に入らないというGMの情報もあり、早速イクシードデイズターに挑む面々。戦闘開始です！ちなみに今回はヴィヴィがフェローとして共に行動しています。

1ターンの目

先手はPCたちから。スピールが例によって例のごとく《バトルソング》で後衛組をバフ。そのまま《ファストアクション》持ちのポツクルが《ショットガン・バレット》を2連射。鞆・刀身・柄の各部位に40〜50点ずつのダメージをたたき出します。続くヴィヴィの《アシッド・クラウド》により早くも鞆が脱落。ブラン（修羅）とゆず、サリアが追撃をかけますが命中が外れた攻撃も多く、2部位を残してエネミーターンです。

まずは後衛に5部位（ポツクル・スピール・サリア2部位、ゆず）が固まっていることに気づいた柄が《烈風のブレス》を使用。PC2人は抵抗しますがサリア及びゆずが抵抗に失敗。ゆずへのダメージ出目で6ゾロが出た結果ゆずのHPが0になってしまいました。

ブラン（修羅）： ゆずー！ー！ー！ー！ー！！！！

GM： なんかこの敵、仕事した気になりました。

ポツクル： ゆず……またなの……www

ブラン（修羅）： HP22なので結構上ブレないと死なないんですよそれがこれですよ（注：烈風のブレスの打点は $2d6+11$ 。出目11以上でないと一撃にはならない）
引き続き刀身がブランに全力攻撃II＋必殺攻撃IIで攻撃。防護点込みで21点のダ

メージを与えます。が、鞘も刀身も虫の息。返すターンであっさりと片付けられたのでした。戦闘終了です！

戦闘が終わり回復する面々。以下こまごまとしたダンジョン探索が続くのでハイライトです。

・はぐれ蛮族（なぜかギターと化した魔剣をかき鳴らしている）との邂逅（5A）

G M : 「やあ人族の方々、こんな世俗と離れた所に何用かな？」旋律と共に

ブラン（修羅）

：

?????

ポツクル

：

スピール

：

?????

「おお、なんとエキサイティングな演奏」

G M : 「慣れないと指を切る、お勧めはしない」

ポツクル : 「いや、勧められても困りますし」

ブラン（修羅） : 「えつと……あなたは？」

G M : 「一族内の権力争いに嫌気がさしたから、隠遁して大自然の中農業と音楽に勤しみ余生を送っているただの蛮族さ」

ポツクル : 「……人生いろいろあるよね、うん」

ブラン（修羅） : 「……そっか……」

（情報を渡すシーンのため中略）

ブラン（修羅）：「よくわからないけど……おしえてくれてありがとう？」

スピール：「なんでそこまで知ってるんですか？」

GM：「それはだな、暇なせいで散歩が趣味だからだ」

ブラン（修羅）：「そっか……」

GM：「ああ、それと最後に、素材周囲なら、真ん中のあたり（3C）で出来るぞ」

スピール：「周囲に適した配置！」

ポツクル：「いやなんで周囲しなきゃならんのですかw」

GM：「それはだな、出てくる魔物の個体数がランダムだからだ」

スピール：「追加出現率100%調整しなきゃ……」

ブラン（修羅）：「スピールがいつもと違うんだけど」

スピール：「あ、そっかブランいたっけ」

ブラン（修羅）：「もしかしてこれがスピールの素……う？」

ポツクル：「ノーコメントだぜ」

・謎の小生物を拾う（4E）

（探索判定を振る一行）

GM：「一番達成値が高いのがスピールですね、それではスピールというかサーリアのセンサーが何かを見つけます。」

くじら? : 「きゆう」空を飛ぶ体長1mくらいのクジラです。

スピール : 「あ、ライダーギルドでみたことあるやつっぽい」

魔物知識判定の結果「スカイホエール(Lv10)の幼体」(Lv5)であることが分かりました。名前の通り小さい?空飛ぶクジラです。スカイホエールの戦利品にはお使いで頼まれていた水の結晶がありますが……

くじら? : 「(周囲を見回し)きゆう(自分の知らない存在ばかりと気が付き)きゆう?……きゆう(; ω ; ;)」

PC一同 : 「「かわいい〜」」

……ご覧の通りPCたちはすっかり骨抜きのようにです。

ヴィヴィ : 「なんか変な声が聞こえるんですが」

ブラン(修羅) : 「ヴィヴィ、もしかして何て言ってるのか分かるの?」(注:スカイ

ホエールは海獣語しか話せません)

ヴィヴィ : 「わかるわけなからう」

ブラン(修羅) : 「ですよね。。。」

ヴィヴィ : 「でもまあ、なんかの幼体なんですよ?迷子では?」

スピール : 「意思疎通ができないんだよねえ」

ポツクル : 「両手をぶんぶんして無害アピール」

ここでクジラを落ち着かせる技能判定が挟まれます。技能はライダー+知力ボーナスで目標値18、失敗したら追加1時間ですが……

スピール : (コロコロ) 23

くじら? : 「きゆう!」とりあえず皆さんについていく感じになりました。

スピール : 「いいいいいこ〜」

・温泉に入ろう!(5D)

エリアに入ったPCたちを、温泉の周りにいる妖精ヴァンニクがお風呂に誘います。本来のヴァンニクはレベル3ですが、このヴァンニクはレベル13です。屈強。

GM : 「あらあら、こんなところにお客さんだなんて珍しいわね? まあまあおひとつ(温泉)どうぞ」

スピール : 「わーい、温泉!」

ポツクル : 「わーい!!」

ヴィヴィ : 「おつ、こんなところで風呂とは思ってもよらなんだ」ポイポイ脱いでど

ぼーん

ポツクル : 「ヴィヴィー!!!」

ブラン(修羅) : 「ポツクル、目つぶってて」無理やり目を押さえる

ポツクル : 「いたいいたい、失明するー!!!」

ヴィヴィ : 「おう、誰でもいいから背中よろしく」

スピール : 「あー、脱ぎ散らかしてー」服を回収してから洗いに向かう

GM : 「あら？あなたたちは入らなくていいの？」とブランとポツクルに聞きに来ます。

ブラン(修羅) : ポツクルの周りに演出ダークミストとかでなんとかありませんかね？()

GM : 普通に目隠しすればよいのでは、そこら辺に生えている棘付きの蔦とかでポツクル : 拷問かなにか!?

ブラン(修羅) : 棘付きはかわいそうなので普通に持つてる布切れとかで

GM : まあ皆さん旅をする以上着替えとかあるからいくらでも出来ますね。というわけでポツクルの入浴は許されました、背中に刻印があるブランは任せます。

ポツクル : 「み、みえん……」

ブラン(修羅) : 「傷があつて、見せたくないんだけど……」(ヴァンニクに小声で) GM : 「あら？それはまあ思うところはあるけど……」それを、見せられないような相手なのかしら？あそこにいる方々は？」とは言われますね。

ブラン(修羅) : 「……今は、まだ。ちよつとできないかな。ごめん。」

GM : それでは湯気多めの白濁水質用意してもらえます、着替えは頑張つて。

ブラン（修羅）： ありがたい

こうして温泉で疲れを癒してHPPMが全快した一行なのでした。また、この北である5Cではイベントを確認してから1回無効化できる便利アイテムを手に入れました。安全地帯である4Dで睡眠をとることとして1日目は終わり、次は2日目となります。

・朝食と激辛ソースとブラン

2日目が始まり、移動の前に朝食のシーンが挟まります。3話終盤でブランが一般的な？味覚を取り戻したのでその描写のためのシーンです。

ヴィヴィ： 「昨日ギターの兄ちゃんからもらったトマト食べちゃおう」あとヴァンニクから飲める源泉ももらえてますねきつと。

スピール： 朝起きたら朝ごはんできてる。トマトと干し肉を入れて炊いた麦がゆ。そう、赤いメニューです

ブラン（修羅）： 「保存食のじゃこれ使えなかつたんだよね」と言いながら手元から特製ソースを取り出す

ポツクル： 「うげえ」

ヴィヴィ： 「美味しい野草も取ってきたよ」生で食みながら

ヴィヴィ： 「とりあえず食べて、美味しいのだけ持ってきた」

スピール　：「とりあえず食べて……なんでも口に入れて……」

ヴィヴィ　：「だいじよだいじよぶ、毒なんてへっちゃらよ」フンス

ブラン（修羅）　：「それじゃあ」と言つてソースを雑炊にかけて、いただきます

ブラン（修羅）　：「……………」

その瞬間、ブランに電流走る——ッ！

ブラン（修羅）　：「いたい……………」涙目

ブラン（修羅）　：「口が痛いんだけど、どうすればいいのこれ…………？」

スピール　　：「へ？口が痛い？」

ポツクル　　：「雑炊はなんともないぞ、おいしいお？」

ブラン（修羅）　：「これまでそんなことなかったんだけど、なんで……？」物心ついてか

らずつと味覚がアレだったからね

ヴィヴィ　　：「なるほど。ブラン……………ひとつ大人になったんだね……………」

しみじみ

ブラン（修羅）　：「大人……」めっちゃ涙目

ヴィヴィ　　：「え？妊娠したから味覚が変わったんじゃないの？」

ポツクル　　：「え、妊娠すると味覚が変わるのか!？」

ヴィヴィ　　：「らしい、もののほんで知った」

スピール : 「妊娠? 相手は……?」

ブラン(修羅) : 「覚えがないんだけど……?」

ヴィヴィ : (そつ……と両手を閉じて拝む)

ブラン(修羅) : 「そういえばこの間アリアから触れられてからなんかちよつと感覚はおかしいような……」

ヴィヴィ : 「けつ、なんでえつまんねえの」

スピール : 「あの人なんでもありね……」

ブラン(修羅) : 「つまりこの痛みはアリアのせい……?」

スピール : 「いや自業自得」 我らデスソース絶対許さない同盟

ヴィヴィ : 「そのソースはブランのせいなんだよなあ」

ポツクル : 「ヴィヴィ、すっかり言葉づかいが……」

ブラン(修羅) : 「えっこのソースが原因なの??」 ソースを涙目で名残惜しそうに見つめてますが、封印します

ヴィヴィ : 「とりあえずお残しはアカンゆえ、それはブランが頑張つて食べなさい」 自分の分を啜る。多分ヴィヴィ、生来の言語はともきれいなお嬢様なのに交易共通語だけこんな喋り口調。

ポツクル : 「までもよかつたじゃん。これでブランもまともになったってことでさ

！」

スピール　：「これでおいしいものをちゃんとおいしいって感じられるようになったの。いいことじゃない」

ブラン（修羅）　：「これが……まともなの……？」どことなくうらめしそう

ヴィヴィ　：「いいじゃん、他のみんなと同じになれてさ。『特別』なんて、ろくなものじゃないよ」

ブラン（修羅）　：「それも……そうだね」

ブラン（修羅）　：「ところでこれ食べないとダメかな……？」

スピール　：「ダメ」

そんなこんなで激辛かゆを何とか食べ終えたブラン。2日目の始まりです！

・2日目ダイジエスト

朝イチで3Cに突撃してワーリングアツシユを狩りに行くPCたち。これから獲得できる穢れた灰はアリアからのお使いアイテムです。少し多めに沸くとはいえ所詮は7レベルアンデッド。ポツクルの《ショットガン・バレット》やスピールの《イクソシズム》の前にあっけなく倒れ、灰5個は集まりました。残すところは水の結晶と竜の鱗です。

アツシユたちを倒しマップを埋めつつ進む一行。1Dでの聞き耳判定に失敗した

面々は1Cで計50点ぶんのトレジャー強化が入ったティルギリスと相まみえます。倒すか回避するかの選択肢があり、回避した場合はトレジャーポイントがもらえない……なのですがここで1日目に手に入れた便利アイテムを使うことにした一行。戦闘抜きでティルギリスを討伐し、トレジャーポイントを手に入れます。ティルギリスがいた洞窟の奥には管理人のへそくりが隠してあり、グレータードラゴンの戦利品表を1回振れるというイベントが発生。ここで竜の鱗^{スケイル}ゲットとなりました。

後は水の結晶の入手と管理人の友人への届け物（そして迷子のクジラの親探し）だけです。ひとまず2Bにある友人の場所を目指そうと2Eにあるテレポーターでショートカットをしようとしたら4Cの火山地帯に突っ込んだりしつつマップを開けていく一行。24時を跨いだ3日目の午前2時にPCたちは2B、山の頂上にあるスカイホエールの巣へと到着したのです。

空鯨親：「こんなよなかにだれですかあ〜？」（海獣語）

ヴィヴィ：「でっけえ」

ポツクル：「わーお」

ブラン（修羅）：「届け物を届けにきたよ」（交易共通語）

空鯨親：「ああ、ウチの子！……ありがとうございます！」（交易共通語）

ポツクル：「お、言葉が通じる！」

スピール : 「あ、親御さんだったんですね。よかったね帰れて」

空鯨親 : 「まさか皆さん……わざわざこの子を探してくれたんですか？」

(注：スカイホエールは幻獣ではなく動物カテゴリです。何故交易共通語を話せるかは深くは考えない方針でお願いします)

スピール : 「ここに来る途中で迷子になってたこの子を見つけて保護しました」

ポツクル : 「たまたまだけどな」

ブラン(修羅) : 「なりゆきってやつかな」

空鯨親 : 「重ね重ね感謝の念しありません、ひとまず狭いところですがどうぞ……」と皆さんを狭い(体長1.5m基準)巢へと案内してくれます。

ポツクル : 「ひろーい」

空鯨親 : 「そして「粗茶ですが……」と魔海草原種を煮出した出汁を出してくれます。風呂桶くらいの樽で。

スピール : 「わざわざどうも……私たち、浸かれそうです」

空鯨親 : 「すみません、あいにく鯨なもので」と、お話しているところで管理人からの手紙と届け物を読み

空鯨親 : 「なるほど、水の結晶が……少々お待ちください」と言ってから
いったん奥に引っ込んで

空鯨親：「どうぞ、こちらが水の結晶です」と持つてきてくれました、これにて必要素材回収完了です。

空鯨親：「先ほども申し上げましたが、ウチの子供を連れてきていただき有難うございます」とお辞儀をして

空鯨親：「もしよろしければ、こちらを受け取っていただけませんか……？」と言いながら、「粗〇品」と書かれた箱を差し出してきました。ちなみに手紙の内容はチエスの次の一手でした。

ブラン（修羅）：粗〇品……？

スピール：粗悪品……？

空鯨親：〇の部分、何か文字を削った痕跡が見えます。

ブラン（修羅）：やはり粗悪品……

空鯨親：「こちらはですね、過去の英雄たちが自身の限界を超えるために飲んだと言われる霊薬……のパチモンです」

PC一同：「「パチモン」」

空鯨親：「効果が微々たるものでして」

空鯨親：「（あと時々副作用が）」

スピール：「（副作用）」

ポツクル : 「(時々)」

そんなこんなで渡されたパチモン霊薬の効果は以下のようなものでした。

・【かんたん英雄作成薬】 売却：一部の好きモノ以外買いたがらない

知名度：21 形状：怪しく光る薬 アイテム区分：消耗品

概要：能力値を増強する薬、ロゴからして怪しい。 時期：不明

効果：この薬を飲んだ時にダイスをふたつ振り、以下のどちらかの効果を得る。

①出目が7以上だった場合、任意の能力値を+1する。

②出目が6以下だった場合、ランダム選ばれたひとつの能力値が+6され、それ以外の能力値が全て-1される。

この薬の効果は「リムーブ・カース」もしくは「パーフェクト・キャンセレーション」で解除が可能である。解除する場合の目標値は25であり、1セッションにつき1度しか挑戦できない。

空鯨親 : 「どうぞ、おうちの人と分けてください」これが1d6+4個もらえます、つまり5~10個

ポツクル : 振ります!!! (コロコロ) 出目3!7個!

用事をすべて終え、睡眠を終えて帰らんとするPCたち。

ヴィヴィ : ヴィヴィは子スカイホエールの腹にしがみついてしばらく駄々をこね

ますけどそのうち諦めます。

ブラン（修羅）：（かわいい）

ヴィヴィ：「うう……じゃあねそらまる、またくるからね」名残惜しそう

空鯨親：「いやウチの子きちんと名前が……まあいいか」

スピール：「また海獣語覚えて来ようか」

ヴィヴィ：「帰ったら勉強する」

ポツクル：「そらまる……いい名前だな」

ブラン（修羅）：「違う名前があるから」

そんな一幕もありつつ、帰りは残してあった転移石で帰還。管理人からの依頼も達成したということで竜の鱗がもう1枚もらえました。そして25マスのダンジョン全てを踏破したので25d6点のトレジャーポイントも獲得。スピールがダイスを振った結果、合計98点となりました。出目が高い……。これにティルグリスの分を加えた148点が今回のダンジョンで得られたトレジャーポイントです。3話からトレジャーポイントを115点持ち越している分もあり、PC一人当たり60点ほど貰えそうな気配。

○ミドルシーン②　　く全員集合！く

ダンジョン探索を終え、アリアから貰ったもう一つのテレポートの巻物を使った3人

は、彼女の研究所へと転送されました。ここで修行組のブラン（弟子）、フィオーネとの合流になります。

スピール　：「?（こ）ど（こ）?」

アリア　：「あら、だいたい予定通りね」

ブラン（修羅）　：「アリア? どうして（こ）こに?」

アリア　：「おかえりなさい……. ではないけどいらつしやい、ここは私の今の家のひとつよ。ほかの二人も奥にいるわ、そろそろ食事の準備をするからまあくつろいでなさいな」

ポツクル　：「くたくただぜ〜」

アリア　：「話はあとで聞かせてもらおうわね、どうせあなたたちのことだから変なことしたんでしょ?」

ヴィヴィ　：「テレポーターからの火山ダイブ」

ヴィヴィ　：「あ、あとポツクルが真つ先に露天風呂発見した」

アリア　：「ほんとうに、見てて飽きないわねあなたたち」

スピール　：「寝てる時の二人の寝言もかきとつてあるよお」

そのまま夕食に通されるPC3人にヴィヴィ。また、この段階でブラン（弟子）の鍛えなおされた師匠のデータと、またポツクル用の新規装備のデータが開示されました。

その名もBB弾 (Burst Born Bullet) 製造装置。それぞれのデータは以下のようなものとなっています。ちよつと長めになるので気になる方だけ読んでもらえれば。

【白帝】 基本取引価格：非売品

知名度：20 形状：装飾の少ない片刃の剣 装備可能部位：武器 改修時期：現在

概要：五帝が二「白帝」の先代が所持していた剣、先代白帝の魂が宿っている。

ランク：〈ソード〉S 用法：1H両／2H 必要筋力：10

命中：+1／+2 威力：20／30 C値：10 追加D：0／+1 刃武器

《白帝流伝承者》

この装備は、所持者が「武器習熟A／ソード」「武器習熟S／ソード」「武器の達人」取得した時にデータが変更される。また、所持者は白帝流の流派特技を習得できる。

《空をも断つ》

《必殺攻撃IⅡIII》及びその派生特技の命中判定前に、MPを3点消費し使用を宣言する。宣言した攻撃はダメージでなくHP減少として扱う、1セッションに3回まで使用可能。

【BB弾製造装置】 基本取引価格：非売品

知名度：22 形状：弾丸の鑄型と専用注射器

概要：生物の血液から弾丸を生成する装置 製作時期：魔動機文明

生物からHP1点ぶんの血液を抽出することで、特殊な弾丸（Burst Born Bullet）を1発生成する装置。血液採取後1時間以内でなければ生成できず生成には30分必要だが、生成された弾丸自体は比較的中期間（セッション中）は保存可能。どの種族から血液を採取するかによって、ガンとして使用した際の効果が変わる。セッション開始時に、コストなしで12発まで生成可能（血液を採取できる種族に限る）。

以下詳細

人間：命中もしくは威力どちらかのダイス出目を反転可能、消費MP+5点。

エルフ：水中で使用した際に、威力+20。

ドワーフ：攻撃に火属性を追加、元々火属性の場合威力+10。

タビット：対象は回避でなく危険感知（「先制判定―7」を基準）で判定、消費MP+2点。

ルーンフォーク：対象のHPでなくMPを減少させる。

ナイトメア：対象が穢れを持っている場合、合算ダメージに+「対象の穢れ」点。

リカント： 威力+20、消費MP4倍。

リルドラケン：対象が飛行している場合その修正無効、さらに威力+10。

グラスランナー：威力ロールの結果を2d6ではなく1d6×2で行う。

メリア：効果をHP回復に変更（クリティカルなし）、消費MP+1点。

ティエンス：魔神に対して威力+20。

レプラカーン：対象の回避判定にマイナス4のペナルティ、ただし威力-10。

何らかの手段で血液採取可能であれば、PCデータ外種族の血液を使用することも可能。

というわけでPC全員が揃った夕飯です。アリアのご飯は豪華なモノとかではなく、これでもかというほどの家庭料理。お手製です。

アリア：「予定通りの素材は回収できたみたいね、それじゃあ明日の朝には色々と完成させておくから。まあ今夜くらいはゆっくり休みなさいな」

スピール：「お願いします〜！」

ポックル：「めしだー！！！」

ブラン（弟子）：「!?：アリアせんせいが、やさしい!?」

アリア：「解体するわよ」

ブラン（弟子）：「ごめんなさい」平伏のポーズ

ポックル：「お菓子の人はいつだって優しくなかったじゃないか!?」（お菓子をもらったことを思い出してる）

ブラン（修羅）：「……ほんと？それ」（3話ラストの痛かったりを思い出してる）

ブラン（弟子）：（師匠持って斬りかかってきたことを思い出してる）

アリア：「それとポツクルにブラン……ああそっちの盾の子の方ね、あと私の部屋に來なさい。渡すものがあるから」

ポツクル：「おつかしー!!」

ブラン（修羅）：「いやお菓子じゃないと思うけど」

アリア：「まあいいんじゃない？欲に忠実な方が見てて飽きないわ」

フィオーネ：「でしちゃん、師匠直りそうでよかったね〜」

ブラン（弟子）：「ん！師匠！かんぜんたい！」

スピール：「師匠？が？壊れ？」（師匠が刀周りの話を何一つ聞けていないので理解していない顔）

ブラン（弟子）：「よろしくおねがいしますアリアせんせい」ペこり

アリア：（ブラン／弟子に任せていたら説明が行き届かない気がするけど自分でするのはめんどくさいって言う顔）

ポツクル：「でも師匠治ってよかったね！」

ブラン（弟子）：「うん！」

ブラン（修羅）：うちって師匠まわり聞いてたっけ（聞いてなかった気がする）

ポツクル : そういえばこの前泣きつかれたことを思い出した

G M : ブランが自分の刀のことを師匠って言ってるくらい知識じゃないかな
 スピール : 師匠がいる、という事実は聞いている

ブラン(弟子) : はつきりとは言っていない、隠してはないよ

フィオーネ : ↑酒臭くて泣きつかれなかった人

G M : 自業自得100%

ブラン(修羅) : フィオーネはしゃーない

フィオーネ : なんでや!?

ブラン(弟子) : わかるよ。ストレスなんだよね。(肩ポン)

そんなわけで、この後アリアの部屋での授与式です。

アリア : 「はい、まずはポツクルにこれ」と小さめの鞆、中身は【BB弾製造装置】
 を渡します。

ポツクル : 「なんだこれ……」

アリア : 「使いこなせるかはわからないけど、色々面白いことが出来るからあげるわ」

ポツクル : 「よくわかんないけど使ってみるぜ!」

アリア：「弾丸の製造に採取後すぐの血液必要だから、そこらへんは自分で何とかしなさいね。くれぐれも犯罪行為には走らないこと」と、言うわけでサンプルとしてこのセツション中は使える弾丸をくれます。各種族1個ずつなのでちょうど12発ですぬ。

ポツクル：「うげ、血は苦手なんだよなあ……がんばるぜ」

アリア：「それで、ブランの方なだけど……」

ブラン（修羅）：「だけど？」

アリア：「どうだった？本来なら昔からあるはずだった感覚は？」と聞かれますね、まあ味覚に関してでしょう。

ブラン（修羅）：「……まだ慣れないかな。でも食べ物がこんなにおいしいのは初めてかも」

ブラン（修羅）：「夕食もご馳走様」

アリア：「そう？だったら『ソレ』をどうにかしたい気持ちも強くなったかしら？」
ブラン（修羅）：「……お金ならまだないけど」

アリア：「それじゃあ、頼らないで戦う方法も考えなくちゃね。それとも、願いが叶ったら引退でもする？」他の人がいるから固有名詞はぼかしますが、それ以外は特に配慮せずに話しますよ。

ブラン（修羅）：「引退はするつもりはないかな。でも「これ」は僕が望んだものじゃないから。」

ブラン（修羅）：「その時はただの冒険者として生きようかな」

アリア：「ま、あなたはナイトメアだからね」と言いながらブランの方に手を置き
アリア：「気のすむまでその生活を楽しみなさい、あなたには悠久の時を歩める可能性があるのでから」

ブラン（修羅）：「アリアが言うと言得力が違うね」

アリア：「それで、気が済んだら適当に男でも捕まえて家庭を持ちなさいな。……外見が変わらないのは、強いわよ？」

ブラン（修羅）：「……………」（ちよつと顔が赤くなる）

アリア：「まあ、冒険者やつてるうちにめぼしいのにコナでもかけておきなさい。普通の生活してたら出会わないような人と一緒になることもあるでしょう」ブランの変化を心底に楽しそうにしながら、ふと思いつ出したかのように

ポツクル：「明日にでも死にそうな人はやめとけよー」

スピール：「心当たりいつ死ぬかわからん」

ブラン（修羅）：「大丈夫、ポツクルじゃないから」

ポツクル：「死なないよ!!!」

フィオーネ：現状候補として、マスター、レイさん、伯爵の三人しかいない気が（ポツクル、マレウスは除外）

ブラン（修羅）：（実はこういう時に顔赤くするのがPLが好きだからやったのは内緒だぞ！）

アリア：「ああそうそう、これ渡しておくんだった」と棒状の包みをブランに渡します。

ブラン（修羅）：「これは？」

アリア：「倉庫に転がっていた実験用の剣よ、正直場所の邪魔だからあげるわ」
具体的には強化バスタードソード＋1（必要筋力20、命中＋1、追加ダメージ＋1、威力20／30、C値10）です。

ブラン（修羅）：「僕あまり剣使わないけどいいのかな？」

アリア：「なんか、その鎧と盾に短剣は……見た目がアンバランスで……」（注：ブラン（修羅）のメインウエポンは大盾のブレードキラーですが、サブウエポンとしてウィークネスリビラーという命中した敵の弱点を暴く短剣も持っていました。）
ブラン（修羅）：「ちよつと前まではバスタードソード使ってたんだけど。盾で攻撃する方が多くて便利な方に乗り換えちゃったんだよね」

アリア：「まあ受け取っておきなさいな、最悪路銀の足しに出来るでしょう」

ポックル : 「冒険者は見た目のそれっぽさも大事だぞ!」

アリア : 「さ、みんなも今夜はとつと寝なさいな。明日はちよと頑張ってもらうことになるわよ」意識すると『明日シナリオのボス戦やるから』ですね

ブラン(修羅) : 「貰いものだし、大事に使うよ。ありがとう」

ブラン(弟子) : 「おやすみなさい」

スピール : 「うーん、なんか面白そうな書物とかありません?」

アリア : 「じゃあこれあげるわ、ポックルの故郷のここ200年くらいの観察日記」

スピール : 「……愉快の間違い?」

アリア : 「ポックルがおねじよした布団を干してる写真とかあるわよ? 盗撮だけど」

ポックル : 「なんでだよ!!!」ここ200年を一冊の本にまとめたときに、わざわざ入る情報じゃないよね絶対

フィオーネ : 「……アリアさん、もしかして盗撮常習犯? 参考までに、いいバーサタイル紹介してくれないかしら? あくまで参考に。」

ポックル : 「あ! それで思い出した! 結局オイラが管理者うんぬんってなんだったんだ……?」

アリア：「……ああ、あれ？管理者権限Ⅰの定義が『私が観察対象にして
いる生物、もしくはペットとその血族』だからじゃない？研究施設内で勝手に死なれて
も困るから」

スピール：（思わず吹き出す）

ポツクル：「あ、なるほど、ペットのマークだったんだ、ふーん、へーん」

ブラン（修羅）：（そつと肩ぽん）

ポツクル：「スピール!!!」

アリア：「過度な期待と、それを周囲にわかるように出しているようじゃまだまだ
いい男にはなれないわよ？」

スピール：「いやwwwwちよつとwwwwwwペットwwwwww」

ポツクル：「だれがペットじゃー!!!」

そんなわちやわちやもありつつ、夜は更けていきました。その途中アリアが「ちよつ
と迷い猫（注：先に立出していたゼノのこと）の様子見てくるわ」と出て行って早朝に
帰ってきたりなどもありました。そして朝食の席にて

アリア：「と、いうわけで試し斬りの木偶を準備してきたわ。多分、ぼちぼちな
ジュニアの軍隊に気づかれる位置まで進行しているはずよ。これ食べ終わったら送っ
てあげるから撃退してきなさいな」

ブラン（弟子）：「ぐんたい？」

フィオーネ：「待って、進行ってどゆことですか？」

アリア：「ああ、昨夜ゼノの様子を見るついでにマレウス殴りに行ってね。殴る代わりに、あなた達の試し斬り用の魔物を用意させてナジュニアに進行させて置いたのよ」

ブラン（弟子）：「はい？」

スピール：「ついで」

ブラン（修羅）：「というか、それで死んでないのかマレウス……」

ポツクル：「お、おうw」

スピール：「おしおきまでしかしな人」

フィオーネ：「マレウスのクソ野郎、残機制だから」

アリア：「頑張つてね、ナジュニアの軍なら討伐は可能だと思っけど死傷者はほとんどもないことになるかもしれないから」

フィオーネ：「なるほど、つまり魔物をマレウスの屑野郎だと思つてぶつ潰せばいいって事ね！」

ブラン（修羅）：「アリア……」

アリア：「なにかしら？」

ブラン（修羅）：「……いやなんでも」

アリア：「ま、今のあなた達なら何とでもなるでしょう。死なない程度に頑張るなさい」

スピール：「……こういう訓練受けてたの」

ブラン（弟子）：「アリアせんせい、スパルタだから…」

アリア：「死んでも何とかしてあげるわ、安心なさい」

フィオーネ：「アリアさん。一応聞くのだけれど、その魔物どうせ魔神よね？」

アリア：「多分ね、とりあえず『今のあなたの手持ちで、魔神要素含んだ面白いのだしなさい』って言っておいたわ」

といった感じでナジュニア近郊の平原へと飛ばされたPCプラスヴィヴィの6人。そこにいるのは、触手をたゆらせる巨大なゴーレムらしき存在。さらにその足元に黒くうごめくナニカたち。戦闘開始です！

○クライマックス　vs 木偶（アリア称）と愉快な魔神たち

まずは戦闘準備&先制判定から。魔物知識判定に関してはフィオーネが危なげなく弱点まで抜き、相手の情報が明らかになりました。データは以下のようなものです。

<http://yutorize.21d.jp/ytsheet/sw2.5/>
?id=77Xlite

http://yutorize.21d.jp/ytsheet/sw2.5/
?id=SIHRD

敵の内訳は強化カーバイトクロウズが1体に奈落の落とし子が3体で、全員前線エリアからのスタートです。両方魔神ということもあり、フィオーネの魔人の書が早速活躍します。《魔を狩る者》で両者に弱点を追加。先制判定は弟子が指輪を割りながら成功。弟子のみファストアクション権を確保した状態でPCたちの先攻です！

・1ラウンド目

まずはフェローのヴィヴィの《スペルエンハンス》から。(ヴィヴィ：「我、バインドとエンハンスどっちすればいいゾ?」 フィオーネ：「ヴィヴィちゃん、そのしゃべり方どうしたの……。」 ヴィヴィ：「ものの本で勉強した」 ブラン(修羅)：

「大体伯爵のせい」

続けてスピールによる《バトルソング》。後衛が多めのこの卓においては最早恒例です。その後フィオーネによる《ファイアストーム》が敵全員を襲う!……なのですが行使時の出目の低さとボスの抵抗ダイスの出目が走ったのが相まってボスの抵抗は両半身とも抜けず。しかし雑魚に関しては弱点込みで40点ずつほどのダメージをばらまき、《ダブルキャスト》分の《ウインドカッター》で抵抗されながらも右半身にダメージを入れます。抵抗されても弱点が固定値で追加されるのは強いです。

次はポツクルの行動。《ショットガン・バレット》で雑魚を殲滅しつつ隙間を狙おうとしますが、命中ペナルティ決定のダイス目は6。大人しくクリティカル無効のまま攻撃を行います。ダメージは27点で雑魚の殲滅に成功します。

後衛組も動き終わり次は前衛組の弟子。初撃の隙間チャレンジは出目が6だったため断念。ダメージに関しても20点という敵の高い防護点に弾かれて1桁台しか入れることができません。《ファストアクション》分の隙間チャレンジは3。これを受け入れて行った命中判定は同値による敵の回避。しかしこれを指輪を割りながら通し、《双刈》《空をも断つ》による防護点無視36点を叩き込みます。修行の結果が早速活かされた結果になります。

ブラン（弟子）：（コロコロ）36点

ブラン（修羅）：まわるー

ポツクル：かっくいー!!

GM：残り17点と欠片、だいぶ削れました!

ブラン（弟子）：あとブランとゆずとサーリア?

ブラン（修羅）：ですね

GM：【ここでリプレイ用になんかかっくいい感じの奥義RP入れてください】

ブラン（修羅）：草

ブラン（弟子）：考えときます

ということですのでそのRPが以下のものです。

ブラン（弟子）：“必”ず”殺”す。そのみを突き詰めた一人と一振りの攻撃はミスリル程度で止まらない

ブラン（弟子）：“ためしぎり。これがわたしたちの”ひっさつ”」「”双剣”」

師匠：“空をも断つ”」

最後にブラン（修羅）とゆずサーリアのペット組の行動です。ブランは後衛でゆずをかばいながら弟子に《カウンター・マジック》。ゆず&サーリアも右半身に弱点とバトルソング込みできちんとダメージを入れていきます。次はエネミーターンです！

《奈落発生》の発動タイミングは右半身の手番終了時のため、普通に弟子を殴る右半身。弟子はこれを回避し、《虚白》による反撃を宣言。しかし命中判定で自動失敗をしてしまい、相互フォローの耳飾りでポツクルへ希望をつなぎます。4体の落とし子を産み右半身の行動は終了です。

続く左半身はそんな落とし子を早速PCたちに投げつけてきます。対象は自身や落とし子を含む前衛エリア全体ですが、呪い属性物理攻撃のためボス本人は抵抗できれば

防護点で弾き、落とし子は呪い属性無効で被害がありません。よくできてますね、これ。結果はボス両部位ともにダメージ0。一方の弟子は抵抗に失敗。23点のダメージを食らいます。

このターンに産まれた落とし子3体は《影走り》によって誰でも狙えるため攻撃対象をランダム決定。最初の犠牲者はポックル。技能を持たない彼に回避の目があるはずもなく《連続攻撃Ⅱ》による3連撃が決まる……と思われたのですがポックルは2撃目を6ゾロで回避。命拾いをします。続く対象はスピール。直前のスピールで出目が走った反動からかピンゾロを2回出しながら3発とも命中。しかしスピールは生命点の高いメリア。後衛にしては高めの防護点もあり攻撃を耐え抜きます。最後の落とし子の対象はフィオーネ。スピールと違い防護点生命点低めの彼女には3連撃はきつく、気絶してしまいます。

・2ラウンド目

まずはブラン（修羅）がフィオーネにアウェイクポジションを使用。気絶から回復させます。その後ゆずが電撃で右半身を攻撃。弱点込みで10点のダメージを入れます。フェローのヴィヴィの行動は《アースヒール》。HPの減っている一行には嬉しい回復です。

続いては弾をテイエンス弾（魔神へのダメージ増）に入れ替えたポックル。隙間チャ

レンジの出目は6でしたが、諸々の修正を乗せると当たりそうなことが分かったためチャレンジ決行。無事命中させ、1回転させ45点を叩き込み右半身を落とします。ここでGMが忘れていた《世界の汚染》を発動。しかし出目が走らず4点ダメージだけに終わります。

起き上がったファイオーネは脅威となる雑魚の掃討のため後衛にいる雑魚3体に《ファイアストーム》。雑魚1体に対して2回転の62点、残りに関してもそれぞれ40点ほどのダメージと殺意の高さを見せつけます。

ファイオーネ：「汚物は消毒だああああ」野太い声

ブラン（弟子）：「がうう」（ストレスが…）

ポツクル：「どこから声出してんの!？」

ヴィヴィ：「あれはマネしちやいけない、ヴィヴィおぼえた」

スピール：（あれ以外にもマネしちやいけないことたくさんやってるのは黙っておこう）

残った雑魚2体はサーリアとスピールの攻撃で処理され、最後は弟子の行動です。隙間を狙った一撃は無事命中し、《双刈》《空をも断つ》によって2回転した防護点無視の49点を左半身に叩き込みます。このダメージにより左半身の《世界の汚染》が発動。このダメージは1回転して18点が全員に入ります。クリティカルしているとはいえ、

回復が入ってるPCたちは原則これに耐えきれはるはずですが、ここにその例外が……
ブラン（修羅）： ゆずのHPが丁度0に。泣いてる

GM： GMのノルマがゆず撃破になってる

ブラン（弟子）： ゆず本当にかわいそう

スピール： 知ってた

ポツクル： かわいそー

ブラン（修羅）： ゆず、毎回10点敵に与えて死ぬのがノルマになってるんだけど

GM： もうゆずの制作費用は共有資金からでいいのでは？

ブラン（修羅）： 早くコンジャ9にしてプラスバードにしなきゃ……

とはいえ雑魚を産む右半身が落ち、残る左半身も弟子の一撃により半壊状態。PCたちにとつては脅威ではなく、そのままゴレムは倒されたのでした。戦闘終了です！

○アフタープレイ くパチモン霊薬を飲もう！く

3話持ち越し分も含めて結局PCたちに配られたトレジャーポイントは68点。最も高いトレジャー表でも40点ですから、かなりの大盤振る舞いです。どの表を振るか
わいわいと相談するPCたち。一方スカイホエールから貰った霊薬に関してですが
……

ブラン（弟子）： 英雄作成薬飲みます？

ブラン（修羅）： のみたーい

ポツクル： 飲むつきやねえ!!!

GM： 7本ですね、とりあえず全員1本配って残りといらない人はご相談で。

フィオーネ： のむかあ。出目6以下からの、筋力+6されてフィオーネの筋力

が三倍になったら笑ってください。（注：フィオーネの現在の筋力は3）

ブラン（修羅）： ムキムキフィオーネ……

ポツクル： なぜフラグをww

フィオーネ： ムキムキ（当社比）

それぞれ薬を飲み、思い思いの成長をしていく一行。そして遂にフィオーネの番がやってきます。普段はないアフタープレイの描写がなされているということで賢明な読者の方ならお気づきかと思いますが……

フィオーネ： よくわかんないけど、面白そうだから飲みます（コロコロ）6だからランダム成長。あの

ポツクル： おら振れ

ブラン（修羅）： きたいするー！

フィオーネ： （コロコロ）筋力。うっそでしょおおおおおおおおおお

ブラン（弟子）： フラグ回収が上手

ポツクル : ムキムキなったやんwwww

GM : 筋力3倍ですよ

ポツクル : おめでとー!!!

ブラン(修羅) : あまりにも面白い

ファイオーネ : 「おお、この薬飲んだら体から活力があふれてきたわ〜。」サイドチエ
ストポーズ決めながら

ブラン(修羅) : 「ファイオーネ、なんか最近おかしな方向に進んでない?大丈夫?」

スピール : 「……最近?」

ブラン(修羅) : 「……最近だよ。最近」

ヴィヴィ : 「二部のおかしい人たちは、一回は筋トレに目覚めると聞く」

これに加え通常の成長でもなぜか筋力が2増えたファイオーネの明日はどっちだ。

といったところで第4回も終わり。次回はちよつと変わった導入になります。乞う
ご期待!